
冷笑主義

不二 香

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

冷笑主義

【Nコード】

N3980W

【作者名】

不二 香

【あらすじ】

——滅ぼせるものなら、滅ぼしてみろ——

ゴシック・バロックな人々でおくる、短編連作中世ヴァンパイア・シリーズ。

時は15世紀後半暗黒時代、南フランスの片田舎に1匹の吸血鬼が住んでいた。

名は、シャルロ・ド・ユニヴェール。

吸血鬼の弱点をことごとく凌駕したこの麗人、ローテンションな灰色メイドと愉快な仲間たちを従え今日も行く。
(自サイト公開済)

第1話【暗黒都市の番犬】前編（前書き）

こちらの連載は、自サイトで掲載しているシリーズについて、携帯・スマートフォン閲覧用にこの場をお借りするものです。

10年近く前に書いたものからの出発になりますので、読み辛い点多々あるかと思いますが、ご容赦くださいませ。（誤字脱字の通報は大歓迎です）

第1話【暗黒都市の番犬】前編

その人物は何やら楽しげな表情で、埃っぽい古書を次々と本棚から引っぱり出したあげく、開いては放り出し、開いては放り出し、していた。

本人にはそれなりの目的があるのだろうが、傍から見ればただ無目的に散らかしているとしか思えない。

現にさっきまで整然としていたはずのその部屋の平穩は失われ、足の踏み場もなくなった哀れで無残な姿がさらに悪化してゆくのみ。

彼女——パルティータ・インフイーネは嘆息を喉の奥に押し留め、銀盆にのせたティーカップをひっくり返さないように注意しながら開いた扉を軽く叩いた。

と、機械仕掛けの人形の如く瞬時に、部屋の主がこちらを向く。

「ああ、パルティータ。何か用か？　今は見てのとおり少し忙しい」

「何かお探ですか？」

「有用な本と無用な本とを整理しようと思ってな」

——整理。

彼女は口ウソクの炎に浮かびあがるその男の顔をまじまじと見つめた。

整えられた銀髪に、どこかやり手の弁論家を思わせて他人に警戒感を与える切れ長の双眼。やや病人っ気のある青白い顔色だが、あごは鋭く鼻梁はひとすじ通り、強情な意志が見え隠れする。

しかし特筆すべきは——その瞳が紅玉ルビーよりも紅いこと、そしてこちらを見て微笑しているその口元で見え隠れする尖った犬歯。

「整理、ですか」

「整理だ」

「……そうおっしゃるんでしたら、私はそれで構いませんが」

ぶつくさ言いながら、とりあえず彼女はその男へと物理的に近づく道を見出そうとした。

部屋は、それほど広いものではない。

かつては執事かなにかの書斎としてでも使われていたのだろうが、いまや単なる書庫である。それも、地下と一階に存在する図書室からさえ溢れ出てきたあぶれ本の住み処だ。

大層値が張るだろう檜材の重厚なデスクも、唯一それらしい仕事といえは部屋を照らしているロウソクの燭台が置いてあるというところだけで、他に仕事をさせてもらえない状況にあった。

つまり、そこも古書で埋まっていた。

彼もまた主の整理の犠牲者である。

「ユニヴェール様、お手紙が来ておりますのでお届けしたいのですが」

彼女は主に近づくことを断念し、扉の場所から動かず告げた。

すると主はいきなりパタンと手にした書を閉じ、ひたとその紅眼でこちらを見据えてくる。

「パルティータ。私は身内に上の名で呼ばれるのが好きでないと云ったはずだが？ シャルロと呼びなさい」

「言いにくいんです」

主の名はシャルロ・ド・ユニヴェールという。

世間的には、ユニヴェール卿。つまり、爵位——子爵の位を持つている。いや、持っていた。

「おまけに私は身内ではありません」

パルティータはこの屋敷のメイド娘である。食事の支度をしてくれる幽霊の女中おばさんはもうひとりいるが、紅茶運びやら手紙運びやらの細々した世話事から、家令や執事めいた雑務まで、この屋敷の全般を扱っているのは彼女なのだ。

真っ直ぐに伸びた黒髪と、黒い眼、社交的には“お綺麗な方ですね”と言われることができないもない顔立ち。まだ少女とも表現でき年頃ではあるが、誰よりも屋敷を知り、自らの行なうことにつ

いて主に判断を仰ぐことはあれど多く口出しはさせない。

柔らかな灰色のメイド服、スタンドカラーをきっちり留めて、好き勝手にやっている。

「手紙か、誰からだと書いてある？」

ユニヴェールの話がいきなり飛ぶのは今日に始まったことではない。

彼女は主の言葉に従い、三つ折りにされ、赤のロウで封印してある手紙の隅を見やった。

「“C・R”という署名がありますが」

「C・R、ね」

口の中でそのイニシャルを繰り返しながら、黒衣を寸分の乱れなく着込んだ男は、芝居がかった仕草で大窓から外を見た。

外は寝静まった静寂の夜。

見下ろすことのできる街並みは闇に紛れ、暖かい灯の光ひとつも見つけることはできない。幽鬼や異形が跋扈する、世界の裏側。

光と影が色濃く倒錯し、栄光と暗黒が支配するこの時代。

神への賛美歌は尽きることなく、壮麗で華美な聖堂が所狭しと建てられて、芸術が花開き、光あるところには崇拜と清浄なる精神が満ちている。

だが光が増せば影も増す。

陽光消えし西の空。黄昏とともに支配は変わらん。

市の雑踏も夫人たちのおしゃべりも引いてゆき、夜の闇が街を喰う。祈りの声も細々と、人は闇を畏れて閉じこもる。

「その名前には心当たりがある」

ユニヴェールは言うなりクルリとこちらを向き、どこをどう踏んだのか軽業師のような身軽さで本の海を乗り越えて、あっと言う間

にパルティータの眼前に立っていた。

「そいつはきつと、セザール・ド・ロートシルト卿に違いない」

明後日を見やるとぼけた顔と貴族つたらしい上品な物腰が相まって、一級の結婚詐欺師を呈しているユニヴェール。

それが意味深にパルティータをのぞき、シニカルな笑みを浮べて囁いた。

「彼はいい男だぞ。顔も身分も気概もな。欠点といえば——少々盲目的なところと——これはいささか決定的だが、私と同じ“種類”だということか」

勝手に批評を下しながらユニヴェールは盆から手紙を取り上げ、素早く目を通す。

「今晚訪ねてくるそうだ。晩課の鐘がさっき鳴っていたからもうすぐ来るだろう。パルティータ、紅茶を用意しておけよ」

パルティータは半分聞き流していた。

主はなんと言った？

“私と同じ種類”と言ったか？

それは——

「つまり、ロートシルト卿は……」

念押しのために口を開けば、ユニヴェールが彼の薄い唇に立てた人差し指をあて、言葉を押し留めてきた。代わりに結論を自分で引き継ぐ。

囁くような、甘美なテノールの声音。

「つまりあの男も私と同じ、すでに一度死した者……吸血鬼だということだ」

そして微かな笑みを漏らして更に彼女の耳元で言い募る。

「何か不都合があるか？ パルティータ」

「いいえ」

彼女は言葉を切り、ひたと主の紅く煌めく双眸を見据えた。

穏かな表情のまま、真っ直ぐに言う。

「吸血鬼なんて一匹だけでも扱いに骨が折れるのにもう一匹やって

きたんじや臨時給金をもらわなければ明日こそ私は過労で倒れるんじゃないなろうかと心配になりましただけです」

対して主は、幾人もの娘や婦人を虜にしてきた柔らかい眼差しで、ふっと笑った。

声は優しく言葉は勝ち誇り。

「大丈夫だ。幸い私は良い医者を知っている」



その男は、確かに誰もが認める紳士に違いなかった。彼のために心を虚ろにする女は数知れず、おまけに伯爵という地位まで持っていたのだから、結婚を企む親の数も数知れず。

だったに違いない。

昔は。

生前は。

「ユニヴェールはこちらに」

夜深い中、屋敷の裏手に広がる黒の森奥から、二輪馬車に揺られてやってきたその男。

パルティータは極めて事務的に一礼し、彼を案内するために背を向けた。

セザール・ド・ロートシルト卿。

鳶色とびいろの髪は肩ほどもで伸ばされ、無造作に後ろでまとめられていた。そういう奔放なことができるのもまだ彼が精神も身も若くして時を止めたからだろう。

背もユニヴェールと同じ程高く、秀麗ながら愛嬌のある顔は人好きがするし、黒の外套を止めてある飾りピンに使われているのはおそらく本物のサファイアとダイヤ。

衣装に使ってある生地も、ある程度の街へ行かねば手に入らない高級品である。

申し分ない男だ。吸血鬼でさえなければ。

「お待ちしていました、ロートシルト卿」

明らかに歳はユニヴェールの方が上に見えるが、これも爵位の違いというものである。彼女の主は恭しく胸に手をあて、直立のままに客人を迎え入れた。

暖炉には火が入られ、テーブルの上には煌々くわんくわんとロウソクが灯されている。

ユニヴェールは自分の向かいになるように彼を座らせ、通りがかりに燭台を隅へ寄せて自らもきびきびと席についた。

彼は長い足をさっと組んだかと思うや否や、かしこまっている若い吸血鬼に問う。

「で、率直にお聞きますが、私に御用とは何でしょうか？」

「ユニヴェール卿は、誰かを愛したことがございますか？」

パルティータは空のワイングラスを運んできたところだったが――いきなり若い輩に真摯な顔でそう問い返された主の顔を見るにつけ、吹き出しそうになるのを必死にこらえなければならなかった。

ユニヴェールは鳩が豆鉄砲を顔面に喰らったような顔で固まっていたのである。

いつも余裕面をして優雅に立ち回っているあの男が！

震える肩をどうにかなだめながら主の前にグラスを置いた時、彼はジロリとこちらを睨んでくることは忘れなかったが、それが何になろう。

「――なきにしもあらずというところです」

取り繕った苦笑を浮べてユニヴェールが言う。

それを聞か聞かないかのうちにロートシルト卿は半分腰を浮かし、身を乗り出して声を大きくした。

「ならば私の心内がよく分かっていただけるはずなのです！ 私の

妻になる人はある晩見知らぬ男に連れ去られ、あげくおそらく同じ手の内の者に私は殺されてしまったのです！　そして私はこのような吸血鬼という忌むべき存在と成り果ててしまいました。しかし先日よからぬ噂を耳に致しまして——それが、私の妻がある男と結婚したという噂でした。もちろん約束を交わしたとはいえ法律上はまだ私の妻ではなかったわけで……憤慨しつつも仕方ないことだと思いました。けれどもその相手というのを聞いて私は愕然としましたよ。その男は妻を私から奪い、私を殺させた、そう私が確信している男だったんですから！」

すごい勢いで一気にまくしたてるロートシルト卿。

熱くなった空気をさますように、ユニヴェールが冷ややかに口を挟む。

「それで？」

「私は妻を、ミレーユ・シャルドネを取り返したいのです。それから、私が何故殺されなければならなかったのか、真実を知りたいのです！」

——正確には、妻になる予定だった人、ね。

パーティータはロートシルト卿のグラスに赤ワインを注ぎながら胸中で訂正する。

「貴方の妻になる方——ミレーユ・シャルドネ嬢と貴方は、その事件の時同じ場所にいたのです？」

「いいえ。妻は妻の屋敷に、私は私の屋敷におりました。しかし後で知ったところによれば、妻がさらわれたのと私が殺されたのはほぼ同じ時のようです」

「……………」

ユニヴェールがあごに手をあて黙考した。

そしてふと言う。

「貴方の取り返したいとは、どういう意味ですか？」

「ヴィス・スプランドウールに連れて帰ります」

「あの街に人間は入れませんよ」

「同族として、です」

「……………」

ただでさえ人に嫌悪感を与えかねない主の目が、さらに細まった。
ヴィス・スプランドウール。

それは街の名である。

神の輝きを受けた光溢れる都市が、神の代理人たる教皇が君臨するヴァチカンであるならば、そこはまさに闇を支配する暗黒の頂点都市。

幽鬼、死鬼、吸血鬼、人狼、魔女、魔術師、夢魔、死人使い、獣使い、魂喰い、呪師、狂戦士、ソウルイーター
バーサーカー数え切れぬ異形が集まり群れをなす都市。

針葉樹で覆われた黒い森の奥深くに入り口は潜み、表からは決して見えない。

だが陽が落ちれば夜陰に紛れて馬車を駆り、暗黒都市の住人たちは森を抜ける。恐怖と戦慄を携えて、神に加護された街々にまでやってくるのだ。

そして人を襲い、仲間を増やし、死をばらまき、凍れる黎明と共に戻ってゆく。

ただの人間がその街へ入れば命はない。

ウサギが自分から狼の群れへ飛び込んでいくようなものである。

しかし彼らは同族には寛容だ。

「ミレュー・シャルドネ嬢も吸血鬼にする、と？」

「愛あればこそ、です。我々は半永久です。特にあの都市にいれば永久だと言っても過言ではないでしょう。私は彼女と離れていることなどできない」

「……そうですか」

若いとは素晴らしいことである。

パーティータはユニヴェールの数歩横で控えたまま、主の反応を

面白がっていた。

主が若くないというわけではない。ロートシルト卿よりは上であるものの、彼は若くして死に若くして吸血鬼となった。だが、吸血鬼としての年月は遥かに長いのだ。

ユニヴェールという吸血鬼は“伝説の名剣収集”やら“伝説の錬金術本収集”やらロクでもないことに無駄な情熱を傾けることがしばしばあるが、こと色沙汰に関しては技量はあれど熱心に語るのを見たことがない。

夫を亡くして悲嘆に狂った未亡人やら、死の床についている良家の娘やらをたぶらかしては、彼女たちを安らかにする代わりに（ユニヴェールは取り引きだと言っている）血をいただいてくる。が、冷酷なもので、彼としてはただエサを捕獲するために優しさを振りまいているだけなのだ。恋も愛も、片鱗すらない。

「あなたはクルースニクと——吸血鬼を狩る者たちとかなりやりあえる御方だと聞き及びました。妻は高貴な身分になっていきますから、警護も厳しいかと思うのです。私はまだ吸血鬼としても浅く、無謀に向かって行ったら返り討ちにあうだけでしょう。ですから！」

「かなりやりあえる？」

薄く笑ったユニヴェール。鋭い牙が姿をみせる。

「何のために私がこの屋敷にいると思っているのです？ 何のために黒き都市への門を守るこの屋敷にいると思っているのです？ 私に関して述べれば、吸血鬼始末人など問題ではありません」

過信は時として致命傷となる。

だがこの吸血鬼は事実を言っているだけだ。

誰をも魅了してやまないこの端麗で嫌味な吸血鬼は、問答無用に強い。それこそ陽光など歯牙にもかけぬほど、強い。

逆境こそ彼の悦びであり、優越こそ彼最大の自己資産なのだ。そのためには物理的科学的法則を無視することさえ厭わ^{いと}ないのだ

から、強くて当たり前ではある。

「まあ……未来のことは彼女を連れてきてから決めていただきますようか、ふたりで話し合ってね」

ユニヴェールがワイングラスを手に取り、素っ気なく話を終わりにした。

他人の重大事など、自らの退屈を紛らわすものでしかないのだ、この華麗なる吸血鬼にとっては。

しかし彼はすぐに指をぴっと顔の横に立て、ああそうだとロートシルト卿を見やった。

「貴方の奥様を連れ去ったと、貴方が確信を抱いている人物のお名前をお訊きしていませんでした」

「サヴォア卿。……カミィユ・ド・サヴォア卿です」

はつきりとしたロートシルト卿の答えは、ユニヴェールを充分満足させたようだった。

彼の頭の中の人物名鑑に名前があったのだろう。

彼は足を組み替えて断言する。

「サヴォア卿ね。分かりました、ロートシルト卿。明日の夜遅くにはそのお悩み解決しておいて差し上げましょう」

「本当ですか!」

「約束は守ります。少々遅く……晩課の鐘と朝課の鐘、その間ほどに来ていただければ結構です」

「ありがとうございます、ありがとうございます!」

ロートシルト卿の喜びようといったら、とんでもなかった。

「なんとお礼を申し上げてよいか! 私がずっと悩んできたことがこんなにすぐに解決するなんて! すばらしい! 嘘みたいです! 何故もっと早くに来なかったのか! 化け物吸血鬼の屋敷だからやめておけと言われたって、もっと早くお訪ねするんですよ!」

賛辞(?)の雨嵐の中、無責任なユニヴェールは早々に席を立ち、くだらない図書整理に帰ってしまった。が、この感極まったロートシルト卿はなかなか帰ろうとしなかった。

主よりも爵位が高いのだから邪険にするわけにもゆかず、パールテ
イータは根気よく話を聞き続け、これがまた若さのためかワインが
入って彼は驚くほど饒舌であった。

普段は寡黙で口を開けば嫌味と皮肉しか出てこないような吸血鬼
を相手にしているパールテイータにとって、それは大変な重労働であ
った。

他人の惚気話のろけを聞いて心底楽しい人間がどこにしよう。

それゆえに、朝課の鐘が鳴り世界に朝というモノが来て、若い伯
爵が黒き森へと帰った時。彼女は随分と機嫌が斜め向きになっ
ていた。

「パールテイータ！ 寝酒にワイン！」
階上の寝室から降った無邪気な声。

彼女は返事もせず倉へ降り、両手に持てるだけワインの瓶を掴
んだ。

そしてずかずか階段を昇る。

「お待たせしました」

言うと同時に有無を言わず全てを部屋に放り込み、悲惨な大音
響と罵声は扉で封じる。

「労働条件は自ら戦い改善しなくてはならないのです」

第1話【暗黒都市の番犬】前編（後書き）

朝課：午前二時　讃課：午前三時　一時課：午前六時　三時課：午
前九時
六時課：正午　九時課：午後三時　終課：午後六時　晩課：午後九
時

第1話【暗黒都市の番犬】後編

吸血鬼とは、種族ではない。

彼らは元々、人間である。

尋常でない死に方をした者、溺死した者、法では裁かれぬ罪を犯した者、そして教会から破門され許されぬまま死んだ者。

彼らは現世に彷徨い、異形の者として永遠の時を背負う。
生ける屍。

闇の都市に身を埋め、欲するままに人を襲う。

彼らにそれを拒絶する術はなく、どんなに拒みたくとも血を求め、どんなにその運命を呪おうとも愛する者のもとへと足が向く。

しかしその多くは望まれぬ訪問であり——彼らの妻や恋人の通報により、ヴァチカンが極秘に飼う吸血鬼始末人集団“クルースニク”が派遣されるのだ。

そうして情に耽溺する者たちは葬り去られる。

もちろん、吸血鬼も集まれば、中にはただの余興で人間を狩る者もいる。反対にクルースニクの中にも、狂信的に魔物を狩る輩もいる。

光と影。

ヴァチカンと暗黒都市。

光が強くなるにつれ影も濃くなり、その対立は激化するばかり。

光の聖域を守るために存在するのがクルースニクならば、黒の都市を守るために置かれているのがシャルロ・ド・ユニヴェールだといえる。

数多の同朋の中でも機知と伶俐に飛び抜けて、神をも恐れず、死をも蹴っ飛ばし、柔らかい冷笑のうちに全てその手の中で握り潰す。彼にどんな過去があるのかは、あまり知られていない。彼が語らないからだ。しかし、彼が元吸血鬼始末人であること、そして現在は暗黒都市の要望を完璧にこなしていることだけは、事実。

——闇は全てを覆い隠すが、光は全てを照らし出すことは出来ない。

それが、彼の口癖である。



「ああ、まだ身体からワインの香りがするぞ」

「自業自得です」

「どこが」

翌日主は終課の鐘の音と共に起き、何故か黒の外套まで羽織って靴音も規則正しく階下へと降りてきた。

パルティータは彼の着席に合わせようとテーブルに夕食——ではなく夜の朝食を並べる。

血液のみが仮初の命の糧である吸血鬼にとってこんな食事は無意味だが、それでも主はこの儀礼を欠かさない。

が、

「今日は後回しだ。ロートシルト卿の仕事を片付けてしまわねばな」
ユニヴェールはそのまま優雅に玄関へと向かって行った。

彼女も釣鐘草のシャンデリアが淡く照らす廊下を彼の後に続く。

「二輪馬車は用意しておきましたか」

「上出来だ」

彼は振り向き様にぐいっとパルティータの手を引き黒髪の上から

額にキスをする。

「どちらへ参られますか？」

「サヴォア邸へ」

男は一瞬も動きの流れを止めることなく、玄関先に停めてあった馬車へひらりと飛び乗った。

「気をつけて行ってらっしゃいませ」

「お前も行くんだ、パルティータ。御者がいないだろう？」



シャルロ・ド・ユニヴェールの屋敷はそれなりに広い。どこぞの貴族の所有物だったものをユニヴェールが手に入れたらしく（手段は知らない）、今住んでいるのは主たる吸血鬼とパルティータ、そして幽霊の女中と一匹の黒猫だけなので、ほとんどの部屋は使われておらず、掃除もされていなければ、窓を開け放ち空気を換えることもされていない。（これはパルティータの怠慢によるところが大きいが）

しかしカミュー・ド・サヴォア卿の屋敷はもっと、仰け反るほどに広がった。……しかも仰け反ったところで全体は見えない。家本体も大きいが敷地も大きい。山査子さんざしの生垣も綺麗に刈られ、夜目にも広大な邸宅隅々まで配慮が行き届いているのが分かる。

「ロートシルト卿は何回かここへ来たな？」

「何故です？」

「クルースニクが数匹いる」

「では？」

パルティータが邸宅の終わり、鬱蒼とした木立の中で馬を止めながらユニヴェールを見やれば、彼が楽しそうに口元で一本指を揺ら

す。

「全く問題ない」

言ったかと思うと男は蝙蝠コウモリのように漆黒をひらめかせて石畳に降り立った。

鋭利な白皙と鮮紅色の双眸が闇夜に香る。

「では、待っている」

「御意」

ユニヴェールは隠れもせず悠然と正面から歩いて行った。

何の気なしに手折った山査子の枝を放り捨て、泰然と踏みつけながらそのまま相手がそろうのを門で待ったのだ。

無論、クルースニクがばたばたと現れ、彼を無言で包囲する。

白仮面をつけ、僧衣というよりは騎士服に近い出で立ちで、聖なる十字を刻んだ銀剣を腰に帯び、ヴァチカンの密命をただ果たす――

クルースニク
――吸血鬼始末人。

数は二匹。

人間が聞いたらさぞかし怒り狂って“ふたり”だと喚くだろうが、しかしここには、“人”と称してやるほど高級なクルースニクは派遣されていないようだった。

吸血鬼にも色々いるように、クルースニクにも色々いる。

暗黒都市を脅かす者から、しがない下っ端まで。

麗しの吸血鬼は鼻先で笑い、地上に立つ者を威圧する屋敷を眺めやった。

この状況を見るに、サヴォア卿が自分で思っているほど、そしてユニヴェールが予定していたほど、ヴァチカンには彼を重くは扱っていないということだ。

まったく、つまらない用件を背負い込んだものである。こんなところで三下をひねり殺したところでヴァチカンへの威嚇にもなりは

しない。

「綺麗な晩だ。そう思わんか？」

ユニヴェールが視線だけを動かして穏かに問い掛ければ、白仮面をつけたクルースニクのひとりが返す。

「月が出ていない」

まだ若い声だった。

「馬鹿を言え。真に美しきものには光などいらないのだ」

「貴様、吸血鬼だな」

「だったらどうする？ え？」

ユニヴェールは背が高い。故に、銀剣を構えたクルースニクを上から脅迫するように睨みつける結果となった。

「光の眩^{まばゆ}さには限界がある。だがな、闇の深さに限界はない」

それだけで人を射殺せそうな紅が笑みを含んで瞬いた。

と同時に、すくんだクルースニクの首から何かがぱちっと引き千切られる。

銀の鎖のロザリオだ。

「くだらない」

淡く微笑んだ吸血鬼は二匹のクルースニクに見えるよう、ロザリオを掲げて屋敷の灯にかざす。

牙がのぞいた。

「実に……くだらない」

言葉と共に、その長くしなやかな指の先で聖なる十字は音もなくひしゃげてゆく。

沈黙が凍った。

「人を襲いに来たのではないよ、話を聞きに来ただけだ。もったも——それでも私とやりたいというのなら、構わんが」

「……………」

「ただし、貴様らでは相手にならん。別のを連れて来い。私を滅ぼせるくらいのクルースニクをな。特務課^{デュランダル}の隊長殿はお目覚めかね？」

ユニヴェールが微笑を浮べようとした瞬間、遠くで火の爆ぜる音がした。

彼は首を少し横によけ、人差し指と中指をぴっと立てる。

「——やられたな。もう一匹潜んでいたとは」

彼がふっと息を吹きかけた指につままれていたのは——銀の銃弾。

二匹のクルースニクが息を呑む音が、した。

「ヴァチカンはこのな物騒なものまで持たしているのか。当たたら痛いだろうに。しかし、例の如く一般人は何も知らないのだろうか？」

乱れひとつない相貌が夜空を見上げ、屋敷を仰ぐ。

「生憎、貴様らと遊んでいるほど暇人ではないのでね、失礼」

最後の言葉が妖しく空気を震わせたその時にはもう、そこに男の姿はなかった。ふたりの吸血鬼始末人が口を開いたまま見合ったその空間には、肌寒い夜風が吹き抜ける。

折れ曲がったロザリオと銀の銃弾とが石畳に落ち、乾いた音を立てた。

空虚に笑っていた。

そしてまた、闇に静寂が戻る。

本来ならばここにやってくるのは頭のネジが恋に緩んだロートシルト卿であったはずなのに、なんと不運な吸血鬼始末人の若者たちであったことか。

吸血鬼の中のそのまた化け物であるユニヴェールといきなり対峙するとは、本当に運がない。

山査子は踏みつける、ロザリオは恐れない、おまけにためらいも痛みもなく曲げる、あぐく銀の銃弾を宙で掴む。

ちなみに彼はその胸に杭を打たれても、首を銀の剣で薙^ながれてもしつこく甦^{よみがえ}る。

つまり——誰も、彼の滅ぼし方を知らない。

「あー、本当にくだらない」

呆然と佇んでいる白のクルースニクを見下ろしながら、当のユニヴェールは屋敷の屋根の上、煙突に寄りかかって心底つまらなそうに嘆息していた。

黒衣は風にはためき、

「久しぶりに少しは遊べるかと思ったが——あんなヒヨコ以下ではな。猫がネズミをなぶるのと変わらん。……男の血なんていらんな……」

思わず喉が鳴った。

しかし、享楽で婦女子を襲うことはパルティータから厳しく禁止されている。

こっそり破ったことはあったが、何故か見つかって（おそらく屋敷で飼っている黒猫が告げ口したに違いない）、散々小言を浴びせられたうえに棺桶に鍵をかけて閉じ込められたのだ。

あの時はある意味本当に死ぬかと思った。精神的に。

彼女の首をへし折るのは簡単だが、彼女がいないとあの屋敷が“ゴミ屋敷”と呼ばれるようになるのは目に見えている。

しかも、へし折ったらへし折ったで、更なる厄介を背負い込むことになりそうな予感もする。

一日中彼女の幽霊に張り付かれて、一日中小言や恨み言を淡々と言い続けられたら！

考えただけでもげんなりする。

「仕方ない。仕事するか」

黒い影は、また消えた。



「というわけでロートシルト卿、残念ながら奥様はお亡くなりになっておりました」

世間的には夜遅く。彼らにしてみればもうすぐ黄昏の時間だという時刻。

磨かれたテーブルの端にはシャルロ・ド・ユニヴェールが足を組み、背筋を伸ばして座っていた。もう片方の端には哀れに肩を落としたセザール・ド・ロートシルト伯爵。

「現在奥方と称されております方は、いわゆる偽者でして。奥方がサヴォア卿の他に慕っている男がいて——つまり貴方です——、サヴォア卿がそいつを葬ったがために奥方が嘆き悲しみに暮れて衰弱死したなど、公表出来るものではありませんからね。貴方が殺されたのは、誰もが予想できるとおり、ミレーユ・シャルドネ嬢との結婚に邪魔だったせいです」

「ミレーユの墓は……」

「ローマです」

「ローマ……」

卿の目がうわずった。

だが、ユニヴェールがぴしやりと言い置く。

「残念ながら、墓を探しにローマまで行くほど私は閑人ではありません、ロートシルト卿。貴方がどうしても行くというなら止めはしません、貴方には危険すぎる道程だと思いますよ」

魔物がローマへ、ヴァチカンへ近付くことは容易ではない。

聖なる都には精鋭の吸血鬼始末人がわんさかいるのだ。田舎町にいるような雇われ傭兵と始末人を兼ねたような者ではなく、対魔に特化した、それこそそれだけに運命を捧げるような輩が。

「気を落とさないでくださいませ、ロートシルト卿。奥様は最後まで貴方を愛しておられたのですから、それでよいではありませんか」
全く心のこもっていないパルティータの慰めも、涙の海に溺れる若者には素晴らしい詩の一節に聞こえたようだった。

彼はがばつと立ち上がり、腕にパルティータを抱き締める。

「ありがとう！　優しい人、ありがとう！　僕は君の声にどれほど癒されるだろう！」

ユニヴェールの柳眉の片方が跳ねた。

パルティータは感情の浮かんでいない黒い目で、感涙にむせぶ吸血鬼の背を軽く叩く。

「君は僕の理想の人だよ、インフイーネ嬢！」

「……………」

ユニヴェールがすつと立ち上がった。

上品な物腰で柔和な笑みを浮べたまま、つかつかとやってくる。

そしてがしつとロートシルトの両肩をつかみ、ぐっとパルティータから引き離し、彼を直立の姿勢に戻す。

「ご期待に添えない結果で真に申し訳なく思っております、ロートシルト卿。また何かありましたらどうぞ遠慮なく。他に忙しいことがなければ、次回も快く引き受けさせていただきますから」

そして彼は、さかんに何か口走る卿の背中をずんずんと押し、

「心の傷を癒すにはおひとりになられた方がよいですね」

玄関ホール我真ん中まで連れてきて、仰々しく一礼する。

そしてユニヴェール自身は三步ほど退がり、壁に取り付けてあるメイド呼び鈴の紐を思いつきり引っ張った。

「それではお休みなさい」

がこん、と奇妙な音がして、ロートシルト卿の姿が忽然と消えた。床が、卿の立っていた床が、ぽっかり口を開けている。

「パルティータ！　手紙を書くよ……」

「……………」

尾を引く恋男の言葉が遠くなってゆき、パルティータはいそいそと穴をのぞく。

ただ直下へと暗闇が広がっているだけで何も見えない。

「……これ、どこへ続いているんです？」

「暗黒都市のド真ん中へ続いている」

怪傑^{かいけつ}の吸血鬼はそう言うのと、清々しく奥へと去って行った。

「で、真相はどうなのですか？」

パーティータは訊いた。

にんじんジュースを書斎のデスクに置きながら、長椅子のクッションに長身を投げ出す主を見やる。

「真相？」

「帰りの馬車の中でもお楽しみだとか言っておいてくれないんですけど。嘘ですよ、奥様が亡くなったなんて」

「ぴんぴんしてたぞ」

「奥様も共謀してロートシルト卿を殺したんですね？」

「普通の頭ならそう考えるだろうがな。あの坊ちゃんの頭の中には濃霧が発生しているんだろうさ。どう考えたってロートシルトとサヴォアじゃ、金も地位も約束された未来も格が違う。サヴォア卿にしても、美女として有名だったミレーユ嬢を収集したかったんだろう。あの屋敷はメイドに扮した愛人だらけて噂もあるようだからな。奥方は金を選んだが、卿はあのとおり夢見がちで思い込むと一直線だから、邪魔になった。だから奥方は彼のもとから身を隠し、サヴォア卿はうるさいハエを叩いた。首筋に牙をあててやったらペラペラ白状してね、あのご婦人は」

ユニヴェールの口元が皮肉げにつりあがる。

「愛を取るか金を取るか、それが問題だ」

遠くで朝課の鐘が鳴った。

光と闇、異形と人間、支配の交代が始まる。

「——それにしてもくだらないことに労力を使ったもんだな、私は。パーティータ、お前のマズイ血を飲ませろ」

「嫌ですよ。この間大仕事した時に飲んだばかりでしょう。私の身体だってそう簡単に血液量産できるわけではないのです」

「それさえ出来ればお前は暗黒都市の女王にもなり代われるんだがな」

「結構です」

「吸血鬼に襲われても死なない、吸血鬼にならない。……長年生きてきたがお前が初めてだ」

「何事にも始まりはあるものです」

「あのまづさは致命的だが」

「放つといってください」

「……………」

感情全開な若吸血鬼の相手をして疲れたのか、いつもなら延々と続く嫌味は途切れ、代わりに無防備な寝息が聞こえてきた。

存在そのものが舞台に立つ役者のような、南フランスの麗人。

暗黒都市の絶対なる番犬。シャルロ・ド・ユニヴェール。

パーティータは小さくため息をつき、くすんだ紅の厚いカーテンを隙間なく締めきった。そしてろうそくの炎を吹き消す。

外は暁を待ち始めているというのに、室内には完璧な闇の帳が降ろされた。

と、夢うつつなテノールが再び聞こえてくる。

「そういえば、サヴォア卿のところから金貨をこっそり黙ってもらってきた」

「泥棒」

「——ロートシルト卿を相手にした特別手当をやるのか」

「……………」

見れば、暗闇の向こうで紅が冷やかに笑んでいる。

パーティータはこの世のものとは思えぬほど華やかな笑みを返し、雲雀のように軽やかな声で言った。

「お疲れ様でございました。肩でもお揉みしましょうか？」

T
H
E

E
N
D

第1話【暗黒都市の番犬】後編（後書き）

2003年

第2話【死に際の太陽】前編

「ヴァチカンから、腕利きのクルースニクが一匹やってくるらしい」
小さめバスケットに山の如く積まれた焼き菓子。

ぱりぱりと小気味よい音をさせながらそれを次から次へと消し去っていた男が、一通の手紙を斜め読みして言った。

「暗黒都市の女王陛下から、直々の情報だ。……なんと面倒な……」
「いつやってくる？」

パルティータ・インフィーネ——この屋敷のメイド——は、視線だけを男へと動かし、問う。

彼女は特にすることもないので彼の向かいに座り、肘をついた両手にその顔をやる気なくのせていた。

彼らの前では香ばしい芳香を漂わせる紅茶が湯気をたてており、真夜中のおやつタイムを控えめに主張している。

「——近く、だそうだ」

「教皇の命令でしょうか」

彼女が僅かに首を傾げると、彼女の主である男——シャルロ・ド・ユニヴェールは、薄い唇の片端をくいつと吊り上げて皮肉げな笑みを浮べてくる。

そして彼は長くて細い中指でコツコツとテーブルを叩き、夜に支配された窓の外へ視線をやる。

「……表向きはそうだろうが、実際はおそらく違うな。教皇インノケンティウス……何世だ？　六か？　七か？　八か？　それとも九だったか？」

「八世です」

「八か、おしかった。……ともかくあの輩には意志なんぞありはしない」

「教皇を動かす操り人形師がいると？　——心当たりがおりないですね？」

「ないこともない」

シャルロ・ド・ユニヴェール。

世の中をナメきっている澄ました白哲と、几帳面を絵に描いたように埃ひとつ付いていない黒衣。

闇の中から獲物を射抜く双眸は切れ長で、不気味に輝く瞳は紅。

笑えばのぞく尖った牙は、刃物の如く鋭利に光る。

不安と恐怖が混じる夜の闇。

暗黒の帳が降りたその町の一郭で彼を見た者は、戦慄を携えたまま声を震わすだろう。

——ヴァンパイア
吸血鬼、と。

生ける屍、吸血鬼。

闇に生き、世界の暗黒面を掌握するにふさわしき、不気味な異形。華麗なる死人。

しかしその言葉は決して間違いとはならない。

シャルロ・ド・ユニヴェール。

なにせ彼は本当に、優雅な笑みで魔刻に君臨する悠久の吸血鬼なのである。

「そのクルースニクはあなたを討ちにくるので？」

「さあ。私のことは大昔から向こうもよく知っているわけだし——
今、私を討とうとする理由はないと思うのだよ。きっかけが何もない」

大抵の女ならば骨抜きになる目つきで、主が微かな笑い声を漏らす。

「私がやられれば暗黒都市が黙ってはいないだろう。そうなればヴァチカンと暗黒都市の戦は避けられまい？ 光が滅びるか、暗黒がこの世を支配するか、歴史はそれだけに絞られる」

「その選択肢、どちらも同じだと思うんですけど……。結局ヴァチ

カンが暗黒都市に勝てないとおっしゃりたいわけですね？」

パルティータは黒い瞳に白い光を宿しながら、ぼそりとつぶやいた。

主であるユニヴェールは負けを知らない。彼に並ぶ吸血鬼などいない。

だからこそ案の定、彼は涼しい顔でさりとらなずいてくる。

「当たり前だろう。まず、私がやられることがないからな」

「……………」

時々、彼の中には『誤算』や『間違い』、『苦悩』や『窮地』といったものなんかこれっぽっちも存在していないのではないかと思う。

彼は過去、常人にはそう降りかからぬ人生の大誤算を経験している。

人間を護る者の最高峰たるクルースニクから、狩られる側である吸血鬼への大転落——人間にとって最大の悲劇ともいえる敗北だ。

どんな理由で、どんな経緯で、彼がその奈落に沈んだのかはあまり知られていない。彼も語らない。

しかし当人がそれを悲劇と思っているかは不明なのだ。

どうも、喜劇とさえ捉えている節がある。

「それで、そのクルースニクのお名前は？」

「分かん」

「……………それじゃあその手紙、一体何が書かれているんですか」

「……………」

何にしろ、彼に敵う者がいないのは間違いない。



光と芸術に満ち溢れ、華やかな宮廷交戦が繰り広げられる煌びやかなこの時代。

教会では祈りと賛歌、立ち並ぶ露店では威勢のよい掛け声、広場では陽気な女たちの笑い声と歌声。そして通りを行き交う高貴な馬車。

それを支配する中枢は遥かなるローマ、そこに鎮座するヴァチカン教皇庁である。

俗世の覇権争いは神聖ローマ帝国やフランス王国を基底に各国間で行なわれているのだが、その俗世全てを喰わんとしている闇に抗すことができるのは、ただヴァチカンのみ。

正確にはヴァチカンが極秘に飼っているクルースニク——吸血鬼始末人、のみ。

大いなる太陽が地平に沈み、飾りなき黒が世界を染める夜ともなれば、人々は家に閉じこもり堅く門扉を閉ざす。

栄光に代わって魔が支配する、夜。神と人の謳歌^{わうか}は死に絶え、不可視の恐怖とざわめく異形が酒盃を交わす。

そしてヴァチカンと対をなして闇を統べる中心は、暗黒都市ヴィス・スプランドゥール。“華麗なる悪徳”の名を戴き、巨大な赤い月が架かる魔都。

フランス王国南部、パテルという町の背後に広がる黒い森のどこかに入り口はあり、見えない都市は広大かつ豪華に栄華を極めて

いる。
そしてその黒い森の入り口に、静かな睨みをきかせて屋敷は建っているのだ。

通称ユニヴェール邸。

暗黒都市の番犬、妖しく強靱な吸血鬼の屋敷。

そこには主たる吸血鬼がひとり、メイドがひとり、そして黒猫が一匹住んでいる。

「ねえルナル、あなたは赤と緑とどっちが好き？」

「情熱の赤」

「じゃあ緑にするわ」

「……………」

パルティータは、後ろから不満げな視線を投げつけてくるでつかい黒のかたまりを無視して、それを手にとった。

キャベツ。

「……パルティータ、最初から素直ににんじんが好きかキャベツが好きか聞いてくださいよ」

その言葉を聞いて、パルティータはひたとソレに向き直る。

ソレ——通称ルナル。自称亡国の王子。

腰まで伸ばされた艶やかな黒髪、ユニヴェールにやや及ばないが、高い部類に入る背丈。

ぼーっとしているようにいて隙のない不思議な顔つきと、道化の如く描かれた奇妙なアイライン。

おまけに軽く羽織った足首までのローブも、中に着込んでいる軽装の剣士服も、全てが黒。黒。黒。

ここまで黒でそろえられると、いい加減うっとおしい。

そのうえ、どこぞの魔女にかけられた魔法でもって昼間は人間、夜は黒猫ときたもんで、見かけから中身まで不信極まりない男である。

「じゃあ聞くけど、にんじんとキャベツどっちが好きなわけ？」
「両方嫌い」

「でしょ」

「……………」

してやられたとばかりに天を仰ぐルナールを余所に、パルティータは立ち並ぶ露店をぐるりと見回した。

陽が高い時間帯のパルティータの町は実に華やかである。

どこからともなく香ばしいパンの匂いが漂って、おまけにあぶった鳥や煮込み野菜スープをあちらこちらで売っているのだ。

子どもも大人も声高で、夜を忘れている。

それは昨夜暗闇に身を縮めた分、太陽の加護ある今のうちに手を伸ばし背を伸ばし、動いておこうという無意識か。

主、ユニヴェールは言っていた。

「人は月のもと“生と死”を学び、太陽のもとそれを忘れるのだ」、と。

「でもパルティータ」

ルナールがカゴの中身をのぞき込みながらぼそと言ってくる。

「料理は幽霊のおばちゃんが作ってくれるんでしょう？ 貴女が勝手に食材集めちゃっていいんですか？ ……こんなテキトーな……」

彼が右手でつまみ出したのは網の中に大小様々種類様々に詰め込まれた“貝”。左手でひっぱり出したのは、大事に包まれたやや黒コゲのカエル。

「いいのよ」

彼女は、名も知れぬ毒々しく真っ赤な果物の品定めをしながら言い切った。

「作るの私じゃないんだから」

「……カエル食べるのは誰ですか？ まあ猫の僕に“狐”ルナールなんて名前を付けるくらいルナールの貴女ですからね、大して驚きませんけど」

「だってあなた本当の名前忘れちゃったんでしょ」

「……………」

答えの代わりに衣擦れの音が返ってきた。

分が悪いと悟ったルナールが背を向けたのだ。

が、彼はすぐに楽しそうな声音でささやいてくる。

「パルティータ、貴女何か悪いことやらかしました？」

「……特になにも。今まで模範的な人生を送ってきたつもりだけど」
「本当ですか？」

ルナールが心弾ませる時は、いつでも凶事がやってくる時である。
パルティータは眉を寄せて彼の視線の先を見やった。

「……そういうあなたは何もしていないわけ？」

「特に何も」

「じゃあアレは私たちとは無関係なんじゃない？」

「思いつきりこっちを見てるような気がしますよ？」

「気のせいということにします」

彼女は断言。

しかし世間はそれを許さなかった。

世知辛い。

「そこのふたりっ！ 背の高い黒男！……お前よお前！ 気味悪い化粧したお前！ そう、お前のこと」

雑踏にはた迷惑な大声が響く。

ルナールがやるせなくなつて自らを指差したのか、ソレは満足げにうなずいていた。

「女！ お前もよ！ 灰色のメイド！ 黒髪の不健康そうなお前だつてば！ 逃げてでも駄目、止まりなさい！」

無視して（ルナールを囿にして）人波に紛れ込もうとしていたパルティータだが、さすがにそこまで名指しされたのでは紛れることも叶わずに渋々立ち止まる。

「ルナール、何なの、あれは」

「僕に聞きますか？」

人々はざざと遠巻きに。

ぽつねんと残されたふたりに相對しているのは、ひとりの女騎士

だった。

白馬に乗った、騎士。

——いや、違う。

「私にはただの変人に見えるわ。空想と現実の境目がわからなくなっちゃった人よ」

「賛成です」

一言でいうならばその女は、“女兵士”^{アマゾンネス}。

くるくる綺麗に巻かれた金髪に、馬の尻尾のようなふさふさがついた兜^{かぶと}。

白地に金糸縫いの豪華な騎士服を上から護っているのは、白金の鎧^{よろい}。

そして彼女は左手に磨き込まれた槍を持ち、右手をびしっとこちらへと突きつけている。

パルティータが逃亡を計ったのは、クルースニク関係者だけが身に帯びることを許された紋章が、その兜の前面に刻まれているから……という理由もないわけではない。

——交差する剣を背負った十字架……その紋章。

「あの女がユニヴェール様のおっしゃっていたクルースニクだったらどうしましょう」

平らな視線で見つめたまま、パルティータは言う。

するとルナールから疑問符が返ってきた。

「どういことですか？」

「女王陛下からお手紙がきてね、腕利きのクルースニクが一匹くるって」

「へえ」

男の目がきらりと輝いた。

「お前たちからは邪悪な匂いがします！」

ふたりのヒソヒソ話を無視して、朗々たる声で女が宣言してくる。その背後には騎馬兵らしき者たちが総勢十数名控えていた。

「闇に住まう悪魔ども！ このわたくしが成敗します！」

「……アンタ誰ですか？」

ただでさえ細い目を更に細くして、ルナールがつぶやいた。

「お前たちのような輩に名乗る名前はないっ！」

女が胸を張り馬上で槍を一閃させると、やじ馬からは「おおっ！
！」というどよめきと、まばらな拍手が起こる。

——アホらしい……。

パルティータが愛想のない顔を背けて、嘆息すると、斜め頭上からまたもや楽しそうな声が降ってきた。

「確かに、真っ黒な僕と陰気な灰色の貴女。どう見てもアヤシいですよね。目を付けられてもおかしくありませんよね」

「……だけどね、私もあなたも一応人間でしょ」

「吸血鬼に血を吸われても吸血鬼にならない女と、夜になると黒猫になってしまう男。人間だと証明するのは難しいですよ」

この男には、証明する気なんぞない。

不気味な道化師顔が、にこにここちらを見下ろしていた。

「賭けてもいいです。あの女はクルースニクではありません」

「……で？」

「僕に任せてください。あれを追い払い、かつ余興も楽しめるはずですから」

「…………」

止める理由はない。

不幸はルナールが好きだ。ということは、とりあえずルナールが主体的に動いていれば、不幸はまずルナールに降りかかるに違いない。

「……好きにすれば」

この一言が、彼女でさえ戦慄する事象を目の当たりにすることとなろうとは、誰が今知ろう。

第2話【死に際の太陽】後編

主がいつから吸血鬼になったのか、パルティータは訊いたことがない。

どれだけの女を虜にし、命を奪ってきたのかも、訊いたことがない。

また、何ができて何ができないのか。

本当の弱点は何なのか。

実は全く知らない。

十字架も意に介さないだとか、山査子さんざしなんか鼻で笑いながらバキツと折ってしまうだとか、飛んでくる銃弾さえも避けてしまうだとか、仮に当たっても滅びないだとか、そういう非常識なところがいくつもあるということだけは知っているのだが……。

あの含んだ白皙の裏側に、どれだけの札カードを隠しているのか。

暗黒都市の入り口をたったひとりで守っている吸血鬼。

その重責を責とも思わぬあの男は、今日もその虚無を相手に楽しく生きている。



黄昏も迫り、人気のなくなった街の通り。

後ろを振り返れば黒い森の屋敷へと続く大きな道が伸びていて、前を見れば町の中心へと続く下り坂。

家々の壁は最後の陽光で鮮やかな黄金色に染まり、空もまた橙色の絵の具を流し込んだ美しい夕刻ひとつ前。

切り取った絵画のようなその場所で、ふたりは再びぼつねんと立っていた。

ルナール。

そしてパルティータ。

昨日露店で悲惨な輩に絡まれたふたりだが、ルナールがうまく取り繕った結果、こういう事態になっている。

つまりは——今日これからここで、悪の成敗が行なわれるのである。

ルナールがそう指定したのだから仕方ない。

「私とあなたで、どうあのイカレた女に対抗するわけ」

一本調子でそう問い掛けるパルティータは、いつもどおりのメイド姿であった。武装といえば背負った矢筒と手に持った弓だが、“使えないことはない”というだけの代物であるので、放って敵に当る保障は全くない。というか当らない可能性の方が圧倒的に高い。

「たぶんね、あの人はユニヴェール卿のおっしゃるクルースニクではないんです。ヴァチカンから派遣されてきたクルースニクである性格をしている人なら、まず第一に卿を成敗するはずなんですよ」

立派な説明を続けるルナールはといえば相変らずな真っ黒装備で、得物^{えもの}は腰に帯びた普通の中剣ひと振りのみ。

彼は元々ふた振りの剣を使う剣士なので、ヤル気のなさを体現しているわけだ。

「ちまちました僕らをわざわざ雑踏からほじくり返して成敗するんではなく、ね」

「……そもそも成敗される理由がないんだけどね」

どこからか地鳴りの音が聞こえてくる。

坂の下方、街の中心部から近づいてくる砂埃が幻であったらどんなによいか。

やられるつもりなど毛頭ないし、あんなのにやられたら末代までの恥であるが……身体の芯から疲れそうでもどうも嫌なのだ。

「私、帰ってユニヴェール様起床の準備をしなくては」

「そんなもの必要ありませんよ。第一ね、彼女と約束したじゃありませんか。昨日見逃してもらう代わりに、今日この時間にここで正々堂々と戦うって。しかもふたりそろって！」

「約束したのはあなたであって私じゃないもの」

「そういうのを屁理屈というんです」

「真実というのよ」

なんぞとくだらない言葉を並べ立てている間に、ふたりの目の前には驚くべき程の騎馬隊が整列していた。

もちろん、その中央で凜と背筋を伸ばしているのは、名前を教えたくないあの女。

それぞれの白金甲冑が光を乱反射して目が痛い。

「約束を守るとは、闇の者にしては潔いな！^{おさ}ではその心意気に答えて滅びの理由くらい教えてやろう！我々の長たる方がもうすぐこの町に巢食う悪鬼を滅ぼしにくる故、先陣を切ってこのわたくしが目障りなゴミを片付けておくのだ！」

やはり無駄に誇り高い大声で彼女が口上を叫べば、

「ほら当りましたよ！ やっぱり彼女はクルースニクではありませんでした」

ルナールが得意げに声のトーンを上げる。

「そんな大層な理由掲げて……ただそのエライ人に気に入りたいから抜け駆けするんだったりして」

「そんなことはないっ！」

つぶやいたパルティータに素早く否定の言葉が刺さった。

「……………」

そうやってムキになるあたりがあやしいのだが、会話をすると余計に疲れるので、パルティータは早々に口を結んだ。

「こいつらは私の私軍。しかし対魔用に特別訓練をさせた者ばかり

！」

もはや人間だと力説しても無駄だろう。

彼女が槍を虚空で一閃させると、控えた騎馬隊もまた一糸乱れぬ動きで槍を一閃。

銀色の穂先が黄昏の空のもと一斉に輝いた。

「……ルナル、どうすんの」

「大丈夫です、助っ人がきます」

「助っ人！！」

哄笑は馬上のアマゾネスから。

「それは何か？ お前たちの主人がここへ駆けつけてくるとでもいうか？ ご愁傷さま！ 私はそれも計算に入れてこの時間を承諾したのよ！ まだ太陽が世界を照らすこの時間をね！ いくら最強と呼べようと、吸血鬼なんて結局か弱い生き物なのよ！」

吸血鬼は、陽光にあたると灰となって滅びてしまう。

あのユニヴェールでさえ、日中目を覚ましていることなどほとんどないのだ。太陽が世界を照らしている間は、^{ひつき}柩の中で深い眠りに落ちている。

滅びは死ではない。

滅びは無への一方通行だ。

神に救われることもなければ、地獄の苦しみもない。

その言葉は単純に、魂の消滅を意味する。

「終課の鐘を指定したんですが、もう勤務時間は終わってるから駄目だっていわれたんですよね」

悪気もなくルナルが言った。

「……じゃあユニヴェール様来ないじゃない」

「——いえ。大丈夫だって言っていましたよ」

「なんで？」

「さあ」

この男はいい。

昼間は人間の姿だとはいえ、自分の意志で猫になることもできるのだ。（夜は完全に猫でしかいられないようであるが）

だから、いざとなったらいつもの黒猫に戻ってどさくさに紛れ逃げることだって可能なわけであり……。

だがパルティータにそのような特技はない。

おまけに助けも来ないときた。

「大人しく首を刎ねられなさい！ わたくしと我々の長、そして人々と神の栄光のために！」

「……嫌」

「私もそれは少し困ると思う」

『……………』

「猫なんかどうなっても構わんが、メイドがいなくなると少々不便だ。なにせ我が屋敷に勤めてくれる人間など、そうはいないからな」

「それはあまりにもひどい言い用です」

ルナールだけが平然と振り返った。

「僕だって一生懸命なんですよ」

「だが話が違うぞ。お前は今日ここに、女王陛下お達しのクルースニクが来ると私に言っただろう？ ……なんだ、その馬鹿は」

「僕も一生懸命だったのですが、それゆえに早まりまして。これがそのクルースニクだと心底信じていたのですが、先ほど違うと宣言されました」

「……わざわざ早起したんだがな」

パルティータが振り返った先にぬっと立っていたのは、彼女の主であった。

終焉の輝きを投げつける陽光の下、いつものごとく超然とした紳士が突っ立っている。

微かな笑みを浮かべ、姿勢正しく、折り目正しい黒衣をまとい。

「ユニヴェール様」

名前を呼べば、彼は片眉を上げてちらりとこちらを見てきた。

「まあ新しくメイド募集をしなくて済んだだけ良しとするか」

「太陽が」

パルティータが強引に続けると、吸血鬼はニヤツと牙を見せて笑う。

「死に際の太陽なんぞ恐るるに足りん」

「しかしいつもはお休みになって——」

「用事がないから起きる必要もないだけだ」

終末を数える鐘の音。そんな靴音を静寂の街に響かせて、彼はパルティータとルナルの横を通り過ぎた。

「吸血鬼とは——元来脆弱な生き物だ。そう、お前が言ったように」
涼しげな紅の双眸が、アマゾネスを見やる。

「吸血鬼は一度死を経験したゆえに変な情を持っていてな……愚かな愛に身を滅ぼす者、心を悩ます者が多い。どんなに冷酷だと言われた奴でさえ、時に儂き命をその手で守ってしまうことがある。それが己の身を滅ぼすことになっても、だ」

言葉は優しく綺麗だが、彼の不健康な白い顔には意地の悪い笑み。
「自らを滅ぼすものに自分から飛び込む輩もいる。陽光に焼かれることを、杭で打たれることを、クルースニクの手にかかることを、望む輩もいる」

馬上の金髪女は槍を構えたまま、じっとその吸血鬼を見据えていた。

彼の言葉の行き着く先を、待っていた。

「だが——」

ユニヴェールの歩が止まる。

パルティータとルナル、そして変人アマゾネスの向き合った調子ちょうど真ん中。

そこで立ち止まって彼は騎馬隊を見まわし——言った。

「私をそんなやつらと一緒にされては困る」

刹那、彼の歌うようだった口調が一変し、流るるは低く美しい呪詛のような声音。

……甘美な毒。

「この私の領内で、貴様らのような輩が好き勝手できると思ったか？」

紅の目が意志を持って見開かれ、白金の騎士達をじわりじわりと射抜いてゆく。

「太陽さえ私を滅ぼせぬのだ。クルースニクも私を滅ぼせぬ。貴様らにも滅ぼせぬ。それでも死にたければかかってくるがいいさ。――だが、容赦はしないぞ。誰かひとりがその槍を私に突きつけたなら、全員この場で死んでもらう」

騎士たちの額から頬へと、幾筋もの汗がつつた。

「地獄を見てみるか？ 調度いいかもしれんぞ？ 人間は一度地獄を見なければ大きくなれんのだ」

麗しき黒の吸血鬼が、黄昏のその時を支配している。

何十もの騎馬兵が、たったひとりの男に圧倒されていた。

「声が出ないだろう？ 今お前たちの頭には私の声だけしか響いていないだろう？ 手も足も、自らの意志では動かせまい？ 今お前たちの身体を支配しているのは私であって、お前たちではない。――分かるな？」

光溢れる静かな戦場。

そして、漆黒の翼を広げる如くユニヴェールがぱっと両手を広げ、声高に令を発する。

「我が僕^{しもべ}たち！ 槍を空へ掲げよ！」

瞬時、迷い微塵なく、乱れひとつなく、騎馬隊がその穂先を突き出し頭上へと構えた。

美しく冷酷な刃物の光が、無数の金色に輝く。

その者達の目は死んでいない。自らのしていることを自覚している、焦燥の目がそこに並んでいる。

しかし彼らはユニヴェールの言葉に逆らえないのだ。どうしようもなく彼らの身体は、吸血鬼の言葉のとおり動く。

「……………」

背筋に寒気の走る、壮観な眺めではあった。

闇よりの魔から人の世を護るために組織されたはずの精鋭が、抵抗ひとつできず魔に喰われているのである。

一刃交えることも叶わず、負けている。

たったひとりの吸血鬼に。

陽光のもとに立つ、吸血鬼に。

「良い子だ」

ユニヴェールが穏かに手をおろし、片手をあごにやる。

「判断はお前に任せよう、女」

唇を噛みしめ、物凄い怒りの形相で彼を睨んでいる女騎士。

「お前は私の支配下から外してあるはずだ。……お前が戦いを望めば、可愛い部下たちは互いに槍を奮って皆殺し。お前が撤退を望めば、不問に処す」

「……撤退だど！」

「私は、お前ら全員にここで死んでもいい構わんよ。冷たく、暗く、孤独に満ちた凍れる大地の底へ——行ってみるか？」

シャルロ・ド・ユニヴェール、その死せる鋭敏な顔つきに、更なる影がさす。

「聖なる死を被ったからと言って、神が光へ導いてくれると思ったら大間違いだぞ。神は見ているだけで動きはせん。その命の炎が消えた時、貴様らは灯火^{ともしび}なき闇に放り出され、そして初めて気が付くのだよ。万物の起源は闇であり、神ではないのだとな」

饒舌な役者であった。あらかじめ、台本が書かれていたような。

「どうする。選べ」

「……………」

女が、じつと虚空を見つめた。

猪突猛進の馬鹿女のようなが、これだけの騎士団を率いるからには、相当の身分であるか腕なのであろう。何しろ、女である身では騎士という地位を得ることすらほとんどあり得ないことなのだから。

「……我が名はヴィスタロッサ。この借りは必ず返します、暗黒都

市の影なる王——シャルロ・ド・ユニヴェール」

彼女はそう言うと、馬を数歩退かせた。

と同時に騎馬隊の掲げていた槍が降ろされる。

吸血鬼の支配が解けたのだ。

「暗黒都市がいつまでも優雅にしていられると思わないことね。ヴァチカンも幾重にも網をめぐらせて——」

表情のない紅の瞳を一瞥し、彼女は馬の腹を蹴った。

言葉は途中で途切れ、舞い上がる砂塵とひづめの音にかき消される。

パルティータが見上げれば、空はようやく薄紫。まだ色の薄い月が彼方に昇ったところであった。



「ルナル。よくも私を騙したな」

「とんでもない」

「確信犯だろうが。お前ははじめからあの女がクルースニクでないと踏んでいた。だが、私には間違いなくクルースニクだと伝えた」

「手違いです」

バターでソテーされた様々な貝をつつきながら、ふたりは飽きもせずと同じ議論を繰り返していた。

パルティータはそんな得体の知れないものを食べる気になどないないので、壁際に立って控えているのである。

「私はな、女王陛下以外の者に使われたことはないのだよ」

「使ってなんかいませんってば」

この吸血鬼を手にするならば、相当の覚悟が必要とされるに違いない。

飼い主を喰い殺しかねない猛獣なのである。

一見すると美しく、優しく、穏かに見えるが——こんなにも吸血鬼の弱点を凌駕した吸血鬼など、もはや吸血鬼と呼んでいいものではない。

ではなにか？

——単なる化け物だ。実際には首輪も鎖もない、野放しの化け物。

「猫の丸焼きにしてやる」

「ごめんです！！」

ぐいっと襟首を掴もうとしたユニヴェールの手をすり抜けて、ぼむっと上がる白煙。完全な夜になり、ルナールが黒猫へ変わったのだ。

しなやかで綺麗ではあるけれどいかんせんどこかお高くとまっている猫が、椅子の上にちょこんと現れる。

彼はユニヴェールを馬鹿にするように一声鳴くと食堂を突っ切り、廊下の奥へと消えていった。

「……拾ってやった時はもっと可愛げがあったんだが」

「反抗期でしょうか」

「……………」

パルティータの言葉に返答はなく、ユニヴェールがナイフとフォークを置いた。

そして立ち上がり、テーブルの上の小さな燭台を手取る。

「聖なるかな。聖なるかな。聖なるかな」

口の中で唱えながら、窓に寄る。

外は、もうほとんど夜だった。

「人は闇を恐れ、闇は人を羨む。だが人は闇に憧れ、闇は人を嫌うのだ」

完璧な美を誇るその男の顔が、炎に照らし出された。

光と影に彩られ、冷然とした笑みをのせた吸血鬼。

理不尽が集まって形を為した化け物。

「答えは出ず、答えはなく、——そして戦いはどちらかが滅びるま

で続く。避けられず、終わらない」

「私は闇を恐れもせず、闇に憧れてもいません」

銀盆を抱えたままパルティータがきっぱりと断言すると、主が面白そうな顔をしてこちらを見た。

「ではお前は何を恐れて何に憧れる？」

「私は貧乏を恐れて、お金持ちに憧れるのです」

「……………。私はこの町で永遠に人間どもの挑戦を受け続けるだろうな。闇を葬らん、暗黒都市を滅ぼさんとする者達の挑戦を」

主は自分の話を続けてきた。

「もし、……もし私を超えるクルースニクが現れる時が未来に存在するのなら、その時こそが闇の終わり、私の真の死、永遠の終わり」

「滅びたいのでしたら、今すぐにでも滅ぼして差し上げますが」

満面の笑みで彼女が言うと、ユニヴェールが盛大に吹き出した。

「笑止千万！」

くると身体ごとこちらを向いて、大仰に手を広げる。

「何ゆえ私が滅びたいなどと思わねばならんのだ！ クルースニクをいびるのは人生で一番楽しい事なのだぞ！」

「……………」

おそらくシャルロ・ド・ユニヴェールという男は、本気でそう思っている。

この男に精神的な裏はない。

あるのは、物理的に間違っている存在の謎だけなのだ。

「そういえばユニヴェール様。女王陛下のお手紙、一番の用件は何だったんですか？」

「一番の用件？」

「クルースニクのことなんか、どうせ最後の一行くらいだったのでしょう？」

徹底的に聞き出してやろうと彼女が構えた瞬間、あっけらかんとした返事がやってきた。

「ああ、それか。求婚だ、求婚」

「キューコンというと、花の……?」

「違う。結婚を求めるキューコンだ」

「誰が! 誰に!」

「私がそんな面倒くさいことするわけなかりうに。陛下が私に、だ」
「宮廷のメイドともなればお給料随分と上がりますよね。待遇も良くなりますよね?」

パルティータが銀盆を放り出して両手を組めば、ユニヴェールがニヤニヤ薄く笑んでくる。

「飛躍のし過ぎだぞ」

「……まさか断るつもりで!?!」

語尾が裏返る。

だが、なおさら平然として吸血鬼は椅子に座り、颯爽と足を組んできた。

「私が城に入ったら、誰がここを護るのだ? —— そもそもひとりの女に縛られるのは嫌いな性質でね、私は」

「ああなんてこと!」

「明日にでも断りの手紙を差し上げるつもりだよ」

太陽の光さえも彼を滅ぼすには至らない。

万物の父であり、神の権化であるべき太陽でさえ、法則外の魔物には手出しができないのだ。

シャルロ・ド・ユニヴェール。

世界の守護者たる神徒たちの、最初にして最後。そして最大不落の砦。

だが……。

さすがの吸血鬼も、まだ知らない。

手紙を盗み読んだルナールがさっさと「承諾」の返事を送ったことなど、まだ知る由もない……。

T
H
E

E
N
D

第2話【死に際の太陽】後編（後書き）

2003年

第3話【パルティータ誘拐事件】前編

「パルティータはどうした？」

ユニヴェールはナイフとフォークを動かしながら、斜め横に座っている黒長髪の男に尋ねた。それは極めて機械的な、事実のみを追った問いかけ。

「……知りませえん」

案の定返ってくる答えにも意味はなかった。

否——、正確に言えば情報としての意味はある。だが価値はない。

「もうここ二日くらい姿を見ていないような気がするのだが……」

葡萄酒と香辛料で煮込まれた牛肉をきれいに切り分けながら、彼は小さく嘆息した。

シャルロ・ド・ユニヴェール。彼はこの屋敷の主にして、子爵の地位を与えられた由緒正しき貴人であった。

冬の月光をも凌ぐ冴えた銀髪に、紳士然とした黒衣。いささか嘲笑の混じる白晢は世の女という女を虜とし、物柔らかな振る舞いは場を彩る。……だが、微笑にのぞく牙と底なしの紅の瞳とが、彼の本質を冷たく物語っていた。

夜に生き、神を足蹴に、人を喰う。鏡には映らず、だがそこに存在し、闇の中から薄く笑う。死してなお死なず、運命と未来、そして時の大河から見放された者。

それが、彼だ。

シャルロ・ド・ユニヴェール。

彼に与えられたもうひとつの名は、吸血鬼。

「暇をやった覚えはないし、暇を乞われた覚えもない」

彼は一切れ口に放り込み、燭台に揺れるロウソクの炎を見つめて

考える。

「ならば何故いない？」

「給料少ないから辞めたのではないでしようか」

「馬鹿を言え。普通の貴族が払う倍はやっているぞ」

ユニヴェールは下の方から上がった言葉を一蹴。

だが彼はゆっくりと視線をそちらに移した。

そこにはロープでぐるぐる巻きにされた男が、疲れ果てた形相で椅子に座っている——いや、座っているとと言うよりも椅子に腰を置いてテーブルに身を投げ出している。

傲慢の黒髪はテーブルに流れ、不気味なアイラインの引かれた目は宙をふらつく。

羽織った上衣も中の剣士服もうっとおしく黒統一で、まともな人間が対面すれば、誰もが「悪魔！」と叫ぶだろう。

ちなみに通称はルナールというのだが、本名は自分でも忘れてしまったらしい。どこぞの魔女の呪いを受けて、昼は人間夜は黒猫の姿になる。まあ悪魔といわれても否定はできない境遇にいる若造というわけである。

「この忙しい時に消えるとは、あの馬鹿娘が……」

つぶやいてから、ユニヴェールは静止。

「……………」

斜め上方を見やり——柳眉を寄せる。

「……本当におかしいな。いつもだったら“その馬鹿娘を雇った貴方はもっと馬鹿なのです”とかなんとかぼそつと後ろから聞こえて来るんだが」

「屋敷にいないんだから返事がなくて当たり前じゃないですか？」

「黙れ」

ユニヴェールは寝起きで機嫌が悪いことはほとんどなかった。よく眠れないとか寝覚めが悪いとかいう可愛らしい神経など持ち合わせていないからである。

だが彼はここ数日、もっと実質的なところで機嫌が悪かった。

パルティータの不可解な不在も然り。

そして――。

「貴様がありがた迷惑な伝達屋ゴツコをしてくれたおかげでこの私がどれだけ神経をすり減らしていると思う！ 仮にも相手は女王陛下だぞ？ 勝手に婚姻承諾の返事を送るとはいいい度胸だ。実は結婚する気なんぞ欠片もありませんと御前で言わねばならなかった私の身になってみる」

実際にすり減らしているのは神経ではなく弁解のための口舌なのだが、とりあえず置いておく。

「……僕の体力と精神も随分擦り減りました……」

「あげく。恩知らずかつ能無しで今すぐ土に埋めてやりたいほど可愛い可愛い我が居候が私を想うあまりに暴走したのだとどれだけ説得しても聞く耳をお持ちにならない」

蚊の鳴くようなルナールの訴えを瞬殺し、ユニヴェールはキャベツの煮込みスープに手を伸ばす。

食事はこの屋敷に憑いている幽霊の女中がいるから不自由はしない。だが、メイドがないのは不便だった。

世を恐怖で戦慄させる吸血鬼が、皿洗いだの掃除だのでは様にならないではないか。

「ですから……、ずいませんでした……」

人間の姿猫の姿問わず三日三晩ロープで縛って転がしておいたのが効いたのだろうか、ルナールは涙を流しながらうめいてくる。

生物、長時間“何もしないことしかできない”ということとは、ある種の極限状態をもたらすものなのだ。

「……………」

窓の外を見れば、時は夕刻から夜刻へと移りつつあった。

「貴様もうすぐ猫になるな？ 縛り直すまで逃げるのではないぞ？

あと三日くらい縛っというてやるんだからな」

「ぞーんなあ……」

ルナールの非難がましいい声音に、吸血鬼は双眸の紅を強くした。

「地獄の王のもとへ送り届けてやってもいいのだが？」

一瞬息が詰まったように空気が引きつり――、ルナールが顔色を失くしてぶんぶんぶんと首を振る。

「いえいえいえいえいえいえいえ、結構です文句言いません縛られています」

「よろしい」

軽くうなずいてユニヴェールはナイフとフォークを置いた。

そしてテーブルに肘をつき、およそ神の創れる完璧な造形だろう両手を眼前で合わせる。

「一昨日、昨日、今日と連夜で婚姻断りの説明をしに行くのは、陛下のご不興を買いかねんな……。パーティータでも探しに行くか？ あいつのことだからただ旅行に出てみたなんて話もあり得るが……：そういえば今夜から暗黒都市のウォーリングフォード劇場でアダム劇をやるとか言っていたな……。暇潰しにでも出かけるか……？」

ユニヴェールの屋敷は広い。

ロマネスク様式が随所に見られるその建築物は、華美なところのないパテルの町と沈んだ色の黒い森によく似合い、重く積まれた時代の風合いが見る者に畏敬を抱かせる。

部屋の数は一両手両足の指以上。地下にはワインの貯蔵庫、食糧庫、書庫、その他必要なかどうか首を傾げる穴倉が数個ある。

廊下はすべて赤絨毯が敷かれ、ユリやスズラン、蛍袋などという花をかたどったランプがぼんやりとした琥珀の光で夜を照らしていた。

以前はそれなりに名のある貴族が住んでいたのだが、今となってはただ三人だけ。しかも目下はメイドが行方不明なので主と下僕のふたりだけ。

そんなわけで広大な屋敷はいつでも薄暗闇と厳かな静寂に包まれ、誰かが玄関扉の前で叫んだりすれば、奥まった食堂までも筒抜けの状態にあった。

もちろん、今夜もそうだったのである。

「シャルロ・ド・ユニヴェール！ 聖騎士ヴィスタロッサです！
ここを開けなさい！」



世界には永遠に続くだろうふたつの面がある。
それは光と闇。

そしてそのふたつの色が最も濃く対立していたのが、いわゆる中
世暗黒時代である。

古代よりの伝統と物語を身の内に飼いながら、近世への思想と科
学の目覚めに突き進む。

時の境目さかいめが渦を巻く混沌に翻弄され、確かなものを見失いながら
確かなものを探す時代。

富を持つ者と持たぬ者、権力を持つ者と持たぬ者。聖なる緋色の
枢機卿が集い神に祈りを捧げるヴァチカン、その門の外ではローマ
の物乞いがボロ布をひきずって路地を徘徊する。

その荒んだ闇に魔物は潜むのだ。

唆す言葉は巧み、焚きた付ける囁きは甘美、弱き人には抗う術もな
い。

彼らの楽しみは、騒乱。魔物。惨劇。悲劇。それを演出するためには手
段を問わない。

光が強ければ強いほど、照らされないわだかまりの闇は深さを増
す。

闇が濃ければ濃いほど、光はまばゆく輝いて見える。
それがまた、闇を生む。

「急な用件なのです！ 捕まえたりせぬから開けなさい！！」

「誰が捕まるか」

「な！ シャルロ・ド・ユニヴェール！」

彼が屋敷正面の扉を開けると、自分で呼び付けたクセに彼女は叫んで大袈裟に跳び退いた。

この前対峙した時の様に甲冑は身に付けていないものの、規定の純白騎士服を身に付け細剣を帯びたヴィスタロッサは、確かに常人よりも凛々しい気迫はある。

しかし、たかだか二十数年しか生きていないような小娘の威嚇を真に受けるほど、ユニヴェールはマメではない。

「……………」

彼がわずかに目を細めれば、

「何でお前が出てくる！」

喉の奥から唸り声さえ上げそうな勢いで、ヴィスタロッサが指を突きつけてきた。

「ここは私の屋敷なのだから私が出てきて当たり前だろうに。——何か用か？」

対してユニヴェールの口調に険はない。

彼にしてみればヴィスタロッサなど子ども同然だ。そもそもヴァチカンの教皇もフランス国王も、神聖ローマ帝国の皇帝も、全員子どもに等しい。この吸血鬼、外見こそ若いものの、時代を渡って三百年程になる。

「……………」

しばしの後、口の中で何やら躊躇^{ためら}っていた金髪女が、勢いよく顔を上げてきた。

「……ユニヴェール卿、お前は教会を恐れるか？」

「……………」

ユニヴェールは無言の白い眼差しで彼女を見下ろした。

口を真一文字に結んでまた一步後退する彼女に、自然と薄い唇が笑みの形を作る。

「神も十字も恐れぬものを、何故教会など恐れる必要があるのだ」

「吸血鬼ならば恐れよ」

いささかムツとした表情でヴィスタロッサがそっぽを向いた。

綺麗に巻かれた金髪が揺れる。

「吸血鬼ならばロザリオで逃げろ。銀の銃弾で倒れる。太陽の光で灰となれ。山査子さんざしの茂みには近づくな。福音書の言葉に泣け。聖剣で滅びよ」

「あいにくと私はそんな繊細な輩とは違う出来でね、お嬢さん」
マドモワゼル

ユニヴェールは切れ目のない動作で腕を伸ばし、ヴィスタロッサのあごをつまむ。

と、瞬時に彼女の額に口付けた。

「!!!!!!」

「……ふむ」

完全に凍りつく彼女を横目、吸血鬼はまたもや信じられないという表情で眉をひそめる。

「何故パルティータは来ぬ？ 普段なら“節操なし”とか言われるパターンなんだがな」

あごに手をやり首をひねる。

と、その足を黒い塊がすり抜けて外へと出てった。

「ルナール！」

鋭く叫べどソレは振り向きもしないで夜の闇へと消えて行く。

猫の姿になったものだから縄が意味をなさなくなってしまったのだ。

「食堂の扉を閉め忘れたか……。まあいい、明日帰ってきたら今度は縄が緩んだら死にそうなくらい高いところから吊るしてやろう」

黒猫が逃げていったのは、濃紺に浮かび上がる黒々とした森の中。微風にさえもざわめく木々は互いに話をしているように聞こえ、だがそれは、中に入る者を二度と帰さぬ嘲わらい声にも聞こえてくる。

この深い森は昼でも暗く、道を知ろうと奥を見据えても、あるのはただ右も左もなく広がる闇、のみだ。先は無く、後もない。

人間がその森に足を踏み入れれば、まずその届き得ぬ何かに畏怖する。そして慣れる。だが、長居をし過ぎれば――潰される。

悠久の時を内包する原始の針葉樹林。広がる闇は世界の源であり、天を覆い林立する木々は生命の礎であり、腐敗した落ち葉を蓄えた大地は全ての辿り着く場所だ。

しかしいつか人は、この森を焼き、拓くかもしれない。

暗黒都市への入り口が白日のもとにさらされる日が来るかもしれない。

それはもちろん、ユニヴェールがこのパータルから去っていることが条件だろうが、そうである時、世界の様相はどうなっているのだろうか。

人が闇を駆逐した時なのか、人が追い詰められ喘ぐ時なのか――。

夜独特のひんやりとした空気を吸い、ユニヴェールは思考を止めた。

ふいの口付けを受けて固まっていたヴィスタロッサがようやく動いたからだ。

「ぶ、無礼だぞお前！」

彼女の手は腰の細剣にかかっていた。

「何が」

投げやりに言ってやれば、彼女はぱくぱくと口を開閉してくる。

だが、ユニヴェールはもう飽きていた。

「すまんが、メイドを探さねばならない。用件があるなら早くしろ」「……それであの女が出てこなかったのか……」

横へとそうつぶやき、ヴィスタロッサが顔を上げた。

おそらく間違った方向へ純粋なのであろう、碧眼がひたと紅を見据えてくる。声音もしっかりしていた。

「頼みがある。幽霊を退治してくれ」

「は？」

「あのだな、私の友人が勤めている教会でだな、さ、最近……ゆ、幽霊騒ぎが起きているわけであって、私とその退治を頼まれた」

おそらく幽霊という類が苦手なのだろう。

説明し出してから彼女の声は異様に震えていた。まあ、人間誰にでも苦手なものというのは存在するのではあるが……紅唇までもが色褪せている。

「だ、だがその教会というのがクセものであってだな。お、お前は三十年前にあったというロバン事件を知っているか？　れ、礼拝に来ていた一般人を、ひとりの男が無差別に斬りつけたという事件だ。死者は十三名」

「ああ、知っている」

サイド・ロバンという貴族の子息が起こした事件だ。ひとりの男に、大人も子どもも無差別に殺された。

「今の幽霊騒ぎはその時殺された奴等だ？」

「悔しく無念であった彼らは未だ神の御許へ行けず、嘆き哀しみ、その寂しさゆえに生者を同じ道に引き入れようとしているのだ。ああ私も引きずり込まれてしまう。まだ死にたくないのだ！　恐ろしい！　そんなところへ行きたくない」

「それが聖騎士の言うことか」

「頼むユニヴェール卿、前回のことはなかったことにしてやるから私に力を貸してくれ。知り合いで幽霊も化け物も死も悪魔も恐れぬ輩といえばお前しか思いつかなかったのだ」

彼女は驚愕の握力でユニヴェールの手を握り締め、懇願してくる。

「前回のことはこっちがなしにしてやったという記憶があるな」

「解決してくれたらパーティータを返してやってもいい」

「貴様が誘拐したのか？」

「そうだ」

ヴィスタロッサの断言。

「――違うな」

だがそれは、割って入ったやけに渋い声によって完全否定された。
「貴様は何者っ！」

ヴィスタロッサが聖騎士なりに聖騎士っぽく怜悧に反応した。非情の銀色をした細剣の切っ先が、光る。

夜風が庭を渡り、森を全体を揺らした。

沈黙が計られ、冷涼な中に緊張の糸が一本現れる。

正面の門へと続く道。そこにいつの間にかソイツはいた。

面会の約束はないはずだ。

が、ユニヴェールは月に嫉妬されるだろう美貌をぴくりとも動かさない。

夜陰に紛れたその男。

背はユニヴェールと同じ程。だが細身の吸血鬼とは違って身体造りに厚みがあるため、ひとまわりは大きく見える。

黒の長い騎士服をまとい、腰には二振りの長剣。一本の短剣。青みがかった黒髪に飾られた顔は美しいというより野性的であり、しかし余計に色気はある。

そしてユニヴェールの視線が猛禽類だと例えるならば、その男のそれは凶暴な肉食獣だ。一撃必殺よりも、狩り^{なぶ}廻ることが好きなタイプ。頭が良く、喰えない輩。

「女王陛下にお仕えする黒騎士がどうした、ウォルター・ド・ベリオール」

ヴィスタロッサのために付け加えた最後の一言が、その侵入者の名前であった。

ウォルター・ド・ベリオール。

吸血鬼に対するのがローマのクルースニクであるならば、聖騎士に対するのがこの黒騎士という者たちである。

詳しくはユニヴェールも知らないが、悪魔に――正確には暗黒都市の女王に魂を売った騎士が、不死と引き換えに堕ちた姿こそ黒騎士なのだという。

もっともこのベリオールは元から人間ではなく、生粋の北欧由来の魔物だが。

「聖騎士のお嬢さん。嘘はいけない。仮にも神を崇拝するヴァチカンに仕える身であるならな。お前さんはココのメイドを誘拐してはいねえだろ」

ベリオールが粗野に笑った。

言葉はヴィスタロッサに向けられているが、彼が視界に入れているのはユニヴェール。

そして彼は、好戦的に笑う。

「邪険にしてくれるなよ、番犬。俺は陛下からの大事なお言葉を預かってきたんだ。“メイドの命が惜しくば婚姻の儀、行なうのみ”ってな」

「……………」

挑戦状だ。

「どうするよ。ん？ 俺は言葉を伝えに来たただけだがな」
女王の我侔ではある。

だがこれは、同時この男からの挑戦状でもあるのだ。

軽い口調とは裏腹に、ベリオールの目はユニヴェールがどう出るかを待っている。シャルロ・ド・ユニヴェールという者を試している。

番犬と称された吸血鬼は、ただ強いだけの視線を黒騎士に向け――
「面白い」

笑いも怒りも困りもせず、そう一言だけ告げた。

それが、宣戦布告だった。

第3話【パルティータ誘拐事件】後編

吸血鬼という生き物は、過酷な宿命を背負った者であると言われる。

永遠の命と引き換えに、次々と失われてゆくものを受け入れねばならない。いかに優しき心の持ち主と言えど、他人を犠牲にせねば狂気に病む。

そうして彼らは、闇に堕ちておよそふたつに分かれる。

神を恨み、呪い、世界を憎む者達の一派。

彼らは暗黒都市の中核となり、光を蝕む手先となる。人を狩り、クルースニクと対峙する。夜を凍らせ、華やかな都市を紅に染め上げる。

彼らを支配するのは、彼らをこの運命へと陥れた世への憎しみ。

彼らは自らを置き去りにした光を、人間を、赦すことができない。

世界を愛せば愛すほど、裏切りへの怒りは深くなる。

もうひとつは、己の運命に嘆きその身を呪う者達の一派。

彼らはいつでも悲劇の物語の中にいる。血の飢えと、理性の狭間。自らに課された永遠と、愛すべき者の喪失との間。求められる冷酷さと奥底に残る情との矛盾。

世界を愛せば愛すほど、己の身を呪う言葉は深く傷をえぐる。

「どうにも愚かな生き物だな」

夜に浮かぶこじんまりとした白の教会を見上げて、ユニヴェールはそう暇つぶしの解説を締めくくった。

「お前も吸血鬼だろうが」

斜め下から白い眼を向けて聖騎士ヴィスタロッサが言ってくるが、ユニヴェールはフンと鼻で笑い、

「墓場の臭いがするぞ、ここは」

彼女の言葉を軽く払いのけた。

手にしたランタンをかざさなくとも姿を誇示する白いその建物が、ヴィスタロッサの言う幽霊騒動の教会だった。

綺麗にそろえられた芝生の奥に、ひっそりと佇んでいた“墓場”。

クルースニクやら吸血鬼やらが好んで使う用法から言うと――、死んだ場所そのものも墓場と言うことができるらしい。ならば、この教会を墓場と呼んでも悪趣味な冗談にはならないだろう。十三人も死んだのなら。

「神を崇める場所とは思えぬ禍々まがまがしさよ」

「お前には入りやすくてよかろうに」

「馬鹿を言え。人々の念が交錯する場所ほど頭痛のする所はあるまい？」

言いながら彼は扉を押す。

人間ならば大人ふたりでやつと開けるものを、片手で。

「……………」

扉を指差し何やら言いたげにわたわたしているヴィスタロッサから視線を外し、ユニヴェールは人間の聖地へと踏み込んだ。

ドーム状に天高い聖堂。原色で彩られたステンドグラス。今まで幾度となく目にしてきたものと何も変わらない、質素な教会。

「……気に入らん」

ぐるりと見まわした吸血鬼の顔に、不機嫌の色が横切った。

純粹な祈り。隠された欲望。薄く全てを覆う支配の意志。嘆きと救済を求める声。懺悔と怒り。崇拜と策謀。

やんわりと教会を漂うそれらの残された思念は、まわりついで彼を締め付ける。眉をしかめて振りほどいても、聞き分けのない子どものようにすぐまた寄って来る。

「……丸ごと喰うぞ」

しかし低く脅せば、それらの念は蜘蛛の子を散らすごとく霧散した。

異様に縮こまっているヴィスタロッサを後ろに従えて、彼は一步、教会の中その聖堂に靴音を響かせてゆく。

両脇には乱れなく並べられた長椅子があり、壁の燭台にはひとつも消えることなく炎が揺れていた。

「神よ、呪われた我が身を救いたまえ」

ユニヴェールは中央で足を止め、眼前の祭壇へと高らかに乞うてみた。

微塵の思慕も映さぬ双眸は十字架を見据え、凍てついた微笑みを露^{あら}わにする。

「そう言ったら私はどうなるだろうね？ 私は救われるか？」

「お前は救いなんか求めているだろうが」

「求めぬ者には与えぬか」

「……………」

聖騎士がこちらを睨んだまま口をつぐんだ。

凜とした白の衣装は気高く、永遠にしゃべらなければ彼女は実に美しい。だが死すればその美しさは滅するだろう。明後日の方向を向いたその口が開かなければ、彼女は彼女でない。死とはそういうものだ。

少なくとも、ユニヴェールはそう断じていた。

安易だろうが、世の中そんなものなのだ。

「自分を慕わぬ者には加護を与えぬ。だから神は偽善と言われるのだ。見捨てられた者からな」

「そんなことはない！ 神は全ての者を想っているのだ。自らを信じない者に対しても、慈愛の心を持っておられる」

「ならば何故堕ちる者が存在する」

答えが聞きたいわけではなかった。

ユニヴェールは答えなど必要としていない。今一番必要なのはメ

イドなのだ。憐れみよりも紅茶を運ぶ者が。赦しよりも起床を告げる者が。

「私は神を憎んでもいないし、人間を憎んでもいない。この身を呪ったこともない」

彼は祭壇の前に並んで立っている十三人に目をやった。

ドレスを血に染めている貴婦人や、子ども達。首がとれかかっている青年に、なんだか眼が据わっている老人。年月のためか、どこか古い絵画のようなカビ臭さがあるが――皆、曖昧な笑みを浮べてこちらを見ている。

「全知全能の偉大なる神など所詮は我々の幻想だ。人の運命はなるようにしかならん」

「だが救世主は実際に！」

「救世主はただの改革者に過ぎない。いつでも」

彼の声音はいたって穏かである。

寝息をたてる猫の背をなでるように、優しくしなやかで……だがその実、劇場歌手のようにどこまでも響いている。

「シャルロ・ド・ユニヴェール。お前は何故吸血鬼なのだ」

びしっと、空気を叩く音がしそうなほどに剣を突きつけてくるヴィスタロッサ。

彼女の瞳はユニヴェールに固定されていて、おそらく不気味十三人組のことは見えていないのだろう。

ここが件の教会だということも忘れているに違いなかった。

ユニヴェールは小さく首を傾げて女殺しの笑みを浮べる。

「吸血鬼始末人をやることに飽きてな」

言い捨てるなり彼は大きく祭壇へ跳びあがり、真ん中に置かれていた十字架を優雅に掴んだ。

火傷なんぞ気にはしない。そもそも彼の白磁のお肌には傷ひとつ付かないのだ、こんな薄汚れた思念で崇められた十字架などでは。

「何故だろうな？ この教会には幽霊だけじゃなく暗黒都市の悪鬼までが入り込んでいるぞ。……ヴィスタロッサ！ 後ろだ！」

言うと同時に鋭い金属音が耳に鳴った。

銀色の刃が翻り、大きな狼のようなシルエットが床を打つ。

これが戸口で鳴いた家からは必ず死人が出るという黒の妖犬、バーゲスト。あれだ。

「なんでこんなものがっ」

悲鳴ひとつ上げずに血糊を振り払うヴィスタロッサを横目、ユニヴェールは自分に向ってきた妖犬に思いっきり十字架を投げつけた。見た目は良くないが——まあ誰も見ていないので構わない。

そのままの勢いで軽く祭壇から着地をすれば、彼の仲間と言うのか敵と言うのか“食屍鬼”^{グール}がわらわらと聖堂に入場してくるところだった。

食屍鬼。その名のとおりに屍を喰らう闇の者である。自身も死者であり、身体は腐敗しその目に意志はない。あるのは食す本能のみ。多く暗黒都市の輩が操る下級兵士とでも言おうか。

斬っても斬っても立ち上がるそれはさすがに気味が悪いのか、ヴィスタロッサがユニヴェールの方へと後退をしてくる。

「結婚式でもやるつもりか……」

彼女は余裕のない冗談を床に落とす。

対してユニヴェールは背筋を正して直立。腕組みをして蔑みの眼差しを食屍鬼の群れへとくれてやる。

「こんな奴らを入れていたから、今まで眠っていた幽霊達が目を覚まして人々の目に触れていたわけだな。闇は闇を呼ぶ」

「ユニヴェール！ 何を呑気なことを！」

さすがの銀剣も、切れ味が鈍ってきたのだろう。一撃で倒せずヴィスタロッサの足が後退の歩を速めていた。消えない炎の揺らめきが大きくなる。

荘厳なる聖堂には濃い死臭が充満し、呪われた死の行進が引きずるような不気味な和音で迫ってくる。

「ここの幽霊達は、悪気はなかったと言っているぞ。ヴィスタロッサ」

「ああそれは良かった！　だが今は幽霊よりも食屍鬼をどうかしろ」

「この食屍鬼は——我が同朋だな。暗黒都市からやってきた」

「だから手出し出来ぬと言うか！？」

「——そんな義理など持ち合わせていない。ただな、ここにこ奴らがいる理由を思いついたのだ」

「そんなことはどうでもいい！」

「無関係だった点と点が繋がったのだ。誘拐犯はここに我がメイドを隠している。食屍鬼を外の見張り役にしてな。人為的でなければ教会にこんなやつら現れん。そしてそれゆえに食屍鬼の気配を察して幽霊が起きた。素晴らしい。完璧だ」

「ユニヴェー……ル」

叫んで振り返ってきた聖騎士の声が尻すぼみになっていた。

彼女は碧眼を歪めて、息を詰める。

ユニヴェールはただ自らの推理に満足して笑っていただけだ。

そして彼を誰とも判別できずに向かってきた食屍鬼の首をその研がれた爪で掻き落とし、笑っていただけだ。どす黒く変色した紅の雫が、白い手を音もなく流れ落ちてゆく。

「盛大な挑戦状を叩き付けた割には、子どものお遊び止まりだな。もつとも——」

彼は奥へと続く、祭壇横の小さな扉へと視線をやる。

「これができる限りの最善であると分かっているところは、さすが女王陛下と言うべきだろうが」

「コラ待てユニヴェール！　勝手な行動は慎むのだ！」

黒の吸血鬼は化け物じみた（というか化け物だが）脚力でひらりと食屍鬼の大群を越え、群がろうとする者の首を躊躇いなく匆^はね、目的の扉を開いた。

「ヴィスタロッサ。幽霊どもは悪さなどせんから、お前の頼みはめでたく完了したぞ。金はそのうち請求しておく。では——おやすみ^{ボンヌニユイ}」

言うだけ言うと、彼は軽くキスを投げて後ろ手に扉を閉める。

目の前には細くて息苦しい回廊が奥へと伸びている。あまり入れ替わることがないのだろう空気が、まずい。

なんだか背後の扉の向こうから呪詛のような言葉が聞こえてこなくもないが、過去にはこだわらない主義なのだ。

そうだ。過去はいい。

なんであろうともう過ぎ去ったものなのだ。

「……茶番だが……」

ユニヴェールはふと嘆息気味に肩を落とす。

「つきあわなければあのメイドは、自主的に帰ってきそうもない……」

問題はいつだって未来なのだ。



どこへ続いているのかも分からぬ暗い回廊。誰がいるのかも分からぬ闇の先。

それなのに高らかな足音をさせて歩むユニヴェールの眼前に、小さな扉が現れた。……そこで行き止まりだった。

並みより高い背丈の彼がそれでも一応身をかがめずに済む、それほどどの扉。

「……………」

今日何度目かのため息を押し殺して開ける。

「……………」

開けて見えた光景に、そのまま閉めて踵きびすを返したいのをどうにか堪え、彼は恐ろしく落とした声音で言った。

「……貴様、そこで何をしている」

「これはまたお早いお出ましで。アナタ様が教会なんかを恐れる人

ではないとは思っていましたが」

そう一礼しながら、道化師の仮面^{マスク}を顔にかざし、部屋の中央に立っていた男がくりとこちらを向いた。

誰かれ構わず神経を逆撫でする慇懃な口調。

だが、

「貴様ではない、ベリオール」

ユニヴェールは一瞥すらくれずに挑発を叩き返す。

彼の紅は、ロウソクに照らされた部屋の向こう側、何種類もの揚げ菓子やら果物のタルトやら切り分けられたパンケーキやらがのせられたテーブルの向こう側を、じっと射ていた。

「その灰色。貴様だ貴様」

「——はい？」

名指ししてようやく、彼女は動かしていたフォークを宙に止めて顔を上げてきた。

しばしそのまま制止し、思い出したように口を開く。

「ああ、ユニヴェール様」

長い黒髪に血色の悪い顔、いつもどおりの灰色メイド服をしつかり身に付けたその女は、紛れもなく彼の持ち物であった。

ちやうどユニヴェールと対面する形でテーブルについている彼女は、どうやら片っ端からおやつを食べていたらしい。

「パルティータ」

声をかけるユニヴェールの顔には、自然この世の果てまで華やかにするだろう凶悪な笑みがのる。

「何ですか？」

「何をしている？」

「捕まっています」

「そうか」

「はい」

「それはまた楽しそうだな」

「これくらいの役得がなきゃ人質なんてやってられません」

平面顔でそう言うと、彼女は真っ直ぐ主を見据えてきた。
暗黒都市の闇よりも深い双眸が無味乾燥な無言で告げる。

「……………」

吸血鬼は笑みを消した。

一度まぶたは閉じられ——次瞬開いた紅の瞳には、道化の仮面が映りこむ。

「ベリオール。何をした」

「ユニヴェール卿。そう恐い顔しなさんなって。俺はただ色よいお返事をいただきたいだけだね」

獅子か虎。そうでなければ竜だ、この男は。

ウォルター・ド・ベリオール。

彼はきつと、下にいるだけでは飽き足らない。忠実に仕えながらも、虎視眈々と取って代わる日を狙っている。その相手が暗黒都市を統べる女王であっても、だ。

……生来の魔物で、生来の野心家なのだ。

「では質問を変える。私が“Non”と言ったらどうなる？」

「メイド募集の広告をお屋敷の前に貼り出すことになるかもな。あんたも知っているだろう？俺の特技は剣じゃなく、“烙印”だ。」

「烙印の呪を押された者は、術者の意志によって殺される。どれだけ術者と烙印者が離れていようと、どれだけ烙印を押してから時間が経っていようと。人間には出来ない——究極の暗殺技だな。色々と制約もあるのが難点だが」

ユニヴェールはなるほどとわずき、しかし……と首を傾げた。

「それは女王陛下の指示された行動とはいささか違う。そうだな？」

「とはどういう意味でしょうか？」

道化の黒騎士は面白がって馬鹿丁寧に疑問符を返してきた。だがユニヴェールは鷹揚おうように対する。

「女王陛下は、メイドを殺してまで返事を持ってこいとはおっしゃっていない。あの方が指示したのはメイドを誘拐して私を脅迫しろということろまでだ」

「そうか」

「そうだ。何故なら——」

一拍置いて、彼は仮面の合間からのぞくベリオールの目を捕える。この男の目は、すべてにとって危険な目だ。均衡を崩す意志と勢いを持った目。感情を殺さぬ目。

それを見つめたまま、告げた。

「女王陛下は私が“何者でもない”ことをご存知だからだ」

「……何者でもない」

おそらく消滅その時まで失せることのないだろう強い光——ベリオールの視線が一層強まった。道化の仮面は外されず、しかし声には本人が混じる。

「……アンタは、ただ一人で光と闇、両方の刃を受け止められるつもりなのか、ユニヴェール卿」

「それは誰にも分からんさ。やってみねばな」

——何者でもない。

その言葉は、分かる者の間では世界でたったひとつの意味しか持たない。

光と闇の間にある、“中立”。

善意を持って言えば、何もされなければ脅威にはならないということ。

悪意を持って言えば、理由があればどちらにも牙を剥く^むということ。

中立。

それは本来あるはずのない、しかしただ一匹の吸血鬼のためだけに用意された椅子。

「黒騎士ベリオール。貴様の一存で実験を開始する心構えはあるか？
暗黒都市と私を戦わせる覚悟はあるか？
女王陛下はそれを回

避するために我がメイドの“誘拐”で事を留めたのだ。陛下のお怒りを身をもって私に知らしめる、それで事を収めるおつもりだ」
緩やかな脅迫だった。

「階段を昇りたいのなら、時を選んだ方がいい。——もうすぐその時は来る」

歌うように上品なテノール。

だが地の底を這うような熱もまた、潜む。

魔物が人を堕とす時と同じ、セイレーンの如き魅惑の旋律。

「メイドを殺しても構わんが、その代償は思うより大きいぞ」

ムツと眉を寄せる灰色のかたまりを視界の隅に、ユニヴェールは肩をすくめた。

「どうする」

「……たかがメイドひとりにお優しいことで」

道化の仮面が静かに降ろされた。

今にも喉笛を噛み切ってきそうな目が爛々《らんらん》とこちらを睨んでいるが、手は剣にかかっていない。

「私をなめられては困るのでね」

「……化け物が」

吐き捨てられたと同時に、騎士の姿は霞と消えた。

ウォルター・ド・ベリオール。

暗黒都市の暗黒。

「……………」

「……………」

ユニヴェールが息をついて視線をずらせば、彼のメイドはじーつと目の前の菓子山を凝視していた。

が、主の目に気がつくと変わらぬ真顔を上げ、彼の言葉を待つ。

「怪我は」

「あるわけがありません」

「烙印は」

「消えました」

過去は過ぎ去ったものだ。

失ったものも、壊されたものも、自ら壊したものも、どうにもならない。そして、それらには何の感慨もない。情もなければ未練もない。何もない。何者でもない。ただ世界を見下ろして、光と闇とを天秤にかける。

そうやって軽く笑う。

そんな現在を繰り返す。

死者に——吸血鬼に将来と呼べる未来はない。だが、問題は未来なのだ。将来がなくなるとも未来はやってくる。世界の時は流れ続けている。

ならば、永遠に未来と格闘し続けることが彼の宿命だろうか？

だとしても彼の優位は変わらない。

野心もない、目的もない。

だからこそすべてを抱き、すべてを飲み込むことができる。

歴史の大河と同じように。

ユニヴェールは満足げに目を細めて、メイドに背を向けた。

「では、屋敷に帰るぞ」

「御意」



—— 二日後 ——

「……今日買い物に出かけましたら、ヴィスタロッサ聖騎士が昇進したという話を聞きました。なんでも食屍鬼の百人斬りをしたとかで」

パルティータが声をかけても、紅茶をテーブルに置いて、主は

あごに手をやったまま紙束を睨み微動だにしなかった。

「女王陛下から謝罪のお手紙も来ていました」

「ベリオールも意外と律儀者だな、あんな失態まで報告したのか」
相変らず視線は紙を忙しなく行き来し、しかし一応聞こえてはい
たようである。

「食屍鬼をあんなに動かして、聖騎士をひとり昇進させるまでに事
が大きくなったら、報告せざるを得ないと思いますが……。しかし、
彼は単なる食屍鬼で卿を追い返せると思ったんでしょうか？」

「あいつはきつと私が来るとは思ってなかっただろうよ。この私が
メイド一匹を本気で取り返しに来るなんてな。あそこに来るのは一
般人と巡回の聖騎士だけだとタカをくくったから、食屍鬼だったの
だ。——いいか、パルティータ覚えておけ。勝負というものは、驚
いた方が負けだ」

「……………」

夜陰の降りた窓の外をちらりと見、パルティータは気を取り直し
てずいっと主の手元をのぞきこんだ。

「……まだ決まらないのですか？」

「あと三人だ」

ばさっとテーブルに投げ出されたのは労働契約書の束。

不合格と烙印を押された紙の年齢欄を、鋭利な流線型を描いた爪
がコツコツ叩く。

「年齢が問題だ。子どもは難しい」

ユニヴェールとパルティータ。ふたりが現実を見つめれば、大き
な食堂のテーブルはいつになく大盛況。老若男女十三人、共通項は
ホラーについた血糊と不気味な薄笑い。あの教会にいた幽霊たちだ。
「大体なんで私が暗黒都市への就職^{あっせん}幹旋をしなければならない？

本来神の御許に行きたいもんじゃないのか？」

「権力は有意義に使うべきです。あんな陰気なところにずっといた
のでは可哀相ですよ。神様は助けてくれそうにないですし」

手をつけられる気配のない主のティーカップ。彼女は言いながら

砂糖を入れてかきまぜた。ミルクポットを軽く持ち上げれば、主は緩く首を左右に振ってくる。

「——あんな陰気なところで楽しげにおやつを食べてたのはどのどいつだ」

「誘拐でもされれば、ありがたみが身にしみて給料上がるかと思ひまして」

「三分の一カットだな」

「ひどい。誘拐されたあげく不当に労働条件を悪くされたのでは黙っているわけにはいきません」

パルティータが棒読みで拳を握ると、ようやく紅茶に口をつけた吸血鬼が嫌味な微笑を向けてきた。

「昔の伝でヴァチカンでも紹介してやろうか？　その特異体質では実験台にでもされるのがオチだろうがな」

「そういえばユニヴェール様は——何者でもないとおっしゃっていましたね？」

話が飛ぶ。

だがユニヴェールは答えた。

「何者でもない」

「では何故暗黒都市の番犬なんかやっているんです？　どこから見ても闇に染まってますよ。中立には見えません」

深い理由があるのだろうと思ったわけではないが、それでも答えはあまりに早かった。

「労働契約なのだから仕方ない」

「……はい？」

「柩に眠って人を襲って眠って襲って……私はな、そんなことを繰り返しているだけの低文化的な吸血鬼ではいたくはないのだよ。芸術を愛で、育て、美味しいものを食べ、少しばかりどこかの国に肩入れし、歴史の天秤に触れ——そうするためには力と地位に見合った暮らしをしなければならぬ。だが、他人の厚意によってそれが手に入っても意味がないのだ。恩を受けるということは、

そこから身動きがとれなくなるということだからな」

要するに好き勝手やるためには、特定の者から庇護を受けるわけにはいかない。自立しなければいけないということか。

「世の中金だ。地に足つけたまま笑ってやるには、自分で稼がねばならん。ま、単に金払いがいいのが女王陛下だっただけの話だな。

私は暗黒都市に雇われているのだから、よほどのことがない限り暗黒都市の命によって動くがね」

あっさりした白哲で、主はもうひと口紅茶を含んだ。

裏も表もなさそうで、しかし裏だけしかなさそうな飄々たる風貌。どこまでが嘘でどこまでが本当なのかは分からない。分からないが――パルティータはあからさまに顔をしかめて非難の声を上げた。

「世の中金だなんて、はしたない。それが紳士で売っている吸血鬼の言うことですか？」

似た者同士であるということを教える者は、誰もいない。

ついでに、黒猫ルナールの心配をする者も、いない。

「ああそうだ、パルティータ。劇場の無料招待券があるんだが、今夜行くか？」

THE END

第4話【魔女狩り】前編（前書き）

魔女狩り…諸国家と教会が異端撲滅と称して特定の人物を「魔法を使って悪事を働いている魔女」とし、裁判を行って次々と刑に処した一連の歴史的事実。

魔女を見つけ、事実を明らかにして取り締まる者が異端審問官である。

第4話【魔女狩り】前編

時は中世十五世紀後半。地はフランス南部の片田舎、パテルという名の小さな町。

フランス内外からの貴族が都の喧騒を逃れて羽を伸ばすこともあるほど景観も治安もよく、こじんまりとした教会が数箇所にあつて、時を告げる澄んだ鐘の音はどこにいても聞くことができる。町の外には畑が広がり、緑の山と青い空がそれを彩る。

実に牧歌的な風景のパテルだが、一応は内陸の要所を繋ぐ中継地点であり、商業の町としての一面も持っていた。

商売道具を下げて行き交う行商人、誰よりも大声を出そうと頑張っている葡萄酒の呼び売り、一等地で必ず繰り広げられる場所取りの喧嘩や、値段交渉をする威勢のいい婦人——そういった人々の活気が町の大通りを埋め尽くす。

路地に入れば職工たちの工場の音やら家々の食卓の香りやら、歩くだけで人生の充実を得られそうな生活が広がり、疲弊した上流階級がここで魂を癒そうとするのもうなずける。

しかもそうした気持ちに余裕の生まれた貴族や裕福な商人が施してゆくため、ローマでは来る日も来る日も生きるか死ぬかの戦いを強いられているような貧しい者たちも、この町ではそれなりに生きているのだ。

物乞いの顔さえ穏やかで、殺伐とした影はない。

そしてそんな町の裏手は——山の裾野を広大な森が覆い尽くしている。

鬱蒼と針葉樹が立ち並び、下草や藪が茂ったそこは昼間でも薄暗く、狩りに入ろうものなら道を失い帰ってこられない。

おまけにこの森のどこかには、“ヴィス・スブランドゥール”と

いう異形の化け物が集う暗黒都市があるのだと、昔から言われていた。

人間たちの間でも噂になっていた。

そしてもうひとつ。

その森の入り口で入る者を監視するようにある大きな屋敷。

昼間は門の前を掃き掃除をするメイドがひとり。真っ黒な剣士衣装に身を包んだ若い男が時折出入りして、それ以外に人らしき姿はない。

しかし黄昏時になると屋敷のあちこちに炎が灯り——夜ともなれば人々は、身を縮めた家の中から、その屋敷の方向へと走るいくつもの車輪の音を聞く。

“あの屋敷には化け物が住んでいる”

何百年前からだったか、そんな噂が囁かれた。

そしてそれはやがてもっと確定的な口伝に変わっていった。

“あの屋敷にはシャルロ・ド・ユニヴェールが住んでいる”



秋の収穫も終盤に近づいた、ある夜。

豊穣を祝い、あらゆる聖人を祝う万聖節。^{ハロウィン}死者の魂も、地獄の魔物も地上に返ってくる季節。その前日のことだった。

いつもと同じく静寂の黒が家々を包み、申し訳程度に灯された十字路のランタンの光までが、濃い闇色に首をすくめていた。通りに人影はなく、声もない。

聞こえるのは、窓をかすめ行く北風。そしてざわめく木々の笑い声。

そして黒い森に巣食うものたちが夜を祝す杯の音。

しかし。

闇がわだかまる地面を、黒い森の方向からコロコロと転がってく
るものがあつた。

くすぶつた黒煙を丸めたようなその物体。風にとばされる綿ぼこ
りのように、二、三個でもってコロコロ転がる。その真ん中には、
愛嬌のある小さな目がふたつ。

彼らは目当ての屋敷——化け物屋敷と名高いアレだ——の玄関に
たどりつくと、精一杯伸び上がり、それこそ千切れて真つ二つにな
ってしまふのではないかと自身で危惧するほど伸びあがり、獅子の
取っ手をつかんでノックした。玄関ランプの淡い琥珀の光に照らさ
れて、彼らはじつと扉を見据える。

「——何用ですか？」

扉を開けたのは、濃い灰色のドレスエプロンを身につけたメイド
だった。

この屋敷で唯一の、生きた人間とも言える。

彼女は足元で転がる煙球をみても、さして驚きはしなかった。

「どうしたの？」

彼女の問いかけに、煙球たちは歪んだり伸びたり縮んだりで事を
伝えた。

「ユニヴェール卿が。泥酔して。さらわれた。……へえ」

意が伝わったことを知り、声こそないがきやつきやと飛び跳ねる
煙玉たち。

が、反対にメイドの顔は渋くなる。

「限度を知らずに意識がなくなるまで飲むのは、あの方のどーしよ
ーもない悪癖ね……。そんなにお酒に強いわけではないのに。……
で、さらわれたというのはどういうことかしら？ そんなバカげた
ことしたのは誰かしら？」

彼女の口調に危機感は、ない。

だが、メンドクサイことをしてくれたという刺があつた。

「魔女。魔女がさらった。猫も一緒に。……ああそう、ルナールも一緒なの」

メイドは暗い森を眺めてため息をついた。

「きつと私が行かなくなつてどうにでもなるでしょう。でも行かないときつとひがむでしょう。……魔女だなんてたかが人間のクセに余計なことをしてくれて」

彼女は手にしていた雑巾を廊下へと放り投げる。艶やかな黒髪までが不満げに跳ねた。

「準備よし」

ひとりごち、彼女は視線を未だコロコロしている煙玉へと落とす。
「あなたたちがパーティーをしていたのはどこ？ 詳しい話を聞かなければね」



この世のものとは思えない人……。彼女はそう思った。

夜空に広がる薄い雲にぼやけた月光と、隅に置かれた一本のロウソク。

彼女の前には、それだけの僅かな光に浮かび上がる、ひとりの男がいた。

夜より深い黒衣をまとい、凍えるような銀髪に神経質っぽさのある端正な細面。欲の張った成り上がり貴族なんかではなく、由緒正しい血脈を思わせる静謐。

彼の横たわる朽ちた寝台が、滑稽に不釣り合いだった。

いや、粗末な木造りのこの部屋——小屋そのものが似合わない。

部屋には、随分前に教会からもらってあった聖水をまいた。

寝台は、銀の小さな十字架をたくさん床板に突き立てた結界の中にある。

男の両手も、銀の鎖で縛った。

どれほど効力があるのかは知らないが、小屋の板壁には山査子さんさしやら大蒜にんにくやらも打ちつけてある。

吸血鬼の中の化け物だというこの男を殺そうとしているのだ。どんなに迷信めいていても、用心を重ねるに越したことはない。

“死者の魂が地上に戻り地獄の魔物が放たれる“万聖節ハロウィン・イブ前夜”。あの屋敷の吸血鬼も酒宴に参加するはずです。——ユニヴェールは生前から酒に強くもないくせに浴びるように飲んで潰れるという、神に仕える者ならざる男だったというから、そこを突けば貴女でも滅ぼすことができるかもしれせん”

異端審問官の言葉が彼女の脳裏によぎった。

魔女と称して酒宴に混ざるのも簡単だった。介抱と称して場を抜け出すのも楽だった。何もかもうまく行き過ぎて、怖い。

死んだように眠っている男。肌の白さが死人のそれなので、今彼を見た者は誰もが死者と疑わないだろう。

この死者の胸に杭くわを打ちさえすればいい——そう審問官に教えられた。

「杭を打ちさえすればいい」

壁へと視線を移した彼女の碧眼に、立てかけられた杭と槌つちが入る。

「そうすればみんなも私も助かる」

何度も耳元で囁かれた言葉。

何度も繰り返し返し自分に言い聞かせた言葉。

「そうすれば——」

手が震えた。

生まれてこの方、その意志をもって何かを殺したことなどないのだ。

口が渴いて、吐き気がした。

心臓が早鐘を打っている。

「この人を殺しさえすれば皆助かるのです……」

「どうか？」

「!？」

突然かけられた声に彼女が振り返れば、酔い潰れて眠っていたはずの男が半身を起こして笑っていた。

両手が使えないにもかかわらず背筋を伸ばして足を組んで、しらっと寝台に座っている。

紅の瞳を面白そうに輝かせて。

「何故私を殺して貴様が助かる。私は貴様を殺す気などないから、助かるも何もないぞ。というか貴様など初めから知らんな、お嬢さん^{ゼル}」

「……そ、そういう約束だからです」

「約束？」

「あなたを殺せば、私の友人も私も罪咎^{つみとが}なく解放してくれると」

「甘い」

じゃらじゃらと鎖の音をさせながら、吸血鬼は人差し指を立てて軽く振ってくる。

「貴様が私に襲われているならば、私を殺せば貴様は助かる。それは疑いようもない。だが、第三者の混じった生死の取り引きなど信じる奴がどうかしている」

シャルロ・ド・ユニヴェール。

そういう名の吸血鬼だと、教えられた。聖職者の間では有名らしいが、ただ少しばかり裕福なだけの商家の娘が、しかも世間知らずの烙印を押されている娘が、そんなことを知るはずもない。

綺麗に編みこんだ金髪、他色混じらぬ碧眼。美しい美しいと誉めそやされ、そこまでの身分ではないのに深窓の貴族ご令嬢よろしく育てられた。近隣の娘たちとも遊んだが、年を重ねるにつれ、親が友人を選んだ。そして必要なことだけを教えられた。少しでもその

心を暗澹^{あんたん}とさせる可能性のあることは教えられなかった。

だから、世界の裏側に君臨する吸血鬼のことも何一つ知らなかった。

「私が騙されているというのですか」

「信じる必要はないがね」

言いながら、男は柳眉をしかめてコキコキと首を動かしている。色々な吸血鬼対策が実を結んでいるのかもしれない。

「神に仕える異端審問官様が約束を違えることなどありません」

「貴様と貴様の友人は一体何が理由で捕まったのだ」

「……私たちが“魔女”だと……」

「魔女は神など信じぬぞ」

「ですから私は魔女ではなく！」

「では何故魔女ではないのに魔女だといって捕まったのだ」

「……黙りなさい」

彼女は一度唇を噛むと言い捨てて、隣の部屋へと走った。

固い木の椅子に放り出してあったものをぎゅむっと掴み、戻る。

「おとなしく私に殺されなさい。これがどうなってもいいのですか

!？」

「……………」

一瞬厳しくなりかけた男の顔だったが、突き出されたものを目を細めて見ると——一変、投げやりにつぶやいた。

「……構わんよ」

すると彼女が手にした毛玉、縄でぐるぐる巻きにした黒猫が非難がましく声をあげる。

「“僕は貴方の飼い猫ではなくてパルティータの飼い猫だから、そんなこと言って後でどうなっても知りませんよ” だと？」

猫語が分かるのか、吸血鬼が声に出して通訳した。しばしの後、彼は黒猫に向かってびしっと指差した。無論縛られているため両手だが。

「貴様は勘違いしているぞ、ルナール。あの屋敷で一番偉いのはあ

のメイドではない。主は私なのだ。だからあいつは私が貴様に何をしようが嫌味を言うだけだ。よって貴様に人質としての価値はない」
とんだ茶番だと言いたげに、男が首を左右に振る。

「——くだらん。何を信じてどう行動するかは個人の自由だが、何を信じるかは頭を使って考えた方が身のためだぞ、貴様」

嘆息混じりの視線は、こちらへ。

「第一本物の魔女が捕まるわけなकारうに。魔女でもない女を次から次へと捕えて殺してまわる輩が尊敬され、崇められ、信用されるとは、世も末だな」

「……………」

彼女が黙して喘ぐと、それみろと言いたげに吸血鬼が笑った。

「それでも私を殺すか？ 信じれば信じた分だけ裏切られた時の代償は大きいぞ？ ことは命に関わる」

「それは脅しですか」

「いや。ただの忠告だ」

目の前の紳士は、穏かな顔つきでこちらを見つめている。
見つめ返してもその真意は分からない。

「今、パーテル周辺の町々に来ている異端審問官は、ハインリヒ・クレーマーとヤーコプ・シュプレンガーだと私は聞いた。彼らは狂信的な魔女狩人でな、魔女とまともな取り引きをするとも思えんし、魔女と判断した者をわざわざ生かしておくとも思えんよ」

さしずめ——と、彼は薄笑いを浮かべたまま続けた。

「貴様と共に捕まった友人というのは皆、大した地位のない者たちであろう？ 普通の町人、村人は権力がない、処刑したところで両親が嘆き悲しむだけのこと。だが、貴様のようにそれなりの家柄の者は、処刑ともなると色々面倒なのだよ。各方面から赦免の願いが出たりしてな。だが先のふたりは“魔女”と聞けば積まれた金など払いのけるような連中だ」

「それじゃあ……」

「まさか貴様、本気でこの私を殺せる——滅ぼせるとも思っていない

たのか？」

よほど驚いたのか、彼の秀麗な顔の上で目が点になっていた。

吸血鬼は数瞬そのまま凍りつき——そして染みだらけの天上を仰ぐ。

「……無知とは恐ろしい。無知だと知っているだけでは何の役にも立たんのだぞ？　無知だと知っているならば知識を集めねば。無知だと知っていて何もしない輩と、無知だと知らずに無知のままにいる輩と、どこが違う。結局同じだ」

「ではどうしてあの人たちは私に貴方を殺させようと！」

「貴様に私を殺させようとしたのではないさ。私に貴様を殺させようとしたのだ」

「！」

彼女は絶句して口元を押さえた。

身体中から力が抜ける。

予想していなかったわけではないが、断言されればつらい。

何よりも、自分に期待して待っている友人のことを想うと目の前が真っ暗になった。

彼女たちは昔からの友達なのだ。うわべだけのおべっかを使った、形式ばって食事に招いたり、口元を隠して笑いあうような、そんなくだらない友達ではないのだ。

自分の命だけしかかかっていなかったら、こんな美しい吸血鬼を殺そうと思わなかっただろう。

彼女たちの命がかかっていたから、ここまでやったのだ。一生背負うことになるのだろう十字架を負う気になったのだ。

抜け殻になった頭で、男の声が空虚に響く。

「酔い潰れているとはいえ、私が単なる人間の小娘に杭を打たれて滅びるような慎ましい吸血鬼ではないことくらい、奴らは知っている。ヴァチカンの連中はずっと私を滅ぼそうとしてその度に敗走しているのだから！　貴様が吸血鬼退治に向かって死んだのなら、口うるさい有力者どもも名誉の死として納得するだろう。おまけに

審問官の使命たる魔女撲滅もできるわけだ。これぞ一石二鳥！　なんと簡潔に小賢しい」

吸血鬼が立ち上がる。

「……………」

床にへたり込んだ彼女が成す術もなくその姿を視線で追うと、彼女は十字架を無遠慮に蹴っ飛ばし、聖水の水溜りを踏みつけて、彼女の前にすらりと直立した。

鮮血の双眸が言葉なく見下ろしてくる。

冴えた月光に浮かぶその白皙は、死の恐ろしさを忘れさせた。魅入って魅入って、心が虚ろになってゆく。

「殺してみるか？」

「……え？」

突然現実に取り戻されて、彼女は間拔けな声を出した。

だが吸血鬼は、あくまでも涼しい顔で見下ろしている。

「私を、殺してみるか？」

「殺すって……でも……」

「滅ぼせはせんさ。杭で打たれようと炎で焼かれようと首を刈られようと私は滅びない。全部経験済みだが今こうしてピンピンしているからな。だが、殺せぬわけではない」

美貌に邪気が横切った。

「私の首を持ち帰ってみろ。奴ら、絶対に慌てるぞ。ヴァチカンの連中が今まで何度やって出来なかったユニヴェール討伐を、単なる小娘——しかも魔女だと言って処刑しようとした娘がやってのけたとあっては！　面目丸潰れだ！」

「でもそれでは貴方が……」

「私は何も困らんぞ」

彼女が言いたかったのはそういうことではなかった。しかしこの男が率先して殺されたがっているのは一目瞭然である。

実に楽しげで、実に上機嫌だ。

「こ、殺すって杭を打ったり首を刎ねたりするんですね？」

「まあ、そうだな」

「……痛くないんですか？」

心底からの疑問に、吸血鬼が吹き出した。

「うちのメイド並みに可笑しなことを言う奴だな、貴様」

彼が彼女の傍らに片膝をついた。^{かたわ}薄い唇が三日月の形になって碧眼に近づく。

「痛みなど気にしていたら生きてはいられん」

鎖に繋がれたままの手が上がり、長い指が彼女のあごのラインをなでた。

「痛みなどとうの昔に忘れたな。精神の痛みも、身体の痛みも」

「そう……ですか」

不思議と、恐くはない。

そこにあるのに何も映していない紅の瞳も、笑みの端から時折のぞく牙も、すべてが心地良い花の香に中和されて恐くない。

誰もかれをも暗黒に引きずり込む死神のような男だと聞いていたが、この男ならば地獄まで付いて行っても悔いが残らないように思えた。

彼女が見たことのあるどの聖職者よりも高潔で、悟っている。

「本当は首を落とされるのが印象的にも長く死んでおくにも一番なんだが……しかし貴様のような娘では酷だろうな。杭を打つ方が汚れずに済むか」

「首を落とすなら——私がお手伝いしましょうか？ シャルロ・ド・ユニヴェール」

予期せず背後から響いた声音に、吸血鬼が眉を跳ね上げた。

彼が振り返ると同時に付け加えられる。

「様」



「だから言ったでしょう？ 私が行かなくてもどうにかなるって」
パルティータは床を転がっている煙玉に向って嘆息した。

そして主へと水平な視線を送る。

「彼らが貴方が酔い潰れてさらわれたと教えてくれ、シャトー・ガイヤールの幽鬼が、連れ去られる貴方の尾行をしてくれていたのです」

「……告げ口したな」

邪悪に光る吸血鬼の目に、煙玉が慌ててパルティータの影へと逃げ込んだ。

彼女は語気を強めて尋ねる。

「ユニヴェール様。そちらのお嬢さんはどちら様ですか？」

パルティータの視線の先には、彼女よりは年上に見えるがそれなりに美しい、身なりのしっかりした女性がいるのだ。彼女をここまで引っぱり出した、魔女。

金髪碧眼。薄幸そうに感じられるが、それが本質ならばシャルロ・ド・ユニヴェールをさらってくるなどできるはずがない。

「この娘か？ 魔女狩りされそうになっている人間だ」

「……それで？」

「ご友人も異端審問官に捕らわれて、彼女が私を殺してくれば全員無罪放免だと約束されたらしい」

ようやくユニヴェールが女の傍らから立ち上がった。

黒衣の誇りを雑に払い、背筋を伸ばす。

「それを試してみるわけですか」

「世界を見るなんて欲しい」

「そんなものは見るまでもありません」

「何故」

「血染めの外套と衣装、誰が洗濯すると思っているのです」

「……分かった」

主が目を閉じて肩をすくめた。と、同時に銀の鎖が床に落ちて重

い音をたてる。

この吸血鬼にとっては鎖など何の障害でもないのだ。例えばそれが銀であっても。

「この寒くなりかけの時期に、何も羽織らんでここへ来たのか？」
薄目を開けて、主はパルティータを上から下まで眺めてくる。

彼女はいつもと同じメイド服だ。それさえも彼女自身であるかのように。あるいは、そうすることを課しているように。

「私が滅ぼされることなんてないのだから、もっとゆっくり支度をしてくればよかったのだよ」

ユニヴェールがおもむろに歩み寄ってきた。

そして自らの外套を脱ぎ、彼女の肩にかける。

「これからが面白いのだ。風邪をひくわけにはいくまい？ 人間は脆い^{もろ}だろう」

「騙されませんよ」

「……………」

ユニヴェールの柔和な笑みにヒビが入った。

「同意とはいえたかが人間に殺されるとあっては、ユニヴェール家末代までの恥です。許しません」

「ではどうしろと」

「貴方の頭ならいくらでもイヤガラセの方法くらい思いつくでしょう」

「……………」

主は片眉をあげてしばらくこちらを見つめ——、ややあって床に座り込んでいる金髪の女を見る。

そして言った。

「お嬢さん。無知とはいえ私に手を出した勇氣は誉めてやる。それを買って貴様の友人を助けてやらんでもないぞ。——ただし、追加料金は高くつくがな」

令嬢のすがるような眼差しが吸血鬼を見上げた。

神より罰を受けし者。

死してなお死ねず、生ける屍として世に留まりし者。

それがつまり、“吸血鬼”だ。

彼らは化け物だが化け物ではない。彼らは化け物であって人間なのだ。

破門を受けて死んだか、悪行をなして赦されぬまま死んだか、呪いを受けて死んだか……。

彼女の目の前にいる冷凜としたこの男も、また死人なのだ。神に見放された者。

「追加料金？」

「貴様の命ではどうだ」

「……………」

「殺そうというのではない。血をいただくだけのことだが——知っているな？ 我々の手にかかった者は、死するか我々の仲間となるか、道はふたつにひとつ」

「どちらにせよ貴方は死にます。世界から消えるか、世間から消えるか、その違いだけ」

パルティータは平面顔で補足した。

「……貴女も？」

碧眼の女が彼女に視線を移してきた。

「いいえ」

彼女がどんな答えを期待したかは分からないが、パルティータはきっぱりと首を振る。

「私は普通の一般人です」

「……そう」

女のつぶやきは、褪せた花の声音。

エメラルドの中に浮かんで消えたものは何か、パルティータには知る由もない。

彼女はメイドであって、獲物ではないのだから。

「どうする？」

「……私の血で皆の命が助かるのならば」
ユニヴェールが口端を吊り上げた。

「お嬢さん、名前は」

「テレーズ・フォンデンプロー」

「私が滅ぶまで覚えておこう」

月光に映える銀髪を揺らし、ユニヴェールが外を見た。
藍色に落ち、息を殺す夜の街。

「で、どうなさいます？」

パルティータが問えば、主が首をコキコキしながら顔をしかめて
断言。

「無論、正面から奇襲をかけてやる」

「……で、そんな渋い顔をなさって貴方はどうなさったんです？」

「飲みすぎの頭痛だ」

「……………」

「吐き気までする」

「……………」

第4話【魔女狩り】前編（後書き）

シャトー・ガイヤール…十二世紀頃、イングランドのリチャード獅子心王によって、フランスのレザンドリーに建てられた城。

第4話【魔女狩り】後編

黒い覆面をした鹿毛^{かげ}の馬に引かれた黒塗りの馬車が、街の大広路を小気味よい音を立てて走っていた。

パートルから西へ少し離れたとある街。

道行く人々はどこの貴族だろうかと噂し合い、馬車の紋章を確かめようと目を凝らす。

好奇と羨望の目が、過ぎてゆく馬車を追い、流れる。

その渦中の馬車の中。

黒のカーテンをちらりとめくりそんな街人を眺めやって、パルテイータは声を落とした。

「近頃魔女狩りの度が過ぎてきたように思いますが」

「数年前、教皇——インノケンティウス8世が教書を出しただろう」
陽光が全く遮られた闇にぼんやりと浮かぶ主の白晳。だが声はどこまでも現実的だ。

「表題は、“限りなき愛情をもって要望する”」

「魔女教書ですね。魔女についてあることないこと細かく示した——」

「そうだ。あれが異端審問官の権力を強化するために出されてから、おかしくなり始めた感があるな。それまでは魔女狩りと言っても今よりマシだった。地元の聖職者は自らの領域を見ず知らずの審問官に荒らされることを嫌がったし、まだ常識があったからな」

主の口調は回想めいていた。彼はいつでも道の真ん中に立っていた。そしていつでも時が過ぎるのを見ていたのだ。

「だがあの教書によって審問官の権力は教皇の後ろ盾を得た。審問官に逆らってまで隣人を護る聖職者はいなくなり——それは教皇へ

の反逆にも直結するからな——ゆえに審問官の取り締まりは限度を超え始めたのだよ。権力から遠かった者がいきなり権力を持つと、時として歴代の暴君をも凌ぐ暴走をする。しかも……この間上梓された“魔女への鉄槌”、これは教書より更に性質が悪い」

「魔女への鉄槌？」

「著者は件のハインリヒ・クレーマーとヤーコプ・シュプレンガー。魔女の存在に対して疑問を投げかける者たちを一蹴するための本だな。教書よりも詳細な記述で、無知な輩を洗脳するには充分だ。おまけに農村にも町にも文字を読めぬ者が多い故、口を通して広まる噂は尾ひれだらけになる」

「……………」

「魔女への鉄槌では、魔女がその名の通り女だけに絞られている。だからこの頃は女ばかりが捕まり処刑されているのだ」

華やかな舞台の裏の、暗黒。

「盲目的異端審問官の多くは、マリア崇拝者か権力崇拝者、あるいは狂信的な神の信奉者だ。俗物な女を根絶やしにすることを夢見て、命を天秤にかけることで優越に浸り、己の狭量をそのまま神に当てはめる」

「呆れますねえ」

パルティータは揺られながら、淡々と評した。

「それでも正義だ」

主が皮肉めいた笑みを向けてくる。

「それが正義であるならば、正義だと神が言えば、世界はそれを受け入れる。それが人間どもの鉄の信念で、己が真っ直ぐ立っていると信じるための唯一の拠り所なのだ」

「……吸血鬼のメイドなんてやっていたら、私もいつか捕まって処刑されそうですね」

「笑止」

足を組み腕を組み、目を閉じたまま主がぼっさり斬り捨てた。

「私の持ち物を傷つけられる奴など存在しない。お前はただ、私に

付いて来ればいいのだよ」

「――御意」



処刑が行なわれるのは、街で一番の教会が見える十字路だった。悪人の処刑は祭りと言っても過言でない。

その場所には老若男女見物人が、押しつ押しされつ詰めかけていた。憐れむ者もいたのだろうが、それが声にされることはない。そんなことをしようものならば、自らもあの処刑台行きになってしまう。しかし多くは、ただ単に楽しんでいた。罪があろうがなかろうが関係ないのだ。処刑とは、普段隠さねばならない攻撃性を合法的にさらけだせる数少ない場面なのだから。

罪人を括りつけるべき十字架は三台。魔女は火刑と決まっている。がやがやとざわめきが消えぬ中、三人の娘たちが追い立てられてくる。そしてその後ろからは、白い僧服をまとった異端審問官がふたり、厳かな面持ちで現れる。

娘たちが泣き暮れている一方で、最後に壇上に立った死刑執行人の顔は人形かと思間違うほどに無表情だ。

「まず、罪状を読み上げる」

審問官のひとりが言った。

情に満ち溢れているようで、機械的。

くすんだ金髪に痩身のハインリヒ・クレーマー。

彼が手を横に出すと、控えていた小太り――ヤーコプ・シュプレンガーが紙切れ一枚を彼に渡す。

「汝の罪。背徳し、魔女となってこの世を悪に陥れようとしたこと」民衆が息を呑む中、ゆっくりと一行読み上げられる。

そしてハインリヒ・クレーマーは紙をたたんだ。

「言い残すことはあるかね？」

「魔女ではありません！ 何もしてません！」

「お前たちが魔女の集会に行くところを見たという者がいるのだと言っただろう？」

「それは誰ですか！？」

「言えばお前たちは悪霊となり、その者に仕返しをするだろう」

「テレーズは！ テレーズ・フォンデンブローはどうしたんです！ 彼女が吸血鬼を殺してくれば助けてくれると約束したではありませんか！」

「彼女は奴に殺されたよ。あの化け物に人間が敵うはずがない。まったく、誰も敵うはずがないのだ」

「――！」

娘たちは言葉を失った。

望みは潰えたのだ。

狂乱状態に陥った群集は、早くやれと大声で唱和し出す。

理由はいらない。

慈悲もいらない。

このイベントが、華々しく開花すればそれだけでいい。

次の生贄が自分かもしれないという一抹の不安は、しかし異常な高揚の前にかき消える。

田舎街を包む殺気立った熱気、日々の憂さを晴らすための錯乱的な激情。

混ざり合い、うねり、魔女に向けられる呪いの言葉は大合唱となる。

「背徳の身でも主の御許へ行きたければ、祈るがよい。ひたすらに赦しを乞うがいい」

審問官が限りなく優しい笑みを向け、聖印を切った。

――と。

「……………？」

ハインリヒ・クレーマーは手を止める。

彼は聖人君子の顔を真顔に戻し、群集を振り返った。

「……どうした？」

波のようにうねっていた歓声が、突如失せたのだ。

忘我の境地であればほど騒いでいた群集が、一様に同じ方向を向いて息を抑えている。

先ほどとは正反対の極限にある、静けさ。

「……あれは」

審問官が見やった先に、馬車が停まっていた。

黒塗りの、高貴な馬車だ。

御者をしていた青年が、身のこなしも軽く跳び下りる。

長い黒髪に、不気味なアイライン。漆黒の剣士服の上からは深い青のローブを羽織り、彼は挑戦的な目つきで場を見まわして――、馬車の扉を開けた。

『……………』

皆が見守る中、馬車からはひとりの女が出てきた。

場違いにメイド服など着て、ぱっと黒の日傘を広げる。

（なんだ、ただの貴族の見物人か……）

民衆が一斉に息をつこうとした次の瞬間、人々は何も知らぬまま戦慄した。

『――！』

吐き出すはずだった吐息が喉元で止まる。

最後に現れたのは、男だった。

深くかぶった帽子は黒。足元まである外套もまた、黒。だが影の奥からのぞく瞳は不気味な紅。不健康そうな相貌は雪よりも白い。

彼は剣士を先払いに、メイドを傘持ちに、ゆっくりと処刑台へと歩を進めてきた。

何を言われずとも、人々はその男に道を開ける。

そこにいるほとんどの者は、彼が何者なのか知らなかった。だが彼はすでにその場を制圧していた。

存在だけで、圧倒していた。

「……これはこれは……ユニヴェール卿、ですか」

ハインリヒ・クレーマーは男を迎えて、慇懃に両手を広げる。

だが背筋には驚愕で震えが走っていた。

陽光輝く真昼間。

普通の吸血鬼ならば灰と帰して滅びるのではなかったか。

教会の“処刑すべき背約者表”の一番初めに名を置くこの吸血鬼。面識こそなかったが、よく知っている。

悪魔絵師の絵画で、クルースニクの噂話で、僧侶の愚痴で。そして——ヴァチカンの会議で。

黄昏では滅びないと聞いたことがあった。だが、真上の太陽にさえも焼かれないとは聞いていない。

「君が、ハインリヒ・クレーマーかね」

絶対零度の氷製。

審問官はひきつる顔を必死でなだめながら一礼する。

「私などの名前をご存知とは光栄です。世間を騒がす吸血鬼殿におきましては、ご機嫌麗しく」

「飲みすぎで頭痛はするわ寝てないわ陽光で日焼けするわ。ご機嫌は麗しくない」

「……………」

黒衣の裾をひらめかせながら、化け物が一段一段処刑台へと登る。街に響く靴音は、地獄の門へと続くが如く。

「……今日は何をしに来た」

押し殺した審問官の問いに、ユニヴェールが大仰な仕草で娘三人を指差す。

「どうせ殺すのなら私がもらい受けようと思ってね」

「それでわざわざ太陽の下に？」

「悪魔に魂を売った輩より、敬虔な信徒の血の方が美味しいのね。」

——貴様の遣わした娘、なかなか私の口にあったぞ」

微笑の下から牙がのぞく。

「食べたのか」

「それが貴様の望みだったのだろうか？　私は手を貸してやったのだ、感謝しろ」

霜の降りた低い声は、大声でもないのに地を滑り人々のもとへと届く。

蛇のような氷の恐怖が街人の背中を這っていた。

「申し出を断るなら、ここにいる者全ての首を落として、聖なる十字路を血の海にしてやっても構わんのだよ、私は」

ヤーコプ・シュプレンガーが後退し過ぎて処刑台から落ちた。だがもうひとりはおろこうじて踏みとどまる。

爬虫類を思わせる目つきでユニヴェールを睨みつけ――、

「勝ったつもりでいるだろうか？　化け物」

彼はロザリオを突きつけた。

だがユニヴェールは冷えた目で銀色のそれを見つめ、背後に控える剣士に告げる。

「ルナール」

「はい？」

「娘とパルティータを傷ひとつなく屋敷へ連れ帰れ」

「娘さん達は保障しかねますが……パルティータは“僕の飼い主”ですから、かすり傷ひとつ負わせません。ご安心を」

「えええ、私はもう退場ですか」

「貴女が成り行きを見たいって無理やり付いてきたんでしようが。これから危なくなりますから仕方ありませんよ」

「そこも含めて観覧しに来たのに」

「貴女は“僕に”護られていればいいんです！」

ルナールの台詞に吸血鬼の眉が不機嫌にぴくりと動き、だが男の次の言葉は審問官に向けられていた。

「呼べ。いるんだろう、クルースニクが」

「……よくご存知で！」

言うが早いかハインリヒが僧服をひるがえして、銀剣をふるった。

横から一閃、それは吸血鬼の胴を薙ぎ――

「――ッ!？」

刹那、審問官が言葉にならぬ声を上げ、息を殺してどうにか正気で見守っていた群集が、静寂から一転叫び声を上げて混乱に陥った。剣は、化け物の胴を薙ぐ前に止まっていた。

止められていた。

シャルロ・ド・ユニヴェールが、素手で掴んだのだ。

銀剣を深紅の血脈が流れ伝い、滴り落ちる。

木製の処刑台にはすぐさま血の池が出来、紅の冠がぽたりぽたりと現れては沈んだ。

「貴様……」

「生憎だが、痛みを感じるほど若くはないのでね」

嘲り笑われ剣を突き放されると、彼もまた無様に処刑台から転がり落ちた。

異端審問官、ハインリヒ・クレーマーがこのフランスの地で見た地獄。

それは魔女ではない。一匹の吸血鬼だった。

人々が逃げまどい去った十字路。

残ったのは使命感と正義感とに迫られたクルースニク六人。

まぶしいほどの銀剣を手に、腰を落として構える白の剣士達。

だが黒の吸血鬼は、裂傷ひとつ負うことなく涼しい微笑を消すこともなく、一瞬にしてその全員を血に沈めた。

本当に一瞬だった。

銀の剣がひるがえり、しかし跳ね上げられてそれは宙を舞い、次瞬には持ち主が喉を裂かれて絶命。

六本の剣が地に落ちて空虚な音を立てた時、そこに生きているクルースニクはいなかった。

彼らがこの世の最期に見たものは、美しい死神だったか。

それとも物言わぬ紅玉^{ルビー}だったか。

どちらにしろ、彼らの瞳にはもう何も映らない。
彼らは、過去だ。

（こんなことがあるわけがない……。あつていいわけがない……）

処刑台の影、審問官の身体は怒りと恐怖で慄^{おの}いた。

全ては陽光のもとで、神の御前で、行なわれたのだ。どんな吸血鬼でさえ浄化するはずの太陽が、生きとし生ける者の源が、闇を葬ることができなかった。

（何故だ……何故こうなる。何故滅びない！）

異論を唱えることなど到底できぬ、圧倒的な惨劇だった。

六人のクルースニクが、成す術なく散ったのだ。

一矢も報いることなく。戦うことすら許されず！

シャルロ・ド・ユニヴェールという吸血鬼のことは何度も聞いている。元々はクルースニクであった男だとか、生前から矯正不可能な悪魔のような奴だったとか、呪われた家系の当主だったとか、しかし同時に弟子には異様になつかれていただとか。

けれどこれほどの危険因子だとは思っていなかった。——誤算だ。
“吸血鬼の中の化け物”という代名詞は、大袈裟に飾り立てられた伝承ではなかったのだ。

「なんということだ」

流れた血を吸い、紅に染まった十字路。

動かぬ屍には目もくれず、吸血鬼が己の血塗れた衣装を見てうめき声をあげた。

「こんなに返り血が……」

（こんなことがあってはならない。このままでおくわけにはいかない……）

狂気は油を注がれ更に高く燃え上がる。

怨念と化した信念は常軌を逸して強固になる。

（神よ。我らを救いたまえ）

言葉は光の中心、ヴァチカンに向けて。

（今潰さねば、やがて世界は、神は、闇に吞まれる）

中世暗黒時代。

光と影の倒錯時代。

華に酔い、酒に酔い、神に酔い、暗闇を恐れる。

恐怖と狂気が増大し、世界そのものが包まれる。それゆえに人々は光を求め、表装の宴へと逃れ、神に心酔し、悦楽に身を委ねる。

だが全てはもはや飽和状態にあった。

権力の高みも、領地も、逃げ道も、限界だった。

ある極限に達すると、世界はその結末を臍おぼろに知りながらも自己崩壊へと走り出す。

全てを再び無に戻そうと動き始めるのだ。誰の意志でもなく。誰の策略でもなく。

（……神よ。世界を救いたまえ）

逃げ出したハインリヒ・クレーマーとヤークプ・シュプレンガーがヴァチカンへと旅立ったのは、この日から数日後のことである。



「パルティータ、水をくれ」

本来ならば吸血鬼が活動する夜。

珍しく柩ではなく寝台に伏していたユニヴェールは、死人のよう

な声を上げた。

が、返ってくるメイドの声は冷たい。

「せっかくうら若い娘さん四人から血を飲ませていただいたのに、水なんか飲んだら薄まってしまいますよ」

最初は金髪碧眼の娘、テレーズ・フォンデンブローだけから血をもらい、彼女を吸血鬼としてしまう契約だったのだが、助けた三人も世間には戻らないと言いつ張った。

結果、四人もの血を飲む羽目になったのだ。ユニヴェールは。

「苦痛があると血は不味くなる。少なくとも私の好みではない。だから獲物には卵を温める母鳥の如く優しくしてやらねばならんだ。分かってるか、疲れるのだよ、四人分もそんな紳士なことをしていると！ ……ああ大声出したらまた頭が痛くなってきたぞ」

「自業自得です」

「何が」

「前夜祭で意識を失うほど飲んだくせに格好をつけて休みもしないで太陽の下に出て行ったあげくクルースニクを皆殺しにしてきて、面白そうだからって審問官そのまま逃がして、そのまま万聖節の祝宴に直行して節操なくまた酔い潰れて帰ってきて」

「そのうえ女を四人も連れ込んで、か？」

「それも罪状に追加して欲しいですか？」

「パルティータ」

「はい？」

「……外套を血みどろにしたのを怒ってるのか？」

「いいえ」

「では妬いてるな？ 他の女に優しくするから」

「なんでそんなことで私が妬くのですか」

「……………」

「ユニヴェール様はいつでもお優しいではありませんか」

彼女はにっこりと見下ろしてくる。

悪意を感じるには充分な笑顔だった。

「……ではなんだ、言ってみろ」

「この間、街で素敵な石を見かけました。これくらいのパルティータが笑顔のまままで親指の爪を差す。」

「分かった分かった買ってやる」

「ダイヤモンドという石だそうです」

「……他のにしないさ」

「では銀細工の指輪を」

「分かった。買ってやる」

したたかメイドの交渉術にハマったことなど吸血鬼は知る由もない。
い。

蓄積された酒と疲労でとてもではないが頭が働く状態ではないのだ。

「ホントですね？ 念書書いてもらいますよ」

「……………」

彼はふいに面倒臭くなり、冷やしたタオルを額にのせてきたパルティータの襟首を掴んだ。

そのまま引き寄せて彼女の紅唇に口付ける。

気が済むまで味わってから、解放してやった。

「……これが念書だ。私が買ってやるまでに他の奴が上書きしたら無効だな」

「^{タコール}分かりました」

メイドは軽くそう笑んできた。そして何事もなかったように水差しからグラスに水を注ぐ。

「いりますか？」

「……いらん」

「——では、ご用がありましたらいつでもお呼びくださいませ」

ご機嫌麗しくなったメイドが扉の向こうへ姿を消すと、枕の横で丸まっていた黒猫がにゃあと一声上げた。

ユニヴェールはギロリとひと睨み。

「うるさい。買わされたのではない。私があいつに買ってやるのだ。」

主は私だろうが。文句あるか」

T
H
E

E
N
D

第4話【魔女狩り】後編（後書き）

ドイツのドミニコ会修道士…

ハインリヒ・クレマー（ハインリヒ・インスティトリス）
Heinrich Kramer（Heinrich Institoris）

ヤコブ・シュプレンガー Jakob Sprenger

ふたりが著した「魔女に対する鉄槌」は、1714年、プロイセンのフリードリヒ・ヴィルヘルム1世が魔女裁判を禁止するまで、魔女狩りの教典となった。

2003年

第5話【背約の三使徒】 前編

濃紺の空には、輝ける蒼白い半月。

ヨタカの鋭い鳴き声ひとつ、梟の含んだ鳴き声ひとつない夜の静寂。じま 下草の根元を走り抜ける鼠の気配ねずみさえもない不気味な沈黙。

南から来る灰色の突風が、黒い影絵となった大樹の葉をざわめかせ、眠れる原野と田畑を駆ける。

嵐でもないのに妙な胸騒ぎがする、そんな夜だった。

フランス王国を離れ、二歩ほど教皇領へ近づいたところにあるジエノヴァ共和国。その片隅、丘の上の小さな教会の前庭に、その夜、ふたつの人影が対峙していた。

「ここまで出てきたかいが……あつたと言うべきだろうな」

落とされた自分の片腕を見下ろして、黒衣の紳士は薄い笑みを口端にのせた。

その唇の端からは、粘性の低い紅の雫が伝い落ちる。

「そう思わんか？ 白十字の吸血鬼始末人」
クロワ、ブラインシタルースニク

「番犬が……」

吐き捨て、白い法衣をまとった男が長剣を構え直す。

それは聖なる言葉が刻まれた、世に何本もない剣だった。ヴァチカン教皇庁直属の精鋭達——“白十字団”だけが持つことを許された、古より伝わりし聖剣。

彼の視界には、目の前で嘲った笑みを浮かべる男が映り——、鮮血に濡れた大地に重なり倒れている同僚たちの屍が映っていた。

その数十二人。

彼は、最後のひとりだった。

十三人ひと組で七つある特別部隊、白十字団。そのひとつが、今、

滅びようとしていた。

「女王陛下から貴様らが動き出したと聞いて迎えに出てみたのだが……己の腕を失ったのはなかなか久しぶりだな」

「勝ったと思っているか」

「常に、負けるつもりではない」

月光よりも冷たく冴えざえした銀髪。闇の中で咲^わっている双眸は紅。見ている者の背筋を凍らせる冷笑。少しばかり白過ぎる秀麗な細面の顔。青年という域はとうに超えている年齢不詳。

それがその男だった。

しかしどうやら今夜は酒が入っているらしく、動きも鈍いうえに時折その双眸が眠たげに瞬く。台詞にも陰がなく、グレゴリオ聖歌のようにゆったりと奏でられる。

それでもこの有様、白十字でさえ彼の腕を落とすのが精一杯なのだから、どれだけの力量差があるかは推して知るべし。

「シャルロ・ド・ユニヴェール……」

クルースニクは呼んで小さく笑った。

「我々がここで滅んでも、それで終わりだと思ふな」

「以前に同じようなことを聖騎士の小娘に言われた覚えがある」
返すユニヴェールの声に感慨はない。

獲物の死が確定した時点で、その男から興味の色は失せる。

今思っていることと言えば、夜明けまでに自分の屋敷へと帰って就寝の床につくのは難しいか否か、というくらいのもの。

「ヴァチカンは動き始めている。……檻^{おり}は開かれた」

「……檻、ねえ」

弧の字につりあげられていたユニヴェールの口元が、静かに結ばれた。下から舐めるように目を細める。

「ローランの剣——デュランダルが放たれたのだ」

「デュランダル」

吸血鬼は、塵に埋もれた記憶を探るようにつぶやいた。
白十字はおかまいなしに続ける。

「貴様が出奔してから封印された、白十字よりもさらに上の非公式な特別課らしいな。懐かしいか」

「……………」

ユニヴェールは一瞬呆けた顔をして、それからすぐに吹き出した。
「懐かしいだと？ 堅物ぞろいのクルースニクの中にもそんな冗談が言える奴がいたとはな！ 傑作だ！ ヴァチカン教育方針を変えたのか？」

「笑っていられるのも今のうちだ」
言われて、

「とは？」

瞬時に笑いを納めるユニヴェール。その顔に浮かぶのは、緊張ではなく好奇。

「ソテール・ヴェルトール。そしてダンピール。……知っているだろう」

丘を照らす月影の中に、ふたつの単語が落ちた。

「知っているとも。ふたりとも、知りすぎている」

「ならば自分の行く末を案じることだな。彼らも放たれた」

「……………」

しばし過去と現在を行き来したユニヴェールの目が、白十字で静止する。

「ひとつ聞く。何故ヴァチカンは急に動き出した？ 往生際悪くまだ教皇権を復活させたいなどと思っているわけではあるまいな？」

暗黒都市を討ち、諸侯に権威を示そうとでも？」

「我々はいつでも、お前たちを滅ぼすために存在している」

「光があるところ必ず闇は存在するものだ。それでも消そうとするか」

「人が死ぬは世界の理^{ことわり}。生きる者に牙を剥^むく死者を放っておけない方がどうかしている」

「死者、ね」

ユニヴェールは鼻先で笑い飛ばして己の腕があつた場所を見た。

聖剣で断たれた箇所はやはり焼け焦げている。しかし致命傷ではない。格好が悪いのと、バランス感覚が乱れる、ただそれだけの問題だ。痛みも感じず、大量に流れ落ち失われた血液とて、全て自らのものではないはずだった。

彼は、生者ではないのだから。

人は彼のことを、生ける屍——“吸血鬼”と呼ぶ。

生者の血を己の糧かてとして永遠に生き続ける吸血鬼。

そしてその中でもこの男は、三百年もの昔から聖なる者たちに“

吸血鬼の中の化け物”と呼ばれる存在だった。

太陽に焼かれず、銀に滅びず、炎に屈しない。

十字にひれ伏すこともなく、聖水など飲んでも平気。

首を断たれても、杭を打たれても、その度どこからともなく甦る。

フランス南部の黒い森。魔女や妖魔や悪魔が集う、不可視の暗黒都市なるものが隠されているという。そしてこの男は門番の如く森の前に屋敷を構え、入る者を監視しているのだ。

忠実なる暗黒都市の番犬。

ヴァチカンが闇を滅ぼそうと送り込む全ての勇者を、ことごとく蹴散らす脅威の力。

シャルロ・ド・ユニヴェールを滅ぼさねば暗黒都市には指一本触れられない。或いは——、ユニヴェールを滅ぼしたその時こそ、神の勝利、光が闇を蹴つかせる瞬間なのだと、ヴァチカンでは言われていた。

「小物を蹴散らすのも飽いたところだ。丁度いい」

言って彼は喉元のタイを緩めた。

長い指に絡んだ血糊が白地の襟に移ったが、気にしない。

「——天グロリアのいと高きところ、神エクセルシスに栄光あれ！」

白十字の低く神に祈り、その息吹と同時に白銀が閃いた。
だが、

「誰も私を滅ぼせぬ」

シャルロ・ド・ユニヴェール。吸血鬼の中の化け物は小さく笑い、その場を動かぬまま刃を受けた。

月夜に響く重く鈍い、肉が断たれる音。

「……………」

「……………」

ちぎれた雲が月を覆う。沈黙の後、雲が去り再び地上に光が注いだ後、生暖かい紅の雫が大地に弾けた。

ひとつが落ちれば、後を追うように次々と滴り、固い地面に吸い込まれてゆく。

高いところから少しずつ葡萄酒を零したこぼような、芸術。

大地を潤す血脈は溢れ広がり池となり、双方の足元をも濡らす。

「……………」

血溜まりの中へと膝を折ったのは、吸血鬼ではなくクルースニクの方だった。

「空しい忠誠心など捨ててしまえば死なずに済んだものをな。だがそうしろとは言わんよ。それがお前たちの選んだ道なのだから」

白き法衣に包まれたその身体は、無表情な吸血鬼の右腕に貫かれていた。

開かれた目には夜闇以外何も映らず――、

「主よ……………」

血の塊と共に吐き出されたその言葉。

吸血鬼はつまらなそうに一笑すると、一気に腕を引き抜いた。

同時にクルースニクは、糸の切れた操り人形の如く地へと崩れ落ちる。

「天のいと高きところに神の栄光あれ、エクシエルシス デオ エト インテラ パクス オミニブス ポーネ地においては善意の人々に平和あれ」

ユニヴェールが生きていた頃散々唱えたミサの式文。

低くつぶやき、ユニヴェールは血に塗れた右腕を虚空で振った。そして無残に斬られた己を見やる。

「…………この状態ではどうにも格好がつかんな……………」

肩口から脇腹まで、見事に裂かれていた。

痛みも何もないとはいえず、衣装はズタズタ血でベタベタ。若い
婦女子が見たら、美しさに恍惚するどころか悲鳴をあげて卒倒して
しまうような猟奇。

オマケに腕が一本足りないときたもんだ。

彼は落とされた自身の左腕を拾い上げ、しげしげと見つめた。

「さーて、どうやって再生するんだったか……あまりに昔の事過ぎ
て覚えてないぞ……。くっつければ直るか？ それとも燃やしてし
まうのだったか。……困った」

記憶が古すぎるのか、酒のせいで飛んでいるのか。

頬にひとすじ本物の冷や汗なんぞを垂らしつつ、思案に暮れてい
た吸血鬼。

どっと身体に重い振動が響いて初めて彼は気付いた。

「……………」

見下ろせば、火で炙^{あぶ}られる魚よろしく何本もの聖剣で串刺しにな
っている。

腕は両方とも地面に落ちていた。

「もしや貴様らは……」

喉を駆け上がってくる血の溢れと共に、吸血鬼は低い声を絞りだ
す。

「機械仕掛けの——！」

紅を見開いて振り向いたユニヴェール。

その首目掛け、白刃が一閃された。



「お帰りが遅いですね、ユニヴェール卿」
ルナールは嬉々として言った。

「そりゃ昼間じゃ帰ってこれないでしょうよ」

散らかした絵札をきれいにそろえながら、パルティータが答えてくる。

ルナールが言葉につられて見やれば、確かに食堂の大窓越しの景色はスカットとするような晴天だ。

抜けるような蒼に白い雲。きらきらと光が踊りまわっている。

雨の日ならばまだしも、こんな天気の日中に吸血鬼が動き回るわけがなかった。

この屋敷の主がいくら物理的科学的な何かを超えてどこかへいつてしまっている吸血鬼だとしても、大した用事もなく太陽の下をブラブラするほど人間でもない。

「色々なところに愛人がいそうですし、まあ宿には困りませんね、あの方は」

テールに突っ伏し、必要以上にのびのびする黒尽くめの剣士、ルナール。

どこぞの魔女に呪いをかけられて、昼間は人間夜は黒猫、そんな妖怪じみた男である。本人は王家の血筋だと言い張っているが、一体どこの王家やら、真偽のほどは定かでない。

「すっごく楽しそうに出かけて行ったから、当分は戻ってこないかも」

「ずっと帰ってこなきゃいいんですけど」

「ルナール」

「はい？」

聞き返した先には、真摯な顔つきをしたパルティータ。

その真っ黒な瞳にはいつだって何も映らず、その意思を読み取ることはできない。しばしこちらを見つめると、彼女はため息まじりに言ってきた。

「私は時々貴方を尊敬するわ」

「どうしてです？」

「私はそんな恐いもの知らずな発言できないもの」

「……そうですか」

ルナールはそれなりに頭がいい。だから、敢えて何も言わなかった。

絵札を重ね終わり、肩をすくめて食堂を出て行く灰色のメイドを水平な視線で追うだけ。

「ま、夜まではお帰りにならないことは確かだから。それまでのんびりしてましよう」

彼女は朝から掃除も、洗濯も、皿洗いも、さぼっている。

だが、神様はいつだってお空の上から見ているのだ。

悪行には報いが下る。

「——また何かやらかしたっ！」

廊下から素っ頓狂なパルティータの叫び声が聞こえ、やっぱりねえとルナールは嘆息した。

そして彼が意図して面倒なことをまわりに押し付けるのと同様、彼女は意図せずまわりを巻き込むのだ。

【報いはみんな受けましよう】

半ばここの家訓のようなものだ。

「……どうしました？」

ルナールはのろのろと廊下へ出てゆき——、しかし実際は聞くまでもなかった。

食堂の入り口から真っ直ぐ伸びた赤絨毯の廊下。いかにも年代物な琥珀色の布紙が張られたその壁に、何とも悪趣味な装飾がなされていたのだ。

「これはまた……」

吸血鬼の屋敷らしいといえば屋敷らしい。

常人ならば腰を抜かすか気絶する。あるいは戦慄に言葉もなく立ち尽くすだろう。

だが、パルティータは眉をひそめて両手を腰にあてていた。

「あの人は何様のつもりかしら!？」

「……たぶん僕が思うに貴方のご主人様だと思いますよ」

壁には流れ落ちる鮮血で流麗に書かれた一文。

“V^ヴe^ネn^ムe^ムz^ム m^ムe^ム c^シh^エe^ルr^シc^エh^シe^エr^エ”

——迎えに来い。

第5話【背約の三使徒】 後編

世界で一番奇妙な体験をしているのではないかと、ルナールは思った。

一日かけてジェノヴァ共和国に入ると同時、太陽が昇っているにもかかわらず一匹の蝙蝠コウモリが彼らを先導した。そして辿り着いた先がココ。町からは遠く離れたなだらかな丘の大樹の影、小さな教会の前庭だった。おそらく歴史の中程で、町そのものが場所を変え、置いていかれたものだろう。

人ひと気のないそこには黒い日傘を差したメイドが佇んでいる。濃い灰色の長袖ドレスの上から白いエプロンをつけた、長い黒髪の女。

彼女が静かに見下ろす先には、男の首がひとつあった。

両のまぶたを柔らかく閉じた、怜悯な男の首。

それはふたりともがよく見知った顔だった。

主、シャルロ・ド・ユニヴェール。

身体はおそらく燃え尽きたのだろう、その首は燃やされ炭化した木々の上にのっていた。

それ以上に不可思議だったのは、その焚き火のまわりに十三の屍が転がっていることだった。

白い法衣と人数分の聖剣を見るにつけ、彼らはクルースニクなのだと知れる。

十三人。その数字からルナールが思いつくところによれば、それらの屍はいつもユニヴェールがなぶっているような下っ端の輩ではなく、教皇庁直下の白十字団に違いなかった。

ルナールは、ユニヴェールと共にいた時間がパルティータよりも圧倒的に長い。彼女は吸血鬼に仕えて十年にも満たないが、剣士は

三百年近く——それこそユニヴェールが吸血鬼になった直後あたりから——彼の下僕でいるのだ。それゆえに、とりあえずのことは彼女よりも知っていた。

彼は言葉を発して考えをまとめようと、御者台の上でくるくると指を回す。

「おそらくユニヴェール卿が出張したのは彼らのせいでしょう。白十字団——彼らは通常のクルースニクよりも高度な才を持ち、高度な訓練を受け、十三人でひと組で組織され、連携の取れた団体行動をするのです」

「……この中の誰かが我が愛すべき主を殺したっていうのかしらね？」

パルティータがかがみ、日傘をたたむ。無残に折り重なった死体を見ても、生首を目の前にしても、顔色ひとつ変えない女。

その彼女が美しい吸血鬼の首を持ち上げた。

断たれた首の断面は焼け、血が滴り落ちることはない。

だが同時に、白晳の肌にも冷たい銀髪にも焼けた跡はなく、傷もない。名を呼べば、その双眸が開き紅が輝きそうなほど。身体を失くしたことなどどこ吹く風で、してやられたと笑いだしそうなほど。それくらい吸血鬼の首は生きていた。

首だけで、家事をさばったことを婉曲的に咎め、悪口を言ったことに柳眉を逆立ててきそうな気配がある。

「十三人でひと組。僕らがここについた時には全員死んでいる。ということとは、ユニヴェール卿の首を討ち、その肉体を焼き払い、その後クルースニクは死んだということになりますね。あり得ますかねえ？」

「第三者がいたとしたら……？」 別のクルースニクとか

「いません」

「何故」

「別のクルースニクがいたとしたら、こんなところに卿の首を残したりしませんよ。燃えた跡の灰もです。ヴァチカンに持ち帰るとか、

湖の底に沈めるとか、海に捨てるとか、底なし沼に放り込むとか：
：灰だったらパンに練りこんで食べてしまおうとか。ともかく、こんな場所に放っておくわけがないでしょう。甦りたくても甦ることができなさそーなところに始末するはずですよ。無駄ですけど」

「そうね」

「とはいえ、誰が殺そうとも卿が滅びていない以上、何の脅威でもないでしょうが」

「そうね」

パーティータの小さな相槌を聞きながら、ルナールは沈黙の思考に落ちていった。

そして彼に代わるように、パーティータが沈黙の穴埋めをする。

「ユニヴェール様を殺した者は、滅ぼすことが不可能だったのか、必要がないと判断したのか、それともこれで滅びたと思ったのか」

こんなに美しい首が残っていて、敵が何も思わぬわけがない。

今は物言わぬ主だが、こんなに簡単に滅びるわけがない。

そう、シャルロ・ド・ユニヴェールは過去何度も死んでいる。だが、一度として滅びたことはない。

ヴァチカンもクルースニクもそれを充分知っているはずだ。

ここで滅びるのは普通の吸血鬼だけ。だが彼女の手の中にある吸血鬼は、滅びない。普通ではないからだ。

彼が滅びる時は、闇が滅びる時でもある。

それだけのものを背負っている者が、たかだか十三人の殺し屋にやられるわけがない。

灰にされようが刻まれようが聖なる水に漬けられようが、甦った男だ。

誰もが憑りつかれたように魅入る首が残っていて、倒した気になるクルースニクが世に 있을까？

「何にせよ、ご本人様に聞いてみるのが早いでしょうね」

平らな目をしたパーティータは、ルナールを振り返り口端を吊り上げた。

「やっぱり起こします？」

「たぶんそのために呼ばれたんでしょうし」

「……………」

ルナールがひきつった笑みを浮かべて背を向けた。

パルティータ程ではないにしろ、艶やかな黒髪が揺れる。

長閑な休息を懐かしみ、その終わりを悲しむ剣士を背景に、パルティータは主の首を下に置いた。

ただ眠っているだけに見える主。

だが、紛れもなく死んでいる。首だけなのだから当たり前だ。

（——このまま私が放っておいても甦るかしらね？）

ふとそんな邪心がよぎるが、すぐに答えが聞こえた。

（もちろん、甦る）

（——なんで？）

（ユニヴェール卿だから）

（——ああ）

いとも簡単に納得し、彼女は面白い実験を中止することにした。
後で不気味に笑った主に詰め寄られるのは、避けたいところである。

「では」

パルティータは手近に転がっていた聖剣を取り、自らの指先を切った。

「痛……」

鈍く響く痛みと共に、見下ろした指先が紅に染まっていった。

陽光に鮮やかな血の雫。

彼女は顔をしかめながら、指を燃えた焚き火の跡へとかざす。

すると一滴、二滴と滴り^{した}が灰へと吸い込まれ、黒い染みを作つてゆく。

「我が主。再びこの世へ戻らん」

彼女はユニヴェールの首を灰の上にかざした。

蠟人形の如く美しく、死者の如く白く、生者の如く思惑に富んだ

その顔。

「死んでいる場合ではありませんよ」

彼女は淡々とそう言うと、死する吸血鬼の冷ややかな口元へと己の紅唇を重ねた。

もしもルナールが卿の叱責を恐れて背を向けていなければ、彼はその不思議な光景を目にすることができただろう。

そう多くはないはずだ、吸血鬼が聖なる死から再び這い上がるところを見たことがある者は。

しかも太陽が燦々^{さんさん}と輝く中！

燃え朽ちた薪^{たきぎ}の灰。どこへともなく風に飛ばされたはずの灰。

それらが音もなく集まり、人型を成そうとしていた。

地を踏みにじる靴となり、虚空を掴む白き手となり、陽光を吸い込む黒衣となり、重厚な質量のある存在へと変わってゆく。

灰の一粒一粒に定められた場所があるように、違えることなく迷うことなく、本来の姿へと戻ってゆく。再生^{じゅうせい}されてゆく。

降り注ぐ陽射しの下で、刻々と死が蹂躪^{じゅうりゃく}され、凌駕^{りやうが}されていく。

神の領分か、死神の領分か、だがどちらもこの男に鎖をかけ牢に繋ぐことはできない。

主の首を支えていたパルティータは、手が軽くなったのを感じ取った。

瞬間、腕をどけ口付けを離そうとしたが――、逆に腰に手を回され肩を抱かれる。

「出迎えご苦労」

軽く合わせられた口端から、いつもの柔らかい低音が流れた。

その唇は冷たい。だが、確かに男は存在していた。

「……お目覚めの気分はいかがで？」

「死んだわりには悪くないな」

仰げば、不敵な紅の双眸が笑っていた。

吸血鬼、シャルロ・ド・ユニヴェール。

陽光の下だろうがなんだろうが簡単に復活してしまう脅威の麗人。

「呼び付けてすまなかった」

彼は斜めに微笑むと、足りないとかかりにもう一度パルティータの口を塞ぐ。

「十三人全て滅ぼしてやったんだが、ヴァチカンが妙な小細工をしていてな」

ついでにみながらの穏かな物言い。

「小細工？」

「機械仕掛けの死者。実際は低級な死者ネクロマンシー蘇生術らしいが……、死んだ後もただひとつの命令を遂行するまで意志なく動き回るというやつでな。まあ目的を果たしたらまた死ぬんだが。……白十字を全員殺した後、腕を落とされてどうしたもんかと悩んでいたら、殺られたのだ」

「ヴァチカンが死者蘇生術を？」

「なりふり構わぬといったところか」

「……慢心」

ぼそとしたパルティータの言葉に、ユニヴェールの片眉が跳ねた。

「……油断」

優美な光を灯していた紅が、硬度を増す。

「……っていうか自己責任ですよ、ほとんど」

「……………」

黒衣の紳士はあらいようにパルティータの切れた指先へと唇をつけ、さつと馬車に向き直った。

「ルナール！」

「はいっ」

多少裏返った声が、黒塗りの馬車の影から響く。

「暗黒都市へ行く。このまま馬車を出せ。さつさと支度したら、暴言の半分はなかったことにしてやる」

「……か、かしこまりました」

この破格の吸血鬼はそこまで何でもお見通しなのだろうか。

もしや家事をさぼったこともばれているのだろうか。

内心ひきつりながらパーティータが視線で問えば、馬車を見つめる姿勢を崩さないまま、主がフツと笑いを漏らしてきた。

(……釣ってみただけね)

胸中での嘆息。するとそこへ主のテノールが重なった。

「ヴァチカンは、どうあっても一戦交えたいらしい」

「――はい？」

意味が分ならず疑問符を上げれば、吸血鬼は肩越しに後ろを見やり、教会を仰いだ。白塗りの壁に福音のステンドグラス。そして塔の先に掲げられた十字架。

陽光の下、神の御前、時代と人の数だけ重ねられた聖なる祈りの残響。

少しは苦に感じるところはあるのだろうが、その男は一片の素振りも見せずにただ嘲笑う。

「闇は潰す。それが奴らの結論だそうだ」

「昔からそうだったではありませんか」

「だから私も丁重におもてなしすることにした」

「丁重に……」

「ユニヴェール卿！ 出発しますかっ！」

「ついて来い、面白い物をみせてやる」

「――御意」

ぱつと黒日傘を主に掲げるパーティータ。

面白い物といわれたが、当面一番面白いのはシャルロ・ド・ユニヴェールという生き物であることは間違いない。

正しくは死んでいるが。



ユニヴェールは元々クルースニクであった。

吸血鬼を討ち、闇を滅ぼす側の人間だったのだ。

その当ても今と変わらず、クルースニクの中の化け物と呼ばれた。畏怖と皮肉と僻^{ひが}みを込めて。

だが彼は死んだ。殺されたのだ。

そして吸血鬼となって再び世に舞い戻った。

今度は畏怖と恐怖と欠片の羨望を込めて、吸血鬼の中の化け物と呼ばれた。

クルースニクから吸血鬼への転身。

しかも、彼を追って闇に身を落としたクルースニクがいた。

それが教会……否、ヴァチカンの最高機密機関、吸血鬼始末人たちの最高峰、デュランダル隊最大の汚点と言われる——背約の三使徒、である。

「いかにユニヴェール卿と言えども陛下のお許しがなければ！」

「私は私のものを取りに来た。それだけだ」

「しかし手続きは踏んでいただきませんと！」

「面倒臭い」

ずんずんと歩いていくユニヴェールの後ろを、いかめしい顔をした大男——おそらくは傭兵なのだろう——が、ひたすら下手^{したて}に懇願している。

「暗黒都市って一日中夜なのね」

「だから暗黒都市って言うんですよ」

半分社会見学のような気分で、その後に続くパルティータとルナール。

「私は化け物が寄り集まってるから暗黒都市っていうのかと思ってたわ」

「人間が言う場合の“暗黒都市”は、その意味が大半だとは思いますが……」

ルナールはほとんど化け物なので、何度もユニヴェールに連れられてこの都市へ来たことがあった。

しかし人間であるパーティータは入ったことがなかったのだ。

「しかも人間をお入れになるなんてどーゆーことですか！」

あからさまにこちらを指差して大男が言っている。善意で言えば大男だが、率直に言えば怪物の域だ。どこかの伝承の巨人族だろう。いかめしく、巨大。まあ門番だか衛兵だかにはうってつけの人材だろうが。

「……あの怪物、フライパン持ってたら思いっきり殴ってやるのに」「やめなさい」

両手をわきわきさせた彼女の肩に、ルナールが手をのせて静めてくる。暗黒都市は常に夜だが、地上は昼間なので猫にならないらしい。

「人間は入ったが最後出られないのが規則です！ 同族になさるおつもりですか！？ それならよいですけどもっ」

「……………」

ユニヴェールが立ち止まった。

しばし考え、言う。

「アレはほとんど人間ではないから大丈夫だ」

そして彼はまた歩き始めた。

「そんな無茶苦茶なこと言われたって困りますよ〜」

怪物は泣きそうになり、パーティータの平面顔に青筋がひとつ浮かぶ。

ユニヴェール

「あいつも殴り倒してやる」

「やめときなさい」

暗黒都市。

黒い森に存在する、不可視の都。

女王の住まう黒曜の城を中心として、四方八方に広がる夜の都。時計台やら宮殿やらが炎に照らされ輝き合い、いくつもの馬車がカラカラと小気味よい音をたてて石畳の通りを走り抜けていく。

黒のケープを羽織った魔女たちがけたたましくしゃべりたて、怪奇趣味の毒々しい衣装をまとった魔貴族たちが優雅な足取りで歩み行く。

空には大きな燃えるように赤い月。

時折過ぎるのは大鴉の羽音。おおがらす

入るのもためらわれるような格調高いガラス窓の向こうには、整然と並べられた見たこともない品。

紅茶を飲みながら、片眼鏡で品々を物色するどこかの骨ばった術師。

幻想的な仄暗い光を放つ灯火も届かぬ路地裏では、煙玉のような物体が目をはちくりさせ、こちらを見ては逃げていく。

けれどそんな煌びやかな都を眺めていたのも束の間。彼らは今、その都市の地下を歩いていた。

はつきり言ってつまらない。

目に映るのは石積みのの壁と等間隔にかけられたランタンだけなのだ。

「ユニヴェール卿、お願いですから一度陛下に目通りを」

「必要ない」

いい加減にしろと言わんばかりに、吸血鬼が表情を陰しくした。

「言っておくが、私はお前たちと同じではない。私は契約の上でここにいただけだ。自分のものを自分で取りに行くことくらい自由でなければやっていられん」

「……そーんなあ……」

大きな怪物君が図体に似合わず可愛らしい台詞で途方に暮れ掛けたその時、迷宮の地下通路に低く鷹揚な女おうようの声が響いた。

くわらわの僕をそう困らすでない、ユニヴェールしもべ>

「……陛下」

わずかに紅を見開き、ユニヴェールが片手を胸に当てる。一応の礼儀らしい。

くそなたの好きにするがよい、そう——そなたと暗黒都市のつながりは忠義ではなく契約じゃ。だが、理由を聞かせてはくれぬかえ？>

「理由、と申しますと」

くそなたの歩む先に何があるか、わらわが知らぬと思うてか？ そなたの大事は、わらわの都の大事ともなりえよう。事情を把握しておくのは勤めのうち>

「私の力を信用なさっておられない？」

試すような吸血鬼の口調。

どこか上を見上げる目の奥が笑っている。

くそうではないよ。ヴァチカンの動きを知っておきたいだけじゃ。

近頃雲行きが怪しゅうてなあ>

「……………」

吟味するように耳を傾けていたユニヴェールだが、彼はふいと視線を横にそらし腕組みをした。

短い嘆息の後、告げる。

「ヴァチカンはデュランダル隊の封印を解いたようです。ソテールが放たれ、ダンピールの用意もあると。少しでも危機感を感じさせようとしたのか、死に際の白十字が教えてくれましたよ」

く救世主ソテール・ヴェルトール、絶対なる吸血鬼始末人ダンピール——ユニヴェール、いいのかえ？>

「何がです」

く……いや、よい。そなたがそう申すならば、すべて任せよう。自由に動け>

「承りまして」

寒気のするような笑みを残し、主はすぐに歩き出した。

この暗黒都市を統べる女王の声——ゆったりと流れる大河ドナウ

のような声はもう、追ってこない。

「……い、一体何をしに行くのですか、ユニヴェール卿」

吸血鬼は、こけつまろびつやはり後を付いてくる怪物の言葉を無視した。

彼は滑るように地下の奥へ奥へ進んで行くだけ。

迷路のように入り組んでいる地下を、迷うことなく確信的に歩む。時折すれ違う兵士らしき者達が敬礼をしてくるが、主はそれにも全く応えなかった。

彼は無言のまま歩き続け——いい加減パーティータが噴火しそうになった時。

ようやくユニヴェールが立ち止まった。

「ここは……」

「私専用の監獄だ」

視線が指し示す先には、三つの牢獄があった。

そこは薄暗く、部屋のほとんどが闇に覆われている。炎もなく、寝台もない。皿や食べ物形跡もなく、……それどころか何かが存在していた様子もない。

ただ、引き伸ばされた六角形の柵が、銀の鎖でぐるぐる巻きにされて置いてあるだけ。

ひとつの牢獄にひとつの柵。

「あの、まさか……」

岩の如くごつごつした怪物男の顔が、歪んだ。

「いえ、あの、貴方は……もしや……」

「私たちを閉じ込めるつもりですか？」

パーティータは怪物君の後を継いでみた。

「馬鹿言え」

ユニヴェールに一蹴される。

「……ま、さか、ユニヴェール……卿」

しかも大男は別のことを言おうとしていたらしく、未だ口をぱくぱくさせていた。

「ありえ…ませんよね、あの、ほら……」

「あれを起こすんですか？」

代わりにズバリと続けたのは最後尾を歩いてきたルナールだった。
「起こす」

「背約の三使徒……」

怪物がつぶやき、

「へえ」

ルナールが柩を見つめる。

「……………」

怪物君の張り詰めた空気を感じた様子もなく、ユニヴェールが黒衣から鍵束を取り出した。

華奢な六本の鍵が繋がれた、銀色の輪。

ひとつは牢獄の鍵。もうひとつは柩を縛る鎖の鍵。

皆が見つめる中、彼はゆっくりと柩を開ける。

「フランベルジェ、起きろ。時が来た」

木製の箱の中に眠っていたのは、青みがかった髪をした妙齡の女だった。

ユニヴェールが声をかけ、白い指が彼女の唇をなぞったと同時に、長い睫毛を有したまぶたがぴくりと動き、ゆっくりとその青の瞳が姿を現す。

——氷の魔女。

それ以外に呼び様のない女だと、パルティータは思った。

どこか夢見ているような半開きの双眸。白夜に映える氷の如く、霜の降りた青のローブ。

「……………」

起き上がれば長身で、軽くパルティータを超えていた。

おっとりとした動きの彼女は完全に柩から出ると、にっこり微笑んでユニヴェールに向き直る。

そして胸に手をあて一礼した。

「おはようございます、我が主^{モシメイトル}」

「紹介する。私の死を追ってクルースニクから暗黒都市の住人に転身してしまった部下たちだ」

パーティータは黙って紹介された。

「この女はフランベルジェ・ド・モントヴァン。魔女だ」

「どうも初めまして、以後お見知りおきを」

魔女でなければ修道女^{シスター}か聖女だと、人は言うだろう。森奥の風の湖面を擬人化したような先ほどの女性は、俗っぽさがないかわりにどこか浮いていて、ふんわりした——“お姉さん”に近いものがある。

「それからこっちの小さいのはシャムシール。墓場の骸^{むくろ}や動物を手なずけるのが得意だ」

「よろしく」

小さな手を差し出されて、パーティータは毒気を抜かれたまま握手した。

どう見ても少年なのだ。

茶色い髪、利発そうな少年。深い草色の法衣はだぶだぶで、裾をひきずっているところが可愛らしいといえは可愛らしい。

が。

（——こんな小さい子まで飼ってるってどういうことですか）

ギロリと睨みやると、ユニヴェールがついっと目を逸らす。

「で、こっちの馬鹿は……」

「馬鹿で悪かったな」

「主人に向かって殴りかかるやつがあるか、愚か者」

「しょーがねえだろ！　ン十年も寝てりゃ殴りたくもなる！」

最後に起こされたのは、スラムの路地にいそうな擦り切れた若者だった。あごをさすっているのは、ふたを開けた瞬間ユニヴェールに鉄拳をくらわせようとして逆に返された勲章だ。

「死人のくせに血の氣が多い、アスカロン。素手でも剣でも、狂戦士並みに猪突猛進」

「お嬢さん、楽しくやっていきましょう」

鳶色の髪の彼がパーティータの手をとり恭しく口付けた瞬間、二方向から鋭い睨みが飛んだ。

ルナル。そしてユニヴェール。

パーティータはその挨拶を甘んじて受けながら、早くも疲労を感じ始めていた。

「恐れることはない、全員、実に理性的で役に立つ普通の死人だ」
「そうですか」

死人は普通死んでいます。

もはや正す気にもなれず、パーティータは乾いた笑い声をあげた。
こういう大雑把なところがいかににも主らしい。

この吸血鬼は、敵の数だとか種類だとか思惑だとか、そういったものにほとんど注意を払わない。向かい来る者の刃を正面から受けようとする。それどころか策を弄するときは、さらに事をややこしくしようとする時なのだ。

不利だとか有利だとかではなく、面白くなるか否か。

それだけがこの男の基準だ。

だがそうでありながら、ユニヴェールが心底困ったところを、彼女は見たことがなかった。もちろん怖気づくような場面も、追い詰められた場面も、まして“窮地”など見たことがない。

「それで、」

パーティータは、しらっとした顔で立っているユニヴェールを見た。
やった。

「全員私が面倒みるわけですか？」

「……………」

「構いませんけどね」

「それでこそ私のメイド」

「お給料は上げてもらいます」

「……………」

「ああ、あとお屋敷の壁に書いてくださった血文字。あれ誰が掃除します?」

——エト インテラ パクス オミニブス ボーネ ヴォルンターティス地においては善意の人々に平和あれ——

THE END

第5話【背約の三使徒】 後編（後書き）

校正時BGM City of the Fallen [Fire
and Ice]
2003年

第6話【白く冷たく美しく】前編

その男は、淡々と地下を歩いていた。

申し訳程度に灯された炎に照らされる、薄暗い地下の通路。

湿気はない代わりに、ちらちらと空気中に細かい砂が舞う。

等間隔に並ぶ両脇の円柱から広がるアーチ状の天には、人目に触れぬというのに繊細な絵物語が綴られ、けれどそれは長い年月の風化によって所々剥はげている。

劣化した碧みどりとくすんだ金色、褪あせても荘厳さだけは失わない色彩が何十年ぶりに彼を迎えていた。

揺らめくその僅かな明かりに映し出されたのは、光をすべて喰わんとする漆黒の髪。ただ強く前を見据える蒼い双眸。柔と剛を内包した年齢不肖な相貌。そして死者の骨よりも白い長ロング外套コートに包まれた長身瘦軀。

閉じ込められたローマ帝国の風が震え、静かな靴音が通路に響く。

ヴァチカンの象徴——サン・ピエトロ大聖堂。

聖ペテロが刑にかけられたこの地に、ローマ帝国の皇帝コンスタンティヌス一世によってこの聖堂が建立されたのが324年。もう、大昔の話になる。

もつとも、教皇がサン・ジョヴァンニ・イン・ラテラーノ大聖堂からこちらの地へと住まいを移したのは最近のことだから、教会の中心地としての歴史は百年に満たない。それでも聖ペテロの墓所として各国から巡礼者たちが集い、改修や増築を繰り返した聖堂は巨大な懐ふところをもって人々を迎えた。

だがそんな光の都は、旅人はもちろん、ローマの住人もヴァチカンの住人もほとんどが知らない秘密を胸の奥に抱えていたのだ。意図して隠していたわけではなく、公にする機会も必要もなかった。

ただけかもしれないが、彼らが畏れ敬い涙を流す大聖堂の下、太陽の届かぬ地の底に歴代数多の教皇が永遠の眠りについている地下聖堂^タがあるということを、知る者は少なかった。

それよりも深い場所に初期の教徒たちが眠る死者の街——ネクロポリス——が広がっていることを知る者はさらに少なかった。その最奥に眠る者こそが聖ペトロであることを知る者は……。そして——。

「……馬鹿が」

白外套の男は、前を歩く人物に向かって言い放った。
年長者に対する尊敬も敬意も含まれず、ため息のような声音。

「まあそう言うな、ソテール・ヴェルトール」

彼の先を行く白い司祭服の老人が振り返りもせずに関延びした調子で返してくる。

「家名を付けるなど、何度言ったら分かるんだ？」

男は寝起きで虫の居所が悪かった。

「……私がお前と会ったのは三十年程前のこと、一回だけだよ、ソテール」

老翁に懐かしむ色はない。ただ漠然と時の流れを告げてくるだけ。
彼はそう言われてようやく思い出した。

—— 己は不老であった、殺されるまでは不死であった、と。

「三十年前……東ローマ帝国滅亡^{ヒザンツ}か」

「そうだ。その一回だけ」

相手は面倒くさそうに形だけの相槌^{あいづち}で終わらせてくる。

歓迎はされていない。それは彼——ソテールにも分かっていた。
だが、必要とされている。

約三百年前に彼がこのネクロポリスに封印されて以来、起こされる時は必ず決まっていた。
彼の力が必要になった時。

つまり、

「ユニヴェールが動き出したのか？」

「奴が仕掛けてきたわけではない」

「？」

「何にせよ、枢機卿にお会いして直接話を聞けば分かることだ」

「ならばそうさせてもらおうか。だが――、俺がどこまでも教会の言いなりになると思われては困るな……」

白の男はふいに立ち止まり、人差し指を立てた。

完璧な造形の指が、カビて澱んだ空気よどに美しい文字の帯を描く。

銀糸で豪華に刺繍された袖が揺れ、彼の薄い唇からはその文字を小さく読み上げる微かな息吹。

「ソテール！」

先導していた司祭が気付き振り返ったときにはもう遅い。

「さようなら」
チャオ

吸血鬼始末人ソテール・ヴェルトールは、密やかな嘲笑だけを残して眠りに満たされた地下の街から消え去った。

その存在を知る者は数少なく、そこに何かあるのか知る者は更に少ない、地下墓地ネクロポリス。

コンスタンティヌス帝の頃には、人々が酒を酌み交わしご馳走を食べ騒々しく死者と語らう聖堂として活躍していたらしいが、今では当時の空気がそのまま閉じ込められているのではと思うほどに人の出入りがない。

煉瓦積みの壁に四方を囲まれた地下、聖ペテロの墓地より手前にある隠された分岐から横に逸れ道になりに進んでいくと、誰もあんを暗澹たる気分たんにさせる牢獄がひとつある。

そしてその中をのぞけば、十数個の石棺が無造作に並べられているのを見ることができる。

一見すれば、罪人の墓地なのかと誤解しそうな殺風景な牢獄。

しかしその石棺に囚われた者たちには、誇られるべきあるいは畏れられるべき、名前が与えられていた。

通称“ローランの剣”。

正式には、ヴァチカン教皇庁直属、非公式特務課、デュランダル隊。

それは白十字団よりも更に上位に位置する、対魔、対暗黒都市に特化した半ば伝説的なクルースニクの精鋭組織だった。

三百年前までは。

しかし三百年前、所属していたシャルロ・ド・ユニヴェールが吸血鬼に堕ちてからは、彼らの使命は変容した。

彼らが命を懸けて狩る標的は、元同僚であるユニヴェールとなったのだ。ユニヴェールが動く時にはデュランダルも動く。ヴァチカンが本気でユニヴェールに仕掛ける時は、デュランダルが先陣を切る。

家族を捨て、友人を捨て、恋人を捨て、あらゆる個人的な関係を断ち切り、遥かなる時間を超えてパーテルの吸血鬼と対峙し続ける集団。

そしてその隊を率いている者こそ——三百年前のあの時も、今の時も——代々その任を負うヴェルトール家の若き当主、ソテール・ヴェルトールである。

結局ソテールが件の枢機卿の前に現れたのは、彼が目覚めてから有に一週間以上経ってからだった。

サンピエトロ大聖堂の横に建つ、実際の政務が行なわれている教皇庁。

その一郭、午前 of 陽射しが降り注ぐ巨大な一室に、何人かの枢機卿、大司祭、司祭が集められ、問答は始まった。

部屋の両脇を飾る古の聖人たちの石像。その前に白い僧服をまと

った者たちと緋色をまとった枢機卿たちとが隙間なく立ち並ぶ様は
壯観で、そのどれもが厳しく神妙な面持ちだ。

「起きてからここに現れるまで、お前は一体何をしていた」

部屋の主の第一声に、静寂が深まる。

が、問われた本人——部屋の中央に立たされている男は、あっけ
らかんと笑って見せた。

「俺は三十年も眠らされていたんだ、情報収集くらいは当たり前
の行動だろう。それと、墓参りもだ」

「お前はただ言われたとおりに動けばよい、ソテール」

「つけあがるなよ」

白いクルースニクは鋭い笑みを浮かべた。

「……………」

正面デスクの向こう側で大窓からの陽光を背負っている緋色の男
が、ぴくりと神経質に眉をひそめた。

ヴァチカン教皇庁総務局長官代理、ヴァレンティノ・クレメンテ
イ枢機卿。教皇直下の長官は名誉職も同然だから、実際の権力はこ
の男が握っていると考えてもいいだろう。

デスクの上で両肘をつき、指を組み、硝子眼鏡の向こうからこち
らを真っ直ぐに見ている聖職者。枢機卿と呼ばれるにも、長官代理
と呼ばれるにもまだいささか若く。しかし周りに控える者たちの態
度を見れるにつけ、金で買った地位ではないようだ。

家柄と、実力。

それでもソテールは、その蒼眸を糸にして軽く言い放った。

「たかが三十、四十年生きたくらいで大きな口を叩くなよ」

神聖なる空気が張り詰める。

「お前の作戦は遂行してやる。だが、いちいち細かいことに口を出
すな」

「規律の乱れは作戦の綻びになる」

「俺は貴様らを護るためにいるわけでも、貴様らの教義を護るため
にいるわけでも、教会の権力を護るためにいるわけでもないんだか

ら」

「——お前ッ！」

たまらず声を上げた壮年の大司祭を、それより若年のクレメンテ
イが一瞥で黙らせる。

そのままひとつ息をつき、彼はゆったりとした優雅な動作で身体
を背もたれへと預けた。

そして改めてソテールを見据えてくる。目的のためならば手段な
ど問わない、そういう琥珀色をした冷ややかな眼差し。若い、強固
な理想を映した眼差し。

歴史の大河を渡る船を漕ぐには必要な色。

「ではお前は何のために飼われているんだ？」

「白十字が一団丸ごと返り討ちにあったそうだが」

ソテールは問いには答えず、訊き返した。

クレメンティの眼が嫌そうに一瞬だけ外され、すぐ戻る。

「誰かが道草を喰っていて集合に遅れたからな」

「俺がいなかったから白十字だけでユニヴェールに向かって行っ
たって？ どうして退却しない。白十字ではどうにもならん相手だと

いうことは明白だろうに。退くことは必ずしも敗北ではない。良か
ったな、調子に乗ったあの男がここまで乗り込んで来なくて」

ソテールはよく切れる双眸で居並ぶ聖職者たちを撫でた。

白より白く漂白された言葉が、一言一言部屋のを重くする。

「そもそも、ユニヴェールを滅ぼしに行くのに白十字は必要ない。
デュランダルさえ必要ないくらいだ」

髪の前からつま先まで彫刻めいた、しかし他を制する強靱な意志
が宿った男。

「俺にはあの男を殺す義務があった。だがあれを殺したのは俺でな
かった。それがすべての元凶なんだからな」

ヴェルトール家とユニヴェール家は互いに吸血鬼始末人の名門だ
った。一族から何人も精鋭を輩出した。

だが一方は栄光の道を歩み、一方は自らの血で呪われたのだ。

「もう一度聞く。お前は何のために飼われている」

今度は話題を逸らすことは許さない、言外に含んだクレメンティの問い。

いつもならソテールの言葉から逃げるのは聖職者の方であるのに、この怜悯な官吏はどうあっても言うことを聞かせたいらしい。

「何のためか？」

古書に降り積もった砂塵が吹き払われるように、三十年の眠りが白いクルースニクの顔からすっと消える。

と同時に、太陽が雲に陰り、部屋から陽光までもが消えた。

その中で囁かれる穏やかな宣言。

「デュランダルは——否、俺は……教会がどうなろうと関係ない」
一度息継ぎを入れた彼の脳裏、あの男の姿が笑って通り過ぎた。
凍てつく月のような銀髪、禍々しい紅の双眸、光を飲み込む黒衣、人を喰った道化な性格、——闇の街で思うままに君臨する元部下。
「俺は、シャルロ・ド・ユニヴェールを滅ぼすためだけにここにいる」



今からおよそ二百年前。

あの頃、度重なる十字軍遠征の失敗に教皇権は失墜していた。

それを回復させようとした教皇ボニファティウス八世は、権威の優位をめぐりフランス・イギリス両国王と争ったが、1303年、フランス王フィリップ四世によってローマ近郊のアナーニで捕えられ、解放後まもなく没した。あげく乗じて1309年、フィリップ四世は教皇庁を南フランスのアヴィニョンへと強硬的に移す。

そして以後七十年間教皇庁はフランス王の干渉を受けることになる。

南フランスへの教皇庁の移転。

それは後、“教皇のバビロン捕囚”と言われ、子ども達を悩ませる歴史用語のひとつとなるわけだが——しかしこの事件は、人の目の見えぬところでも大きな意味を持っていた。

そう……南フランスにはあの都市があるではないか。

ローマ、教皇庁、教会、そして生きとし生ける者の対極。決して朝の訪れない、世界最大の闇夜。魍魎魍魎が跋扈^{ばっこ}して、華麗なる悪徳がはびこる街。

与えられた名は、暗黒都市、ヴィス・スプランドウール。

そしてそこは、優秀すぎる番犬を一匹飼っていた。

当時すでに悪名を轟かせていた不滅の吸血鬼、シャルロ・ド・ユニヴェール。

暗黒都市がこの好機にまず狙ったのは、自らの目と鼻の先で不由に喘いでいるアヴィニヨンの教皇庁ではなかった。

彼らの標的は、教皇が捕えられた後も光の都市という地位を保っていた教皇領・ローマとヴァチカンだったのだ。

主人のいなくなった生者の聖地に、真の夜が訪れた。

幽鬼は揺りかごから子どもをさらい、死鬼は家々に隠れる生者たちを襲い、悪霊たちは灯のない路地を騒ぎ行く。黒く巨大な化け犬が死を告げる家を探し回り、意地の悪い妖精たちが甘い魅惑の歌声を響かせる。

甘美な幻夢にとり憑かれてしまった者たちは、もう二度と返らない。夢の中で悦楽に浸っている間に魂を喰われ、知らぬ間に死を迎えるのだ。天使に手を引かれることもなく、神の前に立つこともなく。

闇に抗すべき聖人たちは、だが、押し寄せる魔物たちの数に為

す術もなく骸と化していった。

光の都市には夜な夜な暗黒都市の凱歌が流れ、もはやこの荒廃は誰にも止められないように思われた。

市民の喧騒に満ち、娘たちの歓声が溢れていたその街は今や、煤けた髑髏が風に転がり、人々のすすり泣く嗚咽が空虚な土壁に反響する街と化していた。

かつて吟遊詩人に褒め称えられた光の都は今や、色のない灰色の廃墟。

戦々恐々の夜は瞬く間にローマを支配し尽くし、それは教皇領すべてへと広がった。そしてまた彼らは、黒死病までもを引き連れて諸国を死の恐怖に突き落としたのだ。

そして暗黒都市の女王からの下命により、それら全てを率いていたのが――。

「ユニヴェール」

「……ほう？」

ソテールがその名を呼ぶと、その男は振り向き、楽しげに口端を吊り上げた。

夜のローマにひっそりと佇む小さな聖堂。

左右の巨大な円柱に護られ、金箔に彩られたその内部。

焚かれた香の匂いに混じり、歩を進める度に濃くなってゆく血臭。吐き気をもよおすほど若くもないが、それでも自然眉間にシワがよる。

「ユニヴェール、やっぱりお前が来ていたな」

見上げるほどの祭壇の前には血に染まった法衣の人間が糸切れた人形の如く伏し、一見して息絶えていることが分かった。

胴体と首とが離れた場所に転がっていたからだ。

「間拔けな者どもとはいえ、貴様を目覚めさせておくほどには頭があったか」

男が、手にしていた司祭の首を軽く横へ放り捨てた。

彼の指に流れた鮮血が床の上に散り、恐怖に引きつった老人の顔が物言わぬ使徒像の足元で虚ろに空を見つめる。

「何をしに来たか聞いてもいいか？ ソテール」

整えられた銀髪、生温かく凍った紅の双眸、冷笑を浮かべた口元の牙に、星のない夜を織った黒衣。

紳士を絵に描いたような物腰をしているくせに、他人を寄せ付けない。

そんな男が一步こちらに踏み出してきた。

「ローマを、人々を救いに来た。そう答えれば喜んでもらえるだろうな」

闇夜の黒髪、蒼水の双眸、挑戦的な笑みに、床すれすれで翻る白の長い外套。

始めからケンカ腰の、血生臭い麗しき始末人。

ソテールも一歩前へ踏み出した。

すると、両手を広げてユニヴェールがクツクツと喉奥で笑う。

「確かにそれは傑作だ。クルースニク名言語録集のはじめの方のページに収録したいくらいにな。だが嘘はいけないだろう、ソテール。仮にも聖職者なら」

「分かった。言い直す」

こちらにもまた不敵に笑い声を上げて、腰の両側に帯びた聖剣へと手をかけた。

刀身に聖言を刻んだ、およそ三百年前からの愛剣。

「今夜こそ決着が着くかと思ってね」

「クルースニクと吸血鬼、どちらが滅びるか、か？」

勝手にウンウンとうなづきかけたユニヴェールに、
「違う」

ソテールは斜め下からの視線を吸血鬼に送る。

ずらりと並べられた燭台の炎に明るく照らされる、生きた屍。

「吸血鬼・ユニヴェールと始末人・ヴェルトール、どちらが滅びるか、だ」

聞いた黒の男が、ニヤリと笑った。

第6話【白く冷たく美しく】後編

「面白い」

「だろう？」

ソテールは言っただけで二振り、三振りの剣を抜いた。

銀の剣身が聖堂内の光を受けて金色に輝く。鮮烈で、不吉な光。

「時に、私は丸腰なのだが？」

吸血鬼が悠長に刃を見回していた。

しかしとりあえずは聖なる祈りの場。使えそうな槍を持った甲冑像もなければ、宝玉で飾り立てられた鈍くさい短剣ひとつない。

「仕方ないな、一本貸してやる。お前には聖剣なんて関係ないから扱えるだろう」

放物線を描いたそれが吸血鬼の手に納まると、彼が小さく笑った。

「まだこれを持っていたか」

「懐かしいか？」

「幾分は、な」

ユニヴェールが高く掲げ光にかざした剣身には、その剣のかつての主の名が刻まれていた。

Charlotte Univers

そしてソテールが構える剣にも同じく。

Sotter Weltall

「両方がクルースニクであって、滅ぼしあいの腕比べなど出来なかった」

百年前の感触を確かめるように何度か柄を握り直して、ユニヴェールがつぶやく。

ソテールは蒼い切れ長の目を閉じ、短く息を吐いた。

「お前は昔から死に取り憑かれていてどうしようもなかった。本当に先に死ぬとは思わなかったけどな」

「だが私はなかなかしぶとかったろう？」

黒の吸血鬼がゆったりと視線を上げてくる。

「死にはすれど、滅びはしなかった」

「お前を殺した奴らの方が死にそうな顔をしていた」

「……………」

会話が途切れ、静寂が横切る。

——次瞬、二者が同時に地を蹴った。

夜が軋む金属音。

白く走る斬撃のひとつひとつが殺す剣。

白と黒が翻り、木造の長椅子が——人々が座り祈りを捧げていた椅子だ——巻き添えを喰らって無残に砕け散る。

轟く音は破壊と剣響。

華麗かつ容赦のない地獄の崖っ淵。

「ただのクルースニクではお前を滅ぼせない」

「だが貴様はただのクルースニクではない」

上段、下段、払って飛び退く。

だが間髪入れず鼻先をユニヴェールの切っ先が空を薙ぐ。

返す剣で首を狙えば、向こうは瞬時身を返して力任せに止めてくる。

「百年前の人間は、これを予想していたかな」

「していたらお前を殺しはしなかったらうよ」

剣術の試合をしている如く、隙のない打ち合い。

一閃一閃が全開の殺意を持ち、剣圧は常人の比でなく。

十字に斬り結ぶその度、聖堂が澄んだ鋭い衝撃に悲鳴をあげる。

ぱらぱらと漆喰が剥がれ、粉が降る。

「だがもし——」

「過去のことなどどうでもよい」

言いかけたソテールを制す笑い声。

同時に高い頭上から閃光が振り下ろされる。

「互いに、今の方が昔より面白からう？」

人にあらざるその重さをソテールは真正面で受け止めて、効かぬとばかりに跳ね返す。

黒髪が踊った。

「……どうだろうな」

用のない時は薄暗く湿った地下で延々と眠らされ、用があると目覚ましをかけられて、やることはいつだって殺し合い。

なんと殺伐とした人生だろう。

相手に不足はないわけだが。

考える間もロクになく、吸血鬼が言葉を続けてきた。

「貴様の息の根を止めるには」

ユニヴェールが振り切った衝撃で、側面を照らす巨大な燭台が碎け散る。

ソテールはその懷目掛けて踏み出すが、紙一重でかわされる。

そのまま斜めに斬り上げれば、空気を切裂いた刃が聖人像の首を落とした。

「本気が必要かもな」

再び距離を取っての対峙。

どちらもいくらか手負っている。だが、どちらも致命傷——どころか切り傷以上の傷はない。

——と、ふたりの耳に不快な足音が届いた。

ばたばたと品のない、複数の出現。

グラン

『大兄・ヴェルトール！』

「デュランダル……か」

年若い男の叫び声と、ユニヴェールの嘆息が重なった。

大聖堂入り口の方から数人、祭壇の後ろ通路から数人、白い隊衣をまとった聖剣を構えた仮面の者たちが、ふたりを囲むようにして唸り声を上げていた。

白十字団の上に行く教皇庁の非公式特務課、デュランダル。

百年前から、対不滅の吸血鬼ユニヴェール専用となったクルース
ニク集団。

「邪魔をするんじゃない！」

ソテールの麗貌がこの上ない不機嫌に歪んだ。

怒号は蝋燭の炎をも動かす。

「ですが！」

「今はまだお前たちが手に負える相手ではない」

「——我々はデュランダル。貴方だけが特別ではない！」

「死にたいか！」

蒼眸が牙を剥く。

仮面のどれもが不満を訴えているが、彼らではこの化け物には敵
わないのは分かりきっていることなのだ。

秘蔵のデュランダルだが——眼前の吸血鬼に殺されて人員が変わ
るたび、衰えている。

呑気な貴族や枢機卿たちは知らないかもしれないが、ソテールか
らすれば一目瞭然。

育て上げる時間さえ与えられない今や、デュランダルとはいえ一
部の古参を除いて白十字に毛が生えた程度でしかない。しかも頼り
の古参は今やってきた顔ぶれの中にはいない。

——結果は明らか、皆殺し。

「我らは主のために死ぬことが使命です！」

「そうか」

答えたのは、鷹揚な仕草で両手を広げる吸血鬼だった。

それが、剣を手放した。

美しい一本の旋律を奏で、聖剣が地に跳ね返る。

「良い心がけだ」

彼は自分の名が刻まれた剣を、いとも簡単に捨てた。

「——ユニヴェール」

「全員まとめて……おやすみなさい」
ボンヌ・ニユイ

男が厳かに告げた瞬間、吸血鬼の足元に落ちていた昏い影がざわ

ざわと蠢き出した。春の未明、眠っていた蟲が一斉に孵化したかの如く。

光の届かぬ聖堂の隅、生き残った長椅子の背後、原型を留めない説法台の下、破壊の後の瓦礫の山、わだかまった闇が侵食を始め、巨大な黒翼となって天蓋を覆う。

紳士のまま佇むその男の手には、冴え冴えと輝く巨大な大鎌が握られていた。

「真の吸血鬼は闇であり——……」

紅が優しく嘲った。

「さようなら」

「逃げろ！」

声の限り叫んだソテール。

剣を振りかぶった蒼眼に移ったのは、床から伸びた黒い残像。

宙を舞う仮面と曲線を描く赤い血筋。

支えを失って輝く軌跡を残して床に落ちる聖剣。

声を断たれた部下の叫び。

碎けるステンドグラス。

色ガラスの破片がきらきらと光を反射しながら、膝から崩れる白の始末人たちに降り注ぐ。

彼らには、何が起こったのか分からなかったに違いない。そして思いも寄らなかったに違いない。自分自身の影に殺された、などは。床に伸びた自らの影が瞬時漆黒の鎌となり、主の首を落とした、などとは。

吸血鬼は命じただけ、指一本動かしていなかった。

しかしそれが分かって何になろうか。

闇が全て凶器ならば、逃げ場はないのだ。

光があるところには、影がある。闇の中に光はなくとも、光の中には闇がある。

それが世界だ。

そして真の吸血鬼は——闇そのもの。闇を自在に操り、闇となる。

ソテールがユニヴェールへと一閃した刃は翻された大鎌に阻まれ、

しかし――

ファイアット・ルクス
「光 あ れ」

彼は唱えた。

瞬間、時間が止まる。

ユニヴェール
「真の吸血鬼は闇であり……真のクルースニクは光である」
ヴェルトール

ソテールは、吸血鬼が言いかけていた言葉を継いだ。

それから一拍。

眼の前の化け物の左腕が重い音を立てて床に転がった。

そして、吸血鬼の胸は金色に輝く光槍によって背中から貫かれて
いる。

祭壇に祀られた、金色の聖像。

蠟燭の炎によって照らされたその光が、ソテールの命令によって
収束し、不滅の闇を射抜いたのだ。

朽ちた血液が光を伝って床に血溜まりを作ってゆく。

すでに死した身であっても、光そのものに串刺しされれば苦痛な
のだろう。

不滅の吸血鬼が苦々しい吐息と共に柳眉をひそめる。

だがユニヴェールは、咳き込み血を吐きながらも笑って言っ
てきた。

「――相討か」

「そのようだ」

クルースニク、ソテール・ヴェルトール。

彼の左腕もまた落ちていた。

胸を背から貫かれていいるのもまた同じく。

違うのは彼を貫く槍の色が黒だということ。それはソテール自身
の影を凝縮したものであるということ。

白い外套がいつそ華麗なほど朱に染まっていた。

――仕切り直した

言おうとしたが、吐き出されたのは言葉でなく大量の鮮血。

ふと気付けば、聖剣で身体を支えていた。

「朝が、来る」

柱の上に並ぶ採光用の小窓を見上げ、吸血鬼がぼつりと漏らす。
ソテールがつられて見やれば、濃紺だった空はいつの間にか薄い
黄味と紫色を帯びて、世界の目覚めを連れてこようとしていた。

闇から光へ、世界の覇権が変わる宵。

死者から生者へ、その境目さえ分からぬほどに路を歩く者が変わる。

自らの役目の終わりを悟り、光槍も闇槍も霧散する。

「……退^のこう」

ユニヴェールが自分の名が刻まれた聖剣を拾い上げ、こちらに投
げて寄越した。

どこへ消えたのか、大鎌は跡形もない。

「退く？」

「知らぬか？ 光でやられた傷はなかなか癒えぬものなのだ。それ
にローマは荒らし尽くしてもう飽きた」

「闇でやられた傷が……毎晩俺を喰い尽くそうと侵食を始めるのと
……どちらがひどいだろうな……」

「さあ。どっちもどっちだろ」

ソテールからの返り血なのかそれとも己のものなのか、判別つか
ぬ血糊のついた指をぺろりと舐め、ユニヴェールが静かに背を向け
た。

彼は一瞬祭壇を仰ぎ、

「またいつか、殺ろう」

肩越しに言って一歩足を前に出す。

そこに落ちているのは彼自身の影。

「ルナール！ 帰るぞ」

どこへともなくユニヴェールが声をかけると、これまたどこから
ともなく黒猫がすっ跳んで来る。

そしてそれは一声鳴いて影に飛び込んだ。

オー・ルヴォワール
「さようなら」

いつもの淡々とした気障^{けさう}ったらしい言葉を残し、不滅の吸血鬼は影に沈んで——消えた。

シャルロ・ド・ユニヴェールが退くということは、暗黒都市そのものが退くということ。

結果的には、任務完了と言うべきかもしれない。

「ローマは……救われたのですか？」

まだ戦慄に震える部下の問いがどこから響いた。
息のある者がいたらしい。

だが、白のクルースニクはそれには答えなかった。

「——また」

それだけを小さく言い置き、彼もまた立ち上がる。

どこからともなく駆けつけてくるローマの聖騎士たちに部下の介抱を頼み、自身は手をかされることを断り、命ある者の証である鮮やかな紅の血に塗れ、聖剣二振を鞘に戻し、壊れかけた聖堂を背景に。

半分砕けたステンドグラスから清涼な朝の光が差し込んで、美しいモザイクの床面を照らし出す。

彼はその上に血の足跡をひとつひとつ置きながら、ローマの街へと出て行った。



「今回は、あの化け物をどうやっても引きずり出す」
クレメンティが零下の温度で断言した。

「こちらから仕掛けるというわけか？ 勝算は」

ソテールは世間話でもするくらいの調子で斜めに男を値踏みする。
だが、返答は月並みだった。

「勝算がなければ動くわけがないだろう」
飾りっ気のない男だ。

「こちらはお前の他にもうひとり、切り札を手に入れた」

「それは……」

「ダンピール」

背後から玲瓏とした女の声がした。

振り返れば、教皇庁にはおよそ似つかわしくない派手な女が堂々と胸をはって立っている。

枢機卿たる緋色の法衣、大きな紅玉の耳飾に細い腕には二重の金鎖、ダイヤの輝きが連なる首飾りはそれだけで貴族の館がひとつ買えてしまいそうな勢いだ。

だが始末が悪いことに彼女は、それだけの貴石を凌駕する美しさを持っていた。

性格が悪そうとか良さそうとかではなく、その粹組みさえ吹き飛ばす強靱な美女。欲しいものはすべてその手で掴み取る。

そういう自信に溢れている。

「ダンピールが何かは貴方も御存知ですね？ ヴェルトール隊長」
重そうな金髪をわずかにかきあげて、女が首を傾げた。

透き通った碧眼が有無を言わさずこちらを見ている。仕方なくソテールは教科書どおりに答えた。

「知ってるさ。ダンピール——吸血鬼を滅ぼすことを生まれながらにして約束された子ども、だろう。手早く言えば、吸血鬼と人間の女の間に生まれた子ども」

「そういうことです。ダンピールは貴方たちクルースニクのように闇と闘うことを宿命付けられた者ではなく、滅ぼすことを宿命付けられた者。吸血鬼が絶対に勝てない相手」

——この女は何だ？

クレメンティに疑問の視線を投げると、彼がひとつ咳をした。

「こちらはシエナ・マスカーニ枢機卿。特務課デュランダル長官を引き受けてくれた——お前の上司だ」

紹介されると同時、陰っていた部屋に再び陽光が差す。

彼女の立ち位置は計算されていたように光の真ん中であり、妙齡の美女はクレメンティに目もくれず、朗々と言い放った。

「不滅のクルースニクと最強のダンピールがいて敗北はあり得ないわ。ソテール、必ずシャルロ・ド・ユニヴェールを葬りなさい。その代わり、どんな手段を使おうが構いません、貴方の好きなようにやればいいでしょう」

お手上げだというような、冷たいクレメンティの眼差し。

たかが“女”が自分たちよりも上に立っている、その不満を隠そうともしない白けた僧侶たちの眼差し。

だが彼女はそんなことを気にした様子もなく、手にした扇をぱちんと閉じてびしっとソテールに突きつけてくる。

紅唇が、ソテール以外には見えない角度で意味ありげに笑っていた。

（——この女……）

しかし、言葉はやはり明朗快活に。

「全責任はわたくしがかかります」

——その頃ユニヴェール邸では。

「……ゲホゲホ」

麗しの吸血鬼が咳き込んでいた。

「風邪でもお召しになりましたか？ ユニヴェール様」

「風邪なんぞで死にはしない。問題は薙がれた手足をどうやって再生するのか、だ」

斜めな双眸の男は、焼けて変色した本の文字を指で辿りながらつ

ぶやく。

そう。それが重要なのだ。

どうせ不死身のこの身体、風邪くらいで死ぬわけがない。だが先日白十字という輩を相手にして判明したもっと切羽詰った問題がある。

——部分的な再生方法を忘れた。……のだ。

今回はいい。身体丸ごと灰にされたおかげで両手はすっかり元通りだ。

だが、腕や手を落されるたびに全身を焼いていたのでは、格好が悪い。腕だけ、手だけを再生させる方法があったはずなのだが……。そんなこんなで、せっかく起こした三使徒の初仕事は地下書庫での書物漁りになり——ユニヴェール自身もこうやって過去の日記をめぐって記述を探している。

「そんなものどうやったら忘れられるんです」

紅茶を運んできたメイドが、呆れたというよりも見放した調子で言ってくる。

ユニヴェールは顔を上げて睨みつけた。

「お前もン百年生きてみれば分かるだろう」

「嫌です」

「……………」それよりもパルティータ、ルナールを呼んでこい。あいつなら私が昔いつ頃手だか脚だかを失ったことがあるか覚えているかもしれん」

「今、夜ですから。彼、猫ですよ」

「構わん」

「だから出かけています」

「……………」

ユニヴェールは大きく深呼吸して机の上に肘をついた。

「お前は何か心当たりないか？」

紅を上目遣いにすれば、彼女は抑揚のない視線のまま、

「ローマやヴァチカンが影響を受けるような大きな事件の時ならば、

暗黒都市も向こうに仕掛けたりと動きがあったんではありませんか？
例えば、東ローマ帝国^{ビザンツ}の滅亡時とか」

「三十年程前か……。否、あの時は私はここを離れなかった」

「ではジャンヌ・ダルクの魔女裁判」

「見物に出かけたが薙がれた記憶はないな」

「……百年ほど前の教会大分裂時^{大シスマ}はどうです？」

「教会大分裂……待てよ、それより過去に大きいのがあった。教皇がアヴィニヨン捕囚された時だ」

ユニヴェールは、蒼白く鋭い顔に満足そうな微笑を浮かべた。
世の娘たちを魅了してやまない吸血鬼の毒。

「あの時はこの私が退いたのだ」

「……退いた？」

メイドが首を傾げた。聞き間違いかというように。

だが、彼はむしろ嬉々として肯定する。

「そうだ、退いた。左腕を失って——無論、同程度やり返してやったが」

「それじゃあ相手の方は」

「まだ生きている。おそらく——もし未来、私を滅ぼす者がいるのだとすれば、奴だけだろうな」

「二百年前から、生きている……」

「三百年前からだ。元、私の上司だからな。たかだか一年早く生まれただけで、上司！」

どうでもいい訂正をしながら、彼は当時の日記を手にした。

埃が舞ってまた咳き込むが、ページを繰る手は止めない。

「——あつたぞ」

1310年 ×月4日

ソテール・ヴェルトールと一戦やらかす。

左腕を落とされた。左腕を落としてやった。

「で、治し方は書いてあったんですか？」

「そう急くな」

ユニヴェールはそのまま美しい形の爪先を下へと滑らせる。

記述はすぐ見つかった。

間には、どうでもいいような走り書きふたつしかなかったからである。

1310年 ×月24日

治った。

ユニヴェール邸に罵声が響く。

「——私の愚か者ッ！」

T H E E N D

第6話【白く冷たく美しく】後編（後書き）

■サン・ピエトロ大聖堂

聖ペテロが殉教した地に、324年コンスタンティヌス帝が建立したと言われる。1505年に再建が決定。ルネサンスを代表する建築家ドナト・ブラマンテによって構想がなされ、彼の死後はラファエロに引き継がれ、ラファエロが夭逝するとさらにそれはミケランジェロへと引き継がれていった。

この話のサンピエトロ大聖堂は、再建される前。

校正時BGM by Position Music [King
dom of Avilion]

2003年

第7話【フィレンツェ】前編

「——そう。そういうこと」

パルティータは軽くうなずいて、腕を組んだ。

真っ直ぐに伸ばされ、綺麗に切りそろえられている黒髪。おそろいの漆黒の瞳。感情の起伏が一切見えない容貌に、もうすっかり板についた灰色のメイド服。

「どうします？」

楽しげに訊き返してきたのは、“薄情”に黒衣を着せたような細身の男だ。放蕩者の貴族の坊ちゃんに見えないこともないが、腰には飾りではない二振りの剣を帯びている。

「約束は約束。守ってもらわないと」

「では？」

「行くのよ」

「フィレンツェまで？」

「大量虐殺犯の手下になるのは真っ平ごめんなさいでしょ」

きっぱりとパルティータが断言すれば、男が明後日の方向へ眉をひそめた。

「……すでに大量虐殺犯ではあると思うんですけどね、あの御方。

そういう人種ですし」

「だから何だって言うの？」

彼女は抑揚のない口調と平らな目でゆっくり問い掛ける。

「……ルナール」

「……はい」

「私は契約の時に“むやみに人を殺さない”っていう条項をユニヴェール様に飲ませたの。それを破られると私が困るのよ。ここを出

て行かなきゃならないでしょ」

「……ええと……はい？」

「貴方が契約を破ったんですよ。私は辞めさせていただきます”
ってカッコ良く去るのがスジってもんじゃない？」

「……はあ」

——演劇の見すぎだと思えますよ

ルナールの目に横切った言葉は黙殺されたのだろう。

パルティータの顔は水平なまま。

「でもこのご時世こんな給料払いの良い所他にないわけ。出て行ったら私が困るのよ。それなのに私が出て行ったってあの方はみじん切り玉ねぎのひとカケラだって困らないんだから」

「……ひとカケラくらいは困ると思いますけど」

「ひとカケラ困ったくらいで私の気が済むと思うの？」

「いいえ」

ルナールがやる気なく首をぶんぶんと振ると、パルティータは口元を緩める。

「分かっているんじゃない。それなら次にやることも分かっているわよね」

「吸血鬼退治の支度」

「そのとおり」

「で——」

「何？」

純粹に首を傾げるパルティータに、ルナールがにっこり笑って人差し指をぴっと立てた。

「装備はフライパンと包丁、どちらにします？」

「……………」

パルティータは凶悪な笑みで応えた。

「使えるものは全部持っていくのよ」

◆ ◆ ◆
そんな会話から少し前——。まだ世界が夜の闇に包まれていた時分、暗黒都市はいつになくざわついていた。

あらゆる悪徳がはびこり、華を咲かせる世界の影。
決して昼が訪れない、南フランスの魔界都市。

化け物たちを統べる女王の居城、そこへと真っ直ぐ通じる石畳の通りはもちろんどこよりも人（魔物）通が多い。馬車がひっきりなしに行き交い、道端では大道芸人が喜劇を演じ、毒草や焼き菓子
の振売り屋が声を上げ、錬金術師が影のように店を渡り歩き、どこぞの下男が主の使いで忙しなく走り回る。

その雅に飾り立てられた大通りを、やけに目立って歩く五人組がいた。

雑然としたざわめきの音量が次第に絞られ、舗石を行く馬車の速度が落ちる。魔女や薬屋はそそくさと道の端へ寄る。誰もが足を止めて振り返り、近くにいた名も知らぬ者と密やかに言葉を交わす。

注目の的となっている一行の一番前に行くのは、茶色いふわふわした髪の少年だった。大きすぎる深い草色の法衣をひきずりながら、楽しそうに精一杯大きな歩様で胸をはる。

その後ろに並ぶふたりは、充分な大人だった。ひとりには黒騎士崩れの格好をした、しかしそれが似合わぬスレた顔つきの若者。もうひとりには人々に氷河の風を与えながら行く、優雅な物腰をした女性。貴族から小間使いまで、この都市にあって三人の名を知らない者はいない。彼らの主が彼らを起こしたことは、すでに周知の事実となっていた。

そしてこの日は、それこそが道行く者たちのおしゃべりを奪った原因だが——その主までが一行の最後を歩いていたのである。

闇を渡る能力があるが故に、都大路に姿を現すことは少ない暗黒都市の番犬シャルロ・ド・ユニヴェール。

どこからみても奇抜な人間としか思えぬ黒の剣士を横に従えて、飄々と城を目指す。

月光よりも冷たい銀髪に、ルビーよりも鮮やかな紅の双眸。新月の夜を織った黒衣を身に付け、自身に群がる好奇の視線をむしろ喜んで笑っている。

「ユニヴェール様、今日はこういったご用件で呼ばれたのですか？」
美女が振り返った。

「さあ」

「……そうですか」

半ばあきらめた表情で、彼女が顔を前に戻す。
すると今度は少年が大きな目をきらきらさせながら、身体を反転してきた。

「ねえユニヴェール様、用件が終わったらソロン通りのガリアでパフェ食べてもいい？」

「パフェ？」

「この間書庫で見つけた暗黒都市案内決定版に、ガリアのデザートは都市一番の五つ星って書いてあったんだもん。食べてみたい」

輝かしい笑顔に下から見つめられて、ユニヴェールはとがったあごへと右手をやる。

そしてひとつ間を空けて、

「——よし。終わったらみんなで行くでしょう」

寛大な領主を演じるが如く、もったいぶって宣言した。

少年が歓声をあげ、美女が口元にあてた両手で小さく拍手する。

だが黒騎士姿の若者だけは頭の後ろで手を組んで、斜めな視線を主に向けた。

「パルティータ嬢はどうするんだ？　ひとり退け者じゃ可哀相じゃねえの？」

「お持ち帰り用があるからそれでいいだろう。アレは生クリームが思いつきり使ってあるケーキが好きだからな」

「なるほど」

「……あの、僕は甘いの手手なんですけど」

「ではさっさと城に行くことにするか」

黒の剣士、ルナールの申告は完全に無視された。



暗黒都市ヴィス・スプランドウールの中央に位置する黒曜の城。

それが世界の闇の中心であった。

燃えるような赤い月を背負ってそびえている城は、美しくもあり不気味でもある。そして、軽やかな誘いと深い魅惑に満ちている。その内部で行なわれている鋭く執拗な応酬を、見えぬヴェールですっぽりと覆い隠したまま。

「……つまり私は信用していただけではないと」

ユニヴェールの言葉に、謁見の間に集まった魔貴族たちは口を閉ざした。

高い段上、御簾の向こうにいたのであろう女王はまだ一言も発さず、事はその下で粛々と進んでいる。

「そういうことですね？」

シャルロ・ド・ユニヴェールはもう一度丁寧に訊き直す。

彼は、吸血鬼の中の化け物と呼ばれる、生物学的にも物理学的にも、……ついでに言えば神学的にも道徳的にも間違った化け物だ。

陽光を浴びて灰になることもなければ（日焼けはするらしい）、銀の銃弾は喰らう前に叩き落してしまうのが常だが本人曰く無意味、無論そんな輩に十字架なんぞ掲げてみたところで鼻先一笑されるのがオチ。

あげく心臓に杭を打たれたてもむくりと生き返り、首を落とされても甦る。

つまり——何度死んでも滅びない。

そういう吸血鬼だ。

そして付け加えるならば……

「我々は貴方のご出身が気に入らないのですよ。元、吸血鬼始末人クルースニクというね」

ひとりの若者がゆっくりと進み出てきた。

金髪の——誰も疑うところのない——美青年である。背が高く、理性的な顔立ちに貴人の華やかさとしなやかさをあわせ持つ、人間。だが育った環境が彼に尊大という悪徳を与えた。

「ミランドラ伯」

口元にわずかの笑みをのせて、ユニヴェールは胸に手を当てる。

ジョヴァンニ・ピコ・デラ・ミランドラ。

北イタリア、ミランドラ城主の末子であるこの貴族は、ギリシア語からアラビア語までおよそ十五ヶ国語を操り、幼い頃から神童と呼ばれ誉めそやされてきた天才的な哲学者だ。

そして今では、……暗黒都市指折りの魔術師でもある。

「私はてつきりパリにお逃れになったものと」

「はじめはパリにいたさ。だが、陛下からお声がかかってね。今は暗黒都市と自由の都フィレンツェを行き来している」

常人とは頭の構造が違うらしい彼は、「人間の自由意志」というものを説いた。人間はその選択によって神の世界にも、また動物の世界にも、どちらにでもなりうるというのである。

しかし、1486年に彼が開催しようとした世界哲学会議での発表草案「人間の尊厳について」が教皇インノケンティウス八世の逆鱗に触れた。

「魔術とカバラ（数秘術）はキリスト教を補足する」、その論はあまりにも時代に挑戦し過ぎていたのだ。

魔女を見極める指南書まで作られて無実の者が累々るいさと処刑されて

いるこの時代に！

魔術とキリスト教を融合させるなど狂気の沙汰に等しかった。

教会は彼に異端の烙印を与え、才余った彼はフランスに亡命したのである。

「お声をかけたのは陛下だけではあるまい？」

ユニヴェールの面白がるような揶揄に、ピコの眉が片方上がった。「ロレンツォ様のことかな？」

「フランスは私の庭のようなものでね。貴殿が逃げ切れず一度捕まったことは知っている。そしてメディチ家の当主とシャルルが援助して貴殿を救済したことも知っている」

艶のあるユニヴェールの視線が広間を撫でると、居並ぶ魔貴族たちは更に存在を押し殺す。

彼は四人の手下を背後に控えさせたまま、喉の奥で笑った。

「ロレンツォ・デ・メディチ。フィレンツェの経済を牛耳るあの御大の加護があれば、教会も歯噛みするしかないでしょうな。貴殿は異端狩りに怯える必要もなく、自由にのびのびやりたい放題やれるわけだ。ああ、飼い犬の身の私としては羨ましい限り」

やりたい放題やっている男がそう言っても全く悲哀は感じられない。

誰もが言いたかっただろうが、誰も言えずにユニヴェールの言葉が続いた。

「——しかし博識な貴殿のこと、メディチ家がいかようにして成り上がったか、知らぬわけでもあるまい？」

ユニヴェールの爵位は子爵。ピコは伯爵。

もうすでにユニヴェールは死人ゆえに生前の階級など意味をなさないのでが、それでもこの男は上位者を嘲るように殷懃な態度を取り続ける。

三百年という年月をかけた、底無しの深遠を垣間見せながら。

「世間が教皇派か皇帝派かに分裂していた昔、フィレンツェ市は教皇派だった。しかしあの都市中でも教皇寄りの黒党ネーリと自治を

目指す白党ビアンキとの対立があったのは御存知だね？ 黒党のアヴェラルドという男がクーデターを起こしてフィレンツェから白党を追放する」

「……………」

美しい吸血鬼の爪が宙でくると回った。

「このアヴェラルドが、追放した白党から奪った財産で金貸し業を始めた。それがあのメディチ家の始まり」

「……だから？」

「あなたも同じだと言うことですよ」

ユニヴェールは目を細めてあごをひく。

「私が元吸血鬼始末人クルースニク、向こうの出身者で信用がおいけないというのなら。教皇派から生まれたメディチお抱えの貴殿も、信用がおいけない」

「……………」

青年がじっとこちらを見据えてきた。

感情的な色のない、碧眼。

古典復興に燃える絵師たちがこぞって描きたがる、白皙。

「噂には聞いていた、ユニヴェール卿。貴方を侮ってはいけな」と「伊達に長年生きていないのですね」

対して悠然と佇むこの吸血鬼は、その造形が美しいことには美しい。

けれど、時を刻むことをやめたその容貌から正確な年齢を読み取ることは誰にもできない。加えて、その男が危険なのはそういう見目ではなかった。

存在が、空気が、笑みが、深さが、人を捕えて離さないのだ。

目を合わせたら最後、流砂や底無し沼に吞まれるように彼の闇に吞まれてしまう。差し出された手に自らの手を重ねたその瞬間、もう帰ってはこられない。

吸血鬼ゆえなのか、ユニヴェールゆえなのか、それは分からない。しかし彼はそういう男だった。

「なあ、そんな小難しい話俺にはどーでもいいんだけど」

肩をこきこきとやりながら、ユニヴェールの背後から黒騎士の若者がだれた声を上げた。

「アスカロン」

若者の横に立っていた蒼の美女が形ばかり叱責し、彼——アスカロンは口を尖らせる。

「だって時間の無駄だぜ。前置きはいいいからさ、若造、さっさと用件言えよ」

「そーだそーだ。パフェを食べる時間がなくなる」

便乗して少年、シャムシールも法衣をばさばささせた。

「まったくもう」

やはり形だけ怒って見せて氷の魔女、フランベルジェが何事もなかったかのようにおっとり前を向く。

彼女だって暗黒都市の頭でっかち貴族には飽き飽きしているのだ、本気で制止しようなどとは微塵も思わない。

そして彼女はふわふわした微笑みを浮かべたまま言い放った。

「女王陛下、ミランドラ伯。わたくしたちも、我が主も、暇ではありませんの。大した意味のない戯言^{ざれごと}はお仲間うちだけで後ほど楽しんでくださると嬉しいのですが」

円卓に座った魔貴族たちが口をぽかんと開けた。

女王の御簾、段下にひっそりと控えたいつかの黒騎士——ベリオールが目を剥いた。

魔術師ミランドラのただでさえ冷涼な視線が、冷たさを増した。

「お呼ばれた用件はなんですか？」

たぶん彼女は、針山でさえ平然と歩けるに違いない。

緩くウェーブした薄蒼の髪が、啞然としている相手の視線を弾く。
「すまないね」

魔貴族たちの自尊心に助け舟を出したのはユニヴェールだった。

「私の部下は私に忠実だから」

だが船は即沈んだ。

彼は小さく肩をすくめると立ち上がり、ピコへと歩み寄った。

そして低い声でささやく。

「私が暗黒都市に忠実であるという証明でもさせたいか」

「……してくださるならば」

「詳細を言え」

「では、フィレンツェを血に沈めてみてください」

「貴殿を護るフィレンツェを？」

ユニヴェールが訊くと、ピコが美貌を一層冷たくする。

「あそこには狂人がひとりいましてね。せつかくメディチの繁栄で風紀が乱れきって第二の暗黒都市ともなろうとしていたところに、それを真っ向から糾弾する男が現れたのですよ。メディチ家と教会、教皇の乱れを凄まじく罵る男がね。ロレンツォ様が何故か気に入ってらっしゃるから、教会も苦虫を噛んでいてどうしようもない。あげく人心はだんだんその男に向かいはじめている」

「敬謙な都になる前に闇に堕としてしまえということか？」

「ええ。あの男の言うことなど、神の存在など、誰も信じなくなるほどに」

「皆殺しか？」

「そこはお任せしますよ。僕には関係ない。あなたが女王陛下への忠誠を示してくださいればそれでいいのです」

ユニヴェールは考えるようにしばし虚空を見つめ、ひとつ深く息をつくと段上に向かって胸に手を当てた。

「――^{ダコール}了解」

くよろしく頼んだえ>

風の海の如きのんびりした声が降り、それきり御簾の奥からは物音も気配も消えた。

ユニヴェールがピコを一瞥すれば、最初とは変わって天才魔術師が深く礼をする。

「――行くぞ。フィレンツェだ」

他の魔貴族には目もくれず、彼は黒衣をひるがえした。

それを追いかけてバタバタと三使徒が続く。

「えー。パフェはどうなるのさ」

「そんなもの後だ後！」

「でも今出て行ったら、外界は昼間ではありませんの？」

「……………」

「ねえー！ 昼間は動けないんだからさあ、パフェ食べた方がいいじゃないさー！」

「あれっ。ルナールがいねえ、あいつフィレンツェ大虐殺が恐くて逃げ出したかねえ」

「ユニヴェール様、やはりここはいい感じの思い出を作ってから出かけませんと」

「……ルナールがいらない？」

フランベルジェとシャムシールを完全無視して、ユニヴェールが眉を寄せた。

「ああ、いねえ。いつからいなかったんだろうなあ？」

軽くく言ったアスカロンに対し、ユニヴェールが頭痛を我慢するようにこめかみを押さえた。

「あの馬鹿……」

ぽつりと漏らしてぐると三使徒へ向き直る。

「パフェを食べている暇も太陽を避けている時間もない！ すぐにフィレンツェへ行くぞ」

『ええええええええええ』

不満の唱和をそっぽを向いてやりすごし、彼らの息が切れたところで再び向き直る。

不滅の吸血鬼は、部下ひとりひとりをじっくり睨みつけながら言った。

「急がねば鬼の形相をしたパーティータが先回りして我らを待っている」

第7話【フィレンツェ】後編

フィレンツェ共和国は、ジェノヴァ共和国の更に先にあった。

白塗りの壁に明るいうす葉色の屋根。そんな美しい家々が所狭しと立ち並び、狭い石畳の路地は都市を細かく網羅して、各所の広場をつなぐ。

芸術が盛んでもあるこの街は、住み慣れたフランスの田舎町よりも雑々と都会的で華やかな匂いがしていた。

ユニヴェールがシャムシールに馬車のカーテンを開けさせれば、ちょうどアルノ川を渡るところ。

もう少し進めば可愛らしい鐘楼を天にかかげるヴェッキオ宮殿が見えてくる。

「誰もいないか？」

「いないと思う」

吸血鬼の囁きに、少年も声をひそめて返してきた。

外は闇。人という生き物はもう家の中に入り震えている時間だ。こんな時間にうろついている者にロクな奴はいない。

そう、例えば――

「パルティータ。どうにかあいつよりも先に着けたみたいだな。フィレンツェの入り口にもこの橋にもいないとなれば……」

「でもパルティータが僕たちより先に着くなんてありえる？」

「分からんぞ、あいつは時々常識を覆すからな」

「ユニヴェール様、どっちへ行くんだー？」

御者をしていたアスカロンが、間延びした声で訊いてくる。

「フィレンツェと行ったらサンタ・マリア・デル・フィオーレだろ

うが。フィレンツェを血に染めるにはまずあの大聖堂からだ」

「ユニヴェール様、先程から……」

足を組んだままユニヴェールが行き先を指定すると、今度は横のフランベルジェが浮かない顔でこちらを見ている。

「……分かっている」

彼はそうだけ応えた。

暗黒都市からずっと、多くの魔が後ろを付いて来ている。

——監視されている。

刃物の色をした紅の瞳が、妖しい影を落とした。

不健康な白い指が口元に寄せられて、化け物のつぶやきを隠す。

「いい度胸だ」



「いい度胸ですね」

夜気の中、真っ直ぐに凜と響いた声音。

ユニヴェールは一瞬顔をしかめてソレに向き直った。

「ルナール、裏切り者め」

睨めば、名を呼ばれた黒猫は馬鹿にするような鳴き方で一声上げ、彼女の細い足元に隠れた。

「ユニヴェール様」

そして、代わりに呼ばれたのはその男自身だった。

サンタ・マリア・デル・フィオーレ。

芸術の都フィレンツェを代表する壮麗な大聖堂であり、永世の美術品としても称えるべき建築物。

美しいドーム型の天蓋は素晴らしき神の御世の象徴だ。

精練であり、緻密であり、高潔である。

その夜は——そんな神の御前に、地獄の裁判官が立っていた。

「何をしにここへ？」

眼前の女の名はパルティータ・インフィーネ。

怒っている様子もない。けれど笑顔もない。何もない。

「素直に答えたら、どうなる？」

「答えを聞いてから考えます」

彼女は彼のメイドだ。

それが彼の命令もなしにこの地にいる方がおかしい。

けれどそれを問い正すまでもなく、彼には思い当たることがあった。

「これは仕事だパルティータ。無意味な虐殺ではない」

「そうですか」

「……………」

「貴方程の化け物なら、仕事と仕事を受ける相手は選べるものと思っ
ていましたか」

黒髪が揺れ、パルティータの視線が上を見る。

つられてユニヴェールも首をまわせば、向かいの建物の上にガー
ゴイルのような影がいくつも蠢うごめいていた。

「三使徒だけでは手勢が足りずに連れてきたんですか？」

「いや——」

「では吸血鬼シャルロ・ド・ユニヴェールともあろう者が、暗黒都
市から監視されながらお仕事ですか」

紳士の眉が跳ね上がった。

が、すぐに元に戻りメイドを見据える。

身内には向けたことのない怜悯な光がその奥に灯っていた。

ユニヴェールは彼女から視線を逸らすことなく後ろに告げる。

「シャムシール、アスカロン、フランベルジェ。我々をつけてきた
暗黒都市の輩を全て滅ぼせ。一匹たりとも逃すなよ」

『——御意』

三者三様の声色で、しかしどれも嬉しそうに応えて姿を闇にくらませた。

大聖堂の前の広場には、主とメイド、そして黒猫と馬車だけが残される。

「私を止めるつもりか？」

「人が死ぬのはあまり好きではありません」

「だが私は吸血鬼だ。死を司る者つかさどのひとりなんだがね」

「私が気に入らないと言っているんです」

黒猫が背を向けたままひげをふよふよと揺らしているのが気になるが、ユニヴェールは再び焦点をパルティータに合わせた。

「どけ、パルティータ」

「どかなければ、私を殺しますか？」

「……………」

蟬人形のような表情でこちらを見返してくるメイド。

もちろん、彼女を無視してフィレンツェを沈めることなど簡単だ。ヴァチカンは何やら画策中、そして教皇派であるメディチ家の謳うた歌のおかげで、教会はあまりこのフィレンツェに兵力を割いていない。皇帝派を抑える必要がないからだ。

それに以前白十字団をひとつ丸ごと潰してしまったから、こんな緊張感のない地を固めるほどの人手が向こうにあるとも思えない。

三使徒も覚醒した今となっては、こんな都など一日あれば人は消える。

このメイドだって、黙らせるのは簡単なのだ。

その喉を裂いてしまえば済むことなのだから。

だが——、なにぶん面倒臭がり屋のユニヴェール。

雑用ごとをこなすメイドがいなければ、一週間と文化的な生活は続かない。

おまけにこんな化け物が屋敷の主では、勤めにくるという者すらいない。

彼自身は中立を名言しているだけあって、暗黒都市の連中とはそ

りが合わないのだ。

以前には魔女を数人雇ったが、文化的生活を捨てても解雇した。ワケの分からない煮汁で屋敷中を拭かれたり、異臭がしてポコポコ沸き立っている紅茶が運ばれてきたり、廊下、寝室、食堂、書庫……あらゆるところにイモリだのカエルだのキノコだのミミズだのが吊るされた。干して魔術に使うのだそうだ。

ユニヴェールの忍耐は二週間で切れたのである。

「お前を殺しはしないさ」

ユニヴェールは靴音を立ててパルティータに近付いた。

臆することもなく突っ立っているこの女は無神経なのかそれとも強いのか。

「だがね、主の言うことは聞くものだ」

彼は左手で彼女のあごをつまむと、右手で縦襟スタンドカラーの留め金を外した。

陽に当たらない白い肌が露わになり、ユニヴェールは触れるか触れぬかの軽さで首筋を撫でてやる。

普通の獲物ならばここで陥落するのだ。

恐怖を優しさで包んでやれば、女は安堵の園に身を委ねる。

重ねて耳元で睦言むつげんを囁いてやれば、面白いように抵抗を止める。

自ら口付けを求めさえ、する。

が、そこにいたのは普通の輩ではなかった。

そして気付いた時にはもう、何かが彼の喉元に突きつけられていた。

視線だけで確かめれば、

「すりこぎか……」

「血を見るのは好きではないので、包丁は却下しました」
パルティータがにっこりと微笑む。

「私の血と引き換えに、フィレンツェは見逃してください。三百年も仕えてきた者に監視を付けるなど、暗黒都市の態度は傲慢です。ユニヴェールともあろう者が、見くびられたものです。今回の件は忠実に仕事をしてやる必要はないと思いますか？」

「……………」

ユニヴェールは後ろを振り返り、夜の街に耳を澄ませた。
どこからともなくガラの悪い若者の暴言が聞こえてくる。奇怪な
悲鳴と謎の物音が立て続けに上がり、小さな子供の高笑いが響いて
くる。

フランベルジェはさすがに彼女というべきか、気配もない。もし
かしたらたださぼっているだけかもしれないが……。

これでスヤスヤと気持ちよく眠ることができる人間はあまりいな
いだろう。

フィレンツェは無言のうちに緊張している。

目に見えぬ恐怖を、足元から冷気が這い上がるようにして味わっ
ている。

「別にここで大量虐殺を見るのが嫌だとか、可哀相だとか、血まみ
れ主人のメイドをやるのが嫌だとか、約束破られて出てかなきやい
けなくなるのは困るとか、そういうのは些細なことではありませ
んけれど」

「……では、なんだ？」

「私の主が暗黒都市にナメられるのは嫌なのです」

「……………」

明らかに嘘だ。

彼女はついさっきまでユニヴェールが監視されていることを知ら
なかったのだから。

それを理由にパーテルから出てくるわけがない。

「パルティータ」

ユニヴェールは彼女のあごをつまんだ左手に力を入れ、強引に唇
を重ねた。

そのままついばむようにして首筋へと口付けを下ろしていく。

「忘れたわけではあるまいが、私とて魔物なのだからな。お前をこ
ちら側に引きずり込むこともできるのだよ」

牙で白磁の肌を甘噛みしてやれば、細い身体が一度だけぴくりと

強張る。

しかし彼女は何も言ってこなかった。

古くからの伝承にあるように、吸血鬼にその血を飲まれた生者は闇に引き込まれ吸血鬼となる。

それは、死から蘇ったわけではない吸血鬼……つまり^{オリジナル}原型でない者。常に新たな血を求め彷徨う、“吸血鬼にも劣る吸血鬼”。生み出した原型の吸血鬼でさえ衰れむことがあるという、中途半端な化け物だ。

とはいえ、ユニヴェール級であれば相手を原型にすることも可能であり、いつぞやのテレーズ・フォンデンブローがいい例だ。

「パルティータ」

「私の血と引き換えです。フィレンツェを見逃してください」

「強情女」

「結構」

雰囲気もなにもあったもんじゃないやりとりで、吸血鬼の目に霜が降りる。

彼はそのまま牙を突き立てた。

「——ッ」

痛みに耐えるパルティータの短い息吹が聞こえ——……滲み出た鮮血に優しく口をつけたユニヴェール。

「……パルティータ!!!!!!」

瞬間、彼はあらんかぎりの罵声を上げて咳き込んだ。

思わず彼女の身体を突き放し、石畳に膝をつく。

喉を掻きむしりたい衝動をどうにか抑え、しかしその反動で目には涙が溢れてくる。

「どーしましたー?」

わざとらしい猫なで声で、メイドが咳き込み続ける彼の背中をさすってきた。

おそらく、満面の笑み。

「……貴様、謀^{はか}ったな」

魅惑のテノールはかすれていた。

「謀るだなんてとんでもない。第一、私が血を飲まれたって吸血鬼にならないことも、私の血が凄まじくマズイことも、ユニヴェール様はご承知だったはずでは？ 数回飲まれたでしょう？」

「血を飲まれても吸血鬼にならん人間なんぞいてたまるか。あれは私の中ではなかったことになっていたのだよ！」

「はあ」

「しかもお前、これが“マズイ”で済まされるものか！ 毒だろうこれは！ これならまだ聖母マリアの血でも飲んだ方がマシだろうよ！ お前は何か？ 日々着々と対吸血鬼仕様に進化してるのか！？」

ようやく立ち上がり、叫ぶ。

彼が半狂乱になりそうになるのを必死でこらえているというのに、パーティータは面白そうにこちらを眺めながら言うてくる。

「聖夜^{ノエル}が近付くにつれてマズくなるみたいですけどねえ」

「そんな馬鹿な話があって……」

言いかけてユニヴェールは口を閉ざした。

柳眉を寄せて、紅の瞳をパーティータへと滑らせる。

「でも約束ですよ。血、飲んだんですからフィレンツェから手をひいてください」

したり顔で両手を腰にあてるパーティータを視界に入れたまま、彼の頭は別のことを考えていた。

——聖夜が近付くにつれてマズくなるみたいですけどね……？

それは誰が試したのだ？

ユニヴェールは味の比較なんぞをした覚えはない。

誰がそう言った？

「ユニヴェール様！！ いいですね！」

「……煩い、分かった分かった」

邪険に言ってしまったから、はたと気付いて頬を汗がったう。
が、まあいいか。と思い直す。

「そういうことだ、ミランドラ伯」

ユニヴェールは肩をすくめて身体を反転させた。

「ウチのメイドは妙なところで策士だね。私も紳士のはしくれだから、約束を違えるわけにはいかない。フィレンツェは止めて他の場所にするでしょう」

「——なっ！」

背後でパルティータが思いっきりすりこぎを石畳に叩きつける音がした。

よくあるパターンだと石に跳ね返ったそれがユニヴェールの後頭部に当たったりするのだが、さすがの吸血鬼なので首を傾げてやり過ごす。

嫌な風音をたてて、耳元をすりこぎが飛んでいった。

「ジェノヴァにするか？ それともミラノか？ ヴェネツィアでも構わんが」

「……………」

ユニヴェールが話しかけている先には、あの天才魔術師が立っていた。

黒いローブに映える金髪。しかめた顔すら神々しい。

「やはり、フィレンツェでなければ意味がない、か？」

乱れたタイを直しながら笑うと、その碧眼がわずかに見開かれた。
「私を侮るな。貴様の考えていることくらい手に取るように分かるのだよ、若造。貴様の言っていた“あの男”とはジローラモ・サヴォナローラのことだろう」

「何もかも知っている、と？」

「私が一体どれだけの月日人間という生き物を見てきたと思っているのだ？ 愛も恋も憎しみも嫉妬も怒りも悲しみも、私にとってはもはや見飽きた演劇にすぎん」

ジローラモ・サヴォナローラ。

ドミニコ修道会の説教士であったその男は、豪華絢爛な風潮を片っ端から非難し、また教会の腐敗に対して痛烈な批判を行なう異色の徒であった。

それゆえに教会そのものからは疎まれ左遷うつされていたのだが、この魔術師ピコが面白がってロレンツォ・デ・メディチに依頼しフィレンツェに呼んだのだ。

「ロレンツォは随分サヴォナローラを気に入ったようだな。メディチ家をどんなに悪しく言われようと一切咎めないと聞いたが？」

「咎めないどころか、ロレンツォ様はあの男をサン・マルコ修道院の院長にするおつもりですよ」

「ほう」

ユニヴェールが薄く笑う。

「それは……飼犬に手を噛まれたな、ミランドラ伯」
「……………」

「大方、サヴォナローラを話の種に己の論理を話して聞かせ、ロレンツォにもっと目をかけてもらおうとでも思ったんだろう？ 貴様は。だが貴様が予想したよりもはるかに、ロレンツォはサヴォナローラを気に入ってしまった。違うか？」

「そうです」

若い美貌が、表情を見せずに淡々と肯定した。

「ロレンツォは大事な資金源だから、いささか困るのです。権力に罵詈雑言を浴びせるしか能のない男に——僕も初めはもっと物の分かった男だと思っていたんですけどね——、そんな男にフィレンツェを荒らされては僕の面目が立たない」

ジョヴァンニ・ピコ・デラ・ミランドラ。

彼は、素晴らしい逸材だった。

博識かつ明晰で、おまけに天才だった。

けれどそれゆえに異端の烙印を押され、いつの間にか闇に身を墮としていた。

メディチ家という大木に守られて陽光の下堅実な哲学者をやりながら、月の下では人知れず魔術師という顔を出す。

天才ゆえか、素直なゆえか、彼は己の闇に蝕まれていた。

「ロレンツォという資金源を、ロレンツォの興味を、サヴォナローラに取られた。そうして若い貴様が考えることなどひとつだ。サヴォナローラを消す。あるいはサヴォナローラを失脚させる」

多少、哀れに思わないこともなかった。

長年「人」を見て分かったことがある。

人というものは、やはりひとりでは生きていられないのだ。

どこかで誰かに認められたいと望んでいる。どこかで誰かに自分を理解してほしいと願っている。

懂れるその者に、自分だけを見てほしいと無理な注文をする。

しかし人は、それが叶わぬと怨み嘆き憎む。

時にピコのような手段に出る。

この若者は貴族の出身なのだ。金など大した問題ではない。「アカデミア・プラトニカ」という古典研究のサロンに出入りすることも許されている。名誉は充分だ。

多くの文化人に影響を与え、功績は尊敬されてもいる。

暗黒都市に身を墮とすまでもなく彼は恵まれていた。異端と咎められてなお、その才は朽ちることなく人々に受け入れられているのだ。

彼の理論は常に、他の者たちに感嘆の声を上げさせている。

それでも彼は闇に手をのばした。

光の後ろを絶えずつきまとう、影に。

——彼はただロレンツォの賞賛がほしいのだ。

生徒が教師に、子供が親に、そう願うように。

彼はその想いに忠実なだけなのだ。

ユニヴェールはそんな連鎖をいくつも見てきた。

それが悪いと言う気も愚かだと言う気もない。

ただその度に「人」とは厄介なものだと、自嘲気味なため息が出るのだ。

もはやその輪から外れた身。それゆえに浮かべることのできる笑いだった。

誰かが言っていた。“人を墮とすのは人。だが人を救うことができるのもまた人である”、と。

なんと皮肉な輪であることだろう！

「あの男は生真面目で凄まじく神経が細いんです。フィレンツェが吸血鬼に荒らされたとなれば、その日のうちにどこかへ逃げ去るか、全てを教会やロレンツォ様のせいにして狂気にとり憑かれるかどちらか。そうしたら僕はもうあの男に悩まされずにすむですよ」

「それで私か」

問えば、若者がうなづく。

「暗黒都市の貴族の方々が、勧めてくださったのです。シャルロ・ド・ユニヴェールであれば一夜でのフィレンツェ陥落など容易いこと。けれどシャルロ・ド・ユニヴェールは勅命でなければ動かない。ならば一石二鳥、フィレンツェを落とすか否かであの吸血鬼の忠誠度を測ってみればよい、と」

「愚か者」

ユニヴェールは吐き捨てた。

それはピコではなく、暗黒都市そのものへ。

「忠誠など初めからどこにもないというのがまだ分からのか」

「……………」

怪訝な顔をする魔術師に、吸血鬼はわずかの不快を滲ませた目をやる。

「私と暗黒都市のつながりは、金の契約だ。それがある限り私は奴らの言うことを聞いてやる。だが、それだけの話だ。私は闇だが暗黒都市ではない。——ルナール！」

猫が鳴いた。

「三人を呼び戻して来い。帰るぞ」

その言葉を聞いて慌てたのは魔術師ピコ。

無表情を崩して声を荒げてくる。

「——仕事は！」

「くだらん茶番に付き合うほど私もお人好ではないんだよ、ミランダ伯。メイドとの約束もある、監視などというものをつけられた侮辱も放つてはおけん。フィレンツェは落とさない。他のどこも血に染めぬ。私は帰って寝る」

「それは暗黒都市への反逆とも——」

「反逆と取りたければ取るがいいさ。女王陛下は私が中立だとちゃんとわきまえておられると思うがな。今回は度が過ぎた遊びだろう」

「……………」

「ひとつ有用なことを教えておいてやる」

ユニヴェールは馬車に向かう途中歩を止めて黒衣をひるがえした。ともすれば折れて散りそうな魔術師を見つめ、声を落とす。

「生き急ぐな。気楽にやれ。どうせこの世は見えざる者の箱庭だ」

「見えざる者……？」

「神か悪魔か。見えぬのだから誰も知らんさ」

そして彼はフンと鼻先で笑う。

「女王陛下がお怒りになったら言っておけ。いつでも滅ぼしに来いとな！」

「本気ですか！」

「本気だとも」

「……消されますよ」

「笑止！」

心底楽しそうなユニヴェールの哄笑こうしょうが、夜明けのフィレンツェに響き渡った。

「私は滅ぼされぬよ。暗黒都市にも、ヴァチカンにもな！ 何故なら……」

吸血鬼はそこでふと止めた。

白み始めた空を仰ぎ、つぶやく。

「私は構わないが、あの三人は陽光が苦手だったな。早々に行くとするか。パルティータ、御者をやれ。三人と一匹は途中で拾っていく」

「かしこまりました」

妙にご機嫌麗しいメイドが足取りも軽く馬車に乗り込んだ。

それを嘆息混じりに眺め、ユニヴェールも馬車に手をかける。が、これまた魔術師の美声にとめられた。

「何故なら、なんですか！ 続きを言ってください！」

「そんなことを気にしている場合か！ 貴様は天才だがまだ何もわかっていないな。私を見ずに周りを見ろ。お前はもう見てもらう存在ではないのだよ、ミランドラ」

「それは……」

「分らん奴だな。見てやれと言っているのだ、お前を慕ってこの街に来る者達をな」

吸血鬼は言い捨て扉を閉めた。

座り慣れたクッションに身をうずめ、馬車が走り出す音を聞く。

結局パルティータの望むままになったが、そんなことはもうどうでもいい。

若き天才が何を考えどう道を選択するか、それも彼の知ったことではない。

このところロクに眠っていなかったのだ。

不滅の吸血鬼と呼ばれる今でも、睡魔だけには勝てない。

……眠い。

「それではおやすみ、フィレンツェ」
ボンヌニユイ

華やかなる都、フィレンツェ。薄い光の帯が降り立つ夜明け。
何事もなかったかの如く悠然とそびえる大聖堂。それを臨む広場の真ん中で、ひとりの天才魔術師が豆鉄砲を喰らった鳩の顔をして立ち尽くしていた。

「私が、見る……」



「分かります？ シャムシール」

「そんなの簡単じゃん」

「アスカロンは？」

「考えなくても分かるぜ」

「パルティータとルナールはいかがです？」

フランベルジェが窓から顔を出し、御者台にいる人間組にも問う。

「もちろん分かりますよ」

「私も」

「そうですよねえ」

氷の魔女が再び座ると、シャムシールがケラケラと笑いながらクツションをばふばふ叩いた。

「その天才魔術師、紙一重で馬鹿なんじゃないー？」

「シャルロ・ド・ユニヴェールが暗黒都市にもローマにも滅ぼされない理由だろ？ そんなもん決まってんじゃないやねえか、なあ」

アスカロンが全員に同意を求めると、

『シャルロ・ド・ユニヴェールだから』

御者台も含めた全員が、低い声真似をして合唱。
それから馬車は爆笑の渦に飲み込まれた。

「――いい加減に黙らんか」

三使徒を拾いあげてから、ずっとこの騒ぎ。

安眠を妨害され続けたユニヴェールはご機嫌斜め向きだった。

「あ。起きた」

シャムシールがなぜか嬉しそうな声を上げる。

「お前らのせいでさっきからずっと起こされていたよ」

「ねえユニヴェール様、ソロン通りのガリア行こう。パフェ食べる約束だったでしょ。仕事が終わったら」

嫌味は無邪気に敗北する。

「そういえばシャムシール、楽しみにしてましたわねえ」

「俺も腹減ったなあ。暴れたら」

「そんな約束してたんですか？ 私も行きます」

御者台からもパルティータが賛同する。

だが、もうひとりの声はか細かった。

「……パルティータ、僕が甘いダメだって知ってますよね？」

「知ってるわよ」

「だったら……」

「食べなきゃいいでしょ」

「……えええ」

馬車の中は馬車の中で話が進む。

「ねえユニヴェール様、約束は守らないと紳士が廃^{すた}りますよー」

「ガリアって、デザートだけじゃなくて普通の食べ物もありましたよね？ アスカロンはそちらにしたら？」

「そうだなー。パフェって気分じゃねえもんな。本には何がうまいって書いてあったんだ？ シャムシール」

「えー、そんなところまで覚えてない。行けば分かるよ行けば。ねえユニヴェール様！」

頭痛がしてきた吸血鬼がカーテンをめくれば、朝の無駄に清々しい光の中振り返ったパルティータと目があう。

彼女はニヤツと瞬間の笑みを浮かべると、御者台に姿を消した。

「ユ〜ニ〜ヴェーラー様ア〜」

「分かった分かった分かった行こう」

力なくユニヴェールが観念すると、馬車の中には三人の歓声が響き渡った。

「ルナールー！ 暗黒都市へ行ってー！」

「よし、食いまくるぞ」

「アスカロン！ はしたない！」

騒がしい一家を横目に、不滅の吸血鬼は静かにその相貌を陰しくした。

紅の双眸は、黒髪メイドの残像に向けられる。

吸血鬼に血を吸われて吸血鬼にならない人間。

聖夜が近付くにつれて血の味がマズくなる人間。

そしてそれを自覚している人間。

ユニヴェールはカーテンを閉め、再びクッションに身をあずけた。目を閉じて、ひとりごちる。

「……あいつの履歴書どこへやっただろうな？ 過去の私は」

THE END

第7話【フィレンツェ】後編（後書き）

■ジョヴァンニ・ピコ・デラ・ミランドラ

ルネサンス期イタリアの代表的プラトン主義思想家。

何ヶ国語も扱うことができ、大学に在籍していた頃から天才の名をとどろかせていた。

1486年に世界哲学会議を開催しようとするが、そこで発表しようとした「人間の尊厳について」によって異端視され、パリへ。後、フィレンツェに移りロレンツォ・デ・メディチの庇護のもと活動する。

が、フランス王シャルル八世がナポリを取ろうと進軍すると、人心を掴んでいたサヴォナローラはメディチ家を追放、シャルルを味方につけ、フィレンツェの主導権を握った。

その一連の中で、彼をフィレンツェに招いた本人であるピコもまた、1494年若くして毒殺されてしまう。

「アカデミア」ではかのミケランジェロも彫刻を学んでおり、上記の事件によって彼もまたフィレンツェを去った。

※異端とはされつつも、史実では魔術師という記述はありません。あしからず。

第8話【我が屋敷 ただ今メイド募集中】前編（前書き）

話は第一話よりさかのぼる。

第8話【我が屋敷　ただ今メイド募集中】前編

絞首刑台へと引き立てられながら、彼女は集まりざわめいている群衆の波を見やった。

（そしてその群れの岸に求めていた影を見つけて小さく息をつく。
（嘲^{わら}ってくれていいのに）

彼女は立たされた台の上からその馬車を見つめた。

（愚かな女だって、嘲^{わら}ってくれていいのに）

彼女の視線の先にあるのは、貴族仕様の黒塗りの馬車だった。陽光を遮るべく厚い黒カーテンで内側が隠され、覆面をした青毛^{あおげ}が引く、二頭引きの四輪馬車^{コーチ}。

そのカーテンの間から、こちらを静かに眺めている男が見える。

他を圧倒する空気は全く零れておらず、野次を飛ばしながら押し合う見物人たちは彼の存在に全く気付いていなかった。

けれど確かにその麗人はそこにいた。

（貴方はどうしてそんな顔をしてそこにいるの！）

冷たい銀髪、冴えた紅の双眸。やや蒼白い怜悧な白晢に、闇を織った隙のない黒衣。安らかで残酷な死の香をまとった、影なる世界の影なる王。

嘲りもせず、冷笑もせず、淡い柔らかな眼差しで傍観している貴人。

シャルロ・ド・ユニヴェール。

（おとなしく貴方のもとでメイドを続けていれば、死ぬことにはならなかったでしょうね）

彼女——ルイーゼは、届かない言葉をつぶやき続けた。

馬車の中から空虚な微笑みだけを寄越す吸血鬼に。

（でも後悔はしてないのよ。私は自由が欲しかったんだもの。私の思うとおりに生きてみたいと思ったんだもの。だから貴方の屋敷から出た。貴方のもとから飛び出した）

無論、主からの返事はない。

けれど彼は全て分かっている。

ルイーゼにはその確信があった。

（私は精一杯生きたわ。狂気に巻き込まれても、思うとおりにならなくても、恋が実らなくても、私は私なりに頑張ったのよ。結果はこんなんだけど、短い自由を楽しみぬいた。それだけは胸を張って貴方に自慢できるわ）

処刑台の下で、司祭が罪状を読み上げ始めた。

白い法衣を着てしらじらしく『魔女』の烙印を宣言しているその男は、彼女をここへ送った張本人だ。

それでも、彼女はもう憎しみも怒りも感じなかった。

見つめる先にいる、かつての主のせいだったかもしれない。

（自分から毒の霧に羽ばたいた愚かな鳥だって、嘲っているのに）
民衆に紛れ、だがただひとり違う空気を従えて。彼は優しい微笑のまま何をするでもなくこちらを見ていた。

（でも貴方は決して私を嘲わないのよね。決して嘲わない）

彼女は空を仰いだ。美しい空だ。

涙が一粒だけ、頬を伝う。

「何か言い残すことはあるか？」

司祭が虚ろな説明文の最後に、常套句じょうとうくを付け加えてきた。

（我俣だつて分かってるけど、それでも私は今本当に思ってるのよ。自由に生きた、恋をした、精一杯生きた、それは私の譲れない誇り。それでも……。新しいメイドを雇ったっていう風の噂も聞いたけど、それでも——！）

彼女は空に向かって叫んだ。

「私は貴方のところに戻りたい！」

司祭が唇を噛んでルイーゼの視線の先を追った。

人々は互いに顔を見合わせ、言葉の標的を探した。けれど誰もそれを見つけられはしなかった。

馬車はそれごと気配を消していたのだ。

処刑場が潮騒のようにざわめき、視線が交錯する。

「……………」

それらをかいくぐって静かにこちらを見返した吸血鬼の唇が、かすかに動いた。

<Non>
ダメだ

（分かってる、分かってる）

ルイーゼはそれでも溢れてきた涙を隠すこともできず、ただ何度もうなずいた。

（貴方がそう言うことは分かった）

しかし次の唇を読んで彼女は涙を止めた。

<お前はお前の道を生きろ>

（……生きろ？）

彼女は戻りたいのではない。

彼女自身気付いていないが、戻りたいのではなく、生きたいのだ。



「アンヌ様がお見えになりました」

扉の向こうから、若い男の声がした。

部屋の主は、それが女の声でないことを多少訝しく思いながらも返事をする。

「お通しなさい」

少しの間があって、扉が開かれた。

案の定軽く会釈をしながら客人を招いたのは、男だった。

執事には似つかわしくない若年の剣士で、黒髪黒衣。飄々とした風体の、平たく言えばこの屋敷の居候である。

「ハルベルト、ルイーゼは」

「お出かけになりましたよ」

「……出かけた？」

厚いカーテンに覆われた暗い部屋の中で、男は小さく柳眉を寄せ
る。

もう朝陽が昇っている時刻だというのに、そこはまるで真夜中の様相だった。重々しい調度品の数々を照らすのはいくつか置かれた燭台の蠟燭の炎であって、街を明るく彩っているはずの陽光は欠片もない。

心躍る朝の清新な空気もどこへやら、そこには古から沈殿しているような出口のない空気がわだかまっていた。

「彼女はもう戻ってはこないかもしれませんが、ユニヴェール卿」

若い剣士——ハルベルトの背後から、黒いヴェールで顔を隠した女性が一步進み出た。

それを視界におさめ、男は恭しく立ち上がる。

この客間の、そしてこの屋敷の主、シャルロ・ド・ユニヴェールは、ごく自然に両手を広げて麗しい客人を迎えた。

「これはこれは、アンヌ・ド・ボージュー。いや、摂政殿とお呼びした方がよろしいか」

「アンヌで結構です」

若々しい凜とした声音で女性が軽く笑い、口元を緩めた。

彼女の落ち着いた物腰は他者に若い娘という侮りあなとを許さず、ひとすじ通った鼻梁は高貴な意志と風格を漂わせていた。

見かけは質素にしているが、素材のひとつひとつはこの化け物屋敷単位の高価な代物。

身にまとったワイン色のドレスも、耳元を飾る大粒真珠のイヤリングも、胸元のユリを模したスカーフ留めも、とてもではないが中途半端な貴族が手を出せるものではない。

アンヌ・ド・ボージュール。

彼女の父は今は亡きフランス国王、ルイ十一世であり、彼女の弟はつい先日即位したフランス国王、シャルル八世だ。

まだ少年である国王を、夫であるピエール・ド・ボージュールと共に補佐しているのが、姉である彼女、アンヌなのであった。

地位は摂政。

「お座りください」

紳士的な仕草でユニヴェールはソファを勧め、彼女が座るのを待ってから自らも対面に座る。

「ルイーゼがいないのなら仕方ない。ハルベルト、お茶をお持ちしろ」

「はい」

間延びした返事を残す黒の剣士を見送って、吸血鬼はゆっくりと夫人に向き直った。

「ルイーゼが……私のメイドが帰ってこないとは、どういう意味です？」

「貴方はあの方をいつまでここに閉じ込めておくつもりだったのですか？　もしかして一生？」

ヴェールがついた帽子をおもむろに取り去り、アンヌが碧眼を鋭くした。そこには怒りともとれる咎めの色。

が、フランスの摂政に怒られる覚えはない。

「私なんて貴方の生きた年月に到底及びませんから、こんなことを言うのは出すぎたことかもしれませんけれど。もういい加減あのお嬢さんを自由にさせてあげたらいいかですの？」

「とは？」

「知らないとは言わせませんわよ。この町では随分と噂パーテルになっているようですもの」

ルイ十一世は生前、この聡明な長女を誰よりも誇っていたという。だからこそ、王位を継ぐべきシャルルの世話はいつも彼女に任せていたのだ。そして彼女はいつでも、父の期待に答えてみせた。

「……騎士隊長のことか」

フランスで一番高貴な女性に睨まれて、降参とばかりにユニヴェールは肩をすくめた。

アンヌが軽く笑う。

「まるで父親みたいな声をなさるのね」

「あの娘は捨てられた子で——半分くらい私が育てたようなものですから。……ルイーゼがこの街の騎士隊長に惚れているのは知っていますよ。ついでに、相手もルイーゼに惚れているということも知っています」

「それでもあの方をここから出してはあげないの？ 愛する者のそばに行かせてはやらないの？ 一生この屋敷で貴方のメイドをやらせるおつもり？」

「今はまだ、危険な横槍があるようですから」

「？」

好奇の色を上手に隠して、アンヌが視線で問うてくる。

ユニヴェールは、ため息まじりにカーテンで遮られた窓へと目線を逸らした。

「それがどうやら、パテル大聖堂のファロ司祭殿もルイーゼに惚れているらしいのですよ。だが司祭殿は今時珍しい真正銘潔癖な聖職者、今まで“恋”というものを知らなかったぶん恋に身を狂わせているようでしてね。猫……じゃない、ハルベルト——さっきの剣士です——が見たところによれば、何をしでかすか分からない状態なのだということだ」

「だから放してやらないの。まあ過保護」

大袈裟に眉をしかめてくるアンヌ・ド・ボージュー。

ちなみに、彼女は別段ユニヴェールの愛人というわけではない。

彼女の愛人がユニヴェールだというわけでもない。

単なる客人だ。

「ルイーゼ様は普通の人間でしょう？ それを普通でない貴方があれやこれや決めるといえるのはどうかと思いますわ。いかに貴方があ

の方の主で、保護者を自認していらしてもね。——貴方は人の世が嫌い。大事なあの方をこんな俗世に手放したくないのは分かりますけれど」

「嫌いではありませんがねえ」

ユニヴェールは紅の双眸を細めて苦笑した。

人の世が嫌いなわけではない。生きる屍・吸血鬼としてもはや人の世とは次元を異にしている、それだけのことであって嫌いなわけではない。

手の届かない高みから人間を馬鹿にするのは、最高の娯楽だ。

「人は人の世であがくからこそ人となれるのですわ。羽ばたこうとする者を後押しするならともかく、その翼を掴むなんて老害も甚だしいでしょう？」

「……………」

老害、ときたまんだ。

いささか釈然としないものを抱えつつ、ユニヴェールはフランスの誇る女摂政殿に尋ねた。

「で、貴女は我がメイドになんて助言をくれてくださったんです？」

「好きなように生きなさい、と言いましたわ。卿はわたくしが説得しておきます、とも」

「……………」

ユニヴェールはじっとアンヌを見つめた。

彼女もまた臆することなく見返してくる。

「……生者は生者である限り、生きねばならない」

ユニヴェールはどこへともなくつぶやいた。

「そのとおりですわ」

そして目を閉じる。

「正しい助言でしたね」

「ええ」

沈黙が落ちた。

その向こうで、何刻かを告げる鐘の音が響いていた。太陽に守ら

れた人の時間を告げていることだけは確かだが、終わらぬ夜に支配されたこの部屋には関係ない。

そこへ、見計らったようにノックがされる。

「紅茶をお持ちしました」

ハルベルトが入ってくると同時、ユニヴェールは足を組み替えた。部屋を満たす芳香に、柔らかいテノールを乗せる。

「――で、アンヌ。わざわざお出でいただいた用件をお伺いしてもよろしいか」

「実は頼みごとがあって参りましたの」

栗色の髪をした美しい女性は、背筋を正しひと口紅茶を含んでから告げてきた。

「シャルルの戴冠式に出席していただけないかしら、ユニヴェール卿」

「……戴冠式？」

ユニヴェールはカップを手にしたまま、僅かに首を傾げた。白のスカーフに留められたダイヤのピンが、控え目に揺れる。

「ご存知でしょう？ フランス国王はランスの大聖堂で戴冠式を挙げなければ正式には国王ではないのです。父上が亡くなられましたから、弟は形式上国王ではありませんけどね」

もちろん彼はシャルロ・ド・ユニヴェールなのだ、それくらいのこととは充分承知している。

481年にクローヴィスという男がランス大聖堂にてフランク王に即位してから、歴代フランス国王はこの聖なる場所で即位式を行なっているのである。

「オルレアン公が悩みの種なのですわ」

貴婦人はわざとらしく顔をしかめ、白い手袋に包まれた手をこめかみにあてた。

「今この国でシャルルに次ぐ地位にある男子はあの男だけなのです。おまけにあの男は地位に対する執着だけは人一倍あって。昔は私からシャルルを取り上げるべく彼を誘拐しようと計画をしていました

し、先日はわたくしの摂政地位が違法だと言って、その地位を寄越せとアンボワーズ城まで乗り込んできましたの」

「オルレアン公、ルイですか」

ユニヴェールは幾分冷やかな声音で、アンヌを見やった。

そもそもユニヴェール家に爵位を与えたのはフランス王国だが、口調こそは臣下の礼を取れど、くつろいで紅茶をすすっているあたり、臣下の態度ではない。

反対に、アンヌ・ド・ボージューの方こそがシャルロ・ド・ユニヴェールへの目通りを許されたのだと、もしかしたら世間ではそう評されるのかもしれない。

「あの男が摂政権を求めてうるさく言うものだから、地方から代表者を呼んで三部会を開くことになりましたの。その会議で正式にわたくしが摂政を委任されましたのに、あの人はまだ納得していないみたいで」

オルレアン公、ルイ。またはルイ・ドルレアン。

シャルル五世の血を引く、ヴァロワ＝オルレアン家の当主である彼は、軽薄で女好きだと陰口を叩かれる反面、なかなかやり手なようだった。そして性質の悪いことに相当な「野心家」だとも言える。

ユニヴェールは彼と直接面識はなかったが、次期国王候補である幼いシャルルを誘拐しようとした事件のことは耳にしていた。

「あの人は何がなんでもわたくしの意に反するのが生きがいのようなですわ」

フンと彼女が鼻息を荒くするのを見、ユニヴェールは胸中で微笑した。

そしてなだめるように言う。

「いいではありませんか。出来た人物には、それ相応の好敵手ライバルが必要ですよ」

「あの男がわたくしの好敵手だなんて冗談にも程がありますわよ、

ユニヴェール」

このご夫人は、彼女最大の敵オルレアン公を心のどこかで愛しい
と思っっているに違いなかった。

ルイ・ドルレアンは、こんな女などに屈せぬ、逆にひざまずかせ
ようと挑み続け、アンヌはそれをこの手あの手でくじこうとする。
彼を思い通りにしようとする。

ふたりはどうかして相手を屈させようとしているのだ。

「ですがアンヌ。摂政のお話はもう片がついたのでは？」

「今度はそれではないのですわ」

アンヌの目の色が変わった。

ばしんとテーブルを叩きそうな勢いで身を乗り出してくる。

「オルレアン公が極秘にブルターニュの公女と婚約したのです！」

「ブルターニュの公女という……アンヌ・ド・ブルターニュです
か。まだ幼いながらブルターニュ公国の君主となった」

「ええそうよ」

「よいではないですか」

ユニヴェールは試しに言ってみた。

「あのブルターニュ公国が他に取られるのであれば問題ですが、同
じ王家の者のもとに転がってくるのなら」

「だから問題なのですわ。これ以上あの男が力をつけたら、またシ
ヤルルに刃向かってくるに決まっています。誘拐暗殺を企てて王位
を篡奪さんだつしようとしてまで考えた者ですよ！」

断固とした口調で言い切ってから、彼女は咳をして息を整えてき
た。

「ですから、シャルルの戴冠式を行ってオルレアン公をこちらへ呼
び戻すのです。あれだけ王に近いんですもの、列席しないわけに
はいきませんか？ けれどあの男のこと、何かでうちあげて
欠席するやもしれません。そこで、ユニヴェール卿のお力を借りた
いのです」

「具体的には？」

「暗黒都市は抜きにして、個人的に出席していただくだけで結構ですわ。フランスの後ろ盾となってくれとも言いませんし、今後何かあった折のよしみにくれとも言いません。オルレアン公が、招待状に書かれている客人名簿の中に貴方の名前を見つけて驚愕すればよいですよ。とんぼ返りしてくるに決まっていますから」

「オルレアン公がブルターニュを離れなければならなくなったその間に、アンヌ・ド・ブルターニュを他の男とくっつけてしまうわけですか」

「ふふふ。さあ、そこまでは。でも今はどこもブルターニュ公女を手に入れたくてウズウズしているんですもの、短期間で情勢は変わるものですわね。婚約は結婚ではありませんし」

にっこりとアンヌが微笑んだ。

もはや勝利した策士の笑み。

きっと、アンヌからの招待状を見、後ろ髪をひかれる思いでブルターニュから引き返してきたオルレアン公は、ブルターニュ公女の愛を勝ち取る機会を永遠に失うことになるのだろう。

婚約など何の役にも立たない。

結婚を破棄するのは難しいが、婚約を破棄することは実に簡単なのだ。

「——こちらにも暗黒都市との折り合いがありますからね。考えておきましょう」

「良いお返事がいただけると嬉しいわ」

アンヌ・ド・ボージュールは否定したが、シャルル八世の戴冠式にユニヴェールの名を連ねさせ、それにより他国を脅しつける意図がないわけではない。

フランスの背後にはあの化け物がいる。

そう思わせるだけで、他国に対して充分過ぎるほどの威嚇になるのだ。

たったひとり、長身を黒衣で包んだ男の存在には、どれだけの聖なる者達も——あるいは教皇でさえも——敵わない。

「ねえ。貴方の家に爵位を与えたのはフランスでしたわよね？」

立ち上がったアンヌがふとユニヴェールをかえり見た。

「ええそうですが」

「貴方個人が仕えていたのは誰なのか、聞いてもよろしいかしら？」

「私の家はフランス貴族ですが、私自身は吸血鬼始末人クルースニクでしたから

――」

ユニヴェールは鋭い牙を隠しもせず、悪戯っぽい笑みで口端を吊り上げる。

「私の主は、教皇インノケンティウス三世でした」

「……貴方も……」

帽子をのせヴェールで顔を隠した貴婦人は、ややあってしみじみとした言葉を漏らした。

「貴方も生きていたのね」

「昔はね」

「恋はしました？」

「いかにフランス王国摂政殿のご質問であっても、私的なことにはお答えしかねます」

慇懃に微笑んで彼女の手を取り、ユニヴェールはその甲に口付けた。

「不躰なことを聞きましたわね、ごめんなさい。ではユニヴェール卿、よろしくご検討くださいませ」

「御意」

ユニヴェールはアンヌのために扉を開き、通る声で廊下に呼びかけた。

「ハルベルト！ 客人がお帰りだ！」

「あ。そうそう」

アンヌが少々間拔けた声で振り返った。

「新しいメイドですけどね、お屋敷の前に張り紙をしておいたらどうかしら。私も良さそうな子に声をかけておいてあげますわ」

第8話【我が屋敷　ただ今メイド募集中】後編

フランス南部の田舎町。パートルの聖騎士団隊長シルヴァン・レネックは、ひとりの少女を眼の前に悩んでいた。

「悩んでいる場合ですか？」

少女が平坦な調子で言ってくる。

彼は頭をかかえていた手をひざに戻し、向かいに座るその娘をまじまじと見つめた。

艶やかな黒髪に、濃い灰色の膝丈ドレス。胸元には見事な銀細工のロザリオ。

蠟人形のように表情が欠落しているその顔には、平らな黒い瞳がのっている。

「ルイーゼ嬢がこのまま処刑されてしまつてよいのですか」

「よくないに決まつてるだろう！」

青みがかつた銀髪を乱して、彼は声を荒げた。

「何だつて言うんだあの司祭は！　ルイーゼが私を愛していて自分に振り向かないからと言って……魔女裁判にかけて処刑だなんて！　狂つてる！」

「まあ、あの吸血鬼シャルロ・ド・ユニヴェールのメイドをしているのだから魔女と言われても仕方ないのかもしれませんが」

「彼女は魔女ではない！　それに彼女は言っていたんだ、メイドを辞めるとな！　自由になって私のもとへ来ると言っていた！」

「その前に彼女は彼女にしつこくつきまとう司祭に、キツパリ断りを入れたに行ったんですね」

「それが間違いだつたんだ！」

シルヴァンは半ば叫んでいた。

ルイーゼをひとりにしたのが間違いだったのだ。ユニヴェールという化け物のところから自由になると彼女が決めた時、もう彼女を放すべきではなかった。

色々なことにけじめをつけてくると言った彼女を見送るべきではなかった。

彼は、彼女が正式にメイド職を辞しに帰ったのだと思い込んでいたのだが――彼女はその前にあの狂気の司祭に会いに行ったのだった。

そして拒絶を告げられた司祭はあろうことかルイーゼを監禁した。何の弁明もさせぬまま異端審問にかけ、そしてあの男は自身で愛した女に魔女の烙印を押した。

絞首刑の判決を言い渡したのだ。

「いざとなればあの吸血鬼が出てきて大鎌を振るうかもしれない。だがそれでは意味がないんだ！ それでは彼女は自由になれない！」

「だから、言っているではありませんか。まだ彼女を救える、と。貴方が彼女を救えるのです」

少女が落ち着き払ってため息をついてくる。

「貴方が早馬を飛ばしてヴァチカンまで行って来る覚悟がおりないらね」

「ヴァチカン!？」

「教皇にお会いするのです。そしてこの書をお渡ししてください」
彼女が手にしていたふたつの封書のうち、ひとつをひらひらと振って見せた。

「用件はすべてここに書いてありますし、お返事はすぐにいただけ
るでしょう。そうしたら、ルイーゼ嬢の処刑が行なわれる前にここ
へ戻ってきて下さい。それで万事うまくいきます。彼女は救われる
でしょう」

「……………」

シルヴァンは改めて少女を凝視した。

ルイーゼを救ってやるという言葉と、その有無を言わさぬ頑強な

態度に思わず屋敷へ入れてしまったが、どこの馬の骨とも知れない少女だ。

貴族の娘にしては従者も愛想もなく、庶民の娘にしては身に付けているものが高価過ぎる。

「こんな小娘の言うことが信じられるのか、迷っておいでですね？」

「……え、ええと」

「まあいいでしょう」

彼女はやはり抑揚なく言って、ずいっともうひとつの封書を差し出してきた。

「これを信じてもらえなければ、万策尽きたというところですから」

「……な!？」

中から取り出した薄い紙切れに目を通し、彼が口をぽっくりと開けた次の瞬間、紙は彼の手元からひったくられた。

「あ、あの、貴女は……」

シルヴァンが無駄な息継ぎをしている間に、少女は奪った紙切れを十字架の前に飾られた燭台の炎にかざしていた。

白い紙はぱつと燃え上がり、灰となる。

「私の名はパルティータ・インフィーネです。レネック隊長、このことは死ぬまでご内密に。それから——決心はおつきになりましたか？ 早くしなければここへ戻ってくるまでにルイーゼ嬢が処刑されてしまいますよ」

少女はやはり無表情のまま、言った。

「札金は後で構いませんから」



）メイド募集中（

時間…黄昏～夜明けまで。住み込み可。

報酬…相談にて。子爵家使用人以上の支払い保障。

内容…掃除・洗濯・その他雑用（メイド兼家令兼執事）

勤務地…ココ

年齢・経験…不問

※ ただし魔女は不可 猫の好きな方歓迎
屋敷主…シャルロ・ド・ユニヴェール

張り紙を貼ってから数日後の夜明け、ユニヴェール邸の玄関扉が叩かれた。

複雑そうな顔をしたハルベルトが主のもとへと連れてきたのは、ひとりの少女だった。

カラス
鳥の濡れ羽色の黒髪に、濃い灰色ドレス。欠片浮かべた笑みは苦心の末の愛想笑いなのだと分かりすぎるほどに分かる顔つきで、細いその娘はユニヴェールの部屋にやってきた。

「——名前は？」

「パルティータ・インフィーネ」

「どこのご出身かな？」

「生まれたのはローマです」

「ほう」

ローマ出身だという割に、少女は流暢なフランス語を話す。

「ご両親はどういう職業を？」

地に足がついた大人とは言えそうにない年齢だったため、ユニヴェールは訊いた。

「どちらも貴族です」

雑多なものに埋まったデスクの向こう側に立っている娘は、淡々と答えてくる。

ユニヴェールは意地悪げに柳眉をしかめてみせた。

「貴族のお嬢さんが何故メイドなんかやりたがるのだろうね？ 私
が何者か分からずにここへ来たわけではあるまいに」

「もちろん、貴方が何者かは知っています」

彼女の黒い瞳が、初めて表情を見せた。

何かを企んでいる者特有の、楽しげな光が宿っている瞳。

「私は貴方が何者か知っているからこそ、来たのです」

「好奇心か？」

「牢獄から逃れるためです」

「……………」

長年手元に置いてきたルイーゼの代わりになり得る者はいない。
いたとしても、代わりというのとはどうかと思う。それゆえに、ユニ
ヴェールはもう人間のメイドを雇うつもりはなかった。

暗黒都市の女王に打診すれば、人間など足元にも及ばない有能な
メイドか家令が送られてくるのだろうし。

ハルベルトがアンヌ・ド・ボージューの意見を勝手に遂行して張
り紙を貼ったらしいということは知っていたが、どうせ化け物吸血
鬼の屋敷、名乗り出る者などいないだろうと決め付けていたのだ。

「以前のメイドはここが牢獄だと言って出て行ったんだがね」

「そのメイドさんが今どうなっているかご存知ですか？」

少女——パルティータが話の矛先を勝手に変えた。

ユニヴェールは多少虚を突かれながらも嘆息する。

「異端審問にかけられて、近く処刑されるんだろう」

「ご存知なのに何もしてあげないのですか」

「私を咎めるか？」

「いいえ」

パルティータは平面な面持ちのままぶんと首を横に振る。し
かし彼女はさらに言葉を連ねてきた。

「貴方がここで何もしないことは理にかなっています。それはルイ
ーゼ嬢も分かっているでしょう。彼女は自由を求めて貴方のところ
を飛び出した。彼女は彼女の思うように行動して、この結果。それ

でもそれで仕方ない。まさかいざとなったら貴方が迎えにきてくれるなんて甘いことは考えていないと思いますよ」

一氣に言ってから、彼女は付け加えた。

「が。——それでよいのですか？」

挑むような視線を投げかけてくる少女。

ユニヴェールは席を立ち、赤い絨毯を踏みしめてゆつくりとそれに近付いた。

扉のところでかしまって待機しているハルベルトが、興味津々といった目つきでこちらを見ている。

「言っている意味が分かんが？」

「ルイーゼ嬢がみすみす人間の——しかも司祭という貴方の敵に、殺されるのを貴方は黙って見ていられるのですか？」

「人間一匹、司祭一匹にいちいち構っていられるか」

「でも寝覚めが悪いでしょう？」

「……………」

ユニヴェールは無言のまま、鋭い爪の指で少女のあごを掴んだ。唇を耳元に寄せて、低く囁きさやく。

「死にたくなかったら今すぐ自分の家へ帰りなさい」

「処刑の日、上手くルイーゼ嬢の命を助けることができたなら、私をランスへ連れて行ってくださいませんか？」

少女もまた喉の奥で囁いた。

そして一瞬だけニヤリと笑う。

貴族の娘の笑い方とは思えない、過^よぎる殺伐。

「そう見られるものではありませんよね、フランス国王の戴冠式なんてものは」

「…………お前になど…………」

「救えるはずがないとおっしゃる前に、賭けてみてはいかがです。出来なかったとしても、もともと失われるはずだったものが予定どおり失われるだけです」

「——よかろう」

ユニヴェールは一転、皮肉げな笑みを浮かべてパーティータを見下ろした。

少女と思わせぬ物言いに、感心したというのもある。

化け物の中の化け物と称されるシャルロ・ド・ユニヴェールを挑発してくる異様な度胸に、将来が見てみたくなつたというのもある。賭けて、自由を求めたルイーゼの行く末を見届けたかったというものもある。

「では仮契約の証としてメイドの権利を一端だけ先にやろう」

彼は灰色のパーティータの肩を押して、彼女をハルベルトに向かい合わせた。

「この男の名前を決めるのが歴代メイドの最初の仕事でな。今はルイーゼが選んだハルベルトと呼ばれているが……お前は何を選ぶ？」空高く飛んでいきそうな軽い笑顔の黒剣士は、紹介されるまま少女の前に絵が描かれたカードを広げてみせた。

「僕は以前、悪い魔女に魔法をかけられてしまいましたね。どこかの王子だったことは覚えているんですが、名前とか全部忘れてしまつて。おまけに歳は取らないし、夜になれば黒猫になつてしまふんですよ」

カードは五枚。

エストック　ハルベルト　シャイ
剣。　　槍。　　猫。

ルナール　　狐。　　そしてヴァン
　　　　　　　　猫。　　葡萄酒。

パーティータは迷わず選んだ。

「ルナール」

「——だそうだ。今日からお前の名はルナールだな」

「御意」

黒衣の剣士は、羽毛の如く軽やかな動作で胸元に手をあてた。

「そういえば、一番初めユニヴェール卿自身が僕に付けた名前も、ルナールでしたね」

「そうだったか？　ルナールだったことなんて何度もあっただろうに」

◆ ◆ ◆
待っていてくださいと言に残したきり、馬車から降りて行ったパルティータはどこかへ姿を消した。

ユニヴェールが待つことそれから少し。

広場に設えられた絞首刑台に、若い女が引っ張られてきた。

手入れの行き届いた栗色の髪と、先日目会見たアンヌに似た利発な顔立ち。

見間違うはずもない、かつてのメイド、ルイーゼだった。

二十数年前、ふと通りかかったパリの教会前で、その頃のメイドが可哀想だと拾った娘。

かごに入れられた、まだ言葉も話せぬ赤子だった。

その後ユニヴェールの調べで彼女は王家の血筋だと分かったのだが、何故捨てられたのかは簡単に察しがついた。

私生児であるうえに、悪い予言でも与えられたのだろう。不吉な言葉はそれだけで人を動かす。例えば、バカバカしいとそっぽを向けばいい程度のものであっても、だ。

そのことはユニヴェールしか知らない。

ルイーゼの母は流れの踊り子で、亡き王がこの娘の存在を知っていたかさえ怪しいところである。存在を知っていたとしてもまさか吸血鬼館に拾われているなどとは思っても寄らぬであろうし、波乱のもとをわざわざ突き返してやるほどユニヴェールも暇ではなかった。アンヌ・ド・ボージューはよもや自分に更なる姉が生きていて、それがユニヴェールの手から解放してやったメイドだとは——どれだけ明晰でも分かるまい。

（私がわざわざ教えてやらずとも、分かるべきならばいつか分かる

だろうさ)

ユニヴェールは羽織った外套の襟を直し、馬車の中から横目で広場を見やる。

罪人の処刑は大々的な催し物だ。集まった愚民どもはわいわいはやしたてながら、まるでお祭り騒ぎ。

しかしそんな数々の頭上を越えて、ルイーゼの目がユニヴェールを捕えた。

彼はどこか非難がましい彼女の瞳を真正面から受け止める。

(嘲えと言うか)

だが、己の明日のため逆境に踏み出して行った者を、何故笑えよう。

屍の化け物となった彼には到底出来ぬことを、彼女はやったのだ。憂えて嘆くわけではないが、ユニヴェールには『生きる』ことなどもはや不可能。

悲劇を気取る気もないが、それは事実だった。

不滅の吸血鬼として流れる時間を暗黒都市と共に渡り、光と討ちあい続ける。それが古に“最強の吸血鬼始末人”と呼ばれた死者が選んだ道なのだ。

(私が嘲えるはずもなろうに)

ため息をオマケに微笑んでやれば、彼女が空を仰いだ。

「——何か言い残すことはあるか？」

しらじらしく魔女の罪状を読み上げていたファロ司祭が、憎々しげな口調で決まり文句を吐き捨てる。

勝手な恋の狂気に心乱され、振り向かぬ女を死に追いやる、白い聖職者。

しばしの間があり、ルイーゼが晴れた空に向かって叫んだ。

「私は貴方の元に戻りたい！」

「……………」

それが自分に言われたものだと思付くには、少しかかった。

ユニヴェールは切れ長の目を僅かに見開いて、しかしすぐ元の微

笑に戻す。そしてかすかな息吹とともに唇だけを動かした。

<Non>^{ダメだ}

きっとルイーゼもそれは予想していたに違いない。

彼女はこちら見て両方の目から涙を溢れさせていたが、何度もうなずいてくる。

けれどユニヴェールはそれに付け加えた。

<お前はお前の道を生きろ>

彼女の顔が止まった。

そして何か言おうとしたのだろう口を開けた刹那――

「この処刑は無効である！」

人々でごったがえす広場に一頭の白馬が切り込んだ。

「シルヴァン！」

ルイーゼが言いかけた言葉を飲み、愛する者の名を呼ぶ。

颯爽と現れた騎士隊長は彼女に向かって力強く笑み、人波を裂き馬を処刑台の前と進めた。

「ここにヴァチカンからの書状がある。――パーテル大聖堂ファロ司祭は心身不調のためヴァチカンに戻られたし。なお、同司祭が最新に行なった審判は無効とする。また、パーテル騎士団隊長、シルヴァン・レネックに上記の事柄を遂行する権限を与える」

「嘘だ！」

司祭が怒声を上げた。

「嘘なものか！ 教皇の印が信じられぬか！」

シルヴァンが馬を降り、台へと駆け上がって真っ白な上紙を突きつける。そして朗々と命を下した。

「騎士団は速やかに司祭を大聖堂へとお連れしろ！」

（――まるで三流英雄伝説だな）^{ヒロイック・サーガ}

苦笑して、ユニヴェールはカーテンを閉めた。

民衆は予期せぬ波乱に一時は気圧されていたが、結局盛り上がりれば何でもいいのだろう。今はシルヴァンに向かって拍手喝采を送っている。

見当はつく。

きっと彼は、今度こそ手放すまいとルイーゼをしっかり抱き締めただ。

(……それにしても、私の新しいメイドはどこへ行ったのだ)

ややご機嫌斜め向きになった吸血鬼の馬車に灰色メイドがようやく乗り込んできたのは、広場からすっかり人が引いた後だった。

「お前、なんだそれは」

「お気になさらず」

パルティータはなにやら重そうな麻袋を持っていた。石がぶつかるようなジャラジャラした音をさせているところを見ると、宝石や金、全財産でも持ってきたのか。

「ルイーゼ嬢はうまく助かりましたね。では、賭けは私の勝ちという事で早速ランスへ参りましょう。戴冠式に出席」

「了解」

御者台からルナルが調子を合わせ、ユニヴェールが口をはさむ隙もなく馬車を出立させた。ガラガラと細かい振動が身体を揺する。

「うまく助かったって、頑張ったのはあの騎士隊長だろうが。お前は何かしたのか？」

「ええ、少しだけ」

四人乗り馬車の対角線に勝手に腰かけた少女は、親指と人差し指で“少し”の量を示してみせ、真面目な顔をしてから腕を組む。

「ルイーゼ嬢はめでたきお幸せになりました。これで私も心置きなくココのメイドになれるというものです」

「鳥カゴの中に自ら入るか」

「ご心配なく」

パルティータがユニヴェールの言葉を静かに否定した。

「私は色のついた夢はみないのです。今も昔も将来も」

「現実主義か」

「合理主義です」

キッパリと言い直して短く笑うパルティータ。

「人の世がすべて檻の中だとしたら、白い牢獄と黒い鳥カゴ、どちらを選びます？」

貴族出身だと言っていたから、両親に不本意な婚約でも押し付けられたか、どこぞの国に人質としてでも囚われていたのか――、どちらにせよこの少女はいささか行動力がありすぎたのだろう。

聖なる光を敵にまわす、不滅の吸血鬼の屋敷へ“逃げ込もう”というのだから。

黒の貴人は白い手袋をはめた指で自らのあごをなぞり、紅の深淵を少女に向けた。

「お前は黒い鳥カゴを選ぶのか？」

「……白い牢獄はむしろ安全ではありません」

吸血鬼から視線を逸らされつぶやかれる言葉は独り言のようにくぐもり、彼女の口の中で転がされる。

「……何だって？」

ユニヴェールが訊き返すと、

「もちろん。牢獄よりも鳥カゴの方が幾分マシです」

今度は明瞭な回答がある。

ユニヴェールは口の端で冷たく笑った。

「――では仕方ない。ランスへ出かけてフランスの道化になっ
てくるか」

だが、この時ユニヴェールは気が付いていなかった。

何故パルティータが戴冠式のことを知っていたのか、ということに。

彼は知らなかった。

この一連でパルティータが、ルイーゼを救ってもらったシルヴァン・レネック、ユニヴェールの戴冠式出席を叶えてもらったアンヌ・ド・ボージューから礼金を受け取り、あげくシャルロ・ド・ユニヴ

エールのメイドという就職口まで手に入れたのだという一石三鳥の事実を。

そして、彼は現在もそのことを知らない。

T
H
E

E
N
D

第8話【我が屋敷 ただ今メイド募集中】後編（後書き）

■アンヌ・ド・ボージュール

この時点でアンヌ・ド・ボージュールはピエール・ド・ボージュールと結婚しており、オルレアン公ルイもまた、ジャンヌ（アンヌの妹、シャルル八世の姉）と結婚していました。ちなみにピエールとアンヌの仲は悪くありません。

■オルレアン公ルイ

この人はシャルル八世が若くして亡くなった後、ルイ十二世としてフランス国王の座に就きます。未亡人となったシャルル八世妃まで手に入れてしまいます。おそろべし。

■結婚と離婚

この頃はキリスト教では離婚は認められておらず、別の相手と結婚するためには以前の結婚は『無効』であるとあれやこれや教会に証明しなければいけませんでした。

婚約はするのも破棄も簡単。しかし結婚の破棄は困難でした。

2003年

第9話【カステル・デル・モンテ】前編

冬の夜ともなれば外の空気は凍てつき、すっかり葉の落ちた木々の枝には粉雪が降り積もる。

かすかな音はすべて雪に奪われ、ぼんやりと明るい雪の白さだけが浮かび上がる。

幻想的な世界だが、それを楽しむのは曇った窓から外をのぞく子供たちだけ。

大人は外に思いを馳せることもなく、身を縮め、暖かいスープで息をつく。

そして火が入った暖炉の前では猫が丸くなる。

世間一般の常識ではそういうものだ。

「……そういえばここ三日ほどルナールを見ていないのだが、奴はどこへ行った？」

読みさしの本をテーブルに置いたユニヴェールが、食堂に会している誰にともなく言った。

「さあ」

パルティータは素っ気なく返す。

彼女は銀貨をテーブルに平積みして数えるのに忙しいのだ。

「アンタ、知ってるか？」

「いいえ」

顔を見合わせてブンブンと首を振ったのは、蒼の魔女フランベルジェとやさぐれアスカロン。

彼らはさつきからずっと飽きることなくチェスをしていた。ちなみにフランベルジェの全勝である。

「シャムシール」

「――？」

ユニヴェールの問いかけが、暖炉のすぐ前に敷かれた絨毯の上、特等席に陣取り絵版画の束を広げていた少年に向かった。

彼が無造作にめくっているその版画はどれも、ユニヴェールが長い年月をかけて収集したものだ。名もない画家から知る人ぞ知る宮廷画家のものまで、大作はないがどれも全て本物。彼らの友として、援助者として、直接貰い受けた芸術品である。

「それ、燃やすなよ」

「大丈夫」

座り直した少年が、無邪気に笑う。

いつか故意に燃やしそうな無邪気だ。

「……絶対だぞ」

「ルナールのことは聞かないの？」

少年に見えてすでに数百年生きている少年が、可愛らしく首を傾げる。着ている深緑の法衣が体のサイズよりもかなり大きいものだから、憎らしいほどに可愛らしい。

だが可愛らしさよりも危機感を感じているらしい主は立ち上がり、少年の正面に向かうと疑念を含んだ目つきをしながら彼を見下ろす。「……ルナールよりもその版画の方が大事なのだがね……。……お前、よく昼間も起きているだろう。ルナールがどこに行ったか知らないか？」

「出かけるって言ってたよ」

「ほお」

「南イタリア……シチリアへ行って来るって。ええと、プーリアってところ」

「――シチリアのプーリア？」

ユニヴェールが少年から視線を外し、暖炉の炎を睨んだ。

「この寒い中やけに遠い場所まで出かけるものだな。あいつ寒さは苦手だったろう」

「そういえば、」

パーティータは言いかけで立ち上がり、奥に置いてあった銀盆を持ってきた。

その上には綺麗な白い封筒が一通。

「全然関係ないんですけど、ロートシルト卿からお手紙が届いていました」

「ロートシルトからならお前宛だろう？」

「いいえ。今日はユニヴェール様宛です」

「——今日は？」

「ええ」

彼女がかくんとわずくと主の片眉が上がったが、それ以上の言葉は返ってこない。

黙した男が手紙を取り上げ、開いた。

「……………」

同時に柳眉がぴくりと動く。

「伯爵は何と？」

一応尋ねて見れば、手紙を持った手がやや降ろされた。

自分で確かめろということらしい。パーティータがつま先立って

のぞきこめば——、

『アタンスイオンAttention.』

白い紙の真ん中にそう一言、走り書きしてあるだけだった。

あの伯爵らしい美しく大胆な筆致だが、あの伯爵なのに文章そのものに飾り気がないこと自体が薄気味悪い。

「……気をつける、ですか。一体何に、でしょうね？」

あのロートシルトという若吸血鬼は、ユニヴェールとはまた違う次元で“世界は自分を中心に回っている”と思い込んでいる。

また自分だけとんでもない劇場の中にいて、意味深なヒントを送るという重責を担った登場人物になりきっているのだろうか。

「シャムシール、ルナールは何をしに行くか言っていなかったか？」

ユニヴェールが手紙を置くことなく、暖炉の少年に再度問うた。

「女の人を送ってくるって言ってたよ。なんだか没落貴族っぽい、

可哀相なお姫様なんだって。お供の人もあんまりいなくて、道中盗賊に襲われたりしたら危険だから僕が護るんだとかなんだとか」

「その女の容姿の話は？」

「えっとねえ、金髪でしょ。碧眼でしょ。白いドレスに白いケープ、それから……」

『……エメラルドの髪飾り』

「へ？」

自分の声にユニヴェールのテノールが重なったことに驚き、シャムシールが大きな茶色の目を開いて仰ぐ。

だが吸血鬼の視線はすでに上方。

紅玉^{ルビー}に劣らない明度と硬度の双眸が、ずっと細まって笑う。

「没落の儂い姫君の騎士か。いかにもルナールが好きそうな役柄だ」
「それが何か？」

パルティータが分からないという顔を見ると、ユニヴェールが満足げな目で流し見てくる。確信を得た時の、勝ち誇った余裕。

「ルナールがひっかかったその女は、人間ではないはずだ」

「……というと？」

「おそらくルナールたちが向かっているのはシチリアの南、プーリアにあるアンドリアの丘」

「アンドリアの丘……？ 確かそこには——」

フランベルジェの遠くを見つめるような声音に、ユニヴェールがうなずいた。

「アンドリアの丘にあるのは最後の皇帝、フリードリッヒ二世が遺した城無き城、カステル・デル・モンテ。ルナールが騎士を務める姫君は、そこに住みついているという“魔物を喰らう魔物——シチリアのアデリーヌ”に違いない」



しばしの沈黙があり、真剣味の足りない声でパルティータはぼそりと言った。

「魔物を喰らう魔物ということは……ルナル、食べられてしまうんですね」

語尾は下がり調子。疑問符が付くどころか決定事項になっているところが何とも薄情である。

「かもしれないな。ほいほい女にくつついていく尻軽なアイツが悪い」
『……………』

「夜は猫になるだろうに、アイツはどうやって姫を護るつもりなんだ？」

部屋に漂った奇妙な空気を完全無視して、ユニヴェールが暖炉に手をかけ嘆息した。

「フリードリッヒのあの城に俗な魔物が住み着くというのも気に喰わんが、たぶらかされて喰われる脳ナシも気に喰わん。おまけにその脳内花畑が私の……私の……。パルティータ、私から見てルナルは何だ？」

「友人？」

「違う」

「召使」

「役に立たん」

「ああ、居候」

「それだ。……その軽石男が私の屋敷の居候だとはな」

「しかしユニヴェール様」

パルティータは銀盆を抱え直して異議申し立てをする。

「何だ」

「フリードリッヒ二世は三百年ほど昔の皇帝ですよね？ 最後の皇帝とはどういう意味ですか？ 神聖ローマ帝国の皇帝ならば今だってドイツ王のフリードリッヒ三世が兼任して……」

「笑止！」

パルティータの意見は一瞬で笑殺された。

暖炉の炎を見つめる白い麗貌に、冷ややかな嘲りが浮かぶ。

「あんなもの、もはや皇帝ではない。フリードリッヒが死んだ時、古のローマ帝国再建の意志も死んだのだ。ヴァチカンのインノケンティウス三世が最大にまで高めた教皇権を、あの男は鼻で笑って踏んで見せた。そしてあの男が世に知らしめたローマ皇帝の権力は、あの男が死んだと同時に消え去った」

「皇帝に会ったことがおありですか？」

「生きたユニヴェールとしても、死んだユニヴェールとしても、な」
化け物貴族は口端で笑った。

「フリードリッヒは驚くべき鬼才のうえに究極の虚無主義者ニヒリストでな。イスラムにしろカトリックにしろ、人々が信じることを奨励も禁止もしなかったが——、あの男自身にとってはどちらも単なる政治上のしがらみでしかなかったのだよ。だからこそ……奴とは結構気が合った」

鋭い流線型の爪が、コツコツと暖炉の煉瓦れんがを叩く。

「あいつは破門されたあげく皇帝廃位を宣言されて、おまけに偽皇帝討伐と称して十字軍を差し向けられてもなお教会に刃向かった輩だからな」

そして主は双眸を三日月のようにしてニヤリと付け足してきた。

「そんな奴がコチラ側暗黒都市に来たら私の地位も危うくなると思ってだな、あいつの死の際にはわざわざ奴に忠告して神父を呼び寄せさせた」

——破門されたままの身で死ぬと、主の言うコチラ側……つまり魔物になってしまうのだ。

「おかげで奴は安らかに死んだが、フリードリッヒという巨大な楔くさびを失った歴史は迷走して迷走して——」

主はしらしらしく胸元で聖印を切る。

「ご愁傷様なことだった」

フリードリッヒ亡き後、ドイツは次々と傀儡王かいらいが対立して立つ大空位時代シラーを迎えた。

そしてフリードリッヒのもうひとつの国シチリア王国は、彼の皇子たちとフランスとの戦いの場となり、皇子たちを討ち君臨したシャルル・ダンジューと暴政に耐えかねた民衆との戦いの場となり、あげくはそのシャルルとスペイン・アラゴン家ペドロ王との戦場となり。

まさに混迷を極めた不幸な地となったのである。

「……………」

道化じみた台詞を止め、ユニヴェールがもう一度ロートシルト伯爵からの手紙に目を落とした。

そしておもむろに口を開く。

「……アスカロン」

「何だ？」

「カステル・デル・モンテへ行け」

「ええええー俺がー！ーッ！？」

「今すぐ」

抗議の声を上げる若者だが、彼の飼い主は容赦ない。

「お前は影の中を渡れるだろう？ わざわざ人の姿で馬車で行くより何倍も早い。先に行ってルナールを捕獲して来い。城の中に入れたらどうしようもないからな、必ず先回りしろ。アデリーヌのことだ、普通の馬なんぞ使うわけがない。……捕まるか捕まらないか、ギリギリのところだな」

「寒いのになあもう。で、卿はどーするんだ？」

言いながら、フランベルジェに王手チェックメイトをかけられて顔を歪めるアスカロン。

「私は寒いから行かない……と思ったが」

「？」

「暗黒都市に仇なす者を片付けるのが私の仕事でもあるからな。今まで黙認してきたが——私の持ち物に手を出すとなれば、それなりに痛い目にあってもらわねばならん」

「つまり叩き潰しに行くわけですね」

「金をもらっているからには仕事はすべきだろう」

ユニヴェールが暖炉にかけていた手を離し、手紙をテーブルの上に置いた。

彼は軽く両手を払い、旅支度に向かおうとする。

しかしその後ろに続いたパーティータの背後から、おっとりとした警告が響いた。

「ですがユニヴェール様」

フランベルジェだ。

「カステル・デル・モンテはローマの更に南ではありませんか」

「それがどうした」

「先日もフィレンツェに赴いたばかり。ローマをかすめてカステル・デル・モンテへ行くなど、あまり聖人方を刺激するのはよろしくないんじゃないかと思いましたの」

すでに向かいの席にアスカロンの姿はない。

影と溶けて大地を移動できるあの若者は、遥かなるイタリアの南へ向かったのだ。

彼女はきつちりと彼のキングを取ってから、ユニヴェールの方に顔を向けてきた。

「ソテール様がお目覚めになっているのでしょうか？　今までと同じというわけにはいかないのではありませんか？」

ぼんやりとした青色の目をしているが、指摘は鋭い。まさしく大人の意見だ。

彼女はこの屋敷の中で唯一、利害得失傲慢不遜なく理性的に物事を捉えることが出来る者なのかもしれない。

しかし残念なことに、彼女の主は救いようが無く傲慢不遜だった。「そんなことは分かっている。だが、だからと言ってヴァチカンに安息を与えてやる義理はないのだよ、フランベルジェ」

ユニヴェールは言いながら食堂を出てゆく。

「必要があれば教皇庁に乗り込んだってかまわんさ」

「いつてらっしゃい」

シャムシールの緊張感のない声が屋敷に響き、
「……………」

蒼の魔女は主が消えた扉に向かい、一礼した。



そんなユニヴェール家の会話より数時間も前。

まだ太陽が世界を照らしている時間、当のルナールはすでに南イ
タリア・アンドリアの丘にいた。

……つまりアスカロンの努力ははじめから無駄だということだが
……。

「これは――」

馬車を降りたルナールは、知らずため息を漏らした。

「神聖ローマ帝国皇帝にしてシチリア王、フリードリッヒ二世が建
てたカステル・デル・モンテです」

馬車の中から姫が誇らしげに言ってきた。

我に返って彼が手を差し伸べると、彼女は小さく微笑み手を取っ
て降りてくる。

「今は閑散としたものですけれど、それだけに未だ三百年前の空気
を残しているように思えるでしょう？」

若干茶色味を帯びたオリーブの木々、寒風に枯れ果てた下草、そ
の先に広がる人の気配のない荒野。薄っすらと雪化粧したアンドリ
アの丘の上に、それは物言わず建っていた。

ルナールも話には聞いたことがある、城無き城、カステル・デル・
モンテ。

八角形の塔が八つあり、それをつなぐようにして造られた八角形
の筒状の巨大な建造物。もちろん中庭も八角形であるという。

この城には堀もなければ、厩舎もなく、兵営もなくて、砲座もな

い。

つまり軍備も防備も何もない。

だからこそそれは“城無き城”と呼ばれているのだ。建造物としての城は存在しているが、城としての機能は何一つ存在していない。冬の空にそびえる城はなるほど息を止めるほど美しいが、それはその存在意義そのものが謎をまといっているがゆえの美しさでもある。内に秘めたものを、決して語らぬ沈黙の城。

「フリードリッヒ二世は天文学にも造詣深かったと聞きます。八という数字には何か意味があったのでしょうか。この城が城でないわけも……」

「失礼ですが、」

憂いの混じる色で城を見上げつぶやく姫を、ルナールは可能な限り柔らかない声音で遮った。

「この城に住んでいらっしゃる？」

「え？ ええ。正式な権利はないのですけれど、誰かが管理している気配もないので、新しい住まいが見つかるまでは不法占拠なのです」

罰が悪そうに彼女がうつむく。

ルナールは慌てて首を振り、手を振った。

「いえいえ、そういうことはありません」

一際大きく吹き抜けた北風が、彼の長い黒髪をさらった。

首をすくめてやり過ぎし、黒衣の剣士は力なく笑う。

「……出来るだけ早く風のあたらないところに避難させていただけないかなあと思ひまして」

この男、寒いのは本当に苦手なのである。

「フリードリッヒ二世がどういう人か、あなたはご存知？」

「いえ、あまり詳しくは」

門を開けてくれたのは執事ではなく、僧衣をまとった老年の男だった。

人に会ったのはそれだけで、ルナールは絨毯すら敷かれていない剥き出しの廊下をただひたすら姫君の後を追う。

「時代に先駆けてしまった不幸な天才で、しかしそれでも時代に懐柔されずに生き抜いた皇帝たる皇帝だと。僕の家主がそう評しているを聞いたことはありませんが」

「生まれた時から巨大な権力の狭間にいた人だったそうですから」城の中はまさに時が止まった如き静寂に包まれており、姫のケープがわずか大理石と擦れる音、そしてルナール自身がたてる足音の他に聞こえてくるものはない。

乾いた地を駆け抜けてゆく強風からさえも、隔絶されている。

「彼は、ドイツ王にして神聖ローマ帝国皇帝、ブルゴーニュ王、イタリヤ王、そしてナポリ・シチリア王。それだけの相続権を全て持っていた子供でした。誰もが皆フリードリッヒを恐れ、しかし自らが君臨するための傀儡として欲しがった」

「結局手に入れたのはインノケンティウス三世だったとか？」

「ええ。フリードリッヒの母親はフリードリッヒをドイツの傀儡にしたがる義弟を嫌っていましたから、教皇を頼らざるを得なかったのです。彼女は義弟がドイツ国王になることを認める代わり、早々に息子を自分の祖国であるシチリアの王にしました。教皇の後見をもらって」

美しい金色の髪が、こちらを振り返った。

「そしてインノケンティウス三世は、フリードリッヒを自らの影として創り上げようとしたのです。自分の色に染まった、皇帝にしよう」と

碧の双眸には、懐古と悲哀。

けれどふいにその瞳が強さを増した。

彼女の口調も鋭くなる。何かの戯曲を読み上げるような調子に。「けれどそこには誤算がありました。フリードリッヒという子供は、

誰が想像したよりも賢かったのです。頭を撫でて誉めるところではなく、家庭教師たちが恐れ戦慄するほどに」

ルナールも耳にしたことがあった。

フリードリッヒ二世はラテン語だけでなく数ヶ国語を操ることができ、天文学、数学、論理学などの学問を次から次へと吸収したあげく、乗馬や槍術に至る武芸まで秀でていたのだ、と。

おそらくのたまっていたのは主だ。

「そして賢かった彼は、時が来るまで沈黙し続けていたのです」

彼女がある一室の前で手招いてきた。

ルナールはそれを視界に入れながらも、一歩立ち止まる。

彼女が怪訝そうな顔をしたが、曖昧に笑って城を見物するフリをする。

しかし彼は同時、全神経を尖らせた。

深呼吸して、城の空気を記憶の底まで染み渡らせてゆく。

土っぽい、色褪せた空気を。

「インノケンティウス三世が亡くなってからようやく彼は——」

まだ続けていた彼女が、言葉を切った。

「ルナール？」

再び歩を進めた黒衣の剣士は、心ここにあらずの状態で姫の横を通り過ぎ、その広間へと足を踏み入れる。

優しい——頼りないとも言——造りをしているその顔はいつになく真剣で、彼は確かめるようにゆつくりと広間を見回した。

一歩、一歩場を変えて、黒衣を躍らせる。

高い天井。

無駄に広い空間。

しかし反面無駄に派手な装飾のない、当時の教会の風潮とは真逆をゆく質実な内装。

採光用の窓から差し込む光。

そして正面には、二本の太い柱に護られた王のための高み。

「ここは玉座の間ですか？」

「ええ。そうです」

「……………」

彼は無言で玉座を見上げた。

そして息を吐く。

「僕は……ここを知っています。おそろく」

第9話【カステル・デル・モンテ】前編（後書き）

■カステル・デル・モンテ 1996年、世界遺産に登録されています。

第9話【カステル・デル・モンテ】中編

ユニヴェールとパルティータがアンドリアのカステル・デル・モンテに着いたのは、アスカロンが発ってから三日後の昼過ぎだった。暗黒都市の馬を使ってもそれだけかかったのだ。フランスからここまでがいかに遠いか分かるだろう。

それならばユニヴェールが単独で影を渡ってくればよいものを、彼は何故か彼女を連れてきたのだ。

「卿〜〜〜！」

「アスカロン」

丘の上にぽつんと建つ不思議な建造物へと消えかけの雪を踏んで歩いて行くと、荒れ野の風景の中から若者がバタバタと駆けてくる。彼はユニヴェールと同じであり陽光を気にしない。

吸血鬼ではない魔物だからという理由がひとつ、魔物の太陽に対する耐性も様々だというのもひとつ。

「ルナールはどうした？」

「俺が来た時にはもう城の中に入った後だったみたいだぜ。……それ・よ・り！　俺、入れないんだけど、この城の中に！」

「ああ」

「結界っていうやつか？　とにかく扉や壁に手を触れただけで弾かれて、無理矢理進んでも押し戻されるんだよ。だから俺はこのクソ寒い中ずーっと吹きっさらしの外で突っ立ってたんだぜ！」

死人に寒いも何もあったものではないだろうが、彼は身振り手振りで力説してくる。

「やはりな」

「はあ！？」

盛大な声を上げるアスカロンを尻目、ユニヴェールは城の入り口へと歩いて行く。

男はいつもの黒衣の上に、冬仕様の長い外套をまとい、頭上に王冠でものをせれば今すぐこの王にでもなれるような風貌をさらしていた。

態度はでかい、年月は重い、力は強大。

暗黒都市の影の王などと揶揄されるのも無理は無い。

「フリードリッヒがこれを造って以来私も何度かここへ来たが、入ることが出来たことがないのだ」

「なっ。じゃあ入れないってはじめから分かったのかよ！」

「だから急いで行けと言っただろう？ ルナールが城へ入る前に捕獲しろ、と」

「……くっそおう」

アスカロンが不貞腐れて小石を蹴った。

その横で吸血鬼は神妙な顔をして長い指を門扉にかける。

だが火花が散る音がして、彼は反射的に手を引いた。

「駄目か」

数歩後ろに退いて、ユニヴェールが城を仰ぎ見る。

「さすがはあの男が造った城だ」

いつもは完璧に整えられているその男の銀髪だが、今日は強風にあおられ乱れ、前髪がいくつも顔にかかっている。

「フリードリッヒは占星術なんぞにも手を出していたようだな、“八”という数字はイスラムにおいては“天”の意味を持つらしい」
吐く息は白く、空は鈍い灰色。

見渡す限り続く雪混じりの荒涼地帯、枯色の中の城無き城。

そして完璧な美を誇る、時を捨てた魔物の王。

それは、ずっとそのままにしておきたいような絵だった。

——貴族の姫君たちがこぞってその身をこの男に差出したがるのも、分かる。

そう思ったパルティータだったが、それを口に出すことは決して

しない。

すぐつけ上がるからだ。

「まったく酔狂な男よ。勝手に魔物を撃退するような友達がいのない物を造りおって」

「変な人だったんですね」

パルティータは正直な感想を述べた。

すると主が彼女の方を見下ろして問題を出してくる。

「フリードリッヒは教皇の意に従って世界をカトリックに染める気など微塵もなかった。……分かるか？」

「——古のローマ帝国と同じように、征服した地に宗教の自由を許した、と？」

「よくできました」

主は風に吹かれ、外套をひるがえしたまま講釈を続けてきた。

「あいつは十字軍に行くのを渋り過ぎて破門を喰らってな。仕方なしに破門されたまま聖地エルサレム奪還に向かったんだが……」

彼は語りながら思い出し笑いを始める。

「アラビア語も理解する、イスラム文化も理解する。そして天才的な学識。そのせいかあいつはエルサレムを治めていたスルタンと妙に気があってな、戦わずしてエルサレムの統治権をもらってしまっただんだよ！」

きつと吸血鬼ユニヴェールは、フリードリッヒ二世の友人知人代表だか何だかで、その場にいたに違いない。とはいえ、のんびりと傍観していただけだろうが。

「教皇庁は戦わないなど腑抜けだと言って非難したし、戴冠式では皇帝に随行していた司祭たちが破門を理由にフリードリッヒに王冠を与えるのを渋った。だがあいつは自分で自分の頭の上に王冠を載せたのだ」

彼は牙を見せて笑っていた。

だが何を思っただ笑っているのかは定かでない。

もちろん教会に対して笑っているのは明らか過ぎるほどに明らか

なのだが、しかし――。

「その頃の教皇グレゴリウス九世はまれにみる敬謙な教皇だった。神を中心とする清廉な教国を創ろうとした。対してフリードリッヒはシチリア王国……つまりはこの地、イタリアを基盤とした、“皇帝”が君臨するかつてのローマ帝国を目指した」

男の薄い唇から白い息が漏れた。

「ふたりは決定的に相容れなかったのだ」

動かないユニヴェールの表情からは、それを残念がっているのか面白がっているのか、判別は不可能だった。

ただ分かっているのは、皇帝フリードリッヒの死後程なくして彼の出身であるホーエンシュタウフェン家は断絶したこと。だが教皇庁はまだ存在すること。その歴史的事実だけだ。

「……パルティータ」

「はい？」

「お前入ってみろ。人間が入れないことはないだろう。お前が人間ならな」

この吸血鬼は時々、年齢不相応な嫌味を言う。

「あー、そのための要員だったんですか」

パルティータは得心すると、パタパタと扉に近寄った。

彼女はいつものメイド服の上から柔毛にふちどられた黒い外套をしっかりと身に付け、黒い帽子をかぶっており、おまけに手袋も完備。アスカロンが歯噛みして悔しがるくらいの防寒対策で、しかし黙らせておけば良家の深窓令嬢に見えないこともない。

「私は大丈夫ですよ、ホラ」

彼女は体重を後ろにかけて扉を引き開け、するりと中に入ってから渾身の力で両の扉を押し開ける。

「やっぱり人間だったか」

「やっぱりって何ですか」

ムツとして返すと、紅がそっぽを向く。

「では私はルナールを探してきますね」

簡単に言い捨てて、パルティータは主を見捨てた。

「ああ。……あ、ちょっと待てお前、おい、パルティータ！ 主人をこの寒風吹き荒ぶ中に置いていくのか！？ 魔の中に入れる方法を考えようとかしてみる素振りくらいみせろ！ 貴様、薄情者！ 給料減らすぞ！」

空虚な城に無駄な抵抗が響き渡る。

「中には魔物がいるって言ってるのを忘れたのかバカ娘！ 魔物を喰うんだ、人間だって喰われるぞ！ ルナールが喰われた後だったら、逃げるための囃おとりもいりゃしないんだぞ！」

「……………」

アスカロンが遠い目をして荒野を見やる。

「……バカ娘め、一度喰われてしまえ」

ユニヴェールがつぶやいた。



「何か、思い出しましたか？」

姫はいつでも玉座の間の隣にある広間にいた。

「いいえ」

ルナールは首を振り、彼女の横に腰掛ける。

午後になると彼女は窓辺に置かれた長椅子に座り本を読むのだ。どうもそれが日課らしかった。ここに来て数日ほど観察した限りでは。

「しかしこの城を知っているのは確かです。歩いていると、その先にどんな部屋があるのか自然に分かるのです。ここには絵画があったはずだとか、ここには天蓋付きの寝台があったはずだとか、そん

なことまで湧いてくるのです」

「……それをつないでいけば、いつかは貴方が探していらっしゃる記憶に辿りつくのではありませんか？」

「そうかもしれませんね。アデリーヌ」

さらりと名を加えると、姫がさっとこちらを向いた。

幼さの残る表情に、驚愕と失望がのっている。

「わたくしの名をご存知で？」

「そりゃあ、まあ。お話したように、案外長生きですから、僕は」

「いつから私がアデリーヌだと気が付いていらっしやいましたか」

「確信したのはこの城に着いた時ですが。カステル・デル・モンテに住んでいる者なんて、魔物を喰う魔物、“シチリアのアデリーヌ”以外に思いつきませんよ」

「……確信したのに中に入ったのですか」

「ええ、そういうことになりますね」

「何故」

強い語調で詰問されて、ルナールは軽く肩をすくめた。

「何故といわれましても……気分ですよ」

彼は彼の主そっくりの仕草で足を組み、広間を見回す。

「この城が僕を呼んでいたのかもしれませんが、いかに魔物を喰う魔物であっても、麗しい姫君をこんな荒れ果てたところに置いてきびすを返すのは心苦しかったのかもしれませんが」

この城の粗野な土壁が、ひどく落ち着いた。

窮屈な狭い螺旋階段なのに、何時間も座り込むほど懐かしかった。外の光が入り込む窓から見た風景は、時折脳裏をかすめてゆく絵と同じだった。

「フリードリッヒ二世は赤髪だったと言いますから、貴方が彼だということはありませんでしょう」

ルナールから顔をそらしたアデリーヌが告げてくる。

「それは買いかぶりすぎですよ、姫！ 僕は教皇と対立して世界の覇を争おうとするほどの野望が持てる性格ではありません」

「ですが。皇帝が亡くなった後、この地——シチリア王国を手に入れるべく侵攻してきたフランスのシャルル・ダンジュが、この城に皇帝の皇子を幽閉していたという噂があります」

「……………」

「それがどの皇子なのかは定かではありませんが」

「そうですか」

どの皇子にしろ、彼らは敗れたのだ。フランスと教皇と、に。

それくらいルナールも知っている。

亡国の王子。その欠片残された記憶は、もはや大昔に崩れ消えたホーエンシュタウフェン家の治めるシチリア王国のことだったのだろうか。

「……関係ないことをお尋ねしてもよろしいですか？」

彼はさばさばと感傷を捨てた。

「何ですか？」

輿入れする前ほどの年齢に見える姫だが、いかにも魔物らしく物腰は老成している。

どこか脆そうなところがないわけでもないが。

「貴女はもうすでに一度亡くなっている魔物ですよね？」

「ええ」

「そしてこの城の結界は貴女が作ったものではなくて、フリードリッヒ二世の趣味による建築構造の副産物ですよね？ 家主がそう昔話でぼやいていたのを聞いたことがあります。建築祝いに行ったら結界が出来てしまっていて入れなかったんだって。——だからこそ本来は魔物の貴女ひとりだけではこの城から出ることも入ることもできなはずなんです」

「……………」

アデリーヌの紅唇が結ばれた。

「あの僧侶が、貴女を外に出したり中に入れたりする手引きをしていたんではありませんか？ あの僧侶がいなければ貴女はこの城で生きることなんて不可能だったのでしょうか？」

部屋の外で執事の如く立っているのであろう老僧の方を透かし見るように、ルナールは目を細める。

「貴女は貴女の意志でここにいるのではない。貴女は貴女の意志で僕を連れてきたわけではない。——貴女の後ろにあるのは、ヴァチカンの意志ですね。聖なる都が貴女をこの城という籠の中で飼っている」

彼は彼女の大きな碧眼を見据えた。

「違いますか？」

「……………」

アデリーヌが長い睫毛を伏せ、大仰にため息をついた。

「見かけによらず、冴えた方なのですね」

「見かけによらず、ですか」

「やはりフリードリッヒの血を引いていらっしゃるのかもしれない」

彼女が寂しげに笑う。

ルナールは長椅子の背にまわしていた手で姫の髪を撫で、

「こんなにも時が経ってしまえば血筋など……」

言おうとしたそこへ——

「ルナール！ バカ猫！ 探したわ！」

問答無用な罵声が飛んできた。

いなくなった猫を見つけた飼い主の、愛ある“バカ猫”ではない。

きっぱりとバカ呼ばわりした、寸分の狂いもないバカ猫発言だった。

「……………」

思いつきり軽薄剣士の顔がひきつり、彼が無意識に首を回した広間の入り口には、黒尽くめのメイドが仁王立ちになっていた。

彼女の顔を見て、“あ、貴女は——！”などと意味不明に慌てふためいている僧侶を裏拳で昏倒させ、黒い女は言ってきた。

「貴方が好きで喰われるのは一向に構わないけど、喰われる前に遺

書を書きなさい」

「……遺書ですか」

「そう。ええと文面は、全財産を——……」

勢いのままに言いかけた彼女が、虚空の斜め上を見た。

耳を澄ましているのだ。

「ねえ、何か聞こえない？」

「聞こえますよ。なんだか、大勢が乱闘しているような音が」

ルナールが適確に教えてやると、彼の横に座っているアデリーヌが静かに言った。

「——あれはホーエンシュタウフェン家の兵士たちの亡霊ですわ。今でも彼らは護り、戦っているのです。この城に仇なすものが現れると」

「この城に仇なす……」

ルナールの顔が一層青ざめた。

「つて、まさかパルティータ、ユニヴェール卿もいらしているんですか!？」

「私が慈善活動でこんな辺境まで来るわけがないでしょう？ でもユニヴェール様はアスカロンと一緒に城の外に置き去りにしてきたのよ。色々面倒くさそうだったから」

どーでもよさそうにため息をつく彼女。

「あー。どうしよう」

しかし本当にそうつぶやきたかったのは、ルナールの方である。



「どうするんですか、卿」

「どうしようもない」

男ふたり城から閉め出しをくらって、佇む。

空は夜へと向かって灰色の濃さを徐々に増していた。比例して風の冷たさも増す。

「今夜も雪になるかもしれない」

氷風に遊ばれる銀髪を鬱陶しそうにかきあげて、吸血鬼は荒野を見下ろした。

なんとなく、指先の動きが鈍い気がする。

「フリードリッヒは生涯、教皇が差し向ける敵と戦い続けたが、他の諸侯はあの男ほどカトリックを冷笑していたわけではないからな。裏切り者は後をたたず、息子のハインリッヒまでが教皇にそそのかされて父帝に刃を向けた」

「息子が？」

「その頃はすでにハインリッヒはドイツ王だったが……いつまでも父親の駒でしかないことに不満を持っていたらしい」

「へえ」

「フリードリッヒはハインリッヒの目を潰して監禁したが、息子は別の城に移される時に谷底へ身を投げて死んだんだと。その頃私は別の地にいたから詳しくは知らんが」

「うわぁ……自分から死んだんだ」

ユニヴェールは素直な相槌を打ってくる自分の駒を見やる。

「お前たちもいつでも刃向かってよいのだぞ」

「――誰に」

「私に」

「はぁ？」

心底きよとした顔でアスカロンが口を開け、しばらくしてから笑い転げ始める。

「何で今更刃向かうんだよ！ 刃向かうくらいならはじめからアンタに付いてきたりしないって！」

「ほー」

「俺たちはどっかのバカ息子みたいに権力が欲しくて死んだ——魔物に堕ちたわけじゃない。アンタは俺たちの恩人だし、アンタに惚れたから死線を越えてまで付いてきたんだ」

ユニヴェールが言葉を返すことはなく、彼はただ鼻先で笑った。

裏のありそうなひねた顔をしている割には、表しかない男なのだ、アスカロンは。

よく知っている。

「ならばひと働きしてもらおうか」

「おうよ」

ふたりは不敵に地平を見据えた。

そこには、何千という騎兵歩兵が現れていた。

第9話【カステル・デル・モンテ】後編

「時は我らに味方したようだな」

カステル・デル・モンテはどこぞの軍に完全包囲されていた。

だが世界が闇に包まれようとしている今、人間がどれだけ集まろうと魔物の敵ではない。

規則正しい鎧の音を大地に轟かせながら迫ってくる軍勢に、ユニヴェールは悠然と対峙する。

「……ん？」

だが、彼は広げようとした両腕をふと降ろした。

凝らされた紅の双眸が、標的を捉えて大きく見開かれる。

「黒い鷲の紋章——ホーエンシュタウフェン家の軍勢か！」

吸血鬼が思わず声を上げると、横からアスカロンの呆れ声。

「待ってくれよ、ホーエンシュタウフェンは途絶えたんだろ？」

「ああ、絶えた」

ユニヴェールはその紋章が掲げられた旗を凝視したまま、言う。

「グレゴリウスの後を継いだインノケンティウス四世はフリードリッヒの皇帝廃位を決めて、あらゆる諸侯に“偽皇帝フリードリッヒ討伐”の十字軍を命じたのだ。破門を恐れぬのはあの男くらいのものだからな、ドイツでもイタリアでもフリードリッヒへの反乱の火は上がり、それでもアレは戦い続けた」

「で、戦に戦を重ねた末に死んだのか」

「直接は病が原因だったがな。そしてあの男の息子たちも孫も皆、教皇と組んだフランスのシャルル・ダンジューによって討たれ処刑された。ホーエンシュタウフェンは途絶えたのだ！」

「ってことは……あれは亡霊か」

「の、ようだが……」

含んだ言葉を残し、ユニヴェールは地を蹴った。

外套をひるがえし、一斉に槍を向ける軍勢の中へと踊り込む。

そして着地した瞬間片腕を一閃。

木々が嵐に薙ぎ倒される如く兵士たちが音も無く崩れ、消え去る。
自らの影に殺られたのだ。

——真の吸血鬼は、闇そのもの。

「亡霊ごときが魔に敵うものか」

そうつぶやき、すぐさま彼は身を反転させて振り下ろされた剣を
素手で掴んだ。

持ち主は白尽くめ。

染め抜かれた紋章は、重ねられた二振りの剣に燦然と輝く十字。
さんぜん

「やはりクルースニクが混じっていたな」

「……………」

吸血鬼は低い声で吐き捨てると、銀剣を突き放す。

「おかしいと思ったのだ。あの城の結界は構造に因る。よなのにアデ
リーヌが出入り出来るとはな。それを可能にするためには、あの魔
物と人間が結託していなくてはならん。と思う」

ユニヴェールは切れて伝った己の血を手首で舐め、見えない彼方
を睨みやる。

「クルースニクがいるとなればヴァチカンの差し金で間違いなから
う」

彼は自らの影の中からひと振りの剣を取り出した。

大した銘もなければ逸話もない、通りがかった露店の隅に置いて
あったのを焼き菓子十個分くらいの安値でパルティータが買ってき
た、そういう一品だ。

「だがどういうつもりだ？」

「……………」

もちろん相手のクルースニクは何も答えない。

ユニヴェールはひとりでしゃべり続けた。

「亡霊なんぞをいくら集めたところで私に勝てぬことくらい承知しているだろう？ ……貴様らのようなクルースニクも同じことだ。

……ああ、もしやルナールをエサにして私を呼び寄せ、アデリーヌに喰わせるつもりだったか？ だが生憎私はあの城に入れなくてね。迎えも来なかったし、わざとらしく入り方を教えてくれるような親切な奴もいなかったぞ」

向こうにはこちらの言葉を黙って聞いている義理もなければ義務もないわけで、クルースニクは最後まで聞かずに斬りかかってきた。だがユニヴェールはそれを、剣術の稽古をつけているかのように軽くあしらってゆく。

そしてふいに叫んだ。

「ソテールはどこにいる！？ 私を滅ぼすための計画ならば、あの男がいるはずだろう！？ 私はここにいる！ 貴様はどこにいる！？」

剣を大きく払って牽制。

ユニヴェールは亡霊を薙ぎ、白い影を探した。

「ソテール・ヴェルトール！！」

だがかかってくるのは相手にならぬクルースニクばかり。

「——鬱陶しい！！」

彼は噛み付くように怒鳴ると左手にした影の大鎌を一閃させた。

剣圧に大地がえぐれ、彼のまわりから亡霊の群れが消え失せる。

生身のクルースニクも遠くに吹き飛ばされていた。

「アスカロン！」

「何だ？」

男の声は、吸血鬼の影の中からした。

「屋敷に戻れ」

「——ええ？」

「ソテールがここには来ていない。だがヴァチカンが動いているのにアイツが動かぬわけがない。……となると行き先は我が屋敷^{パーテル}しかない」

「隊長が相手かよ……」

「デュランダル隊そのものが来ているかもしれんな。だが戦ってはならぬとフランベルジェとシヤムシールに伝えろ。ソテールが本気で剣を奮うのは私にだけだ。お前たちが手を出さなければアレは何もしない」

「デュランダルが暗黒都市に侵入しようとしたら？」

「……私を滅ぼさずに目先の利を狙う男ではないよ。例えば部下が先走ってもあの男が止めるだろう」

ユニヴェールは、性懲りも無く剣をとるクルースニクを遠くに見、嘆息。

「あの男が三百年経っても未だに存在しているのは、暗黒都市を討つためではなくて私を滅ぼすためだからな」

「意味が分からない。アンタをプーリアにおびき出してその隙を狙って暗黒都市を討とうってのがヴァチカンの考えだろ？　なのにアンタがいなけりゃデュランダルは動かないってどういうことだよ」

「さあな。理由なんぞ知らんよ。だが勝手に筋書きを作ってはいけない。ヴァチカンの考えなど事実の断片につながれた我々の妄想に過ぎんからな。自分ではまともだと思っけていても、人間の思考は大抵まともでない」

「そういうもんか」

「ソテールが私を討たずに暗黒都市へ入るというのなら、ルナールを放って闇を渡り戻ればいいだけのこと。まずはパーテルの状況を知るのが先だ。今はまだ、事を大きくする時ではない」

「……了解^{ダコール}」

気配が消えた。

「……さてと」

ユニヴェールは悠々と歩いて、カステル・デル・モンテの正面扉

の前に行く。

振り返って剣を構えれば、丘のふもとからわらわらと亡霊兵士たちが登って来るところ。

彼はそれを氷の眼差しで見下ろした。

軍隊に混じって見えるいくつかの純白はクルースニクのものだろう。

砂の混じる雪よりも白く、そこだけ別の意志が宿っている。

「私はフリードリッヒの友人なのだが、何故こうも閉め出されたり攻められたり散々なメにあうのかね。何かあの男に悪いことをしたんだろうか」

言葉はまるで他愛ない愚痴のように軽く。

そして彼は腕を掲げ、これまた軽くパチンと指をならした。

奇術師がやってみせるアレである。

――が。

瞬間、世界からあらゆる音が消えた。

ガシャガシャと小うるさい甲冑の擦れあう音、軍馬が地を蹴る音、槍の穂がぶつかりあう音、地鳴りのような行進、それらがすべて消えた。

黒の権化が立つ眼下は、何も無いただの荒野に戻っていた。

亡霊も、人もいない。

石と、草と、わずかな雪と、暗雲の夕影。

天と地の境界を作りながら横切る鳥の影。

吸血鬼がふと目をやると、その大地から銀剣の先が突き出ていた。底無し沼に引きずり込まれる途中で止まったような、図。

彼は小さく肩をすくめると、もう一度指を鳴らす。

すると、地面に落ちた銀剣自身の影が蠢き伸び、そして剣の切っ先からみつき――そのまま音も無く大地の中に引きずられて溶け

消えた。

後には刃もなく、影もなく。

——真の吸血鬼は、闇そのもの。

闇はすべてを飲み込み、無に返す。

「茶番だな」

ユニヴェールは笑うと、後ろに向かって声量を大きくした。

「どうした？ ルナールは生きていたか？」

「ルナールは生きています。ホーエンシュタウフェンの亡霊軍だというから一度見てみようと思いついてきたのですが」

返ってきたのはメイドの平坦な声音。

「惜しかったな。全部まとめて地の底へお帰りいただいたところだ」
ユニヴェールが振り返るとすぐ後ろに彼女はいた。

「——？」

そのまま有無を言わず手首を掴まれる。

そして城の中へと連行。

「ちよっと待て！ 私はこの結界を通れな——……」

単独だと吸血鬼など受け付けてくれないその見えない壁は、いとも簡単にふたりを通した。

「……………」

ユニヴェールは狐につままれたような顔で、城の内側から扉を見やる。

外套の裾が石畳にひらめく。

「人間が一緒だと通れるみたいですね。アデリーヌも僧侶を従えていましたし」

「お前まさか確信も無く私を引っ張り込んだのか」

「……………」

パーティータは肯定も否定もせず、ただ笑ってきた。



「この方は——フリードリッヒの血縁かもしれませんよ、ユニヴェール卿」

「それは興味深い」

言葉とは裏腹に、吸血鬼の声は零下の響きだった。

広間の窓際に置かれた長椅子に座っているのは、貴族と称してもおかしくはない儚い姫君。金髪碧眼、豪華な白いレースに飾られたドレスをまとい、髪には目を引くエメラルドの飾り。

——シチリアのアデリーヌ。

夜を照らすランプの灯が側壁に色づいて、その緋色を一層鮮やかにする。しかし床に落ちた影は染み付いた時代の分だけ濃い。

「あの、ユニヴェール卿……」

「黙れ」

「……………」

吸血鬼の勘気^{かんき}を知って、ルナールが口を閉じる。

彼は、ユニヴェールとアデリーヌが相對するその中点よりやや外れたところに立っていた。

やや居心地悪そうなのは当然だ。

「わたくしにお怒りですか」

「ヴァチカンは何を考えている」

アデリーヌの容姿も態度もこの城に劣らない。

だが明らかに空間を支配しているのは新参の吸血鬼だった。神秘

を内包し客人を惑わしていたその城は、現れた吸血鬼に気圧された
だの石積みの住居と化している。

「お前がヴァチカンに飼われて魔物を喰らい続けたのは何のためだ。
ルナールをさらったのは」

「わたくしはただ言われたとおりにしただけです」

「この部屋に向かっている途中で部下から連絡が入った。案の定ソ
テールは我が屋敷に来ていたようだな。おまけに暗黒都市からは黒
騎士ベリオールの騎士団が出てきたという。——ソテールに私の不
在を告げなければ、剣の交わりは避けられなかっただろう」

「貴方は戦いがあった方が楽しいのでしょうか」

「私をこちらに引き付けてその隙に暗黒都市に討ち入ると言うやり
方は分からなくもないが、ソテールがそんな策に従わないことくら
い分からぬヴァチカンでもあるまいに。何年あの男を飼っているん
だ」

「命令系統は必ずひとつだとは、限らないものです」

アデリーヌが静かに石畳へと視線を落としてつぶやいた。

「ヴァチカンの意志はひとつでない、と？」

「ローマにはふたつの頭があります。枢機卿ヴァレンティノ・クレ
メンティ。そしてデュランダル長官シエナ・マスカーニ。彼らの視
線は同じ方を向いているようで——おそらくは微妙にずれています。
それから……」

彼女がユニヴェールに顔を向けた。

「暗黒都市もまたひとつではないでしょう」

「……………」

『Attention』

お気楽貴族の文面がよみがえる。

だが男は笑い捨てた。

「まあ結局のところ、何が真実だろうと何が虚偽だろうと私には関係ない。今回のことは、枢機卿も私を滅ぼそうとし、デュランダル長官も私を滅ぼそうとした。だが互いの意思疎通がなかった。そういう話にしておいてやろう」

パルティータが見やった主の双眸には、そう思っている気配など感じられなかった。

その男は騙される愚か者を演じたがっているだけなのだ。

「互いに出し抜きあっている者どものうち、一体誰が私を滅ぼすだろうな！」

声高に哄^{わら}う吸血鬼に恐怖も恐れもない。

「貴方は暗黒都市に裏切られているかもしれないですよ！」

アデリーヌが立ち上がった。

だがユニヴェールの哄笑^{こっしょう}は止まない。

「裏切られて滅びるような可愛らしい魔物であれば、何ということだろうと嘆き悲しむかもしれないがな。生憎、裏切りにおびえるほど繊細な神経は持ち合わせていない。ヴァチカンだろうと暗黒都市だろうと、私にかかってくる奴らは全員叩き潰すまでだ」

つかつかと靴音を鳴らした吸血鬼が、無遠慮にアデリーヌの細首を掴んだ。

「貴様とて暗黒都市を裏切った罪人なのだがね」

「——ユニヴェール卿！」

「黙れ」

「黙りません！」

ルナールが珍しく本気で反抗した。

「その人はフリードリッヒ帝の皇子がこの地をフランスのシャルル・ダンジューから護ろうと戦った時に、共に戦ってくださった貴族の令嬢なのですよ！」

「アデリーヌとはフランス名であろうが」

「……え」

詰まったルナールをかばうようにして、アデリーヌが声を絞り出

す。

「父上は……シャルル・ダンジュのやり方を……否定なさったのです」

歴史に聞き及ぶ中では、ルイ聖王の弟、シャルル・ダンジュはかなりの戦好きであったという。彼の統治に反乱を起こした民の鎮圧方法は、皆殺しであったのだと伝えられるほどに。

「ほう。どこまでも裏切りの家系だったわけだな」

淡々と皮肉る吸血鬼に、

「そういう言い方はないでしょう！」

ルナールが食ってかかった。

しかし当の主は怒れる剣士を視界に入れようもしない。

「私は暗黒都市の番人だ。裏切りがあれば制裁を下す。この城には入れないと知っていたから今までアデリーヌが何をしようと黙認してきたが、私はこの機会を逃すような甘い男ではないのだよ」

「——ユニヴェール様」

「ホーエンシュタウフェン家は教会が“まむしの子”と称して、それこそ蛇蝎だかつの如く嫌った家系だ。ルナールがそれかもしれぬと知られば、ヴァチカンやデュランダルの標的は私だけでなくる」

パルティータが挟んだ呼びかけは無視された。

「口止めしようというわけですか！ 僕はそんなの嫌ですよ！ 僕は狙われて死んだって構わないんです！ 普通に魔法をかけられただけでこんなに生きているわけがない、どうせ一度死んでるんですよからね！」

「貴様の意見など聞いていない」

「ユニヴェール様」

もう一度怒気を含ませて声を上げると、主の気配だけがこちらを向いた。

「制裁を下すとは？」

「……吸血鬼は人の血を喰らう。だが、魔物を喰らうこともある」
魔物は魔物を喰らって力を大きくすることがあるのだ。

ヴァチカンがアデリーヌにやらせていたのもそれだろう、そう主は言った。

「私に対抗させるつもりだったのかもしれないが――屑どもをどれだけ寄せ集めようとたいした力になりはせん」

「アデリーヌはずっとこの荒野を彷徨っていたんですよ!？ 彼女は寂しかったんです! だからヴァチカンに与^{くみ}するようになったんです。僕だって貴方に拾われなかったら同じ道を歩んでいたかもしれないでしょう!？」

「フリードリッヒの血統ならば、どれだけ堕ちたとしてこんな無様なことになりはしないだろうさ」

主とルナールの言い争いは不毛だった。

放っておけばいつまでも同じ応酬をしていることだろう。

ルナールが突っかかり、ユニヴェールが払いのける。

パルティータは声を大にして言った。

「ユニヴェール様。ここで彼女を喰らうのは人としてどうかと思います」

「――パルティータ」

「はい？」

「黙れ」

「……………」

彼女は一瞬不機嫌を全開にして、しかし黙る。

上から降る男の声は“暗黒都市の番犬”の声だったのだ。

化け物貴族の声ではない。

「私は外界における暗黒都市の“法”に等しい。法は情の例外は認めぬ」

「人でなし」

「私を何だと思っている。お前は私を何だと思って仕えているのだ?」

吸血鬼の双眸が僅かにこちらを向いた。

小バカにした、怜悯な紅。

「……………」

「分かったらルナールと共にこの場を離れている」

口答えは出来ない厳かなテノール。

「……………」

パーティータは無言のままずかずか歩いてルナールの外套を掴むと、

「ちょっとパーティータ！」

拒む優男を引きずって部屋を後にした。

「もしかしたらわたくしは……貴方が裁きに来るのを待っていたのかもしれないね」

広間にはふたりの影だけになり、首から手を離されたアデリーヌはそう言った。

「ヴァチカンの言葉に耳を貸したのも、そのせいかもしれない」

「滅びを望むか」

「だってわたくしには目的がありませんもの。この世への執着が。死んだのも知らずに父上の姿を探していたら、魔物になってしまっただけで」

「主よ 永遠の安息を彼らに与えたまえ」
レクイエム エーテムナム ドーナー エイス ドミネ

彼女の言葉を聞いているのかいないのか、白い首筋に軽く口付けを繰り返しながら、吸血鬼が低く囁く。

「絶えざる光を彼らに照らしたまえ」
エト ルークス ペルベトゥア ルーケアト エイス

「貴方からミサの式文を聞こうとは……」

歌うようにか細く、アデリーヌの言葉が途絶えた。

男がゆっくりと身体を離せば、崩れ落ちるようにして亡骸は石畳に横たわる。

それはまるで乾涸びた野の花のように――

「アーメン」

吸血鬼は、魔物の骸に背を向けた。

翻った黒の外套に撫ぜられたそれは、パラパラと形をなくし塵の如く虚空に消える。

王の足音が遠ざかり、永遠の静寂が訪れたそこにはもう、何も無い。

燃え尽きるまで揺らめき続ける炎が照らすべきものは、何もない。



「きーさーまーらー……」

麗しい身なりの王が、開け放たれた扉の内側で叫んでいる。
見えない壁を叩くようにして、唸っている。

「ここから出せー。さもないと殺すぞー」

「自分から死んだハインリッヒっていうのは違うと思うのよ。貴方、権力欲ないでしょ」

あからさまに主を無視してパルティータがルナールに言った。
横に座った黒猫がにゃあと鳴く。

どうやらこのおかしな城のせいで、彼は夜になっても猫にならなかったらしい。

パルティータと一緒に扉を出た瞬間に、戻ってしまったのだ。

彼女は城の中から持ち出してきた古めかしい家系図を広げていた。
これまた手近な部屋から持ち出してきたランプを近づけて、

「王様って呼ばれた記憶もないんでしょ？ ってことはシチリア王にはなっていないかったってことになるわよね」

ルナールの出生について話し合う。

猫も興味があるのか、のぞきこんでいる。

背後では、主がまだ喚いていた。

人の手を借りないとこの城の中には入れないのと同様、やはり人の手を借りないと魔物は外にも出られないのだということが見事に立証されたのだ。

「パルティータ、いい加減に機嫌を直せ。仕方なからう？ 私は暗黒都市に雇われているんだ」

諦め悪く、結界にバチバチ言われながらも男は障壁を殴り続けている。

「……………」

名指しされた彼女は、眉を水平に荒野を見つめて動かない。返事もしない。

「ルナール！ その女の機嫌を直せ！ 今すぐにだ！ 今すぐ私をここから出せ！！」

むちゃくちゃな家主の仰せに、黒猫は微妙に固くなりながらも明後日の方角を向いた。

「ルナール、貴様覚えてろよ」

一番働いたのではないかと思われる一番偉くて一番強いその男は、ひとしきり怒鳴ると疲れて障壁に背を預ける。

そして眉間に手をやり、ため息まじりにのたまった。

「ああもう、どいつもこいつも聞き分けのない……………」

T H E E N D

第9話【カステル・デル・モンテ】後編（後書き）

2003年

校正時BGM：Brahms [Hungarian Dance

No. 1] (Piano Solo)

Thomas Bergersen [Sonata

第10話【ダンピール】前編

サン・ピエトロ大聖堂。

それは教皇ニコラウス五世が改装に着手して以後放り出されたままの、聖なる地。

クルースニク、ソテール・ヴェルトールはその前の広場で、彼の弟子に剣を教えていた。

……とは言っても、弟子は悲しくなるくらい上達してくれないのだが。

「ソテール、休みませんか？」

倒されて足下に転がっている弟子が見上げてきた。

「そうするか」

ソテールは笑って、聖剣を白いロングコートの中に納める。

「申し訳ありません、出来の悪い弟子で」

息を弾ませ顔を上気させながら立ち上がった少年は、綺麗な銀髪に蒼い目。

聖職者だらけの聖域の中で飄々と貴族風を吹かす相貌には若さゆえの愛嬌があって、切れ目のない流れるような動作は本人のおっとりとした性格を反映している。

華やかな社交界の中に放り込んだら女どもにもみくちやにされる類の若者で、対処方法が分からず笑ってもみくちやにされ続ける類の子供。

「せっかくかの有名なソテール・ヴェルトールに教えてもらっているのに」

そんな殊勝なことを言いつつ全然悪びれていないあたりがまた、その容姿と相まってソテールにひとりの男を思い出させた。

その男も銀髪で、聖域の只中で貴族っ気をまとい続け、大昔は蒼い目をしていたのだ。

「フリード」

少年の名は、フリード・テレストル。

「お前は剣術と神学とどっちが好きなんだ？」

「……うーん」

少年が眉根を寄せながらゆっくりと歩いてきて、石段に腰掛け足を投げ出しているソテールの横にペタンと座った。

「僕は史学が一番好きですよ」

そう笑ってから、彼は小さく付け加えてくる。

「ダンピール、ダンピールって期待している皆さんには悪いんですけど、僕は刃物に向いてないんです、きっと」

「……ダンピール、ねえ」

ソテールは怜悯な白皙をふと緩めた。

そして、手持ち無沙汰に剣先で石畳を引っかいているフリードを横目に見下ろす。

——ダンピール。

それは“運命の子”とも呼ばれ、一般に吸血鬼と人間の間に生まれた子供を指す。

彼らは生まれながらの吸血鬼始末人であり、人間離れた強靱な

クルースニク

体躯と運動能力を持つうえ、通常の始末人では持ち得ない、吸血鬼を感知する能力まで有している。

そして彼らは、親を滅ぼす運命を持つ。

一閃した剣が聖剣であろうと銀剣であろうと鈍^{なまく}ら剣であろうと、

それは親である吸血鬼を滅ぼすことができるのだ。

運命は彼に親を滅ぼさせ、運命は親に滅びを与える。

それは一匹の吸血鬼に対してだけ有効な、しかし違えることのない絶対的な力であり、それゆえに世界でただひとりの究極の吸血鬼始末人となる。

だが彼らは魔物としての側面も受け継いでいるため、突然強烈な喉の乾きに襲われ、人を襲う可能性も秘めている。無意識の中、見境なく、血を欲する魔物に堕ちるのだ。

そんな彼らなど、人間にとっては吸血鬼に等しい。

吸血鬼にとっては居場所を嗅ぎ付けられる厄介なクルースニク、人間にとっては人の皮を被った化け物。

だからこそほとんどのダンピールは成長する前にクルースニクに葬られるか、闇の同族に始末されてしまうのだという。

生を受けた瞬間から多くの鎖に繋がれた彼らを“運命の子”と囁くのは、憐憫^{れんぴん}か揶揄か――。

「お前がここローマに連れてこられたのはいくつの時だったっけ」

「六歳。母さんが病気で死んですぐです」

「六年……」

通常、ダンピールが六年生きているなどありえない。

だが、その父親を恐れて聖も闇も手を出せない場合は除かれる。

「母さんは僕がヴァチカンに行くことをずっと嫌がってました。父さんを滅ぼすようなことはしてほしくないって。それに、僕は剣よりもペンを握ってた方が良いんだって分かってたみたいです」

この子供は決してズバ抜けて強いわけではない。

卓越した運動能力を誇るソテールにしてみれば、今のフリードは強くないとしか言えないのだ。

それこそダンピールでなければこの聖域に留めておく理由もないほどに。

心理的な要因か、それとも与えられた才の限界なのか……。

けれど彼はズバ抜けて聡^{さと}かった。
だからよく知っているのだ。

自分に期待されていることが何なのか、そして今の自分がその期待に沿うのは難しいだろうことも。

そういう聡さも含めて、この子供はあの男によく似ている。

だがその男とはひとつだけ違っているものもある。——それも決定的に。

あの男は天性の闘う者だったのだ。剣を持つべくして持ち、自ら戦場へ飛び込み剣を振り回し、常に冥府の川岸に身を置くことを好んだ。

けれど幸か不幸かフリードにはその天性がない。

「それとも、ダンピールってのは奇跡か何かで吸血鬼を滅ぼすんでしょうか」

フリードが肩を落としてため息をつく。

その辺にいる学生たちと大して変わらない調子だが、問題は果てしなく大きい。

ソテールは冷涼な目を青い空に向けた。

「俺はダンピールじゃなくてただのクルースニクだから分かんない」

「……ソテールは、なぜ父と戦うのです？」

悩んでいるというよりは興味津々なだけの目が、こちらを真っ直ぐに見据えてくる。

ソテールはまたもや目を逸らした。

「俺と対等にやりあえるのがあの男しかない」

「なんでやりあうんです？」

「……………」

ソテールは言葉に詰まって柳眉をしかめた。

本当に父親に似て性質^{タチ}が悪い。

「マスターニ枢機卿もクレメンティ枢機卿も、人々が闇に怯えず安らかに暮らせる世界にするためですって言うけれど、母さんが死ぬ

のを待って亡くなった途端僕を引き取りに来るような人たちのこと、信じられると思います？」

「……で、結局お前はどうしたいんだ？」

ソテールが訊くと、弟子は口をへの字に曲げた。

「どうしたいんでしょうね」

——数日後。教皇庁の執務室に呼ばれたソテールは、教皇庁総務局長官代理ヴァレンティノ・クレメンティから直々に叱責を頂戴していた。

フリード・テレストルが勝手にフランスへ行ってしまったというのだ。

しかもフランスのパーテルへ。

そう、シャルロ・ド・ユニヴェールの屋敷へ。

『パーテルへ行ってきます。 F 』

悪意すら感じる一文の書き置きを手には、ソテールはクレメンティに噛み付いた。

「俺はいつからダンピールの保護者になった。俺はデュランダルの保護者だが、フリードはデュランダルの一員ではないだろうが。文句ならまず、あの坊やをココから出しちまった衛兵に言え」

「解雇処分にした」

「そりやお早いご決断で」

「我々には時間がないのだ！」

薄い眼鏡の奥から、剃刀かみそりの目で睨まれる。

「フィレンツェのサヴォナローラは、メディチ家のロレンツォや猊下（インノケンティウス八世）の死期をすぐそこだと予言している。あの男は危険な狂信家だが、現に猊下の病は回復の見込みがない」

ソテールが横に目を移すと、金髪の美女——シエナ・マスカーニ枢機卿が涼しい顔で軽くうなずいてきた。

男が続ける。

「ミラノのアスカニーオ・スフォルツァ枢機卿、ヴェネツィアのチポー枢機卿、ナポリのデッラ・ローヴェレ枢機卿、そしてヴァレンシアのロドリーゴ・ボルジア枢機卿。新しい教皇の座は、この中で一番戦略に長け、財力のある者の手の平へと転がるだろう」

聖職者の発言とは思えないが、クレメンティという男は到底夢など見そうもない顔をしている。

徹底した現実主義。

「今度の法王選定会議は金が物を言うわけか」

ソテールが皮肉交じりに口端で笑ってやると、

「十字軍遠征のおかげで教皇庁の金庫は見事に空だ」

キッパリと言い切られた。

「とはいえ、非公式のデュランダルには非公式なりの財源があるから安心してね」

そう言って口元を派手な扇で隠し、シエナがくすくすと笑う。

それを一瞥で黙らせ、クレメンティが続けた。

「新教皇が立った後も私がこの椅子に座っているかどうかは分からない。デュランダルが再び封印されることも考えられる。全てはインノケンティウス八世のお考えであって、新教皇も同じ考えを持たれるとは限らない」

「教皇が変わる前に終わらせなければならぬのよ。分かる？」

シエナが扇をぱちりと閉ざし、その紅唇をなぞるようにする。

「これ以上十字軍で教皇庁を荒らされては困るの。新教皇が十字軍推奨派だった時のために、何としてもインノケンティウス三世以来三百年の仇敵を葬った功績を手に入れて、我々が実権を握っておかないと。貴方とダンピールがそろった今はまさに、あの化け物を葬れる好機なのよ」

「じゃあお前らが教皇になればいいだろう」

「まだ若いんだもの、そういうわけにはいかないわ。物事には順序があるのよ」

女の身でありながら枢機卿の地位にいるというのも謎だが、教皇になることさえ“まだ”という。

だが、シャルロ・ド・ユニヴェールを滅ぼすことができれば、その身が天に召されるまで実権を握り続けられることは確実だろう。例え教皇冠を戴かなくても、その発言力は教皇を凌ぐはずだ。

「ね。そういうことだから、早く坊やを回収に行って頂戴。これ上司令令」

彼女が歩くたび、ダイヤのイヤリングに陽光が反射してまぶしい。

「幸い、今はパーテルの屋敷にお父上はいらっしゃらないようだけど、もし――」

「いない？」

「少し前、パーテルの女聖騎士にあの屋敷を訪ねさせたのよ。そうしたら無愛想なメイドに“数日間暗黒都市に行く予定があるから面倒な用事はダメ”って言われたらしいわ」

「……………」

予定を教えてくれるとは、随分親切なことだ。

「もしその辺の魔物にフリードが殺されでもしたら、大事な戦力を失うことになるでしょう？」

「子供ひとり連れ戻すくらい、他のヒマな奴を行かせればいいだろうが」

「貴方じゃなきゃダメに決まってるでしょう」

「どうして」

ソテールに應對しているのはシエナだったが、彼はクレメンティを見据えた。

シエナはただの説明役だ。

真意は、緋の衣をまとして静かにこちらを見ている若き聖者の中にある。

横から聞こえてきた答えは、やはり女の声だった。大声を出して

いるわけでもないのに力強く通る、生まれながらの演説者。

「彼はダンピールであって、クルースニクではないのよ。いつどこで魔物に豹変するか分かったものではないわ。あの少年が魔物になった時にどれ程の力を発揮するのかまだ誰も知らないけれど、彼の近くには彼を殺せる人間がいなきゃ困るの。彼の父を思えば、その役を単なる衛兵に任せることはできないわね」

「ユニヴェールの時と同じようにか」

ソテールは声を殺した。

この二人は、あの時代を知らない。ユニヴェールが生きていた時代も、死んだその時のことも。

「ユニヴェールの時は失敗したのだろう？ 呪われたユニヴェール家の当主であるあいつを殺すのはお前であるべきだったのに、そうはならなかった」

ヴァレンティノ・クレメンティ。

眼鏡のガラスの向こうの琥珀の双眸は、現在だけを見つめている。「我々は、同じ過ちを二度はできない」

それからソテールはすぐにフランスへと出立……させられた。件のサヴォナローナが熱狂的な支持を集めているというフィレンツェを縦断し、ミラノを抜けてフランスへと入る。

そして彼がフリードを捕まえたのは、パーテルの町の中だった。

「ソテールごめんなさい」

色鮮やかな露店が並ぶ市場の中をうろうろしていた法衣姿の青年。その首根っこをつまみ上げると、即座にそう言われた。

まるで条件反射だ。

「……………」

怒鳴る機会を失って、ソテールはそのままフリードを地面に落とす。

そして有無を言わず町の隅へと引きずって行った。

ソテールは目立つのだ。

長身瘦躯、細面ほそおもての端正な顔。

おまけに彼はいつもの銀糸刺繍の入った白コートをまとっている。ヴァチカン内では普通でも、牧歌的なパーテルでは——いや、一般の地域では——これでもかというくらい目立つ。

右を見、左を見、誰もいないのを確認して、ソテールはフリードに向き直った。

腕組みをして、問う。

「何をするつもりだったんだ？ ユニヴェールは不在だそうだぞ」

「父がいないのは知っていました。……ダンピールは、知ろうと思えば吸血鬼がどこにいるか分かるものですから。ただ——」

「？」

「……ソテール、貴方は父をよく知っているんですよね？」

澄んだ青色が見上げてきた。

ソテールはあごに手をやり、わずかに胸を張る。

「知ってるさ。少なくともヴァチカンにいるボンクラどもよりは遙かにな」

「どういう人でした？」

「俺と同じだけ強い」

「……………」

「お前以上に聡い」

「……完璧な人ですね」

「そんなことはない」

彼は瞬時に否定した。

「アイツは莫迦バカだ」



「お前は莫迦か！」

「莫迦で結構」

あからさまに不機嫌な声で、ユニヴェールは吐き捨てた。

「だが貴様らの方が莫迦だと自覚してから言ってくれ。私に何度同じ事を言わせれば気が済むのかね？ いい加減それくらいのこととは記憶してほしいものだよ」

「口が過ぎるぞユニヴェール！」

「お前の我侭ばかり通ると思うな！」

魔貴族たちが集う暗黒都市の会議は、紛糾していた。

計画に対し、シャルロ・ド・ユニヴェールが首を縦に振らないからだ。

「ヴァチカンではなくまずお前から滅ぼしてやろうか！」

「滅ぼせるものならば滅ぼしてみろ」

「貴様ッ！」

「――座ってください、バルツァー卿。ユニヴェール卿も、少しは我々の話に耳をお貸しください」

議長を務めていた顔の半分を仮面で覆った女が――どこかの城の由緒正しい幽霊だと聞いた――大袈裟にため息をついた。

ユニヴェールが“分かった”とさえ言えば、会議は終わる。

だが黒衣の麗人は頑として拒んだ。

「話は聞いている。だが何度同じ話を聞いても答えは同じだとも言っている」

聞こえよがしの嘆息が一斉に漏れる。

「ヴァチカンはソテール・ヴェルトールを目覚めさせ、噂によれば

ダンピールまでを……」

議長の黒い瞳がユニヴェールをちらりと見、戻る。

「手に入れ、クルースニクとしての教育を行っていると。向こうが整う前に仕掛けなければ、大損害も免れません。今回ばかりは先手を取らなければならないのです」

言外に、それはアンタのせいだというのが含まれているのはユニヴェールも分かっている。

ダンピールなどヴァチカンに取られる前に葬り去ってしまえばよかったのだ、と。

「その先陣の中に貴方がいなければ全く意味がないのはご存知でしょう？　ダンピールは未知数としても、ソテールと戦うだけで我が軍にどれだけの被害が出るとお思いですか？　貴方がはじめからソテールとぶつかるだけで、どれだけ有利になるとお思いですか？」

「そんなもののベリオールにやらせておけ」

「ユニヴェール卿！」

「——貴様らはどうしてそう勘違いをする」

とうとう声を荒げた議長を鼻で笑い、吸血鬼はコツコツとテーブルを叩いた。

「私は門番に雇われているだけであって、貴様らの戦力ではないのだよ。向かってくるものは潰すが、何の面白味もない計画の先陣を切るなど願ひ下げだ」

魔の証、霜の降りた紅の双眸が会議に冷気を吹き込んだ。

「私は貴様らの敵ではないが、——味方でもない」

言い置いて、彼は優雅に席を立った。

そしてクルリときびすを返す。

「……………」

留める言葉を持つ者は、いなかった。

軽い靴音が遠ざかってゆくのを、皆息を潜めて聞いていた。

憤慨も恐怖も怒りも畏怖も、全てを含んだ空気は重く重く貴族たちへのしかかる。

言葉を発することはおろか、誰一人立ち上がることも出来なかった。

<よい>

それを軽く払いのけたのは、囁くような女の声。

若いのか、年老いているのかも定かではない、どこから響いているのかさえ分からない声だった。

それでも貴族たちは声の主が誰であるか知っている。

一斉に頭を下げた。

<事が始まればあの男も出て来ざるを得まい>

声は皆の頭上を、浅く広大な大河の如く流れてゆく。

<あの男は天性の闘者え？ 死する前からあの腕には剣しか抱けなかったものを、今更背など向けられるはずがなかうて>

第10話【ダンピール】後編

「アイツがクルースニクとして仕えていたのはインノケンティウス三世だが、貴族個人として仕えていたのはフランス王フィリップ二世だ」

「……イングランドのジョン王からノルマンディーやアンジューの土地を奪った王様ですね？」

「そういうことだ。あの頃はもうすでにアイツは死んでいたがな、だからこそ、かもしれん」

「？」

「吸血鬼ユニヴェールの働きがあったからこそ、フィリップ二世は勝利した」

「ははあ。……でも父はなんで死——」

言いかけて、フリードが言葉を放り出したまま口を開けた。

玩具のような可愛らしい家々が並ぶ坂道を登りきった途端、目当てのソレが視界に飛び込んできたのだ。

「あれが現在のユニヴェールの屋敷。奥にあるのが黒い森。あの鬱蒼とした中に暗黒都市、ヴィス・スブランドウールがある」

説明を聞いているのかいないのか、少年は蒼の両目を開いたまま釘付けになっていた。

特に変わったところがある屋敷でもなければ、仰天するほど広大なわけでもない。

しかし彼はしばらく動かなかった。

「……フリード」

この子供は聡い。だからこそ、何を考えているのか他人に見せない。見せるどころと見せないところを、自在に操ることができるの

だ。

父親がとんでもない化け物吸血鬼で、自分はそれを滅ぼすことのできる力を持った聖なる始末人で、偉ぶった枢機卿からは世界のために父を滅ぼせと言われて、でも亡くなった母親はそうならないようにと望んでいた。

右も左も後ろもないのだ、真っ直ぐに育つ方がおかしい。

あるいはそれだけ塞がれたら、逆に真っ直ぐに育たざるを得なくなるのだろうか。

——俺なら暴れるな

ソテールはそう思って息をつき、弟子の顔を覗き込んだ。

「……フリード？」

ヴァチカンからわざわざフランスまでやってきたのだ。

何か思うところがあるのだろうか。

と、無造作に屋敷の扉が開いた。

中からホウキを持ったひとりのメイドが出てくる。

『……あ……』

師と弟子、共にどう反応していいか分からず突っ立っていると、

「あら、お客様ですか？」

彼女がこちらに気がついた。

長い黒髪の、濃い灰色のメイド服を着た、やけに表情のない女。

「私はこの屋敷の小間使いですが、何かご用が？ あいにく主人は

出かけておりますが」

ホウキを引きずってパタパタと歩いてくる。

「ここはユニヴェール卿のお屋敷ですか？」

フリードが訊いた。

「そうですよ」

メイドは愛想笑いのひとつも浮かべてこない。

「ちよっとお邪魔してもいいですか？」

「……はい？」

「シャルロ・ド・ユニヴェールは僕の父なんです。お屋敷に入れてはいただけないでしょうか」

初対面の相手に対して、なんとも大胆な発言である。

「……ええと」

表情がないながらも明らかに困っていたメイドが、何故かこちらを見た。

どうやら彼女はソテールを保護者だとみなしたようだ。

しかし彼はお手上げだと小さく肩をすくめてみせる。

「……まあいいか」

随分投げやりなメイドの独り言がぼそつと聞こえ、

「主に怒られるようなこと、しないでくださいね」

彼女は先導するようにこちらに背を向けてきた。

ユニヴェールから傲慢と皮肉と冷笑を引けばフリードになる。そんな相似の風貌が決め手だったに違いない。

それとも、このメイドがいい加減なのか……。

「ありがとうございます！」

いい人ですね、とこちらを振り仰いでくるフリードに軽くうなずきつつ、ソテールは白コートの上から帯剣を確認した。

いつの間にか森がざわざわと騒がしい。

屋敷のまわりを何十羽ものカラスが飛んでいた。屋敷を取り巻く枯れ木にも群がっている。そして彼らはこちらを威嚇するように交代で鳴き喚く。

——シャムシールか。

男は黒髪の下から屋敷を睨みつけた。

ユニヴェールを追って魔となった三使徒のひとり、シャムシール。愛らしい少年の姿をしてはいるが、子どもゆえに大人の想像を超えた妖術を使うことで気味悪がられている。

動物を操るのもそのひとつ。

大昔、ドイツのハーメルンで起こった笛吹き男の事件は、あの少

年が起こしたものだろうというのがヴァチカンでの見解だ。少年は、ネズミだけでなく人間の子どもまで操りさらって行ったのだ。しかしそれに何の意味があったのか、大人たちは今もって理解できていない。

……よく考えれば、主が不在とはいえ残りの三使徒であるアスカロンやフランベルジェがいて、おまけにルナールもいる可能性は高いのだ。

ソテールは自分の左腰——剣を帯びた場所——に目を落とした。すると、

「剣は振り回さないでくださいね。危ないですから」
前を向いたままのメイドに言われた。



通された広い食堂には、アスカロンもフランベルジェもいなかった。

暖炉の前では、ひとまわり大きい法衣に着られた少年が喉の奥から唸っていたが。

「ソテール・ヴェルトール、それから少年、どうぞお座りください」
いささか強張った声で席を勧めてきたのは、黒髪黒ずくめ、不気味なアイラインの剣士・ルナール。

ソテールは彼と面識があった。

実を言うと、ユニヴェールの知らないところで切り結んだこともある。

……フリードよりもずっと腕はいい。剣だけならユニヴェールに

匹敵するといっても過言ではない。

「家の者を襲いに来たわけでもない、誘拐しに来たわけでもない、卿と戦いに来たわけでもない。では、何をしにいらしたんですか？」
ルナールの目は敵意を含んでソテールを見ていたが、応えたのはフリード。

「父のことを聞きたくて来ました」

「……ち、父？」

ルナールが声を裏返した。

そしてフリードを指差す。

「じゃあもしかして君、フリード・テレストルって名前じゃありませんか？」

「そうです」

「やっぱりいい」

剣士は叫び両頬に手をあて、一気に言ってきた。

「もしかして81年からの養育費の請求に来たんですか！？ でもそれはそっちが勝手にヴァチカンに行っちゃって渡せなかっただけなんですよ！ もちろん今まで十年分のお金は大事にとってありますからすぐに渡せますけどね、あの、でも、……利子までは勘定に入れてませんよ」

「……………」

紅茶を運んできたメイドが怪訝そうな顔をする。

「利子？」

微妙な単語に引っかかったらしい。

あの男に息子がいるという事実はどうでもいいのか、知っていたのか。

「いえ、利子はあるより重要じゃないかもしれないんですが……貴女は知らないんですでしたね」

「何を？」

メイドが首を傾げる。

「この少年はユニヴェール卿のご令息です」

「そんなこと話の流れで分かるでしょ」

「それはそうですが」

優越なのか、ルナールがフッフと不気味な笑みを作った。

「卿、意外とマメなんですよ」

言って、剣士はフリードを見やる。

「貴方の母君のお腹に貴方がいると知るや、毎晩通ってましたもん。……ただ、あの方ほどの化け物でもダンピールは脅威なんでしょうかね、貴方が生まれてからは近付かなくなっていたみたいです」
彼は紅茶にレモンを入れながら、

「ホントに、他の女性なんかそっちのけでしたよ。……ああ、あの人は貴女がメイドになる前はかなり遊び歩いてたんです、パルティータ。吸血鬼とはそういう職業だと放言していました」

ちらりとメイドを見る。

だが灰色の小間使いは彼を無視。銀盆を抱えて、指をくるくる回してきた。

「フリードの母君は金髪でいらっしゃいます？」

「いいえ」

「では柔らかい栗毛？」

「ええ、そうですが」

メイドがにっこり笑った。

「その方の肖像画ならば、ユニヴェール様の書斎にありますよ。ちよつと持ってきてきますね」

彼女が見せてくれたものは、小さめではあるが丁寧に描きこまれた肖像画だった。サインの主はソテールも知らなかったが、おそらくはユニヴェールの友人なのだろう。

あの男は芸術に明るい。

見える場所にちゃんと飾ってありますよ、と付言してから、メイドがさらに訊いてくる。

「父のことをお聞きしたいって、あれですか？ ユニヴェール様が貴方と母君を捨てたんじゃないかと、そういうことですか？」

薄い存在感をしているくせに、なかなかズケズケと物を言う女だ。
「うーん……そうなんでしょうか……」

だがフリードは詰まる。

彼も思うところあってここに來たのだろうが、それを言葉に表せないのだ。感情と理性とは別物。

「それでしたら、あの方はそういう人ではありませんよ」

横から口を挟んだのはルナールだった。

彼は芳香漂う紅茶をじっと見下ろし続ける。

「ソテール隊長もお分かりでしょうし、我々や三使徒のことを知っていただけば納得できるでしょうが、ユニヴェールという人は他人に対しての責は最後まで負う人です」

逆にご自身に対しての興味が薄すぎて一度亡くなってしまったわけですが——そう苦笑いを浮かべて、剣士は俯いたまま紅茶に口を付ける。

「卿は今でもヴァチカンが貴方の母君を殺したと思っています。貴方を連れて行くためにね。僕は真相を知りませんが」

「ならば何故父は僕をヴァチカンに行かせたんですか。ヴァチカンより先にここへ連れてくることだって出来たんじゃないですか。そもそも、母をここに置いておくことだって出来たはずでしょう!」

ソテールは切れ長の目を横に流し、弟子を見た。

きっと、一番言いたかったことなのだ、これは。

「母君をここに置かなかった理由は僕にも分かりません。彼女がそう望んだのかもしれないし、他に理由があったのかもしれない。けれど、卿が貴方を連れてこなかった理由は分かりますよ」

ルナールが顔を上げた。一本指を立てる。

「ひとつは、卿が吸血鬼で貴方がダンピールであるという事実。吸血鬼にとってダンピールは猛毒に等しいのです」

そしてふたつ。彼は二本目の指を立てた。

「ダンピールは決して闇の者にはなれません。なれないどころか誰も彼も貴方を殺そうとするでしょう。師匠について剣を習うことは

おろか、友達と一緒に神学や天文学や史学を習うこともできない、讃美歌を合唱することもできなければ、狩りを楽しむこともできない。シャルロ・ド・ユニヴェールの子息と言っても、母君が生きていらしたあの六年間、何もなかったわけじゃないんですよ。卿はそれこそ間断なく魔を監視して近付くものは全て消していました」

「でもヴァチカンに行けば」

メイドが抑揚なく合の手を入れた。

ルナールが続きを引き取る。

「化け物ユニヴェールのダンピールとなれば、ローマが珠の如く大事に扱うのは必至。貴族の子ども達が受ける以上の生活が保障されたも同然、ヴァチカンの聖域内ならばどこで友と遊びに興じようが普通の魔物は近付かない。貴方の本性が表れないように最善も尽くされる。——闇がある限り、そして貴方の親であるユニヴェールが存在し続ける限り、それを滅ぼすべき切り札の貴方はヴァチカンに護られる」

ね、と剣士が笑った。

「親なら当然の選択でしょう？ 手元において一生魔物から囲って不自由に生かすか。ヴァチカンに護らせ友人や師の中で生かすか」
「……だから、僕はあまり外で遊ばせてもらえなかったんですね」
「昼間だって闊歩できる魔もいるんですよ。僕みたいに」

——年月が傷を癒やしても、怪我をしたことは忘れない、か。

ソテールは紅茶に口をつけながら独りごちた。

メイドは最初に母は金髪かと聞いた。

フリードは違うと言ったが、ソテールはむしろそっちの方をよく知っているはずだった。もうずっと昔、あの男がまだクルースニクとして白い衣を着ていた頃の話なのだが……。

それゆえにあの吸血鬼は、フリードの母を殺したのがヴァチカンだと思っているのだ。聖なる都は、目的のためなら手段を選ばない。

真相はソテールだって知らない。

なにせずと冷たい地下で眠らされていたのだから。

しかしあの男がそう断ずる気持ちも分かる。

それにしても——と、ソテールは黒尽くめの剣士を眺めた。

ルナールは怒るだろうか。

……自分は、フリードが魔の本性を表した時にすぐ殺せるように共にいるのだと教えたら。

「お邪魔しました」

唐突に、フリードが言った。

「はい？」

メイドが目点を点にする。

「紅茶、おいしかったです」

「はあ」

「ソテール、ヴァチカンに戻りましょうか」

蒼い目がしっかりとこちらを見る。

「もういいのか？」

「はい」

歯切れのよい返事を聞いて、クルースニクは立ち上がった。

まだ唸り声を上げているシャムシールをひと睨み、ルナールへと視線を移す。

「お前の飼い主にお手合わせ願いたかったな」

「卿もそう言うと思いますよ」

「近いうちに実現するさ」

教えてやると、ルナールがわずかに顔をしかめた。彼はそのまま応えず、

「パルティータ、おふたりを丁重にお送り……」

振り返る。

「……………」

灰色メイドの姿は食堂から消えていた。

「……メイドさんならさつき奥に行きましたよ」

クルースニク・ソテールとダンピール・フリードが坂の下へと姿を消してからしばし、黒い森の中から一台の馬車が現れた。

屋敷の前で停まったその中からは黒衣の貴人が降り立ち、御者をしていた若い男は貴人の先に走って屋敷の大きな扉を開けた。

黒い帽子、襟に毛皮をあしらった黒外套。屋敷の主は扉の前に立つと、後から出てきた蒼の魔女を先に家の中へと入れる。

そして若い男も先に入れると、男の紅はじつとパールの町を網膜に映し、しばらく考え込むように虚空を見つめた。

だが男は、視線を外すとすぐさま黒衣をひるがえす。

その長身が扉の中へと消えた後、通りは再び静寂に包まれた。



「暗黒都市で何かありましたか？」

帽子を取る時も外套を放り投げて寄越す時も、主の眉間に刻まれたシワは消えなかった。

フランスから届いたシャルル王とアンヌ・ド・ブルターニュの結婚式の招待状も、見るなり破り捨ててしまった。

せっかく淹れた紅茶すら飲まずに、部屋から部屋へと忙しく出入りするユニヴェール。

その後を追いパルティータが尋ねると、

「前も言っただろうが。お前はただ私の後についてくればいいのだよ。何も心配することはない」

主は立ち止まり長い指を突きつけてきた。

いつの間にか彼の顔には伊達眼鏡がのり、反対側の腕は大きな箱を抱えている。

「すべて私に任せておけ」

パルティータは無感動にその手を払いのけた。

「貴方のご子息という方が屋敷にいらっしゃいましたよ。ヴァチカのダンピールが」

「……………」

「ヴァチカンが仕掛けてくるなら、権力が狭間に落ちる今、インノケンティウス八世が死にそうな今でしょう。しかもデュランダルの隊長もダンピールも揃そろっている。……まさか滅ぼされてやるおつもりで？」

「笑止千万」

「ではご子息を滅ぼすおつもりで？」

「……………」

主の顔から道化が消えた。

パルティータは小さく嘆息し、吸血鬼を見上げる。

「回避する方法を教えて差し上げます」

ニヤリと笑う。背景に凄味のある笑み。

「私をヴァチカンまで送り届けてください。それだけで、ヴァチカンは貴方に楯突たてく口実を失いますから」

「……………」

主は一瞬眉をひそめ、だが何も言わずくると背を向けた。

そのまま地下室へと続く階段を一步二歩降りる。

「ユニヴェール様」

押し殺した努声をかけると、彼は立ち止まった。

振り返った吸血鬼は、僅かの憤りと穏かな笑みをもってパーティタの手を取り口付けてくる。

「私はね、パーティタ。自分のものをヴァチカンなんぞにくれてやるほど心広くはないんだよ」

彼は下から彼女を見上げ、笑う。

「お前は渡さない」

そしてスタスタと階段を降りて行った。

「……………」

今日二度目。パーティタは目を点にして立ち尽くす。

呆然としたまま数秒。

「……けれど！」

弾かれたように下へ降りて行くと、到着先は“秘密の研究室”とでもいうべき場所だった。

「一体……」

無意識に感嘆符が出てしまうほど、火が灯されたそこは凄かった。所狭しと蜘蛛の巣がはり、床や机にはボロボロの本が開かれたまま放つてある。不気味なラベルが貼られた瓶が威圧感さえ醸し出して立ち並び、部屋の奥にはかまどまで作られている。……大きな鍋がのっているところなんか、魔女の部屋みたいだ。

あるいは錬金術士。

眼鏡をかけてヤル気満々の主は、天秤に積もった埃を吹き飛ばした。そして棚のラベルを睨んで軽やかに瓶を取り出してゆく。

そういえば、錬金術も主の趣味のひとつだ。

「ユニヴェール様」

「ああ、その箱に触るなよ、危ないから」

その箱……主が上から持ち込んだものだ。

「何が入ってるんですか」

「火薬」

「……………」

二の句が継がないでいると、後ろからルナルの声がした。

「今日、ソテール・ヴェルトールも来たんですよ。暗黒都市だってもう、ヴァチカンの企みに気付いているんですよね？」

「だからユニヴェール様が呼ばれたのよ」

おっとりしている声の主はフランベルジェだ。

「戦いに出るんなら僕も行く」

「お前はちっこいんだから留守番ー」

いつの間にか全員いた。この地獄の方がマシな部屋に。

「卿、戦いの準備ですか？」

ルナルの問いに、火薬の量を計り透明なガラスコップに入れていた主が顔を上げた。

彼は牙を見せながら笑い、赤い液体を注ぎ込む。

「戦いではないよ。――戦争だ」

そして仕上げに緑色のツブツブした鉱石を放り込む。シュワシュワと泡が弾けて緑色がどんどん小さくなっていった。

「勝つのは“私”だがな」

『向かってくる奴は皆殺し』

三使徒が声をそろえた。

合わせてボンツと音がした。吸血鬼の手元で白い蒸気が上がり、カビた空気に溶け消える。

だが、パルティータがのぞき込んだガラスコップの中には、何も残っていないかった。

「ユニヴェール様、これは」

主が渋い顔をする。

「――失敗」

『……………』

一方、聖なる都ではクレメンティが壊れていた。

「あー、くそつ、だああああゝゝゝ!!」

いつものクールなポーカーフェイスはどこへやら、頭を抱えて机の上をうめきまわっている。

何故かシエナ・マスカーニも床に崩れ落ちていた。

「パーティータだど!? パルティータという女がああ、の化け物の屋敷にいたのか!」

「——えーと、そうだが」

ソテールは気圧されて小さく応える。

「おまけに茶ア入れてもらって、仲良く歓談してきただど!?」

「歓談というわけでもないが」

「な——ぜ——ヴァチカンへお連れしなかった! ユニヴェールも不在だったのに、お茶会までして、何故に! あああああゝゝ!!」

「話の筋が分からない」

落ち着き払って言うど、シエナが鋭い声を上げてきた。

「ソテール! デュランダル隊長ともあろう者が、パーティータ・インフィーネを知らないの!」

「知らない」

『……………』

上司二人は押し黙り、そしてクレメンティがぱたむと机に突っ伏した。

「そうか、すべてはお前は眠っていた間のことか。しかも最重要機密だからな……。クルースニクはおろかデュランダルのほぼ全員が知らない。枢機卿でさえ知っている奴は一握り……」

「よりによってユニヴェールの屋敷とは、ねえ」

疲れた顔でシエナが肩を落とした。綺麗にカールされた金髪までが色褪せている。

が、ふとクレメンティが元に戻った。

琥珀の双眸が見る間に冴え、背筋が伸びてゆく。

彼は小さく笑って椅子の背に身体を預けると、壮麗な絵画で埋め

尽くされた天上を仰いだ。

「丁度いい口実だ。これでクルースニク全部隊、デュランダルも堂々と動かせるぞ。誰も反対しないだろう。……いや、全部隊を動かしてでも取り戻さねばなるまい」

彼は立ち上がった。

背後の大窓からサン・ピエトロ大聖堂の広場を見下ろす。

そこではひとりのダンピールが懸命に剣を振っていた。

「マスカーニ枢機卿、各局の長官を集めるように。ヴァチカンはパルティータ・インフィーネを奪還すべくパートルに向かい、ユニヴェール及び暗黒都市を討つ」

THE END

第10話【ダンピール】後編（後書き）

2004年

校正時BGM：Within Temptation『Pale』
[Memories]

番外編【最後の騎士】前編（前書き）

企画出品用に書いたものですので、若干復習要素が混ざります。

番外編【最後の騎士】前編

「言葉なんてものは、始めから我々を裏切っている」

彼がそう言った時も、

「そうかもな」

あの男は気のない様子で穴を掘り続けていた。

照りつける陽射しの中、クルースニクの証である純白の外套を乱すことなく身にまとい、穴を掘る。

その男の足元には、小さな箱が置いてあった。ただの箱と思うなかれ、細工も美しいインノケンティウス三世本人の私物だ。

「我々はこれを——剣と呼んでいる」

こちらを見ようともしない穴掘り男。しかしその横で佇たたずむ彼は全く意に介さず、自らの名が刻まれた聖剣を抜き、陽光にかざした。

「だが、こいつは剣と呼ばれようがペンと呼ばれようがお構いナシだ。我々がこいつをどう呼ぼうが、こいつは魔を滅ぼし、人を斬る。命を断つ」

穴掘り男が、小箱を穴に落とした。

今度はもくもくと埋め始める。

「鳥は、人と呼ばれたとしても空を飛ぶ。春は、冬と呼ばれたとしても花を咲かせる。言葉なんてのは“仮”に過ぎない。我々が知ったかぶって集めている言葉の寄せ集めは、人間が世界についた大嘘だ。世界は言葉など必要としていない。“約束”なんてものも、単なる言葉の羅列に過ぎない。意味はない」

彼がひととおり演説を終えると、男がようやく立ち上がった。

黒髪に長身瘦躯の穴掘り男が眉を寄せる。

「ユニヴェール、つまりお前は何が言いたいんだ？」

つまりとかいう問題ではなく、この男はおよそ全部聞いていなかったはずだ。

それでも彼は穴掘り男に教えてやった。

「ロタール（インノケンティウス三世）が約束を反故にするのは今に始まったことではない」

「それくらい分かってるさ」

「それに裏切られたのは貴様ではないだろう」

「関係ない。ケジメなんだよ、ケジメ」

ふたりは気に入らないことがあると、腹いせに相手の私物をくすねてきては辺りかまわず埋めていた。

ヴァチカン、ローマ、フィレンツェ、オーストリア、フランス……派遣された先々、あらゆる場所に。

教皇下ヴァチカンの誇るクルースニク精鋭集団、その中でも一、二の実力を持つ彼らが腹を立てる相手は、高貴な者以外にない。

教皇を始め、皇帝、国王、諸侯、そして枢機卿。

そんな者たちからくすねた品々、いつか盛大に売り払ってやれば相当な額になることは間違いないだろう。

国家ひとつ買い取って大笑いしてやることもできるかもしれない。

「あの人は他人を裏切りすぎるからな。少し懲りた方がいい。罰だ、罰」

この日は、穴掘り男が上司である教皇インノケンティウス三世に腹を立てていた。

フランスに「イングランドを乗っ取れ」と囁いていたはずの教皇。しかし彼はその言葉を裏切り、すでにフランスが占領していたイングランドの領土を、かすめ取るように教皇保護領としてしまったのだ。

「……今時裏切りなんぞ珍しくもないだろうに。まったく、貴様の仁義には涙が出る」

「お前が一度でも泣いたことがあるか」

「そんなお人好しなことをやっているといつかその首取られるぞ、隊長殿」

彼は、剣の切っ先を穴掘り男の喉^{のど}に向けた。

「我々は言葉というのを“守る”ために発明した。それが例え“仮”であり、“嘘”であったとしても、世界というものを秩序だてて我が物とするには、それしか方法がなかった。だが今は——」

こちらを眺めている男の蒼い双眸に、自らの姿が映る。

男と同じ白い外套を羽織り、涼しい銀髪を風に揺らしているクルースニクの姿が。

「言葉など裏切るために存在している」

「……………」

「約束は、守られるか否かが問題なのではない。いつそれが破られるかが問題なのだ。裏切らねば裏切られる。家がひとつ滅び、国がひとつ消える」

「ユニヴェール」

男がため息をついた。

肩をすくめ、そして——……、そして……。

そして、あの穴掘り男は何と言ったのだったか。
世界にどんな嘘をついたのだったか——。



時は中世十五世紀後半、まだ氷解けきらぬ春。

舞台は南フランスの片田舎、パーテル。

町の背後には、鬱蒼と広がる黒い森。入ればたちまち右も左も分

からなくなるといふその森の前には、立ち入る者を監視するが如く大きな古い屋敷が立っている。

昼間は人気もなく静まりかえり、メイドらしき少女が掃き掃除。しかし一転暗い夜が世界を包めば、屋敷には煌々と明かりが灯り、森の奥どこからともなく不気味な馬車が訪ね来る。

あの屋敷には化け物が住んでいる――。

誰もが知っていた。

屋敷の主の名は、シャルロ・ド・ユニヴェール。

遠い昔からここに住み着いている彼は、生ける屍――吸血鬼だと言われていた。

そして、教皇庁がどれだけ手を尽くそうが滅びることのない、吸血鬼を遥か凌駕した化け物だとも。

クルースニクの銀剣で貫かれようが、首を薙かれようが、そして焼かれ灰にされようが、涼しい顔をして蘇る。

祈りの言葉も、神の言葉も、一笑に付す。十字さえ、嘲う。あざわら

冷ややかな銀髪、鋭く彫りの深い相貌。だがフランス貴族出身故の柔らかな物腰。

華やかなる開花の時代。

歌は溢れ、物は流れ、金銀宝玉の採掘が進み、海は拓かれ、ひら貴族は着飾り商人は大きな荷馬車を引く。言葉は惜しむことなく紡がれ続け、荘厳なるカテドラルを見上げる信徒の列は絶えない。

力強いまでに昏い暗黒時代。くら

権力を巡る戦いは数多の宮廷を巻き込み権謀術数渦巻き、髑髏が転がる焦土と荒野に虚ろな凱歌が響く。がいか

神の代理人。その名のもとに魔の粛清は白さを増し、一方緋色の枢機卿は日々金を数える。

闇が濃ければ濃いほど、光はまばゆく輝く。

光が強ければ強いほど、——闇は深さを増す。

「ユニヴェール様、お呼びですか」
遠くで声がした。

「……………」

「ユニヴェール様、お呼びと聞きましたが」

声が近くなり、デスクでうつらうつらしていたシャルロ・ド・ユニヴェールは薄っすらと目を開けた。鮮やかな紅の双眸を二、三度瞬かせ、半分呆けた眼差しを声のする方へと向ける。

「ああ？」

そこには彼のメイドが立っていた。

黒く長い髪に、平坦な黒い瞳。すっかり板についた灰色のメイド服を身に付け、こちらを見下ろしている。

「ああ？　じゃありませんよ。変な時間に呼び出されるから何事かと思えば——」

“変な時間”。確かに変な時間だろう。

レースのカーテンが揺れる窓の外を一瞥して、ユニヴェールは喉の奥で笑った。

陽は高い。本来ならば吸血鬼は柩ひつぎの中で大人しく眠っていなければならぬ。

脆弱な吸血鬼という種族は陽光に焼かれて灰になってしまうからだ。脆弱でない彼にとっては、全くもって他人事だが。

「まだお休みになっていなかったんですか」

言いながら灰色メイドはツカツカとやってきて、盆に乗せていたとグラスをダンツと彼の前に置く。橙色の液体が波々となつがれたグラス。よっぱど冷やされていたのか、グラスはいくつもの水滴をつけていた。

「……パルティータ」

それがメイドの名前だった。

パルティータ・インフィーネ。

「親の仇のようにこれでもかとりおろされたにんじんを、女の甘い血の代わりに飲めというのは無理がある」

「はちみつ蜂蜜入りです」

「……糖分のことを言ったわけではないんだが」

細く長い指でデスクをコツコツと叩いてやると、

「それで、何の御用ですか？」

パルティータはいつものように無視してきた。

とてもメイドの態度とは思えない。が、気にしていても仕方ない。あきらめて、彼は一通の封書を滑らせた。それはデスクの端でぴたりと止まり、彼女がつまみ上げる。

「……お誕生日会のお誘いですか？」

中身に目を通した彼女が、怪訝そうな顔でやや首を傾げてきた。

「ブルゴーニュ公からだ」

「……ブルゴーニュ公？ ああ、ローマ皇帝のご子息の……」

「マクシミリアン」

言って、ユニヴェールは再び窓の外を見やる。

雪のないところでは、小さな花々が蕾をほころばせていそうな陽気だ。何百回目かの凍てついた季節も、もうすぐ終わるのだろう。

「あの男も若いのに苦労者だよ。ブルゴーニュに婿入りした^{むこ}はいいが、たった四年半で溺愛していた妻に死なれ、その深い傷も癒えぬうちに、所詮は婿、所詮はオーストリアからの余所者、フランスにそのかされたブルゴーニュ・フランドルの都市たちは次々反マクシミリアンの旗を掲げて蜂起したときたもんだ。あげく最愛の息子フィリップは蜂起の中心都市“ガン”の保護下に置かれているし、最愛の娘マルガレーテは人質同然にフランスの掌中にある」

吸血鬼は戯曲の台本を朗読するように並べたてた。

「マルガレーテ嬢はフランスのシャルル王とご結婚なさっているのでしたっけ」

「とりあえずはな」

意味深な冷笑を浮かべ、ユニヴェールは背もたれに深く身を預けた。

「その結婚がマクシミリアンと今は亡きフランスのルイ11世との和平の条件だったはずだが——裏切りは常套手段、奥底に打倒ハプスブルクを掲げるフランスの毒蜘蛛ルイは、休戦協定を破って進軍したんだよ。その結果がこれだ。あちこちから攻められ抵抗されてローマ帝国皇帝の皇子ともあろう者が風前のともし火、敗北宣言寸前になるなど、誰が予想しただろうかね」

「それで——」

「パルティータ、お前、私の遣いでフランドルのオウデナールデへ行って来い。お誕生日会はそこで開かれる」

機先を制すと、平素表情を見せることの少ない彼女の顔が、しかめっ面になっていた。

「オウデ……どこですかそれ」

「ブリュッセルの近くだ」

「遠……」

「私の馬で行けばすぐだよ」

眉が寄せられていたパルティータの顔が元に戻る。そして開かれた口から出てきた言葉は、ユニヴェールの予想通りのものだった。

「出張手当は——」

「つく」

苦味を混じえてそう言った後、一拍置いて彼は含んだ微笑をメイドに向ける。手紙の続きなのか、一枚の紙切れをもてあそびながら。

「皇子は今、突き落とされた崖下から這い上がりつつある」

古びた紅玉色をした、穏やかな目。生きて数十年、死して数百年、年季の入った視線。

「お前は、あの男をどう評価するだろうな」



『父公に死なれたブルゴーニュ公女マリアは窮地に立たされていた。反抗する都市民、裏ではフランス・ルイが巧みな糸を引き、領土を奪おうと侵略を始める。』

そんな彼女の苦境を救ったのが、神聖ローマ帝国皇帝フリードリッヒ三世の子息であり、彼女の婚約者であるマクシミリアンだった。千数百名にも及ぶ彼の一行がライン川を下り、ブルゴーニュ領にひとたび入ると、人々は熱狂的に彼を迎え入れたという。主の急逝に混迷を極めたブルゴーニュに現れた救世主だと、彼の行く道は賛辞と喝采で前も見えず、街には無数の旗が掲げられ、夜の闇は燃え盛る松明たいまつで照らされた。

銀の甲冑に身を固め、颯爽と前を見据えて白馬の歩を進める若き皇子の姿は、まるでかの白鳥の騎士、ローエングリンかと思われるほどだった。』

「ローエングリンとはまた大きく出たわね」

つぶやき、パルティータはバサリと本を閉じた。本と言っても、ただ紙束を紐ひもでくくっただけの史記である。主の友人である文筆家が書いたものらしいが、記述がいささか誇大で古臭かった。

しかもそれほど昔のことでもないのに、この内容はすでに懐かしい幻想と化している。

公女マリアはすでに事故で逝去しているし、マクシミリアンがこんなにも歓迎されたのははや過去の話。たったの数年で、民衆は皇子を追い出しにかかっている。

しかしマクシミリアンという男は、打ちのめされて背を向けすぎると家に帰るような若者ではなかった。

口端を噛みしめじつと時を待ち、そして反撃を始めたのだ。

反逆都市ユトレヒトを落とし、クレーフエ、アルンヘム、ゲルデルンを落とし、つい先日、件のオウデナールデくだんを落としたところらしい。

破竹の勢いとはこのような状態を言うのだろうか。

「そんな危険な所へいたいけなメイドをひとりで遣いに出すなんて紳士の風上にも置けない」

ユニヴェール所有の黒い馬車に揺られながら、彼女はぼそりと毒づいた。

正確には、主は別ルート——帝国領アーヘンへ寄ってくると言っていた——で来るらしいのだが、何をしに行ったのやら。

「パルティータ様、着きました」

揺れが止まったと思ったら、低い声がして馬車の扉が開けられる。顔の半分を磁器の仮面で隠した黒マントの男が手を差し出していた。骨だけの、手を。

「ありがとう」

これくらいのことをイチイチ気にしていたら、吸血鬼のメイドなどやっていられない。彼の部下には奇妙な化け物が多いのだ。

彼女はお姫様よろしく馬車から降り、目の前にそびえる石の要塞を見上げた。

遙か上ではためいているのは、ハプスブルク家の紋章“ドッベル・アドラー双頭の鷲”が描かれた軍旗。

背景は夜だった。月も、星もない完璧な夜。

誰が建てたのかも定かではない堅牢な戦城は、無愛想に無言。

お誕生日会をやっているのではなかったかと首を傾げれば、風の向きが変わり一瞬だけ騒がしい歓声が耳元を過ぎてゆく。

「しばらくすればユニヴェール卿もお着きになるかと思いますが、お待ちになりますか？」

「そうね……」

御者に問われて視線を足元へと落とすと、

「貴女がユニヴェール卿のお連れ様、パルティータ・インフイーネ嬢でございますか？」

突然甲高い男の声が響いた。脳裏をよぎった印象は、夜中の向日葵。

「……………」

顔を上げれば、案外的外れではない極彩色の化け物が立っていた。先っぽに鈴のついたトンガリ帽子。ひよろりとした体軀を彩るのは目の痛くなるような色使いのダイヤ柄衣装、足元もトンガリ靴。

——道化師だ。

「それだけの物をお召しになれるのは、世の中広しと言えどもかの御仁のお身内だけかと存じます」

「……………」

その言葉は言いすぎだったが、確かに、パルティータの主が彼女のためにあつらえてきたものはなかなか高価だった。たかが公国の君主——しかも落ちぶれた——と会うにしては。おまけに“誕生日の祝賀”という本来の主旨を全く無視した、いかにも吸血鬼一味な趣味でもあった。

膝丈までの黒ドレスは総ビロード。意匠には惜しげもなく黒レースが使われまくり、縁取る刺繍の金糸銀糸はすべて本物。

そして首飾りはダイヤとルビーが連なる骨董品。

長い黒髪を飾るのはこれまたダイヤがあしらわれた黒レースのへ

ツドドレス。決して枯れない深紅の薔薇が付いている。

主は自分が用意したにもかかわらず、仮装大会かと大笑いしていた。

失礼な。

「私はクンツ・フォン・デア・ローゼンと申します。ブルゴーニュ公の道化でありますから、一時だけでも信用してくださいませんか」
たしかに高貴な人々は専属の道化師を持っていることがある。
どうしたものかとパルティータが傍らの御者を見上げると、

「……………」

彼もまたどう反応したらいいのか分からないのだろう、肩をすくめてくる。

主には、いい加減な手下も多い。

「我が君が貴女とお話したいことがあると申しております」

「ユニヴェールではなく？」

「貴女です。卿へのお手紙にも付け足しておいたのですが。公は貴女ともお話がしたい、と」

それで主は寄り道して遅刻なわけだ。

「……………」

ローゼンのおどけた白塗りの顔。真意を読んでやろうと沈黙してじつとうかがえど、彼の黒い目の奥までが悪戯っぽく笑んでいて何も見せない。

「議題は何ですか」

「ユニヴェール卿を討つべきか否かについて」

彼はサラリと言ってきた。

「へえ」

しかし言われたパルティータも顔色ひとつ変えなかった。

「さア、こちらへどうぞ」

道化が大仰な仕草で城門の奥へと彼女を促す。

「分かりました」

彼女は案内されるまま、紋章はためく城へと乗り込んだ。

番外編【最後の騎士】前編（後書き）

校正時 B G M ∴ J . S . B a c h マタイ受難曲 39 . 「憐れみ
たまえ、わが神よ」

番外編【最後の騎士】後編

主からすれば“ たった ”二十数年の人生を従えるだけのマクシミリアン。

彼は、力の強い目をした男だった。

と言っても睨まれたわけではないし、目つきが悪いというわけでもない。目つきが悪いなら主の方が数段悪い。

戦況が彼の後押しをしていることもあるのだろうが、意志の強さが目に表れている——昔話で語られる騎士のような男だったのだ。

バカが付きそうなくらい愚直で、悪く言えばあのアンヌ・ド・ボージュー率いるフランスの罠には簡単にひっかかりそうな男。

「ユニヴェール卿は、一体どれだけのクルースニクを殺してきただろう」

「たくさん、でしょう」

パルティータが一片の感慨もなく答えると、マクシミリアンの柳眉が少しだけひそめられた。

「ではあの人が求めているものは何だと思う」

「何も」

「……………」

ブルゴーニュ公の明るい琥珀色の双眸が、祝宴に湧く広間へと向けられた。

ふたりが立っているのは、その広間から中庭を見下ろすためのテラスだ。

しかしおそらくは観賞用ではなく戦闘の準備、槍の試合などをするための庭なのだろう、暗闇の向こうに見えるのは、申し訳程度に緑の草が生えた荒地だけだった。

「卿は、何も求めておりません。強いて言えば——楽しさというも

のを追っていらっしやいます」

「……あの人は三百年前に一度死んだ。そう聞いているが、何故亡くなったのだ？」

「さあ」

知らないことは本当だった。

シャルロ・ド・ユニヴェールがどうして死んだのか、どうして吸血鬼になったのか、彼女は知らない。

史書の行間に何があったのか、知る由もない。

主は彼女に話さない。尋ねたこともないだけだが。

「貴女は——人間か？」

再びマクシミリアンがこちらを見た。

穏やかな、若獅子。

「人間です」

時を置かないパルティータの答えに、

「主よ キリエ エレイン 憐れみたまえ」

男が目を伏せ胸元で聖印を切る。敬虔な教徒なのだろう。聖域なヴァチカンで、緋色の衣に身を包みながら利に向かって歩いている者たちよりもずっと。

「貴女もあの人に魅せられた人間のひとりですか」

なぜか彼が少々の落胆を混ぜて嘆息してきた。

「魅せられた？」

意味が分からず訊き返した言葉が、まだ冷たい突風にさらわれる。城を取り巻く芽吹きの木々。風はその隙間を駆け抜け、夜の彼方へ消えていった。

主が近くまで来ているのかもしれない。あの化け物が動くとき空気がざわめく。

否——魔がざわめく。

「私は——かつてあの人を見たことがある」

“見た”

「幼い頃幽閉されていたヴィーンの館から見たのだ。あの吸血鬼は、

反乱軍と皇帝軍、双方を血の海に沈めた。そして折り重なる屍の上で微笑んでいた。……街は、霧のような血臭で満ちていた」

想像しなくても目に浮かぶ。

「彼がこちらを見上げて、私の視線がああ紅い瞳に囚われた時、私は思ったのだよ。コイツは世界の敵だ、とね」

世界の敵。

「皇帝の敵でもない、教会の敵でもない。彼は、生きる者の敵だと本能的に思った」

マクシミリアンの片手が、帯剣した剣の柄つかにかけられる。流浪の王に似合いで、黄金で飾ったような派手なものではない。

しかしあるいは通常帯びている剣ではないのかもしれない。なにかにせ今日は吸血鬼の訪問が予定されているのだから。

「人という生き物は、光に憧れる。輝ける太陽のような光に。しかし人という生き物は同時、闇の深淵に落ちたがるのだ。一点の光もない昏い闇に手を伸ばしたが。だからこそあの人の冷たく優しい死の闇は、人の心を捕らえて放さない。引きずり込む」

——そうだ。

パルティータはふと思い出した。

この男は今、突き落とされた地獄の底から這い上がっている所だった。

おそらく何度も、吸血鬼ユニヴェールの目を思い出し、闇へと身を投げたくなったのだろう。望むまま、あの穏かな底無しの闇へと「我々が剣を抜かなければ、抗あらがわなければ、世界はやがて彼に呑まれるだろう」

だがこの男は父親譲りの忍耐力を持っている。常人ならば絶望を抱くような極寒でさえじっと耐え忍ぶことができるほどの。

「彼は世界の敵だと思った。そして、滅ぼさなければいけないと思った」

マクシミリアンの口元が結ばれ、言葉が途切れた。

パルティータは静かに紅唇を開く。

「ユニヴェールを滅ぼす手立てはないか、と？　それが私と話したいということの内容ですか？」

「……………」

答えはない。彼女はそのまま続けた。

「我が主を滅ぼす手立てなどありません」

夜を睨んだマクシミリアンの顔がやや険しくなる。

「滅びることがないからです」

「始まりある者には終わりがある」

彼が真正面から見下ろしてきた。

彼女は水平な眼差しで見返した。

「あの方は、世界の理の外ことわりにおられます」

「本当に——」

「滅ぼすことは不可能です」

「……………」

決して威圧的ではない皇子の目が、しばし沈黙のままこちらを見据えてきた。

そして、漏らす。

「嘘だな」

「……………」

「貴女は知っている。だからこそ貴女の目はあの人に囚われていない」

再び夜風が巻き上がった。皇子の金髪が、パルティータの黒髪がさらわれる。

「知らないってば」

パルティータは半眼でつぶやき、

「貴方はユニヴェールを“見た”だけだからそう思うのです。我が主は——」

「滅ぼしたければ滅ぼせばいいさ」

彼女が続けた台詞に、突如として貫くテノールが重なった。

「だが、お前には私を滅ぼすよりも先にやらねばならんことが山の

如くあるだろう。違うか？——マックス

「——！」

声はブルゴーニュ公の背後耳元で囁かれ、彼の目が開かれる。次瞬紅のマントがひるがえり、闇を白刃が走った。

「やはりお前自身が私を呼んだわけではなかったか」

「……………」

声の主は、自らに振り下ろされた銀の刃を白い片手で掴んでいた。磨かれた刀身を、沈黙の時と共に黒い血が伝ってゆく。

退魔に使われる銀の剣。汚れを知らない光を放つ剣身の向こうに、ソレはいた。

乱れぬ銀髪、落ち着き払った紅の双眸、いささか皮肉げな笑みを乗せた口元。そして闇と同化した漆黒の長外套。

シャルロ・ド・ユニヴェール。

吸血鬼の中の化け物。パルティータの主。

「曲がったことの大嫌いなお前が、自ら私を呼ぶわけもない」

「パルティータ嬢と貴公がいらっしやると聞いたのは、今日です」

「やはり」

言い置いた瞬間、ユニヴェールがマクシミリアンの手首を蹴り上げた。

「！」

痛みと衝撃に手放された剣がクルクルと軌跡を描く。

そしてユニヴェールの手に。

同時マクシミリアンが新たな剣を抜き、銀線が閃いた。

静寂の夜に重い金属音が響き渡る。

——静寂？

「二振りも用意していたか」

いつの間にか、広間が静まり返っていた。

何十という対の目が畏怖と緊張をもって息を呑み、テラスを見つ

めてくる。

「しかし……私が銀剣を持つと、誰でも初めは驚いてくれるんだがね」

斬りかかった格好のまま、主が飄々とのたまう。

握った剣の柄から、彼の血が滴った。

灰色の石に、ぽつぽつと赤い華が咲く。

利き手で剣を受け、その利き手で剣を振るう。痛みを感じないがゆえの荒業だ。

「並みの吸血鬼ならば滅びに瀕しもしましょうが、貴公に銀など無意味でしょう」

剣を受けた格好のまま、マクシミリアンが平然と答える。

そしてユニヴェールが力を緩めたのだらう、皇子は刃を滑らせ払ってユニヴェールの剣を退かすと、そのまま自分の剣を鞘に納めた。

「高い評価をしていただけで光栄の極み」

吸血鬼も銀剣を放り出す。

血痕新しい石の上、カランカランと派手な音を立てて、剣が転がった。

「私は――」

「滅ぼしたければ、滅ぼさなくてはならないのなら、滅ぼしてみればいいのだよ」

言い捨てる、吸血鬼は黒い外套をひるがえしてズカズカと広間へ入っていった。マクシミリアンが眉を寄せてその後を追う。

「だがな、マックス。そういう一人前な事は一人前の王になってから言え。貴様の甘いやり方では手に入るものも手に入らん。そして手に入れたものはすぐに失われる」

「何のことですか」

「約束は守るためにあるのではない。破棄するためにあるのだよ。貴様は今まで何度フランスに裏切られた。何度市民に裏切られた」

それが、この皇子が“騎士”と呼ばれる所以だった。

槍の、剣の、戦の出来る者はいくらでもいる。

だが、一度結んだ約束を決して破ろうとしない君主は、他にいない。この時代、そんなことをして生きて生き残れるわけがないのだ。処世が下手なのは致命的だ。

「裏切られる前に裏切れとおっしゃるのですか」

「推奨するわけではないさ。それも選択肢に入れるべきだと言っているのだ」

広間の最奥まで進み、吸血鬼がクルリとこちらを向く。

そしてふてぶてしくも玉座に腰をおろした。長い足を颯爽と組んで。

「こんなちっぽけなところで喘いでいるような王では、到底私など討てまいよ」

吸血鬼の柔らかな声音が広間を撫でる。

さつきまで騒ぎ浮かれていた者たちは、顔をひきつらせ声を失くしていた。

浴びるように飲んでいた酒も、キレイサッパリ飛んだことだろう。誰も指ひとつ動かさない。

「私とてここで終わるつもりはありません。けれど、裏切る気もない」

ユニヴェールと対峙しているマクシミリアンだけが、厳として己を保っていた。

「……………」

吸血鬼が頬杖をつき、銀髪の下から斜めな視線でマクシミリアンを見上げる。

「——それが私の性分ですから」

皇子が笑ってキツパリ告げる。

「……………」

玉座に座った貴人はしばらくの間騎士の顔を眺めていたが、おもむろに血に塗れた右手を外套に差し入れ小さな木箱を取り出した。

繊細な細工の施されている長方形の箱。

そしてまた一時それを眺めるユニヴェール。

と、彼はふいにマクシミリアン目掛けて放り投げた。

「……これは？」

「祝いの品にやろう」

受け取ったマクシミリアンが箱から取り出したのは、一本の羽ペンだった。皇子が不思議そうな顔で吸血鬼を見返す。

「それは、インノケンティウス三世がフランスを裏切る書面にサインをした時の物だ」

「インノケンティウス三世！？」

一瞬場がどよめいた。

無理もない。

インノケンティウス三世と言えば、良くも悪くも圧倒的な権力を誇った、三百年も昔の伝説的な教皇だ。

「それを使って、お前は決して裏切らぬ言葉を書くといい」

ユニヴェールが長い指で自らのあごをなぞる。

「そして高潔に生きても君臨できるのだと、私と世界に証明してみればいい」

「……ユニヴェール卿」

「お前が裏切りの文字を書かぬ限り、言わぬ限り、これからのあらゆる戦いにおいてお前が落命することはなからう。敗北は免れないとしても」

「それは、この双頭の鷲は卿のご助力をいただけると言うことですか？」

水を打ったような静けさの中ズバリと言ってのけたのは、華やかな道化、クンツ・フォン・デア・ローゼンだった。

「……………」

吸血鬼の口端に、道化と同じ笑みが浮かぶ。悪戯めいた、笑みが。そして男は人差し指をぴっとたて、薄い唇に二度、ゆつくりとあてた。

——公然の秘密。

「……御意」

意を察し、満足げな顔をしてクンツが深く腰を折る。

それを見やり、やおら吸血鬼がすつくと立ち上がった。

「クンツ、グラスにワイン」

「はい。かしこまりまして」

言い方は、まるで自分がこの主であるかのようにだ。

「皆、杯を取れ。誰かマックス——ブルゴーニュ公にも杯を」

ユニヴェールの高らかな号令で、凍り付いていた人間たちが顔を見合わせ動き出す。空のグラスが回され、あちこちでワインが注がれる。

マクシミリアンにもグラスが手渡された。

グラスの中で揺れているのは、玉座でこちらを見渡している吸血鬼の双眸と同じ、郷愁の紅。

「貴様らの主はとんでもない“騎士”らしい。だが私は、この男と貴様らがそれなりになって私を滅ぼしに来ることを楽しみに待っているよ。その時は覚悟しておけ、誰一人生きて帰ることはない」

ユニヴェールが軽快な靴音を響かせて広間の中央へと数歩踏み出す。黒衣の影が石の床を滑り、主の後を追った。

彼を目で追う者たちも杯を持って立ち上がり、顔はすっかりやる気である。

「ブルゴーニュ公に。未来のローマ王に」

吸血鬼が高々と杯を掲げた。

「そして未来の神聖ローマ帝国皇帝に、——ブロースト乾杯！」

『乾杯!!』



「――帰るぞ」

広間が元通りの喧騒に包まれてすぐ、主がパルティータの元へとやってきた。

「ワイン一杯だけで帰るんですか？」

近くの傭兵に勧められるまま、ブルゴーニュ特産だというお菓子を片っ端から食べていた彼女。黒ビロードからクッキーかすを払いながら少々不機嫌に言った。

「もう用はない」

「そんな」

しかし不平不満を並べ立てる間もなく、

「お帰りでしたらグラスはこちらへ」

盆を持ったクンツに口を挟まれる。

あげく吸血鬼は、

「ウチにもこんな気の利く奴がいればな」

などつつぶやく。

パルティータは口を半月型の笑みにして返した。

「では今度、にんじんジュースを全部お飲みになるまで盆を差し出して横で待っております」

すると、

「それはありがたい」

無理矢理作られた笑顔で、売り言葉に買い言葉、主が言った。

これはもう実行するしかない。

彼女は開いた左手に右の拳を叩きつけた。

「……………」

吸血鬼がふいと目を逸らす。

そして無言のまま広間を出、狭苦しい石の階段を滑るように降りて行く。

――拗^すねた。

パルティータは嘆息し、

「冗談です」

言う。すると、

「パルティータ」

何だか恨みがましい視線を投げつけられた。

なかなか単純な人（死人）なのだ。

「冗談です。私もそんなに暇ではありませんから」

「暇をやろうか」

何気なく言ったただけなのに、吸血鬼がピタリと止まり勢いよく向き直ってきた。

「暇をやろう」

男は、とんでもなく素晴らしいことを思いついた時の顔をしている。

「？」

「私にはあくどい領主どもに通行許可をもらう必要などない。遠出をしたついでだ、どこへでも好きなどころへ連れて行ってやろう」
吸血鬼はパルティータの手を取って軽く口付けると、さっさと階段を駆け下りてゆく。

うるさくて面倒くさい主から解放されるのが“暇”なのであって、それがオマケで付いてきたら暇にはならない。と思ったが、当面の世界平和のために言わない。

そんなこんなでうるさくて面倒臭い主の後をひたすらついてゆくと、男は城門近くでふと肩越しに振り返ってきた。

視線の先にあるのはパルティータ。ではなく、見送りについてきた道化。

「私を呼んだのは貴様だな？ クンツ」

「バレましたか！」

全く悪びれていない道化の笑い声。彼の派手な衣装が、風にあおられひらひらと暗い夜に浮かび上がる。

「あの男、忠義な臣を手に入れたものだな。……マックスに伝えておけ。ガン市とヴェネツィアと……フランスには気をつけろ、とな」

光のない闇の中、蒼白い吸血鬼の麗貌も浮かび上がる。

死の悲哀など微塵も感じさせない、未来だけを嬉々と見据える優雅な化け物。

「ルイは死んだが、新王シャルルの姉、摂政アンヌ・ド・ボージュールも手強いぞ」

「―――御意」

「では行くか」

ユニヴェールがパルティータを手招く。

こうして一匹とひとりの招待客は短い訪問を終え、遠くオウデナールデの城門を出た。

金と黒の地に描かれた紋章、ドッペル・アドラー双頭の鷲。これから世界に拡がってゆくだろう軍旗のはためきを後ろ背に。

「あの方はおそらく裏切りませんよ。貴方に対しても、世界に対しても。しかしユニヴェール様……ハプスブルクとフランスを戦わせる気ですね？」

夜闇の中、ふたり立ち尽くして馬車を待つ。

「その方が面白いだろう？　どちらが勝つか皆で賭けでもするか」

「現時点では……」

言いかけると、主が指を立てて制止してきた。

「まだだ、パルティータ。全ては何かと楯突いてくる教皇庁を黙らせてからだ。久々に腕が鳴る」

「肩も鳴ってますよ。ご老体ですからねえ」

「……………」

主の顔が真っ平らになり――、視線が夜の奥へと向けられる。

「グラナダでも行くか」

“中世最後の騎士”。そう呼ばれたマクシミリアンは、常に戦いの最前列に行く総帥となり、一生の大半を裏切りなき戦いに費やし

た。広大な欧州を駆け巡り、艱難辛苦に耐え、結婚という札を武器に、ハプスブルクの礎を築いていった。

いわゆる“ 幸いなオーストリアよ、汝は結婚せよ” の始まりである。

そして時を移し1519年。ハプスブルク家のカール五世とフランスのフランソワ一世との間で、皇帝選挙を舞台にしての壮絶な一騎打ちが繰り広げられることになるのである。



「約束は、守られるか否かが問題なのではない。いつそれが破られるかが問題なのだ。裏切らねば裏切られる。家がひとつ滅び、国がひとつ消える」

「ユニヴェール」

男がため息をついた。

肩をすくめ、そして——……、そして……。

そうだ、あのお人好しはマクシミリアンと同じ事を言ったのだ。

「仕方ないだろ。俺の性分なんだよ」、と。

いずれユニヴェールを“ 滅ぼすべき敵” と映すことになる、揺るぎない蒼の眼差しで。

THE END

番外編【最後の騎士】後編（後書き）

2004年

GENOCIDE 一〇. 汝の名は世界の領主

人は、影の上に立っている。

お前が光ある場所にいる時はいつでも、お前は自らの影の上に立っている。

それが見えない時、お前は闇の中にいる。

先達に、「前を見て歩け」と言われたことはないか？
後ろを振り返るなど。

絶望の淵が迫ろうと、必死に前を向け。

かすかに見える光を追って、足を止めるな。

そう言われたことはないか？

それは正しい。

闇はいつでもそこにあり、振り返ったお前たちを優しく手招く。
どこまでもついてくる影は何も言わぬままお前たちを誘う。

だからこそ人はひたすらに己の道を前へと走るのだ。

光を追い、神を追い、ある者は冷徹な知性を持って、ある者は情熱的な感性を持って、人間を語り世界を語り、生き抜こうとする。

足元の影を見ないよう、ひたひたとついてくる闇に吞み込まれぬよう。

人は闇を欺くために人を欺き光を欺く。

人はその裏切りの罪ゆえに光に救いを求める。

——中世暗黒時代。

それは罪の深さゆえに絢爛な光で世界を彩った、人と闇と光との駆け引き。

喧騒と祈りに満ちた華麗なる生死の闘い。

人々は勝つか負けるかに鎬しのぎを削り、深まる闇を必死で追い払おうとする。

だが、この世に生まれたその時すでにお前たちは世界に負けているのだよ。

お前たちは奇跡を勝ち取った。だが同時負けている。

全員が、だ。

王も教皇も貴族も姫も、農民も商人も芸術家も詭弁屋も。
生きる定めを背負わされたその時に、誰もが、栄光をその手に握りしめながら世界に負けているのだ。

問う。

それなのにお前たちはこの期に及んで、一体何を恐れる？



春が来た。

そしてメデイチの時代が去った。

ローマ王マクシミアン一世の婚約者であったアンヌ・ド・ブルターニュを彼から奪ったフランス王シャルル八世は、1491年、彼女と華々しく結婚した。

その翌年、1492年。

春雷が鳴り響く中、フィレンツェの後見人であるロレンツォ・デ・イ・メディチが、若くしてその生涯を閉じた。

そして同時、闇夜を切り裂いた稲妻が地上へ走り、フィレンツェの華とも称されるサンタ・マリア・デル・フィオーレ大聖堂の尖塔が閃光に叩かれ砕け落ちた。

激しい雨音を一瞬にしてかき消したその轟音は、街を揺るがし家々の窓をびりびりと震わせた。

それはまるで時代の終わりを人々に告げるようであり、終わりと共に来たる新たな始まりへの警告のようでもあり、フィレンツェのみならず諸国がその一報に息を呑んだ。

メディチの隆盛を望む者も、失墜を望む者も、皆言葉を失った。

ロレンツォという良くも悪くも偉大であった者の後を継ぐべき者がいないことを、誰もが感じていたのだ。もちろんメディチ家の後継ぎはいる。

だが、時代の後継ぎはいない。

全てが終わろうとしていた。

ロレンツォという巨星が落ち、教皇インノケンティウス八世も、ドイツ国王——神聖ローマ帝国皇帝フリードリッヒ三世もすぐにその後を追うだろうと思われていた。

メディチはこれから興亡を問われる、フランス国王シャルル八世はようやく姉の摂政から脱し自ら意志を持ち始めたところだ。そこ

に新しい教皇が立つ。そして新皇帝が選ばれる。

全てが終わろうとし、全てが新しく始まろうとしていた。

時代の手綱を握るのは誰だ――。

各国の権力者たちは眼の前に広がる混沌おののに慄き、だがそれぞれに確かな野望を持って口元を引き締めた。

隙を見せてはいけない。階段を落とされるわけにはいかない。剣を取り、目を光らせ、虚偽と真実を駆使して闘わなくてはならない。

喪失と混乱と静かな緊張が、音もなく大陸に広がっていった。

そして瞬く間に全土へ広がったフィレンツェの巨人の死は、もちろんこの男の耳にも入っていた。

「何故私が決して滅びぬか、話したかね？」

「――いえ」

整えられた銀髪に細面の伶俐な顔、紅の双眸に柔和な口元からのぞく牙。

祭壇へと祈りを捧げるべき長椅子に、罰当たりにも黒衣の長身を無造作に横たえているその男は、祀られた十字架を冷ややかに見上げる。

「そうか」

男が今いるその場所はフィレンツェ。

先日ロレンツォ・ディ・メディチの葬儀が営まれたばかりの、サン・ロレンツォ教会だった。

白い壮麗なアーチが左右に連なり、だが無駄な装飾は許す限り省かれた、清廉なメデイチ家の霊廟。

「あの時貴方は話を逸らしてしまわれた」

「サヴォナローラはどうしている？」

「またも男は話を逸らした。」

「相変らずヴァチカンを怒らせるようなことばかり言っています。けれど、彼の言っていることは間違っていないと思いますよ」

男は寝転がった姿勢のまま、やや顔を後ろへ逸らして相手を見やっ

った。そこに立っているのは、金髪碧眼の綺麗な顔立ちをした若造。

「あの狂信者をかばうとは、どんな心境の変化だ？ ミランドラ伯」

「人間は神にはなれません。けれどそれに近い者にならばなれるのです。しかしそれと同じく人間は獣にもなりうるのです。我々は神によって自由な意志を与えられました。その意志次第で人は良くも悪くもなり、神にも獣にもなるのです。だからこそサヴォナローラの言うように高潔に生きなければならぬのですよ。……今の教会は腐っています」

「高潔」

男は小さく笑った。

「貴方はいつもそうやって鼻で笑いますね、ユニヴェール卿」

咎めるような口調で言われて、男——シャルロ・ド・ユニヴェールはミランドラから視線を外し、再び祭壇を見上げた。

六本のロウソクに照らされる磔はりつけのキリスト像。

「ハインリッヒ（四世）は幼き頃散々諸侯にもて遊ばれ、あげく二人の息子に裏切られた。フリードリッヒ（二世）も息子に裏切られ、そして諸侯にも裏切られた。イングラントはどうだ。私の元に新しいメイドが来た前年、エドワード五世は弟君と共にロンドン塔へ幽閉されたそうだな？ 叔父のリチャードによって」

「……………」

「その後の沙汰は何もないが、教えてやろう。彼らはすでに死んで

いる」

ユニヴェールは十字架を見つめたまま続ける。

「カエサルはブルータスとカシウスとに裏切られ、イエスもまたユダに裏切られた」

燭台の炎が嘲笑うかの如く揺れ、吸血鬼の白皙に落ちた影もあわせて揺れる。

「どれだけ陽光が世界を照らそうとも、どれだけ松明^{たいまつ}を並べロウソクに火を灯して夜を遠ざけようとも、人の足下には闇がある。人はそれを見まいと、囚われまいと、ひたすらに前へと走るのだ。時代の濁流に吞まれ闇に落ちまいと背徳を重ね、それゆえ必死に神に祈り赦^{ゆる}しを乞う」

感慨の欠片も浮かんでいない紅の双眸は、祭壇から離れない。

「それが私の見てきた三百年だ」

シャルロ・ド・ユニヴェールは、人ではない。

吸血鬼、しかも陽光を浴びても灰にならず、聖水もサンザシの枝も踏みつけ、ロザリオはへし折り、銀の弾丸は空中でつかみ、銀剣で貫かれてさえ何度でも復活するという、吸血鬼の中の化け物と呼ばれる吸血鬼である。

そして三百年という長き年月を、時代の影として生きてきた。

今はパーテルという南フランスの田舎街に屋敷を構え、メイドひとり猫一匹、その他化け物三匹と住んでいる。

「高潔でいられる者などいない、と？」

「そんなことは言わんよ。好きにやるがいい」
投げやりな言い方だった。

「貴方は——！」

「ミランドラ伯！」

ミランドラが柳眉を跳ね上げ何か言いかけたそれを遮って、教会の入り口で若者の声がした。

「ジョヴァンニ様（ロレンツォの息子）がお呼びですよ」

「……すぐ行く」

「すぐですよ！ お時間があまりないそうですからね！」

「……………」

ユニヴェールはゆっくりと身を起こし、若者が小走りに消えていった方を見やる。

「今のは？」

訊くと、

「アカデミーで彫刻をやっているミケランジェロ・ヴォナローティです。色々な知識を吸収したがる若者で、私の話もよく聞いてくれます。将来有望ですよ」

先ほどの激昂とは違って変わって、柔らかな笑顔でそう言われる。ユニヴェールはミランドラを見つめ、彼と同じような、だがわずかな背後に含んだ微笑を浮かべた。

「ああ、アレはきっと良い芸術家になるだろうさ。レオナルドと全く対照のな」

そして彼は祭壇に向き直り、言う。

「ロレンツォを亡くしたのは惜しかったな。あの男は芸術に明るかった」

「……はい。ですが人の命が尽きるのは仕方のないことです。それに、やがて教皇もお亡くなりになりますよ。サヴォナローラがそう予言しましたから」

ミランドラの言葉に、ユニヴェールはしばし黙してからつぶやいた。

「……人間は自らの意志で自らを作るのではなかったか」

「そうですね」

「ならば何故予言などができる？ 神の啓示がくだる？ 人は自らの意志で自らを作りながら、それでもやはり箱庭の中ということだな？」

「神は我々を超越したところに存在しているのです。生と死は神の

領分なのですよ」

「……………」

聞いて、吸血鬼は立ち上がった。

そしてくるりと身をひるがえし、美しい異端の人文主義者^{ヒューマニスト}を見据える。

「生と死は神の領分。なるほどね。だが私が決して滅びぬわけは――」

彼は言いながら歩を進め、ミランドラとすれ違う。

ゆつたりと流れる動作の全ては、彼がフランス貴族の出身ゆえのこと。

強大な力の荒さもなければ剣士めいた威圧もなく、だが過ぎた空気が冷たい光の刃の如く、炎が這うような悪寒は教会の温度を零下に下げる。

靴音が止まった。

その静寂をテノールが埋める。

「理由はただひとつ。私が神を殺したからだ」

「――は!？」

予想だになかった言葉に、ミランドラは叫んで振り返る。

「……………」

だがそこにはもう、誰もいなかった。

入り口へ向けて歩んでいたはずの男の姿は跡形もなく、そこに誰かがいたという熱さえ残っていない。

シャルロ・ド・ユニヴェールは吸血鬼。

それは生きる屍。悠久の死人。

「貴方は……」

始めからこの聖なる場所には、ミランドラ以外、生は存在していない。

◆ ◆ ◆
「黒騎士のベリオールが明日パーテルの屋敷を訪問したいってさ」
アスカロンはヤル気なく座ったまま、主を見上げた。

「ほう」

大聖堂の上に腰を落ち着け、月を背負いながらフィレンツェの街を見下ろす主、シャルロ・ド・ユニヴェール。

ナントカと煙は高いところに昇りたがるとはよく言ったものだ。

「どうとう動き出すか」

ユニヴェールは黒衣から一通の手紙を取り出し、意味深げに薄笑って眺める。

どこかの令嬢からの恋文かと思間違うほど上品なそれは、あのネジが外れた若吸血鬼、ロートシルト伯爵からのものだ。

内容はただ一言。

「A t t e n t i o n .
」

——気をつけろ。

色気も味気もない。

それでも不滅の吸血鬼はニヤリと笑うと、白い手袋の指で自らのあごをつまんだ。

「あまり大人しくしてるとそろそろボケるかもしれんな。そんなことになってあのメイドに馬鹿にされるなら死んだ方がマシだ」

そして彼はサラリと世界に告げる。

「ひとつ、時代の息の根を止めるとするか」

GENOCIDE 0. 汝の名は世界の領主（後書き）

ユニヴェール.. [仏] Univers 世界

執筆時BGM・Vivaldi [ヴァイオリン協奏曲8 <四季

> 第二番 夏 第一・三楽章]

砂のような赤を帯びた大きな月が不気味に輝く春の夜。

凍れる冬の呪縛から放たれ浮かれる世界を笑う、肌寒い夜。

パールの町はひっそりと暗い眠りにつき、しかし坂の上から家々の屋根を見下ろす古屋敷には、チラチラと火が灯っていた。

いつ誰のために建てられたのか分からぬその屋敷は、大きくはあれど賞賛に値するほどの代物ではなく。連なる窓の装飾も緻密で繊細だが、その他に目を引くような飾り気はなく。

だが、だからこそそれは闇に同化し、得体が知れず。

屋敷を取り巻く若葉の木々は静かにさざめき、周囲に咲く青や黄色の小さな花々は冷たい夜風に吹かれて揺れる。背後に広がる黒い森は沈黙の中に嘲笑を潜ませる。

軽やかで美しい夜は、それゆえに不安を運ぶもの。

光溢れる幸せが、絶えずその崩壊への怯えをもたらずが如く、湖面の静寂は来たる嵐の影をその水の上に映すのだ。

波がないからこそ姿はしっかりと見える。

静けさゆえに近付く足音は嫌でも聞こえる。

望もうと望むまいと、それはやってくる。

「暗黒都市は明日ヴァチカンに向かって進軍する。――わざわざそれを知らせに来たのか？ ご苦労なことだな、天下の黒騎士殿が伝令なんぞをしてくださるとは」

紅茶をすすりそう言い放ったのは、優雅に足を組んでいる黒衣の男だった。屋敷の主、化け物吸血鬼のシャルロ・ド・ユニヴェール。始末が悪いことに、彼の口から流れ出たその言葉は嫌味ではなかった。

本気で馬鹿にしているのだ。

しかし対して立っている黒騎士は、鼻先で笑ってすぐさま切り返す。

「アンタのところに下手な輩やからは遣いにだせなくてなあ」

「喰われる、か？」

「アンタのところに出来る伝令は交渉係も兼任だ。だがそこらの若造じゃアンタにビビって交渉なんか出来やしねえ」

「魔が魔を恐れるなど、話にならん」

「今じゃ暗黒都市の誰もが知ってるんだ。アンタは敵じゃねえが味方でもねえってな。……知ってるか？ ユニヴェール邸への伝令を預かるってのは出世コースなんだぜ？ 滅びと紙一重のな」

「ほう」

ユニヴェールがつまらなそうにつぶやいて、紅茶を置いた。

底に残ったわずかな芳香が、ロウソクの炎に霧散する。

「ではお前は何を交渉しに来た、ベリオール」

「分かっていることをいちいち訊き直すのは効率的じゃないと思うねえ」

魔が集う暗黒都市、ヴィス・スブランドウール。

華麗なる悪徳の名を冠したその都市を統べるのは魔の女王。

そしてユニヴェールの前で不敵な笑みをたたえているウォルター・ド・ベリオールというこの男、女王直属の黒騎士なのだ。

野心に溢れ、肉食獣の目を持ち、獲物と見れば容赦ない。裏切り者の首を刎はね、数多の聖騎士を討ち、神父を修道女を斬り刻む。

どこにあってもこの男から血の匂いが絶えることはないのだ。

黒曜石を織った気位の高い騎士装束をまとっていても、百戦錬磨の長剣を帯びていても、浴び続け染み付いた呪いは消えない。

吸血鬼ユニヴェールから死の匂いが消えないように。

「変わらぬ答えを聞くために交渉するということのも無駄だろうに」

ミもフタもなく主が言った。

主は黒騎士ベリオールを見据えたまま、だが彼の細長い指はこちらへ伸びてきて――

「……………」

ユニヴェールの横に座っていたパルティータは、その指から守るようにクッキーが山積みになったバスケット（ベリオールからの土産だ）を自らの方へと引き寄せた。

一番上の小さな一枚をつまんで、主に渡す。

「……………」

紅の双眸がしばし一枚のクッキーを見つめ、そしてジロリとパルティータに向けられた。

だがベリオールの言葉が主の視線を引き戻す。

「どうあっても暗黒都市の軍に加わらないってつもりか？」

「……今私が自ら加わらずとも、いずれ巻き込まれよう」

ユニヴェールが黒騎士を細く眺めて意地悪く笑った。

神経の細い輩ならば卒倒しかねない、冷ややかで底知れぬ悪意。

「ヴァチカンと暗黒都市がぶつかるのだ、私の出番がないわけがなかろう？」

「ではこっちが好き勝手やってりゃそのうち加勢してただけってわけか？」

ベリオールが眉間にシワを寄せ、露骨な嫌味を吐いた。

感情を隠すことが下手なこの男は、すぐ顔に出る。そもそも隠そうとしたことがあるのかも不明だが。

「先陣は切らないが剣は抜くって？」

「……………」

吸血鬼は答えず、コツコツとゆっくりテーブルを叩いていた。

凍った麗眸^{れいぼう}は穏かに虚空を見つめ、過去か未来か、どちらにしろ彼にはもはや無用なものへと思いを巡らせているようだった。

吸血鬼シャルロ・ド・ユニヴェールは暗黒都市の番犬。

剣を抜いて向かってくる者を返り討ちにする義務はある。

だが自分から戦場へと出てゆく義理はない。

彼は死人なのだ。

遙か古き時代の禍根に過ぎず、生者の影に過ぎない。これからもずっと。

流れに乗る者であって、流れを作る者ではない。

もはや世界の中心に立つことはなく、剣を抜くための切なる理由もない。

「ユニヴェール卿？」

「……さあ、どうだろうな」

「は？」

吐息と共につぶやかれた言葉に、ベリオールが間の抜けた声を上げる。

パルティータも意味を掴みかねて主を見やった。

だが火のない暖炉の前に座っていた шамシールだけは、知った顔を上げ口を結んだ。

幼い少年の大きな瞳に、無表情の吸血鬼が映りこむ。

「私は生前、自らに刃を立てられても剣を抜かなかったことがある。だが降参を叫ばれてなお皆殺しにしたこともある。剣を抜くか否かは——その時の私の気分次第ということだ」

ユニヴェールがテーブルを叩くのを止め、

「今回もし私が動いたその時は——」

クツキーを口に放り込んだ。

噛み砕き、飲み下し、軽く続ける。

「もう貴様らは手綱を握っていないんだよ」

試すように上げられた紅の視線。

黒騎士は真っ向からそれを受け止めて、ヘッと肩をすくめた。

「……手綱を握るべきは俺じゃない。握ろうとも思っちゃいない。だから俺は誰が手綱を握ってようと構わない。俺はただ上から言われたとおりに滅ぼすだけなんでね」

酒場の女ならば何人でもひっかけられそうな顔をして、ニヤリと笑う。

「アンタが動けば時代が終わる。どんな形であろうと、な。そう言っ
てアンタを出陣させることにまだ強く反対してるお偉方もいる。
だが俺は、アンタの起こす波に巻き込まれても生き残れるって自信
があるぜ？」

「——お手並み拝見しよう」

ユニヴェールが小さく言い置いて席を立った。

会話は終わりというわけだ。

「さて……、アンタに俺の勇姿が見られるかね」

澄まして通り過ぎる貴人へと、だがそちらは見ずにベリオールが
言う。

「……………」

ユニヴェールは応えない。

ふたりは互いに自分の前方を見据えたまますれ違った。

だが、

「ああ、ベリオール」

食堂の扉の前まで行って、ユニヴェールが肩越しに振り返ってき
た。

冷たい目でテーブルを見下ろして、言う。

「今度から土産は何かひとつでいい」

彼の視線の先には、ケーキやクッキー、タルトやパイ。溢れんば
かりのお菓子が所狭しと並べられていた。

菓子屋全てを買い取ったのではないかと思うくらいだ。

「ひとつだあ？ そんなケチなこと俺がするかよ。せっかく喜んで
もらってんのに。なあ？」

「まったくです。吸血鬼ユニヴェールともあろう御方が、そんなみ

みっちいことを言わないでください」

ベリオールに相槌を求められて、パルティータは座ったまま激しくうなずいた。

「これはあの暗黒都市ソロン通りの有名店“ガリア”のお菓子ですよ。こんなにあくさんいただけるなんて、感謝こそすれど拒否するなんてありません」

「……貴様はウチのメイドを太らせてから喰う気だな？」

パルティータの口上を無視してユニヴェールが低く嘆息すると、「太りません」

生クリームたっぷりのケーキに銀フォークをグサツと突き刺し、彼女は毅然きぜんと言い放った。



主が自室に下がってから朝までは、つつがなく過ぎたと言ってもいいだろう。

ベリオールが帰る時にフランベルジェ、アスカロンと鉢合わせてしまったが、それは些細なことだ。

外から帰宅したフランベルジェが軽い挨拶で黒騎士の横を過ぎたこと。続いて入ってきたアスカロンの襟元を掴み、黒騎士が彼女の名を問うたこと。ユニヴェールとの関係を問いただしたこと。

どれも些細だ。

「氷の魔女、フランベルジェ。知らねえのか？ まあ、いつだって俺らは“三使徒”ってまとめて呼ばれてるわけだけだな」

いくつもの箱や紙袋を抱えたまま、アスカロンは涼やかな美女が

消えていった廊下へ舌を出す。

「女の買物ほど疲れるものはねえな。まだユニヴェール様の無茶苦茶な気まぐれに付き合ってる方がマシだ」

「……大量な……」

ベリオールが積みあがっていた紙袋のひとつを取り上げた。

パルティータも一緒になってのぞくと、見えたのは、ドロクマークのついた瓶が数十本。なにやら怪しげな方陣の描かれた手袋。それに有名靴屋と仕立て屋のマークが入った箱。

『……………』

「戦争の支度だってよ」

疲れた声でアスカロンが天井を仰いだ。

「ひとつ時代の首を締めてやるだけなのに、あの女は頭天边から足のつま先まで新品に囲まれてなきや嫌なんだと」

『……………』

しかし問題は朝だった。

黒い森には白い朝霧がかかり、パテルの町には鶏の鳴き声が響き渡る時刻。

敬虔な神父はすでに祈りを捧げ終え、早起きの女が水を汲み、朝餉^{さけ}の支度を始める。

寝起きの小鳥がさえずりながら屋根から屋根へと飛び回り、路地裏の犬が吠える。

黒騎士は戻り、三人の化け物はそれぞれの夢の中へ沈み、黒い猫は若者の姿となってレモンティーを楽しむ。

世界は目覚め活気づき、屋敷は舞台から身を引き静かな眠りにつく。

だがその朝は、眠りを妨げる者が現れた。

屋敷の扉を叩く者があつたのだ。

せつかく人々の心から消えようとしていた闇に、待ったをかける奴がいたのである。

「何かご用ですか？」

パルティータが扉を開けると、そこには二人の人間が立っていた。磨き抜かれた槍の穂先を蒼空に向け、白雪の輝きにも勝る騎士服をまとい、その胸に刻まれた紋章は、交差した二振りの剣に白十字。ひとりは銀の兜から見事な金髪を見せている女で、もうひとりは背の高い、青みがかった銀髪の男だった。

どちらも面識がある。

パルティータは彼らを追い払うでもなく歓迎するでもなく、いつものように淡々と言った。

「ヴィスタロッサ聖騎士、シルヴァン・レネック隊長、主はすでにお休みです。太陽が死んだ頃にもう一度来ていただけるとありがたいのですが」

「今日、用があるのはユニヴェールではありません」

負けず劣らず抑揚のない声でヴィスタロッサが告げてきた。

碧眼は真っ直ぐで、硬い。

そして彼女の言葉を男が継ぐ。

「用があるのは貴女です、パルティータ」

「……………」

灰色のメイドは先ほどより幾分険しい顔で、男を見た。

シルヴァン・レネック。

先のユニヴェール邸メイドを妻に持つ、誠実で柔軟な男だ。少しばかり感情的な面があることを差し引いてもなお余りある、騎士の手本。

パーテル聖騎士団の隊長を十年ほど務めている。

「ヴァチカンから命が下りました」

レネックは、一言一言その意味を確かめるようにゆっくりと言っ

てくる。

「貴女を何としても、シャルロ・ド・ユニヴェールの元からサン・ピエトロ大聖堂へ連れ戻すように、と」

「ヴァチカンが？」

パルティータは大袈裟に眉を上げ、驚いて見せた。

そして真剣な顔つきで彼女の次の言葉を待つふたりをそのままに、
「間に合ってます」

扉を勢いよく閉めた。

『——！！ パルティータ！ 閉めるな、コラ！ 話を聞け！ 説
得くらいさせなさい！』

『パルティータ様！ 貴女はお帰りになるべきです！』

ヴィスタロッサの罵り声が、レネックの強い声が、扉を乱打する
音が、爽やかな朝日の中に轟いたが、パルティータはそそくさと鍵
をかけ回れ右を——……。

「パルティータ」

背後から呼ばれて動きを止めた。

「……………」

降ってきたテノールには静かな怒気が含まれている。

彼女の頬に、久しくその存在を忘れていた冷や汗が伝った。

「“連れ戻す”、と聞こえたが？」

「……………」

振り返って彼女は主を仰いだ。

にっこり笑って断言する。

「寝ぼけておいです。空耳でしょう」

だが扉の向こうからヴィスタロッサの叫びが聞こえた。

『貴女を連れ戻さないと、隊長も私もクビになるのよ！！』

「……………」

パルティータの頬にもうひとすじ冷や汗が伝う。

「……………えーと」

「パルティータ。お前は何者だ。何故この屋敷にいる」

ガウンを羽織った主が、感情の欠落した声音で訊いてきた。

「お前は何故私のメイドをしている」

蒼白く不健康な白皙が、優雅な勘気で見下ろしてきた。

「貴方が雇ったからです」

「パルティータ」

「……私が、ヴァチカンの間者^{かんじゃ}だと思いませんか」

「私の質問に答えろ」

主は笑っていた。

「“連れ戻す”とはどういう意味だ」

凶悪に笑っていた。

「……………」

朝焼けの吸血鬼は機嫌が悪い模様。

GENOCIDE - 1. 黒騎士／聖騎士（後書き）

校正時BGM：Within Temptation「The
ruth Beneath The Rose」
T

「連れ戻す……フランス語は不得意なので細かい差異は分かりかねますが、まあほぼ“誘拐”と同義かと」

「違う」

半目で見下ろしてくる主の紅には、まるで別人のような白い光があった。爬虫類めいた、じっとこちらを見据え距離を測っている湿った光。

どうやら寝入りを起こされて不機嫌なだけではなさそうだ。

しかし、いたいけな少女をこんな風に脅しつけるなんて紳士としてどうなのか。

「……何をそんなに怒っているのですか」

自然、対抗心からパルティータの声にも刺が混じった。

一拍遅れてユニヴェールの眉が上がる。

「怒る？ 私か？」

「ええ、怒ってます」

「……ほう」

彫りの深い白皙に落ちた影が、ぞろりと笑んだ。

片方の牙だけがのぞく、底意地の悪い笑い方だ。生来の笑い方なのか、芝居をつけているのか、どちらにしろ他人が見て嬉しくなる表情ではない。

明らかにバカにされているのだから。

「うぬぼ自惚れるなよ、パルティータ。私はお前如きに立てるべき腹など持っていない」

「……如き」

彼女は口を曲げた。

ユニヴェールはわざとらしく聞こえないフリでガウンをひるがえす。

だがそのまま彼は斜め上を向き、独り言。

「……そうだな。何がどうであろうと、どうなろうと私には大した違いはないか」

ひんやりとした朝の気配に包まれた屋敷の廊下に吸血鬼の言葉が染み入り、わだかまる闇と同化する。

「何者も——そう、何者もだ。もはや私自身をどうすることもできない。世界も神も運命も、私に干渉することはできない。お前が何であろうと、何を考えていようと、かまいはしない」

「……カステル・デル・モンテから出られなかったくせに」

「……………」

麗人は一歩だけ止まりひと呼吸、何も言わず地下へと続く扉の中へと消えていった。

扉が閉まる音が無機質に響き、消える。

しんと静寂が降り……………」

「貴様何様ッ！」

パルティータの低い罵声がそれを両断した。

目をつりあげ、手近な空花瓶をがしっとつかむ。

そして吸血鬼が姿を消した扉に向けて振りかぶり、

「……………」

空中で止めて、思いっきり片足のスリッパを扉に飛ばした。

びゅんっと空気がうなり、ごんっと扉が抗議の声を上げ、ぱたむつと床が嘆息。

「……………」

花瓶を投げられなかった不甲斐なさにパルティータは唇を噛みしめうなだれた。

花瓶の方がスリッパよりも高値なのだから仕方ない……そう言っ
て自分を励ます。
が。

「……何かご用ですか」

ふいに背後に人が立ち、彼女はゆっくりと振り向いた。

そこにいたのは、すべて聞いていたくせに困惑も気後れもししていない、涼しい顔をしているアスカロンだ。

「まだお休みでなかったのですか？　もう朝です。人間の時間ですよ」

このアスカロンもユニヴェールと同じく影を渡る神出鬼没屋なので面倒くさい。

主とのやりとりもあって、ついつい濃度の高い毒が入ってしまった。

「まあまあ、ここはひとつ穏便に」

誰の心にもすぐさま入り込んでしまうサバサバとしたその風貌をもって、彼は両手で彼女の怒気を押し留めてきた。

悪く言えば軽薄。良く言えば壁がない。

相手の警戒心を“解く”のではなく“消してしまう”その才能は、天から与えられ彼が天を裏切ってもなお掌中に行っている最大の武器だ。

「俺はアンタが何者かなんてことは聞かねえが、」

「私はシャルロ・ド・ユニヴェールのメイドです」

パルティータが彼を遮ってキツパリと告げると、アスカロンは虚を突かれたように言葉を呑み――、それからふっと息を吐いてきた。

「それならいいんだ」

彼は静かに歩いてくるとパルティータから花瓶を取り上げ、横を過ぎる。

「昔と似てるからな。あの人と言えど苛立つんだろうさ」

「似ている？」

パルティータは眉を引き寄せた。

「昔と？」

そういえば、主が彼女のことを知らないのと同様、彼女もまた主のことをほとんど知らない。それで何の不都合もなかった。

「そうか。あの白い隊長殿以外誰も知らないんだよな。ムリもないな、三百年も経てば記憶を共有した奴等は大方死んじゃう」

言いながら、彼は食堂へと足を向ける。

「三百年、ユニヴェール様が吸血鬼になってからのことですか？」

「元々はクルースニクだったさ。あの人も、俺も、フランベルジェやシャムシールも」

全員真ッ白コートを着てたんだぜ。

そう言ってアスカロンがケラケラと笑った。

「三百年前あの人は——」

軋む音を立てて開かれた扉から、清廉な輝きをもった白い朝陽が溢れ出る。



ローマの喧騒は、高い壁に囲まれた聖域の中にまでは届かない。

ここに“生活”というものはなかった。

ここに“生活”があってはならなかった。

ここは聖なる場所であり、畏怖の場所であり、生と死が気高く人々を見下ろす場所でなければならなかった。

門を護る衛兵たちは終始無言。

教皇庁内の枢機卿たちが他愛もなく井戸端会議をすることなどあり得ないわけで——彼らの会話は常に駆け引きだ——おまけに今は聖騎士団やクルースニクたちも皆出払っている。

インノケンティウス八世の死期を感じ取ったお偉方が、ユニヴェール及び暗黒都市討伐の号令をかけたからだ。

台頭してきたフランス王家と共に、今の教皇権はなかなか大きい。インノケンティウス三世の頃ほどではないにしろ、“魔女狩り”の効果かその御名は諸侯の剣を抑えるだけの力があった。必然、その教皇の下につく枢機卿たちの権力も大きく、見返りも大きい。だからこそ教皇が変わった時、今の権力者たちは障害物として一掃されかねないのだ。

それを阻止するためには、功績を上げなければいけない。誰が頂点に立とうと、彼らを排除することができないような功績を。

つまり、ユニヴェールの首を神に捧げる功績を。

そんなわけで、閑古鳥の鳴く大聖堂前の広場は全く人気なく、晴々とした空の下空虚な静寂をたたえていた。

だがだからこそ、

「自ら滅ぼしたっていうのに、死んでもあの家から逃れられないのか、あの男は」

彼にしか吐くことのできないつぶやきは、誰に聞かれることもなかったのだろう。

白い石畳にコートの影がひるがえり、彼はまだ冷たさの残る風に目を細めた。

ソテール・ヴェルトール。

「まあ、今のアレが呪縛だの運命だのを気にかけるようにも思えないがな」

どこからか春の色をした花の香も流れてくる。

安らかな陽射しが聖なる狩人に降り注ぐ。

だが聞く者のない愚痴は続いた。

「それを……あの長官代理様はフリードだけで事が片付くとお思いだ」

ソテールは自嘲気味に含み笑う。

自分への嘲りではない。この場所への、この聖域への、それを護

る者たちへの——結局自分も包含されるわけだが——嘲りだった。

「何も知らない」

彼は腰の剣を抜き、ぶんぶんと振り回した。

「あの男のことも、過去も、我々があの男を滅ぼさなければいけない理由も、聖域は何も知らない」

空気を斬り裂き、背後へ薙ぐ。

そしてそのままピタリと止めた。

怜悯な切っ先の向こうには、大聖堂のテラス前に居並ぶ石の聖者たちの虚無的な眼差しがあった。あらゆる者を縛り付ける聖なる視線。

ソテールの蒼い目は、冷ややかにそれを見返す。

「誰も何も知らない」

——昨夜。

フリードに稽古をつけていたソテールは、ヴァレンティノ・クレメンティに呼び出されて渋々その部屋の扉を叩いた。

正確には扉を叩いたのは彼ではなく、彼を呼びに来た名も知らぬ枢機卿であったが。

「お連れしました」

半球の天井には四隅から伸びた美しい曲線の柱が収束し、床には深紅の絨毯。大窓を背にした偉そうな机の向こう側には、長官代理という肩書きを背負った男が座っている。

形式的な高潔と厳格が漂うその部屋は、公人が召集される場所とはまた別の、私室ともいうべき部屋だ。

とはいえ、この部屋をこれほどまでに自分のものに出来た人間は数少ないだろう。

ソテールが知っている限りでは、誰もが居心地悪く、あるいは愚かな慢心でここに座っていた。

この部屋が服従した人間はいなかった。

だがヴァレンティノ・クレメンティは、完璧な主としてこちらを見据えてきたのだ。シエナ・マスカーニという派手な造花を横に飾りながら。

「明日、白十字とデュランダル、フリード・テレストルをパーテルへと送る」

眼鏡の奥からクレメンティが言った。

くだらない前置きはない。この男のそういう割り切った頭の良さは、評価に値する。

「お前はここに残れ、ソテール・ヴェルトール」

「何故」

「ローマとヴァチカンを丸裸にしろと言うのか？」

「……………」

「こちらもギリギリなのだ。せめてもうひとつ大きな駒があれば楽なのだが、それは高望みというものだろう。最強のクルースニクに運命のダンピール。それを今そろえられただけでも神に感謝せねばなるまい。——だが、それでも足りない」

クレメンティの琥珀が白鳥の羽ペンへと落とされた。

感情の一切が映らないガラスの視線。

「こちらがユニヴェールを叩いている間に暗黒都市にローマへと入られるわけにはいかないのだよ。我々は戦ってかつ護らなければならぬのだ。今回はパルティータを奪還し、ユニヴェールを滅ぼすのが目的であって、暗黒都市を滅ぼすことが目的ではない」

「誰のために奪還して誰のために滅ぼすんだ？」

「我々と人々のため。そして未来のため。それ以外に何がある」
迷いのない断言だった。

その平らな表情から何かを読み取るのは不可能だったが、おそらくそれは嘘ではないのだろう。

彼は政治屋だが、同時枢機卿でもあり、偽りなきカトリック信者でもある。

二百五十年前の諸侯たちが、権力の皇帝フリードリッヒ二世よりも神の下に立つ教皇を選んだように、このクレメンティもその首に十字をかけている。

「パルティータ……何だったか」

「インフィーネです。彼女はそう名乗っていると」

シエナがクレメンティを補足した。

継いで長官代理は遠い彼方を見やる。

「パルティータ・インフィーネ。彼女こそこの地にあればもっと事は簡単だったのだが」

「血は争えないものですわね。またもあの御方の血に翻弄ほんろうされなければならぬなんて」

シエナが豪華な金髪をかきあげた。紅の唇が妖艶に笑みの形を作る。

「本当に、可笑しなこと」

史書は束ねられるたび章を変え、王ごとに括られる。

だが流れる現実、そう歴史というものは、途絶えることなく何かどこかへと繋がってふいに花開くもの。埃かぶったページがある日突然開かれ突きつけられることもある。もはやほとんどの人間が“古”と言う三百年前は、今再び、ゆっくりとその姿を現していた。

誰かの細い指が煤すすを払い、表題をなぞり、陽に焼けた紙片を繰り始める――。

「俺がパーテルへ行く。フリードをここに置いて行く。まだ大した剣士でもない子どもを行かせるのは無謀だ」

ソテールは言った。だが、

「吸血鬼しか倒せぬ者をひとり残して何の意味がある」
「いとも簡単に払いのけられる。」

彼は喰い下がった。

「フリードが魔を現したらどうする」

「ヴァチカンにひとり残したフリードが魔を現したらどうなる」

「外の被害は仕方ないというわけか？」

「ここがやられるよりはマシだと思うが？　ここは人々の生きる拠り所なのだから」

「……………」

「ダンピールはユニヴェールへの切り札であつても暗黒都市には素人だ。フィレンツェではあの男の三使徒が目撃され、カステル・デル・モンテの件でお前は実際アスカロンに会っている。屋敷にも全員いたんだろう？」

——ソテールは、まともな報告書を提出したことがなかった。フリード回収事件でも、パルティータというメイドが屋敷にいたことしか報告していない。

「三使徒と渡り合うには……」

言いかけて、クレメンティが声を一段落とした。

「そしてホーエンシュタウフェンとも渡り合うためには、デュランダル隊が必要だ。加えて、番犬ユニヴェールが戦っているとすれば暗黒都市が援軍を出す可能性は高い。くだらぬ化け物どもを駆逐するなら白十字の数の多さは強みになる。分かるか？　……要するに、闇と戦うには最低デュランダルと白十字は向かわせなければならぬんだ」

なめらかで穏かな物言いだ、その奥には誰も立ち入ることのできない峻厳しゅんげんさがあつた。

暗い雪に閉ざされた極寒の地、それでも立ち続ける一本のトネリコの木のような。

「お前をパーテルに出せればどれだけこちらに有利かしれない。だが、ローマの護りをゼロにすることはできない。少しフリーでも危険のある者を門番にすることもできない。闇を討ちに行つて聖域が落ちたのでは、本末転倒もはなはだしいだろうよ」

次善の最良だ。

暗黒都市が本気でヴァチカンを潰そうとしているかはともかく、討つからには護らなければならない。ヴァチカンは決して捨て身で

戦場に赴くことはできないのだ。どれだけの金と命を懸けた戦いであつても、最優先されるべきは聖域の維持、そして平穩。

「フリードならユニヴェールを滅ぼせると、アンタは確信してるのか」

ソテールは軽く訊いた。

同じ程度にクレメンティが答えてくる。

「ダンピールはその親である吸血鬼を滅ぼす運命にある」
続いて響いたシエナの声は熱っぽく。

「生まれくる者はその時点で誰かに殺される運命を負っているのです。王に殺される運命の者、敵の将に討たれる運命の者、病に殺される運命の者、裏切られて殺される者、愛する者のため殺される者……。ユニヴェールが未だ生き長らえていたのは、まだ時期でなかっただけのこと」

彼女は扇をこちらに向け、口端を上げる。

「彼に滅びをもたらす者が、貴方ではなかっただけのこと」
一理あつた。

「そうかい」

ソテールは小さく笑つた。

ひどく嫌味な笑顔をしていただろうことは自覚している。

あの吸血鬼が時折浮かべるものと同じ、冷笑だ。

「アンタたちがそう信じるなら、構わないさ」

負け惜しみに映つたかもしれない。

弟子に超えられてしまった師のような。

案の定シエナは皮肉めいた微笑を扇の影から漏らし、だがクレメンティは鋭い目つきを緩めることなく整えられた机上を凝視していた。

「それだけだ、話は終わった」

そう言つてソテールを部屋から追い出した時も、彼は眉間を寄せたまま微動だにしなかった。

切り札さえも絶対ではないのだと、緋色の聖衣をまとつた男は本

能で感じていたのだろう。

我々が放り込まれている雑踏は、そんなに甘いものではない。

いくら細かく描き込まれた地図を手にしても、裏路地から犬が飛び出て来ることもあれば、見知らぬ者に肩をぶつけることもある。

予期せず友人に呼び止められ、転がっていた小石につまづくことも。

頭上から植木鉢が降ってくることも。

次善の最良も、結局は盤上の幻想に過ぎないのだ。

ヴァレンティノ・クレメンティは策士だが未来視ではない。

それを一番よく知っているのは彼自身のはずだった。

未来は時として、もがき抗う現在を嘲う。

幾重にも成る策を弄し黄金の盾で身構えようとも、未来は簡単にそれを打ち破るのだ。

「運命がフリードにユニヴェールを殺させるなら、運命はユニヴェールにフリードを殺させる」

ソテールは、クレメンティの組んだ蒼白の手を思い出しながら、強張った微笑を蒼空に向けた。

聖域の憂いとは裏腹な晴天がいつそさわやかだ。

趣味悪く笑いながら、彼は大聖堂前の広場を突っ切り裏へと歩く。

「アンタたちが運命を信じるとして、さてどっちの運命が強いかな」

古い物語がある。

もはや色褪せた、三百年も昔の物語だ。

その家はいつでも歴史の背後にあったが決して表へは出ることはなかった。だからこそそれが突然途絶えた時さえも史書に名が残ることはなかった。

だが否が応でも人々の記憶には残った。

彼らの表舞台への登場はあまりにも鮮烈で、強烈で、一瞬後に訪れたその退場もまたあまりにも劇的過ぎたのだ。

人目からは長く深い霧に隠され続けていたその家。

代々の当主、そして主要な血族が白いコートをひるがえして歩くのはヴァチカンの美しい壁の中、そうでなければ灯の消え去った夜の闇の中。

貴族というのは建前に近く、彼らは俗世から隔絶されていた。

彼らが本拠を置いていたフランス国内でさえ、由緒あるクルースニクの家系……としか知らぬ者が多かった。

しかしその存在が一步表舞台へと引きずり出された瞬間、その家に渦巻く禍々しい運命の螺旋は世界の前に姿を現し——、次瞬それは死の大鎌を振るいその家を完全に滅ぼしたのだ。

生き残った者はひとりもいなかった。

その一族は、歴史から消えた。

そしてそれから先、かの家について誰も語ろうとはしなかった。

「クレメンティ」

彼は聖堂の影に見えてきた教皇庁へと視線を移した。

「悪いが俺はココの番犬じゃないんでね」

そしてまたしてもぶんぶんと剣を振り回す。

「ダンピールの運命が、あの問答無用に敵うとは思えんな」

朗らかな足音は教皇庁に背を向け、大聖堂にも背を向ける。

彼が歩く前方からは砂っぽい強風が吹き、いい加減目を覚ませと顔を叩いてきた。

昔は誇りにしていた、今はあの男の対照という意味が大半の——白外套がバサバサと騒ぐ。

クルースニクの白。

全ての色を拒絶するが故に孤高と呼ばれ、ただひとつの意志と崇められる。

何も隠さず、何も包まず、ただ闇を薙ぐ。

全ての色を抱いた黒を、薙ぐ。

「あの問答無用でさえ敵わなかったユニヴェール家の運命に、薄っぺらい希望が敵うわけがない」

……と。

彼は向かうべき高壁に先客が背をもたれているのを見つけ、立ち止まった。

ローマの生活とヴァチカンの聖域を隔てる城壁。

先客は鮮やかな緋色の衣に、たっぷりとした金髪きんぱつの女だった。陽光にきらめく真珠の耳飾が目に痛い。

「ソテール・ヴェルトール。我らの世界の救世主」

得体の知れない“余裕”をまとい、シエナ・マスカーニは笑っていた。

「行けばいいのです。行きたいのなら」

この聖域に住まう人々が好んで集うのはこんな裏寂さびれた場所ではなく、表の庭園だ。偶然だったり、でないことは瞬時に築かれた暗黙の了解。

「貴方とユニヴェールの間にどんな事情があるのかは知りませんが、貴方はユニヴェールを滅ぼしたいのでしょうか？」

「……………」

「構いませんよ。クレメンティ卿には内緒で、デュランダルを指折るほ**ど**だけ残していますの。それにここは神の御威光最も輝くカトリックの中核、クルースニクあがりの枢機卿もひとりやふたりではありません」

「そうかい」

ソテールは挑戦的に鼻先で笑った。

いかにも善良で彼の味方な台詞だが、そうではない。彼女はそん

なお人好でこの地位へ成り上がったわけではないし、彼も鵜呑みにできるほど若くない。

「それじゃあデュランダル長官殿のお言葉に甘えて」

タンツと軽い音を響かせ、彼はその影を地上からふっと消した。

「天のいと高きところ、グロリア イン エクシエルシス神に栄光あれ」デオ

壁の上に立った男は柔らかな蒼眸で聖域を見下ろし——、くると長身の向きを変えた。

臨むローマの街並みはそれこそ平素と変わらない。

白く霞みがかった薄い土色屋根の連なりと、その上を飛び交う鳥たちの黒点、奥に大きく広がる深緑の森。そして街を蛇行してゆくテヴェレ川の流れ。全ての中心に息づくのは、古の栄華を語るフォロ・ロマーノ。

「エト イン テラ パクス オミニブス地においては善意の人々に平和あれ」ポーネヴォルンターティス

白い残像を残し、クルースニクは聖域を捨てた。

「……結果は保険に過ぎないわ」

シエナは誰にともなく言う。

「クレメンティ卿の弱い所は、自分と相手以外考える頭を持ってないと思ってるからね。駒も自分で動くということを失念していらっしやる」

彼女は教皇庁へと戻り出し、ローマとヴァチカンを隔てる壁に別れを告げた。

綺麗に整えられた芝生を、聖衣が軽やかになる。

「危険な賭けで足元ばかり固めないで、もっと先を見なければね。次の教皇はおそらく最も富のある者——私の見立てでは、ロドリゴ・ボルジア。彼は財はあるけれど生まれが問題ですもの。今は教皇選定に勝利するため自分への確実な一票が欲しいはずね」

新教皇は、資格ある枢機卿たちが天啓という形の投票をして選ば

れる。

「ユニヴェールの首をお土産に出来ればそれにこしたことはないけれど。……クレメンティ卿は潔癖すぎますわ。完璧を求めても無駄ですのに。それとも……」

「……………」

彼女の声は遠退き、研ぎ澄まされたクルースニクの聴覚でも最後までは聞き取れなくなった。

ローマ側に降り立ち、壁にひつついていたソテール。

間諜の真似事など何年ぶりだろう。以前は面白いのでヴァチカン中を駆け回り、枢機卿全員の弱味を握って遊んでいたこともある。

……大昔、ふたりで。

「それとも……、クレメンティはまだ最後の一手を隠しているのかしら」、というところだな」

永遠の都ローマへと抜け出したソテールはひとりでうなずいた。

彼と高い壁を隔て、聖域の中を歩くシエナとクレメンティ。その両者の間にもまた、——壁。

「そうだろうとも。あのキレ者ことだ、まだ隠しているだろうな」

クルースニクははりついて壁から身を離し、黒髪の下から斜めに背後を見上げた。

どれだけ描き尽くされた構図であろうとも、絵描きは絵筆を取らずにはいられない、聖域。

陳腐な言葉を並べるしかなくろうと、詩人は名誉にかけて歌を連ねようとする、聖域。

けれど全ては無駄なこと。

人が造り出したはずのこの場所は、決して人の手に納まることはない。

……納まってはならないのだから。

そして、人が造りだしたあの化け物もまた、もはや人の手には納まらない。

全ての犠牲を払ってでも納めることが、人に与えられた報いなの

だとしても。

「サヨ^{チャオ}ーナラ」

彼が向かうはフランス。暗黒都市の砦。

GENOCIDE 2. 汝の名は、世界の救世主（後書き）

ソテール…〔希〕 s o t e r 救世主

ヴェルトル…〔独〕 W e l t a l l 世界

校正時BGM…Within Temptation「Our S
o l e m n H o u r」

GENOCIDEー3.

クルースニク・ユニヴェール

時はさかのぼり十三世紀の黎明^{れいめい}。

第四回十字軍遠征は失敗に終わり、イングランドの獅子心王^{ザ・ライオンハート}・リチャード一世は世を去った。

一方フランスの尊厳王^{オーギュスト}・フィリップ二世は力を伸ばし、リチャードの後を継いだジョン王からフランスにおけるイングランド領をほぼ占領。そのジョン王はカンタベリー大司教の任命を巡^{マクナカルタ}って、時の人インノケンティウス三世から破門され、国民からは大憲章^{マグナカルタ}を突きつけられていた。

そしてその影では後の神聖ローマ帝国皇帝、鬼才フリードリッヒ二世が静かにドイツ王の冠を身に載せる――。

教皇の世界を照らす燦然^{さんぜん}たる権威と、その世界の片隅から一步一步着実に強化していくフランス王国。

全ては彼ら自身が成した所業の結果なのだと、歴史には刻まれよう。

混沌たる世界を白き影となって滑り暗躍していた者がいたと、誰が知ろう。

だが、彼らを所有していたがために教皇は太陽となり、彼らのひとりがフランス貴族出身であったがためにフランスもまた含み笑いを絶やさずいられたのである。

“悪魔のクルースニク”

規則破りで奔放な、そして脅威の力で好き勝手していた彼らは、そう呼ばれた。

◆ ◆ ◆
ローマの片隅、コンスタンティヌス帝建立の格式高きサン・ジョヴァンニ・イン・ラテラーノ大聖堂。そこは、清浄なる白に彩られた代々の教皇が座するカテドラルだ。

市民や巡礼者たちはその恩恵を授かろうと足を運び、各国の権力者たちはいつかこの聖堂を掌中にしようと、ひざまず跪きながらも野心を持って見上げる。そして仰いだ瞬間、その自身の野心に戦慄を覚えるのだ。恐ろしい目的を胸中に秘めている興奮と、神の代理人を屈服させようという背徳。激しい感情の炎が身の内で燃え上がり、我こそが次に世界を照らす者なりと声高に叫びたいくらいの雄々しさを手に入れる。

しかし時を置いて彼らはもう一度戦慄する。
神に頭を垂れた瞬間、その炎は、寄せてきた波に洗われて消えてしまうからだ。

神聖な聖堂に流れる耳には触れない言葉と歌とが、彼の身体から熱く赤いきらめきを奪い去ってしまう。そして代わりに白い砂で創られた永遠の地平が**ぼうばく**茫漠と胸に広がるのだ。

たけ猛る精神は、いつの間にか簡単に静められてしまう。

神を信ずる限り抗えない、それが世界の中心だった。

インノケンティウス三世という強大な教皇が君臨する、聖域。

そんな由緒正しい地下の一室に、ひとりの男が囚われていた。

敬虔な市民たちは場所の存在すら知らなかったろうが、いつの時代にも世界は秘密と神秘と隠蔽で満ちている。

「記念すべき1001回目だな」

ソテール・ヴェルトールが扉を開けると、囚われ人が中からそう言ってきた。

「記念パーティーは1000回目やった」
後ろ手に閉めて応じると、

「1000回は大台に乗った記念。1001回は1000という縛られた数字を打破した記念に決まっているだろう」

囚人はふてぶてしい態度で両足をテーブルの上に投げ出したまま、ソテールを見ようともせずに屁理屈をこねてくる。

冷え冷えとした銀髪、塵埃じんあいのない斜に構えた蒼眸、とんがった顔つき、白い外套コートを羽織った長身。

物の言い方が常人よりも横柄で無駄な余裕がありすぎるのは、彼がフランス貴族の血をひいているからだろうか。

名はシャルロ・ド・ユニヴェール。

地下謹慎処分1001回の重罪人である。

もちろん、反省などしているわけがない。

自宅謹慎など無意味だと悟ったお偉いさん方が苦肉の策として編み出した、地下室に閉じ込める“地下謹慎処分”なのだが。

変化のない白い壁、磨かれた大理石の床、窓の無い密閉空間。

絵画のひとつも花もなく、あるのは一応ふかふか豪華な寝台と、レースのクロスがかけられたテーブルがひとつ、木製の洒落た椅子がひとつ。

調度はそれだけだ。

こんな殺風景な部屋に閉じ込められたら、常人は発狂する。

人間は、刺激がありすぎると卒倒し、なさすぎると逆に狂うという、なんともわがままな生き物なのだ。

しかしそれもこの男には通用しない。

ソテール自身にも。

「それで、どうしたんだ？ ソテール。貴様も一緒に地下謹慎だっ

たろうに。むやみに出歩くと、貴様だけ先に1002回を更新してしまうじゃないか」

脱走常習犯の蒼い目が、ようやくソテールを見た。

二日ほどここに入れられているはずなのだが、飽きた様子は微塵も無い。

「お前、何を考えてた？」

ソテールはユニヴェールの問いには答えず、返した。

「アスカロンを見つけた時のことさ。あれは傑作だっただろう？」

「あれか……街中、ローマの兵に追い掛け回されたんだったか。何せ犯人隠匿だからな」

「だが私の目に狂いはなかった」

アスカロンというのは、あるクルースニクの名だ。

普通クルースニクは、家系やら各地教会の紹介状やらで採用されるものなのだが、アスカロンの場合は違う。

彼は孤児のようだった。

貴族の持ち物を盗んだという罪で逃走しているところを、偶然通りかかったユニヴェールが見つけた。何を思ったかユニヴェールは、あの饒舌で追っ手を言いくるめ、青年を拾った。それだけの話だと思っていたのに、言いくるめたはずの追っ手がすぐ枢機卿に告げ口したのだ。

おかげでローマ中を警備兵に追い掛け回され、当の貴族に怒鳴り込まれ、枢機卿には嫌味を言われ、始末書を書かされ、アスカロン関係では散々なメにあったのだ。

しかしアスカロンの才、その伸びと鋭さは他の安穩あんのんとした育ちのクルースニクを遥かに凌ぎ、誰もが黙らざるを得なくなった。

ユニヴェールとふたりしてざまあみろと笑いあったのは言うまでもない。

「それで、ソテール隊長殿。そんな笑い話をしに来たんじゃないだろう？ いい加減本題を話したらどうだ？」

言われて、ソテールは扉から背を離した。

「ユニヴェール、脱走することに異論はあるか？」

「ない」

間を置かずに返ってくる齒切れよいテノール。

「フランスへ行くぞ」

「了解」
ダコール

「……理由くらい聞け」

「そんなもんでもいいだろうが」

白の相棒はヒラリと足をテーブルから降ろし、立ち上がった。

一仕事終えたように手を払い、支度は出来たと言わんばかりに真顔で指を一本立てる。

「こんなところに閉じ込められていたら色々考え過ぎて今以上に頭が良くなってしまうだろ。あんまり賢いのも困りものなんだよ。第二のソクラテスになりかねん。理由より何より、ここから出ることが大切なのだ」

「謹慎令も一応刑罰としての効果はあるわけだ」

「お偉方に告げ口するなよ」

「もちろん」

ソテールは軽くなずき、斜め上を見た。

「——問題は脱出の方法だ。性懲りも無く何人か見張り番がいるはずだが……」
しょうこ

ユニヴェールも同じ方向を睨みやってくる。

「緊急令だと嘘を付いて逃げ出すのは五日前にやったしな」

それが失敗してまたここに逆戻りしたわけだ。

ふたりとも、自分の邸宅にいるよりここに閉じ込められている方が多いかもしれない。

「……ここはやはり」

ユニヴェールがぽんと手を打つ。

ソテールが蒼い目をやると、彼もまた蒼い視線を水平に動かしてくる。

『強行突破』

見事に唱和した。

静寂と清浄の象徴、サン・ジョヴァンニ・イン・ラテラーノ大聖堂。

そこから軽やかに駆け出てくる姿はふたつ、それを追うのは神父数人と槍を構えた衛兵の集団。

数十という靴音が石畳を叩き、罵声と怒号、そして悲痛な懇願の声がローマにこだました。

「ヴェルトール隊長！ ユニヴェール卿！ お戻りください！」

「貴様ら何ぼーっとしてたんだ！ 早くやつらを捕まえろ！ また教皇のお叱りを受けたいのか！」

『あのふたりに勝てるわけありません』

「そんな弱気なことではどーする！」

「ヴェルトール隊長！ ユニヴェール卿！ 今度こそ私の首が飛びますー！」

「早く追え！ 奴等をローマから出すな！」

だが衛兵隊長の叱咤空しく、相手には助っ人が現れた。

二頭の白馬を連れた、三人のクルースニクである。

三人ともシャルロ・ド・ユニヴェールの拾い子で、今では数いるクルースニクの中でも突出した実力を有する彼の忠実な部下だ。

「あの三馬鹿トリオ！」

馬を得た二匹の白いクルースニクはひと蹴りで飛び乗り、こちらを振り返ってニヤリと笑う。ご丁寧になく同じ口端の角度で。

「ヴェルトール！ ユニヴェール！」

神父たちの悲しげな叫びは慣例の見送り文句。

馬はいななき、咎人はローマの街へと紛れ込んで行く。枯れることを知らない永遠の都へと。

「シャムシール、フランベルジェ、アスカロン！」

衛兵隊長はわなわなと手をふるわせ、腰の剣を抜いた。

その視線の先には、クルリとまわれ右をしさっさと逃げようとしている三匹のクルースニク。

彼は切っ先をビシッと向け号令をかけた。

「今度は奴等を追え——！」

砂塵が風に消え、喧騒も遠くに去った聖堂の前。

残された司祭は石畳に落ちていた投げナイフを拾い上げた。

ヴェルトール、ユニヴェール、ふたりのクルースニクが逃走するため衛兵たちに放った武器だ。

疲れの混じったため息と共にまじまじと見れば、ひとつに刻まれているのは黄金の竜の紋。

それはクルースニクの頂点に立つ家だけが許される紋章であり、現在の所有者はソテール・ヴェルトール。

そしてもうひとつには、黒で描かれた烏揚羽カラスアゲハの紋。

それは代々クルースニクを輩出しているフランスの名門ユニヴェール家の紋章であり、この聖地に集う聖なる者の中でも、不気味な風をまとった一族。

遠巻きに、神父たちが彼を見ていた。

いや、見ていたものは彼の手にある畏るべき落し物だったのだらう。

翼ある竜、黒の蝶。

第四回十字軍の遠征に失敗してなお権力を手にし続ける男、教皇インノケンティウス三世。

その座を支えているのは、そのふたつの紋章に他ならなかった。

教皇は太陽、皇帝は月。

そんなことを豪語できたのも、あのふたりが教皇の手元にあるか

らだ。

欠けてはいけない。紋章だけでもいけない。紋章を身に帯びた、ソテール・ヴェルトール、シャルロ・ド・ユニヴェール、共に歴代最強と呼ばれるふたりがいなくてはならない。

ある意味それをそろえられる運を引き寄せたインノケンティウスもまた常人ではなからうが……。

だがこの時誰が知ろう。

以後、ふたつの紋章はもう誰にも受け継がれないのだ、と。



「で、なんだ？」

「なんだ、とは何だ？」

「我々が脱走した理由」

「ああ」

後ろへ後ろへ風に乗り流れてゆく田園風景の中、思い出したようにユニヴェールが訊いてきた。

ヒマだからとりあえず、といった調子で。

「フランスがな、アスカロンを通じて私的なお願いをしてきたわけだ。王女サマを救ってほしいとのことだ」

「……王女？」

間を置いて、怪訝そうなユニヴェールの顔がこちらを向いた。

「マルグリート」

名を告げて、その顔は口を曲げて柳眉を寄せる。

「その女は生まれてすぐ死んだはずだ。魔女だとかなんだとかで、

教皇が死刑を命じた記憶がある」

突っ切られた風が耳元で抗議してくるが、隣りを駆けるユニヴェールの声だけは何故かはつきりと聞こえてきた。

叫んでいるわけでもないのに、得な声質だ。

そんなつまらない特技が羨ましいわけでもないが、嫌味のひとつも言いたくなる。

「だから私的なお願いなんだろうが。頭を使えユニヴェール。閉じ込められて腐ったか？」

「生憎、私の頭はそんなつまらないことを考えるためにあるのではないのでね。しかし、とすると、国王フィリップは王女マルグリートを処したと偽ってどこかに匿っていたわけだな？ 美しい親心ではないか。——そして、その王女が人間では御しきれぬ誰かに狙われている、と」

「暗黒都市の王、吸血鬼シャルル・ド・アルシュ。ご丁寧にお迎えの日時まで書いた書状を送りつけてきたそうだ」

「ほう」

ユニヴェールの双眸が糸のように細まり、その奥で光る。

彼の蒼い目は、時々こうした異様な湿った色を帯びることがあった。地獄を流れるステュクス川の黒々とした水面を思わせる、救い難い色。

「一度会ってみたいと思っていた」

シャルル・ド・アルシュ。

それは数年前からフランスを中心として散発的な事件を起こしている吸血鬼の名だった。

銀色の髪、紅の目。氷雪の如く伶俐な老紳士。冥界の混沌を織った黒衣をまとい、獲物に印をつけてはエサとする。

印をつけて予告することにより嚴重になった警備を潜り抜けることを楽しみとしている節があり、それでも現場に残るのは喉を裂かれた蒼ざめた死、のみ。

予告をされた者が生き延びた例は、まだない。

首を落とそうが杭を打とうが、古典的な手法では滅ぼすことができない、不滅の吸血鬼。

もちろん教会からもクルースニクが派遣されたが、帰還する者はいなかった。

だが事件がフランスの国境を越えることはなかったため、上層部ものらりくらりと傍観に徹しており、「うちの精鋭は忙しい」の一言でユニヴェールもソテールも動かされることはなかったのだ。

「会ってみたかった」

「……………」

ぽつりと繰り返して前を見据える相棒の目に、過去が映った気がした。

凝視していたこちらの視線に気付いたのだろう、ユニヴェールがフツと笑ってくる。

「名前が一字違いなものな」
過去は、気のせいだった。



後に尊厳王オーギュストと崇められるフランス国王フィリップ二世。
世。

ライバル
好敵手として並び称されたイングランドのリチャード一世が没し

て十数年、その後継ジョン王から広大な領土を奪い返した覇王。

王領を広げ、官僚の整備も行なった、内政にも長けた傑物^{けつぷつ}。

だがそんな偉大な男も、ただの父親であった。

「どこでどのような策が弄されたのかは知らぬが、我が姫を魔女などと言し教皇に吹き込むとは！」

美術品としてではなく戦いにおける要塞として造られたのだろう、南フランス、アヴィニヨンのほど近くに建つ名も無き堅牢な城。

武骨な石廊を渡りながら、ソテールは国王をなだめた。

「今の教皇の権力は絶大です。少しでも気に入られれば地位も名誉も保証される。そういう時代ですよ。嘘を並べてもその隙間に入ろうとする輩は多いものです」

しかし王は腕組みをして笑いながら嘆息。

「教皇の力がここまで大きくなったのも、お前たちがアイツの肩を持つからなんだがな」

壮年をやや過ぎた翳^{かげ}りはあるものの、かつての名将たる威風は衰えていない。豪快なイングラント元国王リチャード一世に比べ、この王はいささか細かく、策略家の性質を備えていた。だからこそ、フランスは教皇に首を押さえられながらもその介入を必要最小限に留められていると言える。

「私は教皇の手下であると同時に、陛下の手下でもありますかね」
後ろでユニヴェールがケラケラと笑いながら口を挟んできた。

「陛下の横で道理の分かったフリをしている男は、正真正銘教皇に魂を売り渡した輩ですよ」

だがソテールは無視した。

「陛下。お守りすべきはマルグリット王女と聞きましたが」

「左様。魔女と予言され、火刑を命ぜられた我が娘だ」

「予言された子供！」

国王の苦渋を一掃、ユニヴェールが声高に言った。

「予言はあながち嘘ではありませんよ。ただ、白か黒かの大きな間違いがあるのですかね。予言された者の半分は優秀なクルースニクであるのに、魔の烙印を押されて殺される。だからローマはいつまでもたっても暗黒都市を滅ぼせない。私のフランベルジェも、魔女裁

判にかけられて危うく殺されるところでした。今となつては優秀なクルースニクであることを疑う者はいませんが」

投げかけられた日暮れの陽射しが三人それぞれの長い影を創る。黄金の光が世界の輪郭を輝かせ、目に映るすべてをシルエットに変えていく。

肌寒い風が抜け、木々が葉ずれの音を立てた。

「ソテールも——」

ユニヴェールが細い指を顔の横でクルクルと回す。

彼の影も律儀にそれを真似る。

「私も、一步間違えばすでにこの世にいなかったかもしれませんね」
橙色に染まった小さな街を見下ろす石廊に、沈黙が落ちた。

理不尽だと、不条理だと、言うことは容易い。

だがすでにそうやって動いている歯車のどこを壊せばいいのか、分からない。あるいは分かっているが気付かないふりをしているのかもしれない。

歯車を壊すのでは駄目だ、機械そのものを壊さねば……、と。

教皇に楯突つくなど生易しい。

革命など所詮は箱庭の惨事。

いっそノアの箱舟の如く——。

「国王陛下」

沈んだ静寂が落ちていた石廊に、突如抑揚の無い女の声が響いた。

「お部屋のお支度が整いました」

メイドだった。

さすが国王付きなだけあり、美しい金髪に大きい目をした可愛らしい顔立ち。

しかし彼女はメイドと称するには、決定的な何かが足りなかった。

「それでは」

女は客人に微笑みもせず踵かかとを返す。

その姿が奥に消えてから、国王が苦笑を浮かべながら言った。
「愛想がなくてすまないね。あれが我が娘——マルグリートだ」



ヨタカの連続した鳴き声、時折挟まれるフクロウの鳴き声、それ以外何も聞こえぬ森の夜。

雲は薄く、月は白々と輝く。

その闇を斬り響くのは、軽快な剣の音。

長い間使われなかった古城の一室には火が入り、ふたりのクルー
スニクが余興と称して剣の打ち合いをしていた。

上に、下に、突いては引き、払っては踏み込む。

三步下がっては打ち込み、右へ左へ、強く、弱く。

合図の一手でひらりと入れ替わる。

ひるがえ

翻る白い外套、違いは袖口に描かれた、裾を縁取り刺繍されてい
る紋章のみ。

ひとつは黄金の竜。

ひとつは漆黒のカラスアゲハ。

『……………』

一際高い金属音が響き、ふたりは間合いを取った。
見計らったように声がかかる。

「お見事です」

テーブルの向こうでこちらを眺めていたメイド——違う、王女だ

った。

全くもって心動かされていない様子ではちぱちと手を叩いている。

「光栄です」

横ではユニヴェールが慇懃^{いんぎん}に礼をしていた。

とりあえずソテールもそれに習う。

が、そんなことをしていたせいで相棒の口をふさぐのが遅れた。

「剣を握ったことはおありで？」

「いいえ」

「おや、そうですか。他の姫君たちとは違うお育ちのようでしたから、てつきり」

「メイドはやりませんが衛兵も剣士もやりませんの」

「それは――」

「その方がいいですよ、姫」

ソテールはユニヴェールの機先を制した。

「メイドは人々のためになりますが、余計なことやらかして大目玉喰らったり地下室に放り込まれている剣士や領主は百害あって一利なしですからね」

失礼なことを言いまくる前に黙らせておいた方がいい。

「……………」

だが見やればユニヴェールはどこ吹く風で欠伸^{あくび}。

ところがその左手は外套の上から鞆を押さえる形にあてられている。

すぐにでも、抜けるように。

「吸血鬼シャルル・ド・アルシュとは私も聞いたことがありますが、何故私なんでしょうね」

相変らず危機感のない間延びした調子でマルグリートが首を傾げた。

茶器を持つ手は華奢で白く、さすがに王女の格好をしていれば王女らしい。

棒読みな台詞に目を瞑^{つぶ}れば。

「エサにするとしても、もっとお美しくて有名な方がたくさんいらっしゃるのに」

ソテールが察するに、彼女の言葉は謙遜でない。地だ。

彼も帯剣した左腰に手をあてたまま、

「人間よりも吸血鬼の方が慧眼けいがんだと言うことでしょう」
笑う。

「……魔女だからだろうが」

ぼそっとつぶやいた隣人の足を笑顔のままダンツと踏みつける。そして次瞬、笑みを消した。

「ユニヴェール！」

ソテールは鋭く叫んで紅絨毯を蹴り、王女の背後に降り立つ。

「任せろ」

低い声が応え、白い影が舞った。

銀剣が一閃二閃軌跡を描き、部屋の隅の影から現れた食屍鬼グールの首を刎ねる。

「手下を連れてきたか」

ソテールが自らの影に剣を突き刺せば、絨毯には赤黒い染みが広がった。

部屋に漂う腐った血臭。

慣れているとはいえ気持ちの良いもんじゃない。

異形の襲来に表情ひとつ変えなかった王女も、ムスツと顔をしかめている。

しかし火がある限り、月がある限り、影が失われることはなく、暗黒都市の魔は底なしに湧きあがってくるだろう。

「伏せろ！」

格子のはまった窓。

ユニヴェールの警告と同時に、前触れなくガラスが割れた。

「……外に」

砕けた窓に長身を寄せて下を見下ろし、ユニヴェールが舌打ち。

その間にも彼の影からは獣の爪が伸び、魔物の腕が伸び、銀剣は閃く。

ソテールは王女の背を押し部屋の中央へと移動した。後ろから振りかぶられる大鎌をひと払い、返す刃で絨毯の上にはカタカタと笑い声を上げる骸骨が崩れ落ちる。

「なるほど。総動員だな」

格子越しに見える窓の外の高い森。

月の光に照らし出された遙か彼方の山の上まで、無数の鬼火が煌めいていた。

先刻までの静寂を引き千切る、不気味な咆哮。

どっとあがる奇声に、槍の穂を合わせる音、下草をかきわける骸骨兵士たちが大地を踏み鳴らす足音。

「王女ひとりに山狩りか」

ソテールがつぶやくと、

「墓場がひっくり返ったみたいだな」

ユニヴェールがニヤニヤ笑ってこちらを見る。

「どうだ、怖気おじけづいたか？ 隊長殿」

「いや。腕が鳴るね」

暗黒都市の王、シャル・ド・アルシュ。

向こうが真正面から挑んできたのだ、ここで叩きのめしてやることほど楽しいことはない。

怖いものなどなかった。

教会も、魔も、死も、未来さえも。

本気で剣を取ることなどなかった。

ふたりいれば。

「お前は外、俺は中」
「了解」
ユニヴェール

ユニヴェールが大仰な仕草で剣を掲げ、月光注ぐ窓に向かって構えた。

人間相手ならばともかく、魔に格子など意味は無い。

そしてソテールも王女を背後にかばい、部屋の扉に向かって聖剣を構えた。

ガシャガシャと、鎧に兜、箆手、槍、剣。触れ合う鉄の音を響かせて、暗黒都市が石階段を駆けてくる。

散々仲間を灰にした、憎き二匹のクルースニク。その首を取ろうと息巻いて。

「――来るぞ」

外側から軍団の体当たりを喰らい、木製の扉が悲鳴をあげてしまった。

遅れてユニヴェールが身をひるがえし、王女の影を薙ぐ。

闇をつんざく断末魔と、扉が碎ける音はほぼ同時。

窓からは黒い魔の影が無数の虫のように、扉からは錆びた防具で着飾った骸骨・食屍鬼の群れがなだれ込んできた。

二つの白い始末人は、一太刀で数匹を薙いでゆく。

軽いステップとは裏腹に一撃必殺。

彼らに“防御”のひと振りはない。

ソテールの頬に一線、鈍い痛みが走り血が流れてゆく。だが、相手の斬撃もろともひたすらに斬る。

腐敗した肉を断ち、骨を砕く衝撃が腕を伝った。

粉々になった白片が散り、墓場の湿った空気が肺の奥まで入り込んでくる。

「何故――」

ソテールは骸骨兵士を蹴り飛ばしながら、背後で王女の声聞いた。

「何故、魔物はあるのを目指しているのです？」
手が、止まった。

「――っ！」

ロングソード

敵の錆びた長剣で思いっきり胴を叩かれ、我に返る。

再び剣を振るえど、思考は止まったままだった。

（何故だ？）

本来ならば――、魔物は王女に向かってくるはずだ。

王女、それを守るソテールを流れの終着点として目指して来るはずなのだ。

その量を少しでも減らしてゆくのがユニヴェールの役目ではないか。

だが現実はどうだ。

何故か本流はユニヴェールへと向かい、ソテールが削っている。

兵士たちはソテール、王女を障壁とみなし、彼らの空虚な眼窩^{がんか}は窓辺で剣を振り回しているクルースニクを見ているのだ！

ソテールは月の光が部屋に入り込んでいることを確認し、

瞬時一点集中、

ファイアット・ルクス

「――光あれ」

唱えた。

「早いな」

ユニヴェールが不機嫌に言ってくるが、無視。

ソテールの力ある言葉に呼応し、夜に浮かぶ氷輪の光は無数の刃となって暗黒都市の死せる軍団を貫いた。

闇にとって光は滅びと同義。

意志ある光の槍は冷たく容赦なく。

美しい驟雨^{しゅうう}は冒瀉された死を根こそぎ浄化する。

部屋は、森は、一瞬にして静まりかえり、尾を引く奇声をひと吠え、軍団は灰と消えた。

一拍遅れて鎧、箠手、剣、彼らの鉄屑が次々重い音を立てて崩れ落ちる。

死の饗宴繰り広げられていた墓場が、鶏の一声、一条の朝陽によって元の姿へと戻る如く。

圧倒的な力でもって、闇は月の前にねじ伏せられたのだ。

「――光」

王女の吐息もまた気圧されていた。

剣ではなく、魔を浄化する才でもなく、光そのものを武器とする。それこそがソテール・ヴェルトールがクルースニクの頂点――黄金の竜を背負う証だった。

ローマにおいてただ一人、彼だけが出来る技。ユニヴェールでさえも、不可能な奇跡。

それが“真なるクルースニク”。

「伝家の宝刀、そう何度も抜けるものではなからう？　まこ雑魚相手に何やってる」

ユニヴェールが不満げに剣の切っ先をこちらに突きつけてくる。

「キレたか？　ソテール・ヴェルトール隊長」

ヴェルトール、ヴェルトール、ヴェルトール。

“ユニヴェール”がフランスの切り札ならば、“ヴェルトール”はローマのエースだ。

元々はドイツの家系だったというが、詳細は不明。

唯一“光”を操ることのできる家系として、今はカトリック教会の中に埋め込まれた家名である。

不気味な名門ユニヴェール家がどれだけ手を伸ばしても、ヴェルトールの名が持つ“光の才”にだけは届かない。

ゆえに、クルースニクの頂点は必ずヴェルトールなのだ。本来個人に与えられるべき黄金の竜は、ヴェルトールの家紋も同然。

そしてその実態は教会生まれの教会育ち。

現に、ソテールもローマで生まれローマで育った。

物心ついた時すでにクルースニクとして剣術を仕込まれていたし、接してくる大人は異様に丁寧な言葉遣いの神父が枢機卿。

……それがどうして、いい年して地下室に放り込まれるような人間になったかと言えば、

「そういうのはだな、シャルルという老いぼれが現れた瞬間有無を言わさず消し飛ばすって具合に使うんだ、馬鹿」

ユニヴェール家の後継者としてローマに乗り込んできた、この男が原因かもしれない。

「お前は、気付かなかったのか？」

ソテールが突き放すと、

「何に」

ユニヴェールは何が言いたいのかサッパリ分からないという調子で肩をすくめてくる。

「あいつらは、お前を狙ってただろうが」

「……は？」

銀髪の下で、蒼眼が開かれる。

だがそれが演技だと、ソテールには分かっていた。

そういう時のユニヴェールの目には表情がないのだ。一切が殺されている。

「お前、何を知ってる」

「何も」

「——嘘はいかな」

二人の会話に突然割り込んだ声は、ユニヴェールのすぐ後ろからした。

彼は驚愕あらわに飛び退る。

「シャルル・ド・アルシュ」

ソテールが念押しのように言うと、相手もまた確認するようにうなずいた。

「お目にかかれて光栄だ。黄金の竜、ソテール・ヴェルトール」
窓辺に、初老の吸血鬼が立っていた。



「仮にも彼は君の上司だろう。嘘はいけない」

老紳士は諭すようにユニヴェールへ向き直る。

黒衣に身を包み、柔和な笑みを浮かべているその男、若い頃は両手に花だったろうと思われるなかなかの人物だった。対峙しているだけで分かるのだ、器が大きい。

シャルル・ド・アルシュ。暗黒都市の王。

そう呼ばれるだけのことはあった。いや——そう呼ぶ以外なかった。

強大な権力を今なお振るい続けることのできる、教皇インノケンティウス三世。

彼と同じ“隔絶”を感じる。

地に生きる人々と一線を画す、違い。それは過度の神性か過度の墮性か。

何にしろ、違う。

「……………」

「君は——」

「黙れ」

吸血鬼の言葉を遮って、ユニヴェールが剣を掲げた。

「ユニヴェール」

ソテールが王女を背後に隠しながら声をかければ、相棒は左手で軽く制してくる。

そして、彼は跳んだ。

同時、アルシュがどこからともなく抜剣する。

華麗に紡がれる金属音。

リズムカルにくぐもった足音を響かせる、絨毯。その下の石畳。

白と黒、ふたりの貴人はさながら国王の前での決闘の如く、月に輝く刃を打つ。

だがその一打一閃が殺刃なのは一目瞭然。

互いの口元には微笑、双眸は氷。
音を立てる外套、空を斬る一撃。
踏みにじられる灰は、めまぐるしい流れに翻弄されながら、舞う。
手傷で終わらせる気などどちらにもない。
生きるか死ぬか。それだけだ。

そしてもうひとつ。王女マルグリートなど、吸血鬼アルシュの眼中にない。

「――アルシュ」

ユニヴェールが牽制の払いを入れ、大きく後ろに跳んだ。
降り立ったのはソテールの横。

「手を。……手の甲を、見せろ」

息ひとつ乱していないユニヴェールが、不可解な要求を老吸血鬼に告げた。

強い語気の割には醒めた目で。

「早く」

「よからう」

夜の窓を背にしたアルシュが余裕の微笑を浮かべ、腕を上げた。
白い手袋をはめた手をゆっくりとこちらに返し、甲を見せる。

「――！」

息が、詰まった。

ソテールは目を疑うとはこういうことなのかと生まれて初めて認識した。

目を疑った。

吸血鬼シャルル・ド・アルシュの白い手袋に黒く染め抜かれているのは、羽を広げたカラスアゲハ。

それは世にふたつとない、ユニヴェール家の紋章だった。

「……ユニヴェール」

ソテールが相棒を見やれば、月光に浮かぶ彼の表層には軽薄な笑み。

面白がっている。

「シャルロ・ド・ユニヴェール」

「はい？」

アルシュに——否、かの紋章を身に帯びている限り、この吸血鬼はシャルル・ド・ユニヴェールと称されるべきなのだろう——正真正銘一文字違いの男に呼ばれ、クルースニク・ユニヴェールがおどけて片眉を上げた。

対して老吸血鬼の声音には熱がこもり、紅の双眸には悲哀、慈愛、憎悪、羨望、嫉妬、複雑な色が入り混じる。

まともそうな顔に狂気の赤味が差す瞬間ほど、気味の悪い時はない。

この吸血鬼の紅にもまた、地獄の川が流れていた。大河ステュクスから別れる嘆きのアケローン、忘却のレテ、そして火の川、氷の川^{イトス}。生者と死者とを隔てる厚い暗雲を抱く昏く^{くら}壮大な水の流れ。

「お前は、天性至高のクルースニク」

確かに、ソテールの相棒は歴代のユニヴェール当主の中でも群を抜いた才があるとされていた。剣の技量は努力の末の結果としても、聖剣のひと振りで名のある魔物を葬りされるのは、剣術の腕を磨いたからではない。クルースニクとして生まれ持った力だ。

「そしてお前は——重ねられた血により欠点のなくなった最強のダンピール。親だけではない、あらゆる闇をその剣ひとつで“滅ぼせる”」

……ダンピール。

「シャルロ・ド・ユニヴェール。我が呪われた一族の最高傑作！」
蒼ざめた月の明かりしかない部屋に、無言の風が吹き込んだ。

風さえも音を立てることをためらったのだ。

「こうしてフランスを騒がせていれば、いつかお前がやってくるだろうと思っていた。一目見ておきたくてね」

暗黒都市の王。

そう囁かれる男が笑った。

ソテールの背に悪寒が走った。

だが、

「それはそれはご慧眼をお持ちで。私としたことが浅薄にも罨に落ちたというわけですね」

当のユニヴェールは冷ややかに呵々^{かか}と笑う。

「いつだって今を生きる者は、先人の知恵に敵うはずもない、と」
彼の背負った白い外套もまた冷たく。

「ま、そういうものでしょうねえ？ 父上」

GENOCIDE ー 3. クルースニク・ユニヴァール (後書き)

アルシュ.. [仏] arche 箱舟 (英語の「アーク (ark)」のこと)

校正時BGM Thomas Berger sen [Dream
aker] The Matrix Revolution [N
avras]

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3980w/>

冷笑主義

2011年11月14日23時05分発行